

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第420集

のっこ
野古A遺跡第12次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

盛 岡 市

財岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

のっこ

野古A遺跡第12次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら、先人の遺した貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました盛岡南新都市計画整備事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発も県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの設立以来、埋蔵文化財保護の立場に立って、岩手県教育委員会生涯学習文化課の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとつてまいりました。

本書は、盛岡南新都市計画整備事業に関連して、平成13年度に行われた野古A遺跡第12次調査結果について収録したものであります。調査の結果、平石川右岸の河岸段丘上に立地する奈良～平安時代の集落跡であることが明らかになりました。堅穴住居跡からは土器類や須恵器を中心とする土器を始め各種遺物が出土しており、隣接する飯岡沢田遺跡や熊堂B遺跡との関係、さらには北西側約2kmに位置する古代城柵の志波城跡と集落構造の関連性を考える上で貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する关心と理解をいつそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご支援を賜りました盛岡市都市整備部、盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に心より感謝申し上げます。

平成15年3月

財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 合 田 武

例　　言

1. 本報告書は岩手県盛岡市下庭妻字北40番1ほかに所在する野古A遺跡第12次発掘調査結果を収録したものである。

2. 本遺跡の発掘調査は、盛岡南新都市計画整備事業に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課、盛岡市の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3. 発掘調査は、平成13年度に行われ、委託者は盛岡市である。

4. 岩手県遺跡登録台帳番号と発掘調査時の遺跡各次略号は以下の通りである。

遺跡登録台帳番号…LE 16-2155

遺跡略号…………ONK-01-12

5. 野外調査期間・調査面積及び野外調査担当者は以下の通りである。

調査期間　平成13年5月8日～11月12日

調査面積　6,224m²

調査担当者　菅原靖男・阿部　徹・齋藤麻紀子

6. 室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。

整理期間　平成13年11月1日～平成14年3月31日

整理担当者　菅原靖男・齋藤麻紀子

7. 本報告書の執筆は菅原靖男が行った。

8. 自然科学関連の分析鑑定と保存処理は、次の方々と機関に依頼した。(敬称略)

・石質鑑定…花崗岩研究会　・炭化材同定（肉眼鑑定）…日本木炭協会

・炭化材年代測定…パリノ・サーヴェイ（株）　・種実同定…古環境研究所（株）

・土器胎土分析…（株）第四紀地質研究所　・鉱製品保存処理…岩手県立博物館

9. 座標原点の測量および空中写真撮影は次の機関に依頼した。

座標原点の測量…北光コンサル株式会社　空中写真撮影…東邦航空（株）

10. 本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた。

後藤健一（瀬戸市教育委員会）　井上喜久男（愛知県陶磁資料館）

今野公顕（盛岡市教育委員会）　千葉正彦（岩手県立盛岡商業高等学校）　盛岡市教育委員会

11. 野外調査にあたっては盛岡市と地元の方々に多大なるご協力をいただいた。

12. 本遺跡から出土した遺物および調査に関わる資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序

例言

〔 本 文 〕

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 遺跡周辺の地形と地質	1
3. 城本層序	2
4. 周辺の遺跡	6
III 調査の方法と室内整理	10
1. 野外調査の方法	10
2. 室内整理の方法	11
IV 検出された遺構と遺物	14
1. 概要	14
2. 壁穴住居跡	14
3. 上坑	104
4. 溝跡	129
5. 柱穴状土坑	132
6. 遺構出土遺物	141
V まとめ	152
1. 遺構	152
2. 遺物	155
3. 成果と課題	160
VI 分析・鑑定結果	173

[図 版]

第1図	岩手県内における遺跡の位置図	3
第2図	遺跡の位置図	4
第3図	遺跡周辺の地形分類図	5
第4図	基本土層柱状図	5
第5図	周辺の遺跡分布図	9
第6図	凡例	12
第7図	遺構配置図	13
第8図	R A014堅穴住居跡（1）	15
第9図	R A014堅穴住居跡（2）	16
第10図	R A014堅穴住居跡出土遺物（1）	17
第11図	R A014堅穴住居跡出土遺物（2）	18
第12図	R A014堅穴住居跡出土遺物（3）	19
第13図	R A015堅穴住居跡出土遺物	20
第14図	R A015堅穴住居跡	21
第15図	R A017堅穴住居跡・出土遺物	23
第16図	R A021堅穴住居跡（1）	24
第17図	R A021堅穴住居跡（2）	25
第18図	R A021堅穴住居跡（3） 出土遺物（1）	26
第19図	R A021堅穴住居跡出土遺物（2）	27
第20図	R A026堅穴住居跡（1）	29
第21図	R A026堅穴住居跡（2）	30
第22図	R A026堅穴住居跡出土遺物（1）	31
第23図	R A026堅穴住居跡出土遺物（2）	32
第24図	R A026堅穴住居跡出土遺物（3）	33
第25図	R A027堅穴住居跡（1）	35
第26図	R A027堅穴住居跡（2） 出土遺物	36
第27図	R A030堅穴住居跡	37
第28図	R A032堅穴住居跡	38
第29図	R A032堅穴住居跡出土遺物	39
第30図	R A035堅穴住居跡	40
第31図	R A035堅穴住居跡出土遺物	41
第32図	R A036堅穴住居跡・出土遺物（1）	42
第33図	R A036堅穴住居跡出土遺物（2）	43
第34図	R A038堅穴住居跡・出土遺物（1）	45
第35図	R A038堅穴住居跡出土遺物（2）	46
第36図	R A016堅穴住居跡	47
第37図	R A016堅穴住居跡出土遺物	48
第38図	R A018堅穴住居跡	50
第39図	R A018堅穴住居跡出土遺物	51
第40図	R A019堅穴住居跡（1）	52
第41図	R A019堅穴住居跡（2）	53
第42図	R A019堅穴住居跡（3）	54
第43図	R A019堅穴住居跡出土遺物（1）	55
第44図	R A019堅穴住居跡出土遺物（2）	56
第45図	R A019堅穴住居跡出土遺物（3）	57
第46図	R A020堅穴住居跡（1）	59
第47図	R A020堅穴住居跡（2） 出土遺物（1）	60
第48図	R A020堅穴住居跡出土遺物（2）	61
第49図	R A022堅穴住居跡	63
第50図	R A022堅穴住居跡出土遺物	64
第51図	R A023堅穴住居跡・出土遺物	65
第52図	R A024堅穴住居跡（1）	67
第53図	R A024堅穴住居跡（2）	68
第54図	R A024堅穴住居跡（3） 出土遺物（1）	69
第55図	R A024堅穴住居跡出土遺物（2）	70
第56図	R A024堅穴住居跡出土遺物（3）	71
第57図	R A024堅穴住居跡出土遺物（4）	72
第58図	R A024堅穴住居跡出土遺物（5）	73
第59図	R A025堅穴住居跡・出土遺物	75
第60図	R A028堅穴住居跡	77
第61図	R A028堅穴住居跡出土遺物（1）	78
第62図	R A028堅穴住居跡出土遺物（2）	79
第63図	R A029堅穴住居跡（1）	80
第64図	R A029堅穴住居跡（2） 出土遺物（1）	81
第65図	R A029堅穴住居跡出土遺物（2）	82
第66図	R A029堅穴住居跡出土遺物（3）	83
第67図	R A029堅穴住居跡出土遺物（4）	84
第68図	R A031堅穴住居跡・出土遺物	85

第69図	R A033堅穴住居跡	87
第70図	R A033堅穴住居跡出土遺物（1）	88
第71図	R A033堅穴住居跡出土遺物（2）	89
第72図	R A033堅穴住居跡出土遺物（3）	90
第73図	R A033堅穴住居跡出土遺物（4）	91
第74図	R A034堅穴住居跡（1）	93
第75図	R A034堅穴住居跡（2） 出土遺物（1）	94
第76図	R A034堅穴住居跡出土遺物（2）	95
第77図	R A034堅穴住居跡出土遺物（3）	96
第78図	R A037堅穴住居跡・出土遺物	97
第79図	R A039堅穴住居跡	99
第80図	R A040堅穴住居跡（1）	101
第81図	R A040堅穴住居跡（2） 出土遺物（1）	102
第82図	R A040堅穴住居跡出土遺物（2）	103
第83図	R D017～021・029土坑	117
第84図	R D022～028土坑	118
第85図	R D030～036土坑	119
第86図	R D037～039・041土坑	120
第87図	R D040・042～045土坑	121
第88図	R D046～053土坑	122
第89図	R D054～058土坑	123
第90図	R D059～063土坑	124
第91図	R D土坑出土遺物（1）	127
第92図	R D土坑出土遺物（2）	128
第93図	R G008・009・014溝跡	133
第94図	R G010・012・013溝跡	134
第95図	R G015～017溝跡	135
第96図	R G溝跡出土遺物（1）	136
第97図	R G溝跡出土遺物（2）	137
第98図	R G溝跡出土遺物（3）	138
第99図	A調査区柱穴状小土坑群（1）	139
第100図	A・B調査区柱穴状小土坑群（2）	140
第101図	時代別堅穴住居跡分布図	153
第102図	堅穴住居跡集成図（1）	162
第103図	堅穴住居跡集成図（2）	163
第104図	堅穴住居跡集成図（3）	164
第105図	堅穴住居跡集成図（4）	165
第106図	遺構別土器集成図（1）	166
第107図	遺構別土器集成図（2）	167
第108図	遺構別土器集成図（3）	168
第109図	遺構別土器集成図（4）	169
第110図	遺構別土器集成図（5）	170
第111図	遺構別土器集成図（6）	171
第112図	遺構別土器集成図（7）	172

〔写真図版〕

写真図版1	空中写真（1）	223
写真図版2	空中写真（2）	224
写真図版3	空中写真（3）	225
写真図版4	A調査区（1）	226
写真図版5	A調査区（2）	227
写真図版6	B調査区（1）	228
写真図版7	B調査区（2）	229
写真図版8	R A014堅穴住居跡	230
写真図版9	R A015堅穴住居跡	231
写真図版10	R A017堅穴住居跡	232
写真図版11	R A021堅穴住居跡	233
写真図版12	R A026堅穴住居跡	234
写真図版13	R A027堅穴住居跡（1）	235
写真図版14	R A027堅穴住居跡（2）	236
写真図版15	R A030堅穴住居跡	237
写真図版16	R A032堅穴住居跡	238
写真図版17	R A035堅穴住居跡	239
写真図版18	R A036堅穴住居跡	240
写真図版19	R A038堅穴住居跡	241
写真図版20	R A016堅穴住居跡	242
写真図版21	R A018堅穴住居跡	243
写真図版22	R A019堅穴住居跡	244

写真図版23	R A020堅穴住居跡（1）	245	写真図版56	堅穴住居跡出土遺物（1）	278
写真図版24	R A020堅穴住居跡（2）	246	写真図版57	堅穴住居跡出土遺物（2）	279
写真図版25	R A022堅穴住居跡	247	写真図版58	堅穴住居跡出土遺物（3）	280
写真図版26	R A023堅穴住居跡	248	写真図版59	堅穴住居跡出土遺物（4）	281
写真図版27	R A024堅穴住居跡（1）	249	写真図版60	堅穴住居跡出土遺物（5）	282
写真図版28	R A024堅穴住居跡（2）	250	写真図版61	堅穴住居跡出土遺物（6）	283
写真図版29	R A025堅穴住居跡	251	写真図版62	堅穴住居跡出土遺物（7）	284
写真図版30	R A028堅穴住居跡	252	写真図版63	堅穴住居跡出土遺物（8）	285
写真図版31	R A029堅穴住居跡（1）	253	写真図版64	堅穴住居跡出土遺物（9）	286
写真図版32	R A029堅穴住居跡（2）	254	写真図版65	堅穴住居跡出土遺物（10）	287
写真図版33	R A031堅穴住居跡	255	写真図版66	堅穴住居跡出土遺物（11）	288
写真図版34	R A033堅穴住居跡	256	写真図版67	堅穴住居跡出土遺物（12）	289
写真図版35	R A034堅穴住居跡	257	写真図版68	堅穴住居跡出土遺物（13）	290
写真図版36	R A037堅穴住居跡	258	写真図版69	堅穴住居跡出土遺物（14）	291
写真図版37	R A039堅穴住居跡	259	写真図版70	堅穴住居跡出土遺物（15）	292
写真図版38	R A040堅穴住居跡（1）	260	写真図版71	堅穴住居跡出土遺物（16）	293
写真図版39	R A040堅穴住居跡（2）	261	写真図版72	堅穴住居跡出土遺物（17）	294
写真図版40	R D017～019土坑	262	写真図版73	堅穴住居跡出土遺物（18）	295
写真図版41	R D020～023土坑	263	写真図版74	堅穴住居跡出土遺物（19）	296
写真図版42	R D024～027土坑	264	写真図版75	堅穴住居跡出土遺物（20）	297
写真図版43	R D028～031土坑	265	写真図版76	堅穴住居跡出土遺物（21）	298
写真図版44	R D032～035土坑	266	写真図版77	堅穴住居跡出土遺物（22）	299
写真図版45	R D036～039土坑	267	写真図版78	堅穴住居跡出土遺物（23）	300
写真図版46	R D040～043土坑	268	写真図版79	堅穴住居跡出土遺物（24）	301
写真図版47	R D044～047土坑	269	写真図版80	堅穴住居跡出土遺物（25）	302
写真図版48	R D048～051土坑	270	写真図版81	堅穴住居跡出土遺物（26）	303
写真図版49	R D052～055土坑	271	写真図版82	堅穴住居跡出土遺物（27）	304
写真図版50	R D056～059土坑	272	写真図版83	堅穴住居跡出土遺物（28）	305
写真図版51	R D060～063土坑	273	写真図版84	堅穴住居跡出土遺物（29）	306
写真図版52	R G008・009溝跡	274	写真図版85	土坑出土遺物（1）	307
写真図版53	R G010・012溝跡	275	写真図版86	土坑（2）・溝跡出土遺物（1）	308
写真図版54	R G013・015溝跡	276	写真図版87	溝跡出土遺物（2）	309
写真図版55	R G016・017溝跡	277	写真図版88	溝跡（3）・遺構外出土遺物	310

[調査表]

第1表 周辺の遺跡一覧 (1)	7	第11表 遺構内出土土器一覧 (5)	147
第2表 周辺の遺跡一覧 (2)	8	第12表 遺構内出土土器一覧 (6)	148
第3表 上坑一覧 (1)	125	第13表 遺構内出土土器一覧 (7)	149
第4表 土坑一覧 (2)	126	第14表 遺構内出土土器一覧 (8)	150
第5表 溝跡一覧	138	第15表 土製品一覧	150
第6表 杜穴状土坑一覧	142	第16表 石器・石製品一覧	150
第7表 遺構内出土土器一覧 (1)	143	第17表 鉄製品一覧	151
第8表 遺構内出土土器一覧 (2)	144	第18表 陶磁器一覧	151
第9表 遺構内出土土器一覧 (3)	145	第19表 奈良時代竪穴住居跡一覧	154
第10表 遺構内出土土器一覧 (4)	146	第20表 平安時代竪穴住居跡一覧	154

I 調査に至る経過

現在の盛岡市は、現都心部への一局集中型の都市構造から生じる諸問題に対処しながら、北東北の交流拠点都市を目指すと共に、次代に向けて魅力ある都心の創出を推進しているところである。そのためには「盛岡南新都心」・「現都心地区」・「盛岡駅西口地区」のコンセプトの異なる三つの都心が輪状かつ有機的に結びつき輪状都心を形成することで都市構造を変えていくことが必要となる。

野古A遺跡の位置する地域は「盛岡南新都市開発整備事業」に該当する地域であり、現在盛岡広域圏における都市機能の集積や拡充、産業構造の高度化、都市人口の増大等に対応するため行政や業務施設、商業や流通施設、および良好な住宅などの用地整備のほか道路などの基幹的都市施設を整備するための土地区画整備事業が行われている。

この事業は昭和45年の「盛岡広域市町村圏計画」において盛岡南地区に新都心地区建設の必要性が提起されたことに端を発し、昭和57～59年の地域振興整備公団による基本計画調査の実施、平成元年の盛岡市議会、岩手南村議会ならびに岩手県議会における事業推進の請願採択を経て、平成2年9月岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が地域振興整備事業團に事業要請を行ったものである。これを受け地域振興整備公団は事業実施の基本計画を策定し、国に対し事業認可の申請を行った。翌年の平成3年12月、当時の建設大臣ならびに国土交通省より事業実施の認可が下り、平成3年度から平成17年度までの概ね15年間、面積約313ha（盛岡市下太田、本宮、向中野、下鹿妻、飯岡新田、南仙北一丁目の一部）を対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

平成4年11月の埋蔵文化財の発掘（試掘）調査等、この事業の実施対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を実施し、本調査を必要とする範囲を確定した。本調査は、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとなった。

本遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成13年度の事業として確定した。これを受けて平成13年4月2日に、（財）岩手県文化振興事業団理事長と、盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。野古A遺跡第12次調査は、平成13年5月8日に開始し、同年11月12日に終了した。

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

野古A遺跡が所在する盛岡市は、岩手県の中央部に位置し、北は岩手郡玉山村・滝沢村、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、南は紫波郡矢巾町・紫波町・稗貫郡大迫町、西は岩手郡平石町の5町3村と接している。面積は485.15k㎡、人口約28万8千5百人（平成14年3月1日現在）の岩手県の県庁所在地であり、北東北の中核を担う都市である。本遺跡は第2図に示すようにJR東北本線盛岡駅の南側約2kmにあり、零石川右岸に形成された河岸段丘上に立地している。国土地理院発行の2万5千分の1の地形図では「盛岡」N J - 54 - 13 - 14 - 2（盛岡新庄14号 - 2）の図幅に含まれ、北緯39度40分45秒、東経141度08分04秒付近にあたる。

2. 遺跡周辺の地形と地質

北上平野の北端に位置する盛岡市は、市街地の中央を流れる北上川に西の奥羽脊梁山脈から零石川が、東の北上山地から中津川、栗川が合流し南流する。北上川は、岩手県北部の岩手郡岩手町御堂観音境内にその源を発し、西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を潤養しながら、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ。

洋に注ぐ。主流部の総延長は243km、流域面積10,720 km²、支流数216を有する東北地方最大の河川である。北上川の流域は盛岡以北を上流域、盛岡市～前沢町間を中流域、前沢町以南を下流域と区分されており、盛岡市は中流域の上部にある。

北上川の中流域の地形は、背後に控える山地構造の違いによって対照的な様相を呈している。新第三系および火山岩類を主体とする奥羽山脈は各支流に多量の土砂を供給し、大小の扇状地が複合する広い平野部を西岸に作り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって測定されて段丘化している。これに対して、老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側では、山地に統一丘陵辺縁部に小規模な段丘と、沖積地が見られるだけである。北上川流域における地形の研究は、中川久夫・ほか(1963)の業績が大きい。中流域上部の盛岡～花巻間の段丘は古い順に、①石鳥谷段丘(高位)、②二枚橋段丘(中位)、③花巻段丘(低位)、④都南段丘(低位)に分類されている。低位段丘は細分され、花巻段丘は西部後背山地東麓から東側に発達している。遺跡が載る都南段丘は、花巻段丘の外方とこれを刻む河谷に沿って見られ、一般に河床面との比高が小さく、その境界が不明瞭になる部分が多い。本遺跡が立地する都南段丘の周辺地域には、半石川の旧河道が幾条も見られ、河道変遷が著しいことを示している。

3. 基本層序

第12次調査の調査区は、市道を挟んでA調査区とB調査区に分けられる。A調査区の現況は畑地および果樹畑で占められ、東～北にかけては、ちょうど段丘線にあたり約1m程標高が低くなっている。B調査区の現況は畑地でほぼ平坦である。A・B調査区とも耕作による影響を受けてはいるが、基本的にはほぼ同じような様相を示しており、第4図はA調査区の北側11R区と、B調査区中央付近の11M区で観察された土層断面の柱状図である。層位はⅠ層～V層に大別され、本遺跡の主要な遺構は、Ⅰ層を除去したⅡ層上面～Ⅲ層上面にかけて確認されている。A調査区の東側については、表土(1層)が非常に薄く(5～10cm)、表土を除去するとすぐにⅣ層が露出する部分も見られるほか、調査区内には、高圧鉄塔1基や、家庭排水用施設が東西にわたって埋設されており、遺構が搅乱を受けている部分も確認されている。土層注記は以下の通りである。

Ⅰ層：黒褐色土(10YR 2/2)で層厚は、8～30cm前後。現在の表土層で、畑地および果樹畑の耕作土である。

Ⅱ層：黒色土(10YR 1.7/1～2/1)で層厚は、0～30cm前後。A調査区の東～中央部では確認されない。本遺跡の遺構検出面である。

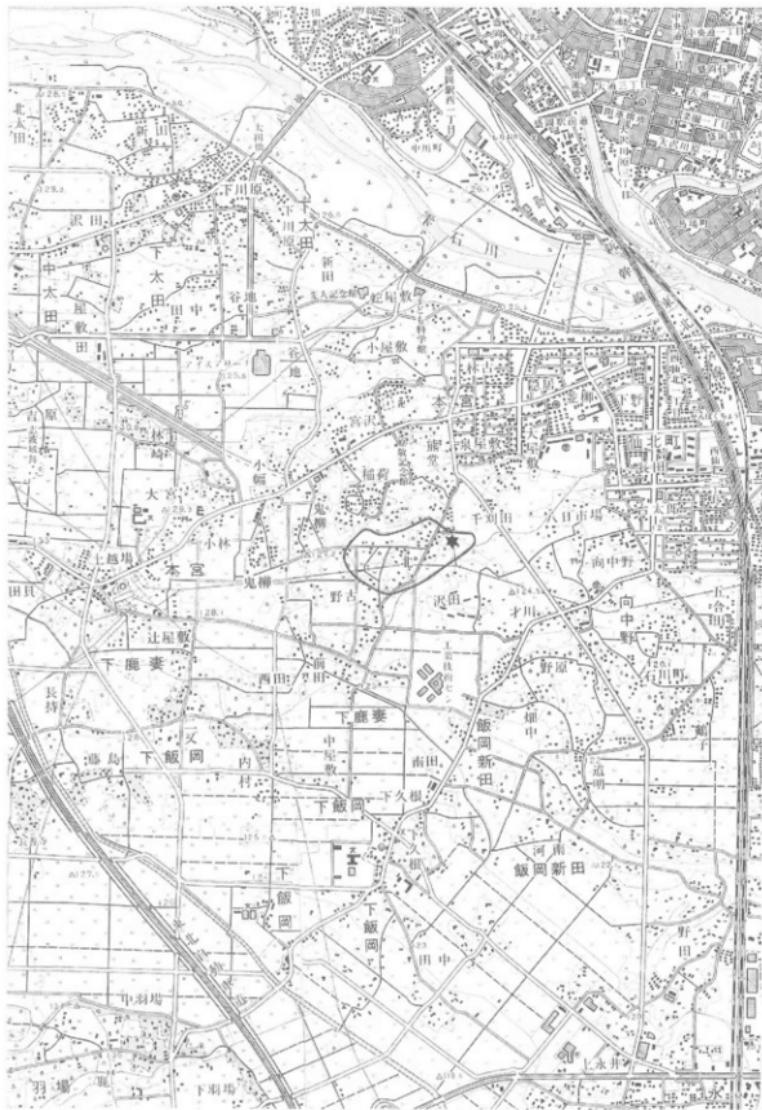
Ⅲ層：黒色～暗褐色土(10YR 2/1～3/4)で層厚は、3～30cm前後。黒色土～暗褐色土への漸移層である。Ⅱ層同様A調査区の東～中央部では確認されない。

Ⅳ層：褐色～黄褐色土(10YR 4/4～5/6)で層厚は、地点によって異なる。A・B調査区とも堅く縮まるが、A調査区では粘性がない。

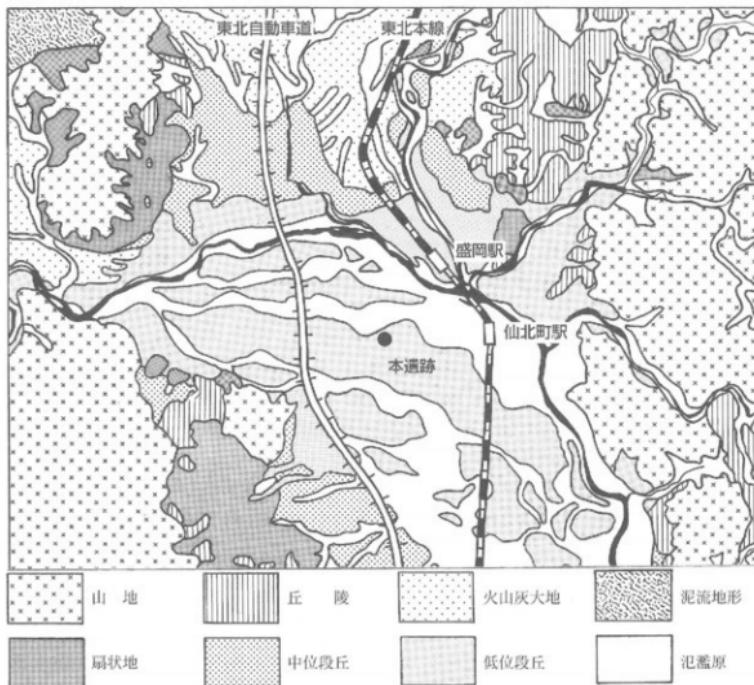
Ⅴ層：柱状図にはないが、Ⅳ層の下に段丘の基盤をなすと思われる砂礫層が確認されている。



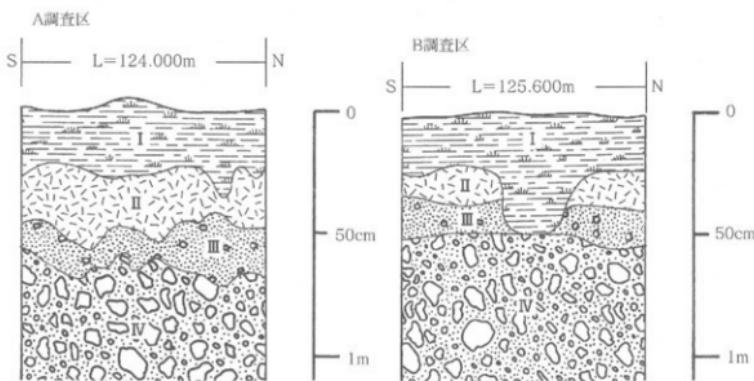
第1図 岩手県内における遺跡の位置図



第2図 遺跡の位置図



第3図 遺跡周辺の地形分類図



第4図 基本土層柱状図

4. 周辺の遺跡

盛岡市内における遺跡は、岩手県遺跡台帳平成12年度によれば、516ヶ所余りが登録されている。第5図は野古A遺跡周辺の主な遺跡の分布を零石川右岸を中心に示したものである。これらの遺跡の分布状況を見ると、零石川の右岸と左岸では対照的な様相を示している。左岸の台地上には、大館遺跡群をはじめとする縄文時代の集落遺跡が数多く分布している。それに対して、右岸の低位段丘向上には、縄文時代の遺構は陥し穴状遺構が散在する程度となり、僅かに本宮熊堂A遺跡から縄文時代晚期の竪穴住居跡が1棟発見されたにすぎない。しかし、古代の遺跡は多く、八掛遺跡など8世紀代の集落跡や太山蛭夷森古墳群、延暦22（803）年に造営された古代城柵である志波城や、林崎遺跡などの集落跡も數多く分布している。このような遺跡の分布域の相違は立地する地形面と大きく係わるものと考えられる。以下は、本遺跡に隣接し、本年度調査された飯岡沢田遺跡第3次調査、熊堂B遺跡第13次調査および志波城跡の概要である。

・志波城跡

本遺跡の西方約1.8kmに位置する太山八丁遺跡は、昭和51・52年に東北縱貫自動車道建設に伴う調査が行われた。その後に盛岡市教育委員会による範囲確認調査を経て、所在地が不明であった古代城柵『志波城』と認定された。昭和55年から59年度に亘る5カ年計画による発掘調査によって、陸奥の国最北端の城柵としての独立性が明らかになるに至り、昭和59年に国指定史跡となった。

発掘調査は、昭和55年から毎年継続して行われており、平成11年までに第85次調査を数えている。平成5年度からは史跡保存整備事業も着手され、槽および築地塀の復元工事が行われている。

・飯岡沢田遺跡第3次調査

遺跡はJR東北本線盛岡駅の南約2kmに位置し、鹿妻農業用水堰を隔てて野古A遺跡の南側と隣接している。標高は124～125mで、現況は畑地・果樹園・休耕地である。第3次調査で検出された遺構は、奈良～平安時代を中心とした古墳および円形・方形周溝45基、中世のものと思われる大型の方形周溝1基、古墳時代末期の竪穴住居跡1棟、奈良時代の竪穴住居跡9棟、平安時代の竪穴住居跡3棟、竪穴状遺構2棟、土坑70基、溝跡9条、縄文時代の陥し穴状遺構3基である。出土遺物は、7世紀末～9世紀の土師器・須恵器が大部分を占めている。古墳および円形・方形周溝からは須恵器の大甕や在地産ではないと思われる長頸瓶の出土も見られる。墓壙と思われる土坑からは副葬品とみられる刀子、鉄製軋轆車、多数の土玉が出土している。また、古代以前に形成されたと考えられる旧河道の埋土上位から須恵器長頸瓶の頭部を打ち欠いて、土師器の坏でフタをした火葬骨入りの蔵骨壺が出土している。

・熊堂B遺跡第13次調査

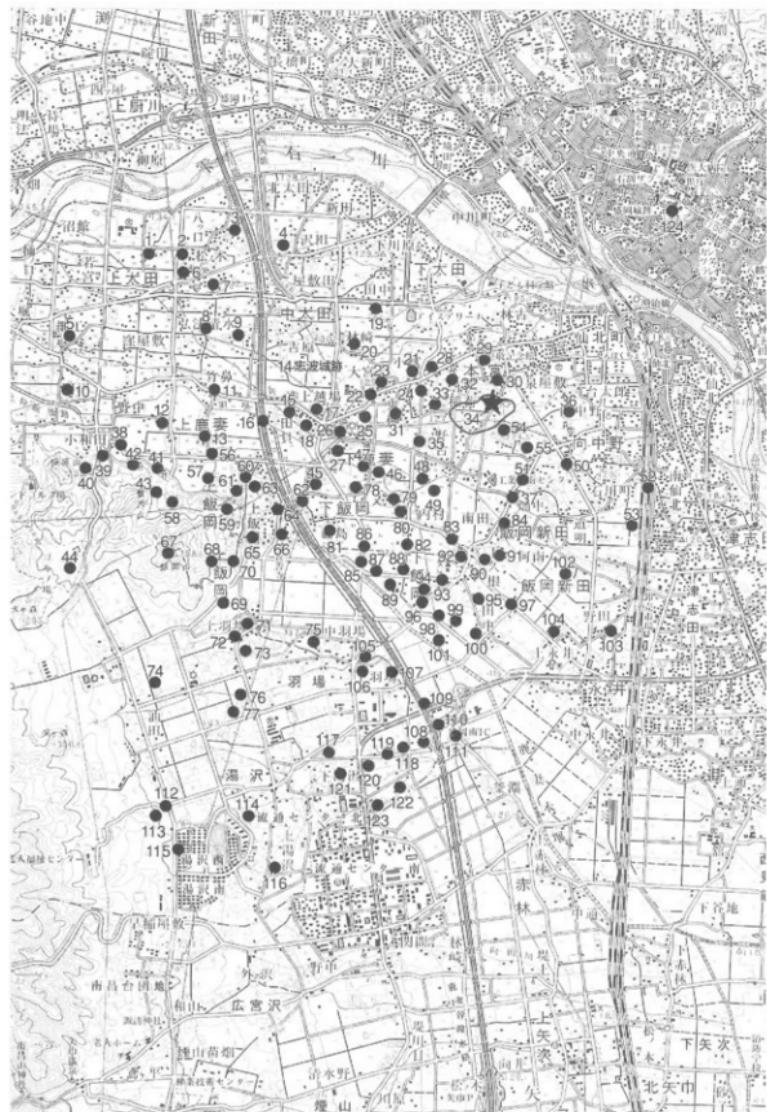
遺跡はJR東北本線仙北町駅の西約1.5kmに位置し、標高は123m前後で概ね平坦である。現況は宅地・畠地・道路であり、野古A遺跡の北側に立地している。第13次調査で検出された遺構は奈良時代の竪穴住居跡4棟、平安時代の竪穴住居跡5棟、竪穴状遺構1棟、古代の掘建柱建物跡2棟、近世の掘建柱建物跡6棟、土坑11基、溝跡6条である。出土遺物は土師器・須恵器が多く、甕、片口、墨書き器も見られる。他に土鍬、砥石、刀子、鎌、古鏡が出土している。

第1表 周辺の遺跡一覧(1)

No.	遺跡名	種別	時代／備考
1	越川	散布地	平安／十師器
2	松ノ木	集落跡	平安／十師器
3	八ツ口	散布地	古代／十師器／住居跡
4	八卦	集落跡	古代／十師器／住居跡／土坑
5	太田娘古墳群	古墳	奈良／十師器／豆・玉／和同開珎
6	原	集落跡	平安／十師器／住居跡／城館跡／掘
7	上野屋敷	散布地	古代／土師器
8	畠中	集落跡	古代／土師器
9	小沼	集落跡	平安／土師器／綠釉陶器／住居跡
10	一本木	集落跡	平安／土師器／住居跡
11	五兵衛新田	集落跡	古代／土師器
12	天沼	集落跡	古代／土師器
13	竹鼻	集落跡	古代／土師器
14	志波城	城柵跡	平安／土師器／獨立柱建物跡／門跡
15	田貝	集落跡	古代／土師器／住居跡
16	竹花前	集落跡	平安／土師器／綠釉陶器／住居跡
17	新原端	城柵跡	绳文／古代／绳文土器(晚期)・土師器
18	石私	集落跡	古代／十師器
19	田中	散布地	平安／十師器
20	林崎	集落跡	平安／十師器／獨立柱建物跡
21	小棚	集落跡	平安／土器／住居跡／獨立柱建物跡
22	大宮	集落跡	古代・中世／土師器／住居跡
23	大宮北	散布地	平安／土師器／住居跡／土坑／溝跡
24	鬼柳A	集落跡	古代／土師器
25	小林	集落跡	古代／土師器
26	水門	集落跡	古代／土師器
27	上越場A	集落跡	古代／土師器
28	宮沢	散布地	平安時代／溝状遺構
29	本宮熊堂A	散布地	绳文／绳文土器(晚期)／住居跡等
30	本宮熊堂B	集落跡	奈良～近世／十師器／住居跡／土坑
31	鬼柳B	集落跡	古代／十師器
32	稻荷	集落跡	平安時代／十師器・須恵器／溝跡
33	鬼柳C	集落跡	古代／土師器
34	野古A(報告遺跡)	集落跡	古墳末～奈良・平安／溝跡／土坑／土師器・須惠器
35	野古B	散布地	古代／土師器
36	谷太郎	集落跡	奈良～近世／土師器／住居跡／溝跡
37	矢盛	集落跡	平安／土師器／住居跡／土坑／溝跡
38	蟹沢下	散布地	古代／土師器
39	二ツ沢	散布地	绳文・古代／绳文土器(中・後期)・土師器
40	小和山館	城柵跡	中世／壁
41	蟹沢	散布地	绳文・古代／绳文土器・土師器
42	ヘビ堂	散布地	绳文・古代／绳文土器・土師器
43	才ミ坂	散布地	绳文・平安／绳文土器・土師器
44	大ヶ森	散布地	绳文・古代／绳文土器・土師器
45	辻屋敷	集落跡	古代／土師器
46	西田A	集落跡	古代／土師器
47	上越場B	集落跡	古代／土師器
48	西田B	集落跡	古代／土師器・須恵器
49	前川	集落跡	古代／土師器
50	向中野船	城柵跡	中世／堀・土器
51	細谷地	集落跡	古代／十師器
52	南仙北	集落跡	绳文・古代／绳文土器・土師器
53	向中野船	集落跡	古代／土師器
54	坂岡沢田	集落跡	古代／住居跡
55	坂岡才川	集落跡	古代
56	中村	散布地	平安／土師器・須恵器
57	月見山	散布地	绳文・古代／土器
58	山中	散布地	绳文・古代／绳文土器・十師器
59	西岡船	城柵跡	绳文・中世／绳文土器(中期)／空堀
60	堤	散布地	绳文・古代／绳文土器・土師器
61	高鎗古墳群	古墳	奈良～平安／十師器・薦千刀
62	藤島日	散布地	平安？／土師器

第2表 周辺の遺跡一覧(2)

No.	遺跡名	種類	性質	時代 / 備考
63	高原	散在	布地	縄文/鐵文上器(中期)・石器
64	大解Ⅰ	集落	跡	古代/土師器・須恵器
65	大解Ⅱ	散在	布地	古代?/土師器
66	簾野前	散在	布地	縄文/鐵文土器(後期)
67	熊岡山館	城	跡	中世
68	熊岡赤坂	散在	布地	古代
69	いたこ塚	祭祀	跡	近世
70	赤坂Ⅱ	散在	布地	平安?/土師器
71	羽場館	城	跡	中世/空堀
72	羽場百目木	散在	布地	縄文/鐵文土器(中期)
73	砂子塚	散在	布地	古代/小塚
74	アイノ沢	散在	布地	縄文/鐵文土器(晚期)
75	因幡	散在	布地	縄文/古代/鐵文土器・土師器
76	木節	集落	跡	平安
77	橋千代	集落	跡	奈良
78	二又	散在	布地	古代/土師器・須恵器
79	内村	集落	跡	平安/土師器・常滑
80	中屋敷	散在	布地	古代/土師器
81	藤鳥Ⅰ	集落	跡	縄文/古代/鐵文土器・土師器
82	深瀬Ⅰ	集落	跡	平安/住居跡
83	高屋敷	散在	布地	古代/住居跡
84	法網樅塚原	祭祀	跡	時代不明
85	飯岡林崎Ⅰ	集落	跡	古代/土師器・須恵器・鏡/住居跡
86	飯岡林崎Ⅱ	集落	跡	平安/土師器
87	上新田	集落	跡	平安/土師器/住居跡
88	深瀬Ⅱ	集落	跡	平安/住居跡
89	上新田Ⅰ	集落	跡	平安/住居跡/上新田と重複
90	下久根Ⅰ	散在	布地	縄文/古代/鐵文土器・土師器
91	石持	散在	布地	古代/土師器・須恵器
92	高屋敷Ⅱ	散在	布地	平安/土師器・須恵器
93	西	集落	跡	平安/土師器/住居跡
94	西田	集落	跡	平安/須恵器
95	下久根Ⅱ	散在	布地	縄文/古代/鐵文土器
96	熊堂Ⅰ	集落	跡	縄文/古代/鐵文土器・土師器
97	松島	集落	跡	古代/土師器・須恵器
98	熊堂Ⅲ	集落	跡	平安/土師器・須恵器/住居跡
99	熊堂Ⅳ	集落	跡	平安/土師器・須恵器/住居跡
100	田中	集落	跡	平安/土師器・須恵器・石器
101	南谷地	集落	跡	平安/土師器・須恵器/住居跡
102	夕覚	散在	布地	古代/土師器
103	横尾	坐	落	古代/土師器・須恵器
104	葛本	散在	布地	古代/土師器・常滑
105	新井川Ⅰ	散在	布地	古代/土師器・須恵器
106	新井川Ⅱ	散在	布地	古代/土師器・須恵器
107	新山	集落	跡	平安/土師器・須恵器
108	開波Ⅰ	散在	布地	古代/土師器
109	下羽塙	集落	跡	平安/土師器・須恵器・綠釉陶器
110	下湯沢	散在	布地	古代/土師器・須恵器
111	大島	散在	布地	古代/土師器・須恵器
112	鴻巣	散在	布地	縄文/鐵文上器(晚期)・石器
113	湯帝跡塚	墓	塚	中世/常滑
114	後鳥	散在	布地	縄文/鐵文土器・石器
115	湯沢	散在	布地	縄文/古代/土器(前・中・後期)
116	鳥	墳	墓	時代不明/小塚
117	小田Ⅰ	散在	布地	古代/土師器
118	圓渡Ⅰ	散在	布地	古代/土師器・須恵器
119	圓渡Ⅱ	散在	布地	平安/土師器・須恵器
120	春子	散在	布地	古代/土師器
121	小田Ⅱ	散在	布地	平安/土師器
122	湯沢大塚	城	築	古~中世/土師器・須恵器
123	沼沢	散在	布地	古代/土師器
124	盛岡城	城	跡	中世~近世/瓦・陶磁器/その他



第5図 周辺の遺跡分布図

III 調査の方法と室内整理

I. 野外調査の方法

(1) 調査区の区割設定

野古A遺跡の区割設定にあたっては、盛岡市教育委員会の方法に準じて行っている。野古地区全域の調査座標は、平面直角座標第X系のX = -35,000.000、Y = +25,000.000が原点である。この座標原点を起点として、遺跡全体を1辺50×50mの大区画に区割を行い、さらにこの大区画を1辺2×2mの25小区画に細分している。大区画は、原点から東に向かってアルファベットの大文字A～Sを、南に1～12の数字を付した。また、小区画は西から東に向かってアルファベットの小文字a～yを、北から南に向かって数字の1～25を与えている。調査区の名称は、大区画と小区画の組み合わせで10Q16mや12R10rというように表現している。平成13年度の第12次調査区はA調査区が大区画の11Q・11R・11S区、12Q・12R・12S区にあたり、B調査区は10M・11M区にあたる。実際の区割設定にあたっては、原点と調査区に距離があるため調査区内に基準点と補点10点を設定した。基準点および補点の成果値および杭高(標高)は、次の通りである。

A調査区	基準点 1	X = -35,550.000m	Y = +25,850.000m	H = 124.555m
	補点 1	X = -35,550.000m	Y = +25,930.000m	H = 123.736m
	補点 2	X = -35,570.000m	Y = +25,920.000m	H = 124.125m
	補点 3	X = -35,550.000m	Y = +25,920.000m	H = 124.138m
	補点 4	X = -35,560.000m	Y = +25,880.000m	H = 124.252m
	補点 5	X = -35,550.000m	Y = +25,880.000m	H = 124.398m
	補点 6	X = -35,520.000m	Y = +25,880.000m	H = 123.821m
	補点 7	X = -35,520.000m	Y = +25,850.000m	H = 124.424m
	補点 8	X = -35,520.000m	Y = +25,830.000m	H = 125.033m
B調査区	補点 9	X = -35,540.000m	Y = +25,630.000m	H = 125.269m
	補点 10	X = -35,540.000m	Y = +25,610.000m	H = 125.228m

(2) 粗掘と遺構検出

B調査区については、これまでに盛岡市教育委員会による試掘調査が行われており、遺構の分布状況がある程度把握されていたが、A調査区については未実施であった。そのため平成13年3月に岩手県教育委員会により、15本の試掘溝が設定され、試掘調査が行われた。粗掘りは試掘調査の結果を基に重機を使用し、その後人力により遺構検出を行った。

(3) 遺構の命名

検出された遺構の命名については盛岡市教育委員会と同様に行い、下記の略号を用いて行った。各遺構の番号は盛岡市第11次調査からの通し番号を付した。

堅穴住居跡……RA 挖立柱建物跡……RB 柱穴列……RC 坑……RD
堅穴状遺構……RE 炉・焼土遺構……RF 堀・溝跡……RG 井戸跡……RI

その他の遺構……RZ

(4) 遺構の精査と実測

検出された遺構に対し、豎穴住居跡については4分法、その他の遺構については2分法を原則として精査を行い、必要に応じて適宜併用した。記録として必要な図面は、精査の各段階で作成している。

豎穴住居跡をはじめとする遺構の平面図は、従来の簡易遺り方測量、溝跡については平板測量を用いておこなった。各実測図（平面・断面）の縮尺は、1/20を基本とし、豎穴住居跡のカマド施設断面図のみ1/10で作成している。遺構内の出土遺物は、床面直上のものは必要に応じて番号を付し、写真撮影・図面作成後に取り上げた。

(5) 写真撮影

野外調査における写真撮影には、6×7cm判カメラ1台（モノクロ）と35mm判カメラ2台（モノクロ・リバーサル）を使用して、遺構の検出状況や遺物の出土状況を撮影している。6×7cm判カメラについては撮影を省略した遺構もある。他にボラロイドカメラをメモ的に使用しているほか、野外調査終了間際にセスナ機による空中写真撮影も行っている。

2. 室内整理の方法

(1) 作業手順

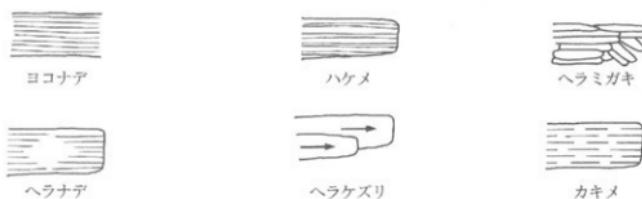
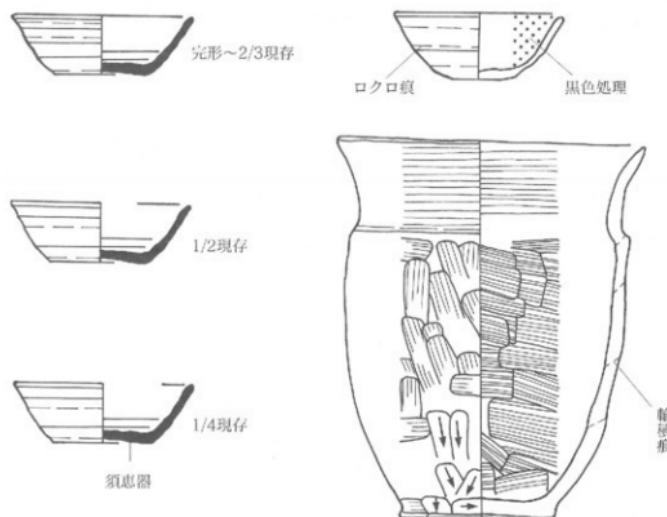
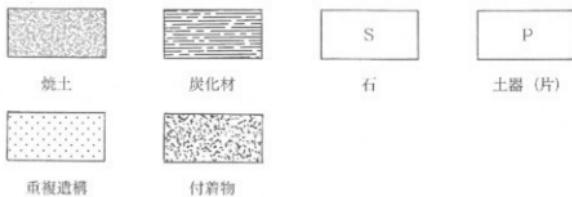
遺物についての室内整理は、野外調査で残った遺物の水洗・注記から始め、各遺構ごとの仕分け、接合・復元、実測、拓本作成、トレース、写真撮影、遺物図版組、遺物写真図版組の順に作業を進めた。遺構については野外調査の際に作成した図面の点検・合成から始め、第2原図・遺構配置図の作成、トレース、遺構写真組、遺構図版組の順に作業を進めた。また、これらと同時に原稿執筆、遺物の計測、各種分析・鑑定を行い報告書に掲載している。

(2) 掲載遺構

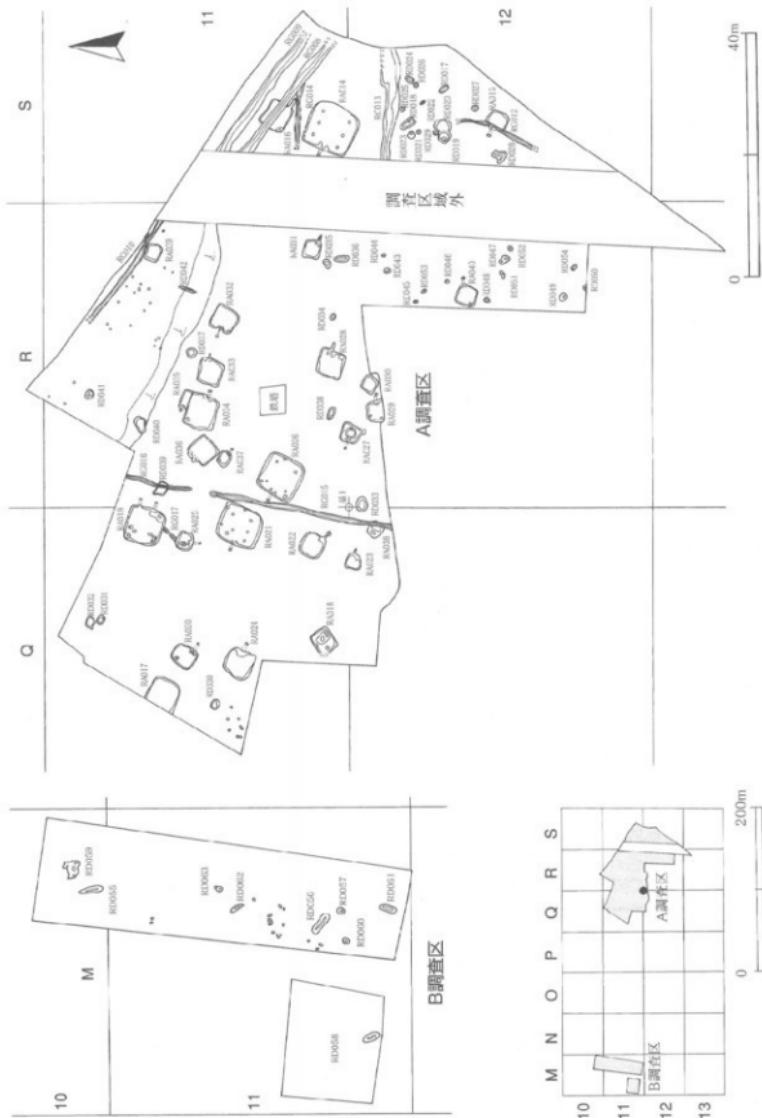
各遺構図版は、次の縮尺を基本として掲載しているが、中には例外もあり、図版にはそれぞれスケールもしくは縮尺率を付している。遺構配置図は野外調査時に作成した図面を基に、仕上がり1/800で掲載した。堅穴住居跡の平面および断面図1/60、カマド断面図1/30、土坑の平面・断面図とも1/60、溝跡の平面図1/120（一部1/150）、断面図1/60、柱穴状土坑の平面図1/150である。図版内の方位は座標北を示している。

(3) 掲載遺物

土器と陶磁器の実測は、原則として反転実測が可能なものを優先したが、遺構内から出土したものについては破片も可能な限り掲載した。土器の現存率は、口縁上端部の表現で区別し、器面調査は、中輪縫の左側を外面、右側を内面とし、土器の特徴がよく表現できるように模式的に図化した。土器の調整技法の表現は凡例に示す通りである。掲載遺物図版の縮尺率は土器・土製品・陶磁器類が1/3、石器・石製品・鉄製品は1/2を原則としたが、遺物によっては異なるものもあり、その際には縮尺率を明記してある。また、遺構図版内のPは土器（片）、Sは石を示している。



第6図 凡例



第7図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

1. 概要

第12次調査A調査区で検出された遺構は、古墳時代末～奈良時代の堅穴住居跡11棟、平安時代の堅穴住居跡16棟をはじめとし、上坑38基、溝跡9条、柱穴状小土坑30基である。また、B調査区で検出された遺構は、繩文時代の陥し穴等上坑9基、柱穴状小土坑14基のみで、奈良・平安時代に属すると思われる堅穴住居跡等の遺構は検出されていない。

出土した遺物の大部分は、A調査区から出土した古墳時代末～奈良時代・平安時代の土器器と須恵器で占められ、縄文時代に属すると思われるものはB調査区から出土した石器1点のみである。土器の器種は壺、高台付壺、甕、壺、耳皿などが中心であり、生活用具としては土製鋸齒車、鉄製の刀子・環状製品および砥石類等が出土している。

2. 堅穴住居跡

(1) 古墳時代末～奈良時代

古墳時代末～奈良時代の堅穴住居跡はA調査区からのみ11棟検出されている。

R A014堅穴住居跡（写真図版8, 56, 57, 58）

＜位置＞ A調査区の東側、11S区と12S区に亘って位置している。北東側にはR A016堅穴住居跡（平安時代）が近接する。

＜検出状況＞ 表上（I層）を数cm除去した直下のII層上面において、黒褐色の広がりとして検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は、隅丸方形を呈している。規模は7.90×7.30mを測り、本遺跡で最も大型の住居跡である。

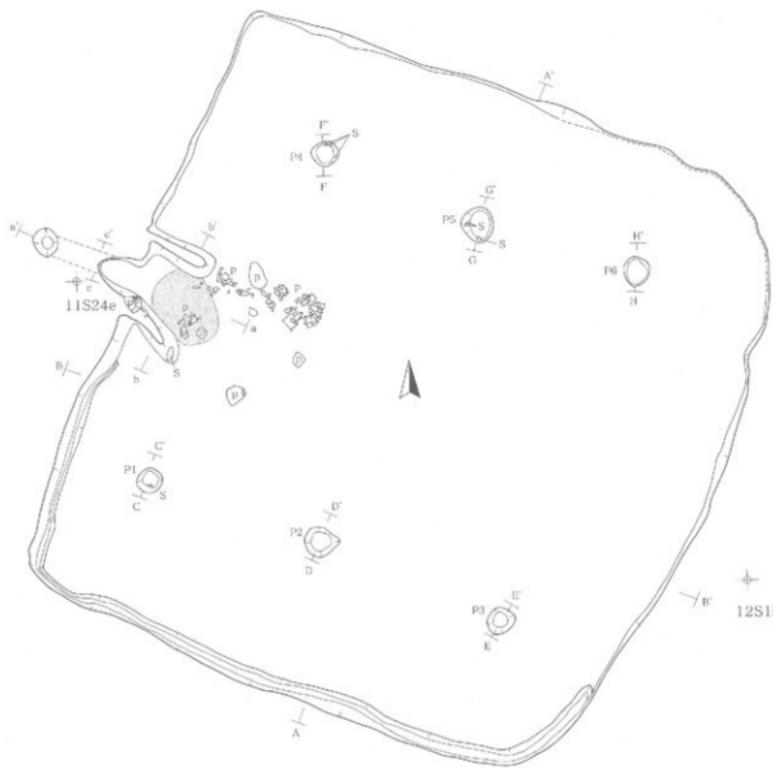
＜埋土＞ 埋土は、基本的に黒色～黒褐色土を主体とするが、褐色土ブロックの混入状況によって5層に細分される。4層以外はいずれの層も堅くよく締まっている。

＜壁・床＞ 壁の大半は、耕作によると考えられる削平を受けており、残存状況はよくない。壁高は東壁10cm、西壁22cm、南壁18cm、北壁8cmを測り、やや外傾気味に立ち上がっている。床面は、平坦で堅く締まっている。貼り床は検出されていない。

＜柱穴・他の施設＞ 主柱穴と思われるものを6基検出した。平面形はP1とP4が円形、他は梢円形を基調としている。埋土は、黒褐色土を主体とし、V層の砂礫層まで掘り込んでおり、P2とP5が他と比較すると深い。また、カマドの左袖～南壁～東壁にかけて幅18～20cm、深さ3～4cmの葉溝が巡る。

No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6
直径cm	40×30	42×37	33×30	34×32	43×41	37×32
深さcm	11	36	27	20	33	15

＜カマド＞ カマドは、西壁のほぼ中央付近に位置している。本体部は削平を受けていることから天井部の構造は不明である。袖部は、黒褐色土を主体にして造られているほか、左袖には土器器の甕を芯として用いている。焼成部は、径94×67cmの梢円形で、厚さ10cmの焼土が形成されている。削り抜き式と思われる焼成部は長



埋土所蔵 ($\Delta - \Delta'$)
 トトコ、5MPa、 $\frac{7}{10}$ 、和鉄合、1.5kg/m³、シート、(16.1~23.0)の割合上プローブを含む

1:7.5YR1/7-1 粘性なし しまり無 シルト (1mm~2mmの褐色土ブロックを作む)
2:10YR2/1-2 粘性ややあり しまり無 シルト (1mm~2mmの褐色土ブロックを形成する)

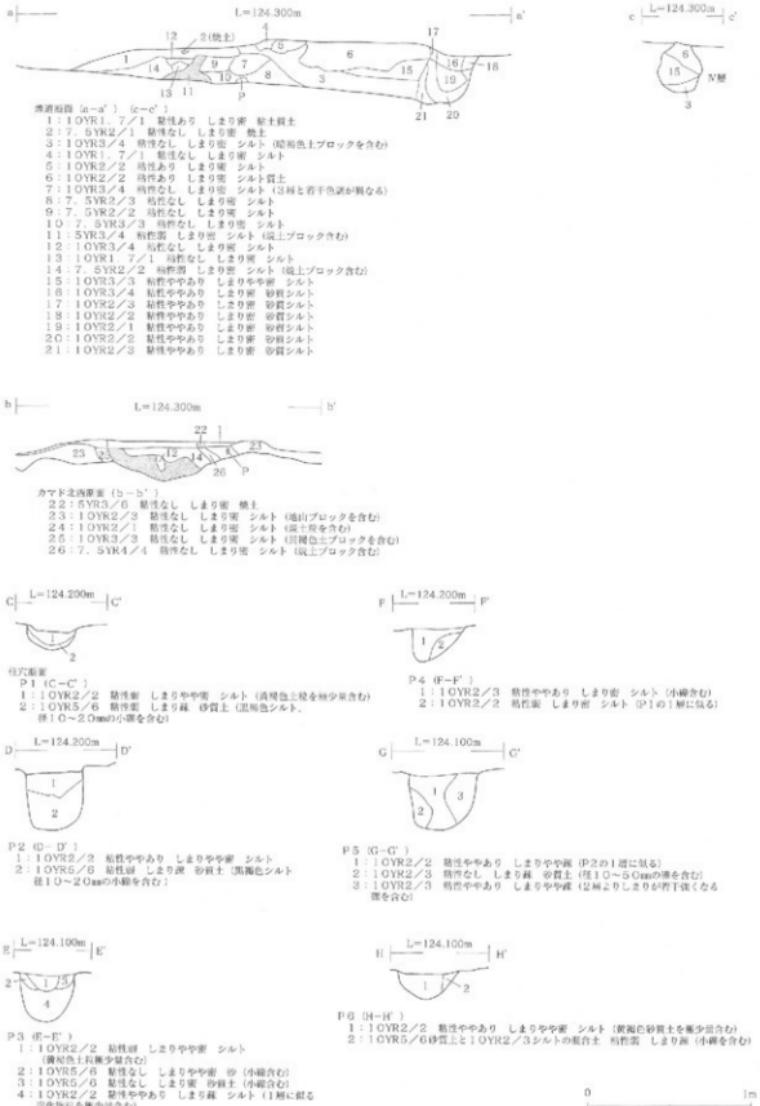
2: 1GXR2/1~2 指性ややあり しまり感 シルト (径1~2mmの褐色土ブロックを含む)
3: 1GXR2/2 指性を含み しまり感 シルト (径5~60mmの褐色土ブロックを含む)

3. TUTR2/z 治癒子であり しまり癌
4. 7. 5YR4/4 治癒なし しまりなし
シルト (強度～50%強の弱さ)
(弱2～30mmの弱を含む)

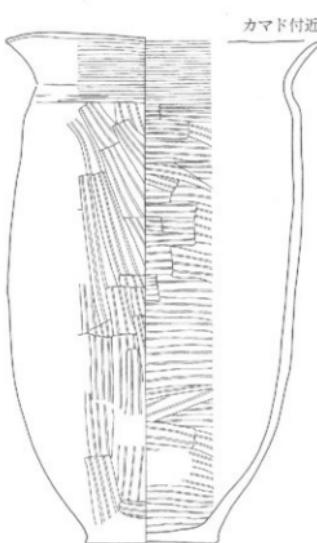
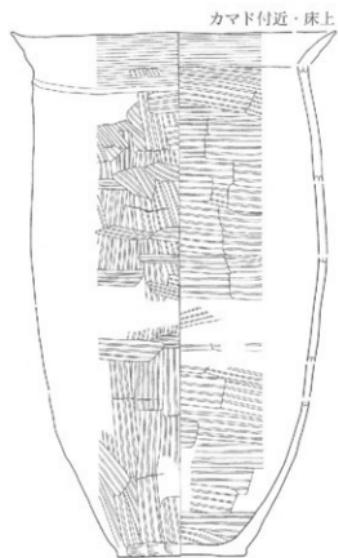
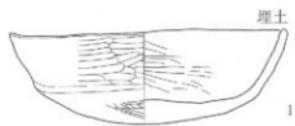
厚土牆面 (B = B')

5:10YR2/2 稼性ややあり しまり密 シルト (層2~5mmの褐色土ブロックを含む)

第8図 RA014堅穴住居跡（1）

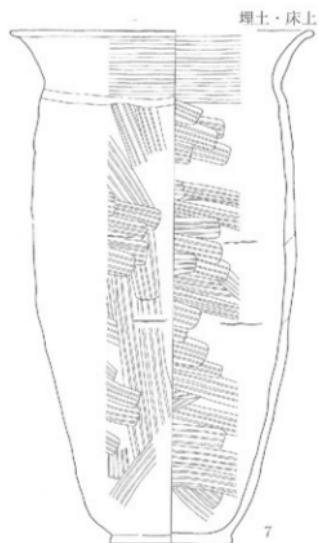
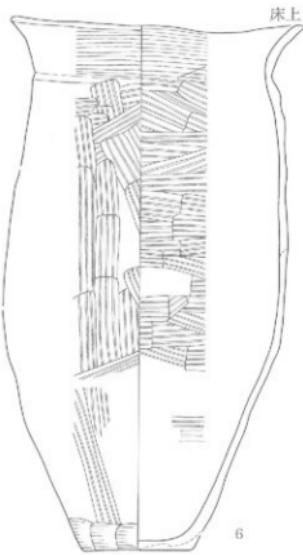
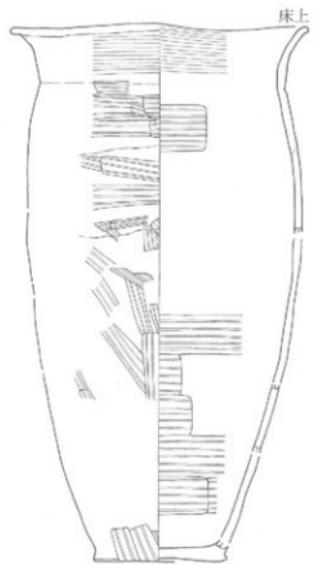


第9図 RA014堅穴住居跡 (2)



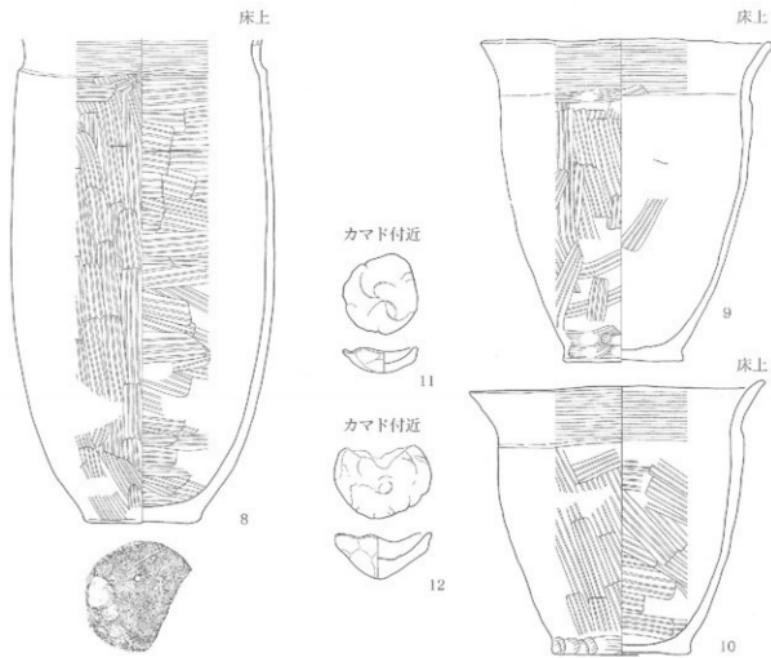
S=1/3

第10図 RA014堅穴住居跡出土遺物（1）



S=1/3

第11図 RA014竪穴住居跡出土遺物 (2)



S=1/3

第12図 RA014堅穴住居跡出土遺物 (3)

さ1.28mを測り、緩やかに下りながら煙出し部に至る。煙出し部は径32×31cm、深さ30cm程の土坑が掘り込まれている。

<遺物> カマド周辺の床面から上師器の环・甌・長胴甌が出土している。1はロクロ不使用の土師器の环である。口縁部は外傾気味に立ち上がり、体部外面の中位に段が巡る。底部は丸底である。内外面ともヘラミガキ調整が施されている。2はロクロ不使用の甌の口縁～体部上半である。口縁部はヨコナデ、体部はハケメ調整される。3～10もロクロ不使用の上師器の甌で、いずれも口縁部はヨコナデ調整、体部はハケメ調整される。8は口縁部を欠損しており、不明であるが、他は頭部から外傾して口縁部が立ち上がっている。

3・4・5・9の底部には木葉痕が確認できる。11・12はカマド付近から出土した、手捏ねのミニチュア土器である。内外面に金属等の付着物は見られず、用途などの詳細は不明である。

<時期> 出土した遺物の特徴から奈良時代（8世紀代）と考えられる。

RA015堅穴住居跡（写真図版9, 58）

＜位置＞ A調査区の東側、12S区に位置している。RG012溝跡と重複関係にあり、本遺構の方が古い。今回検出された堅穴住居跡の中では、鹿妻塀を挟んで南側に隣接する飯岡沢田遺跡に最も近い場所に位置している。

＜検出状況＞ RA014と同様に、表土（I層）を数cm除去した直下の、IV層上面において黒褐色の広がりとして検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸の長方形を呈している。規模は3.43×2.86mを測り、カマドおよび南東壁の一部は攪乱をうけている。

＜埋土＞ 埋土はレンズ状堆積の様相を呈しており、黒色～黒褐色シルト質土からなる7層に分けられる。主体となるのは1層と3層であるが、間に径約1mm程の炭化物粒を少量含む黄褐色土の層が見られる。

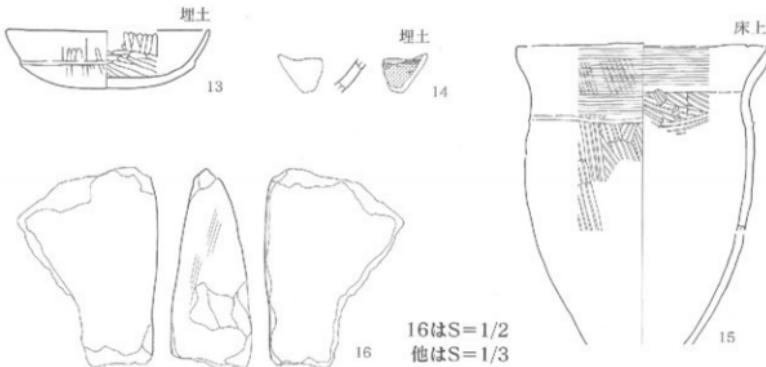
＜壁・床＞ 壁の上部は削平を受けているが、床面からほぼ垂直に立ち上がる。北西壁の一部のみ外傾して立ち上がっている。壁高は南東壁28cm、北西壁17cm、南西壁35cm、北東壁31cmを測る。床面は平坦で綺麗で、中央付近で亞円礫と炭が検出されている。貼り床は確認されていない。床面中央付近で検出された炭化材は、ナラおよびクリ材との肉眼鑑定による結果を得ている。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴および他の施設は確認されない。

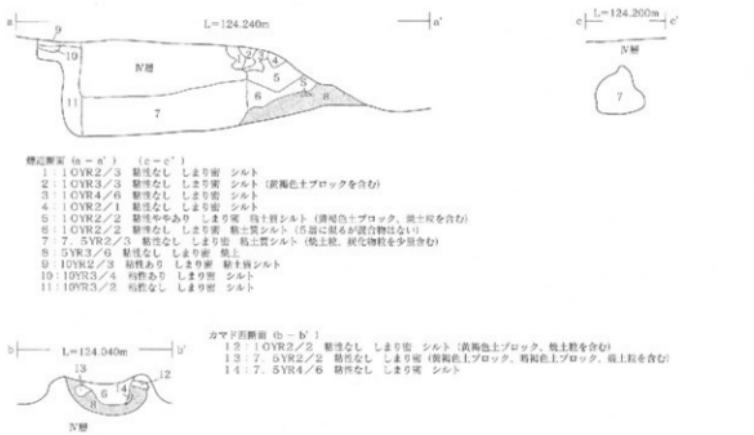
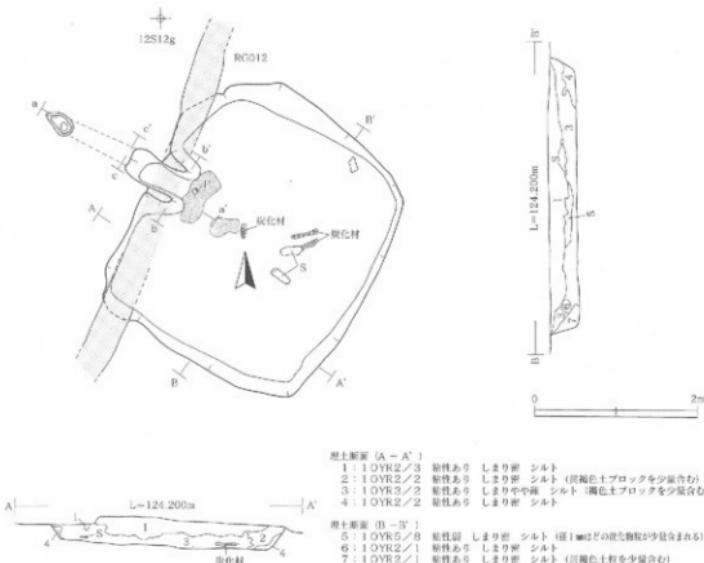
＜カマド＞ 北西壁の中央付近に位置している。本体部が攪乱を受けていたため、上部構造は不明である。袖部はIV層を削りだして造られており、芯材に礫や壺の使用は認められない。燃焼部は径68×25cmの梢円形で、厚さ約6cmの焼土を形成している。煙道部は削り抜き式で、長さ1.52mを測り、緩やかに下りながら煙出し部に至る。煙出し部には径37×23cm、深さ56cmの梢円形の土坑が掘り込まれている。

＜遺物＞ 13はロクロ不使用の土師器の环である。体部外側中位に段が巡り、外面の段を境に口縁部は外傾して立ち上がっている。底部は丸底で、器面調整は内外面ともヘラミガキ調整が施されている。14もロクロ不使用の土師器の环である。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理が施されている。15はロクロ不使用の甕で、底部を欠損している。口縁部は外面に巡る段を境にやや外傾し、端部が直立気味に立ち上がっている。器面調整は口縁部外面が櫛齒状沈線を施した後ヨコナデ調整され、体部はハケメ調整されている。16は砥石と思われる。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴と炭化材の年代測定の結果から奈良時代（8世紀代）とみられる。



第13図 RA015堅穴住居跡出土遺物



第14図 RA015竪穴住居跡

RA017堅穴住居跡（写真図版10, 59）

＜位置＞ A調査区西端の11Q区に位置し、北西側は調査区域外へ延びている。南東約3mには RA020堅穴住居跡（平安時代）が近接する。

＜検出状況＞ II層、III層は削平されており、表土（I層）を除去した直下のIV層において黒色土の広がりとして検出した。南東壁は一部搅乱を受けている。

＜平面形・規模＞ 北西側が調査区域外へ続くことから規模、平面形の全容は不明である。現存する南東隅、北東隅は隅丸を呈しており、南東辺4.65m、南西辺3.68m、北東辺3.20mを測る。

＜埋土＞ 10層に細分されるが、主体は黒色土からなる1層、2層で、堅く締まっている。3層～6層はIV層に起源するとと思われる黄褐色土の小ブロックの混入具合によって細分される。

＜壁・床＞ 壁は床面からやや外傾して立ち上がり、壁高は南東壁25cm、北東壁32cmを測る。床はほぼ平坦で、貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴および他の施設は確認されない。

＜カマド＞ 調査区境界で少量の焼土が確認されたことから、調査区域外の北西壁中央付近に位置すると思われる。

＜遺物＞ カマドが調査区域外に位置すると思われ、出土遺物が少ないため掲載した遺物は1点である。17はロクロ不使用の甕の口縁部で、外面はヨコナデ、内面はヨコナデ・ヘラナデ調整されている。

＜時期＞ 出土遺物が少なく、不明な点が多いが、土師器の破片やカマドが位置すると思われる方向から奈良時代と思われる。

RA021堅穴住居跡（写真図版11, 59）

＜位置＞ A調査区西寄りの11Q区と11R区にわたって位置している。南東側4mにはRCG015溝跡を挟んでRA026堅穴住居跡（奈良時代）が近接する。

＜検出状況＞ II層上面において灰白色の火山灰小ブロックが、方形に点在することによって検出した。

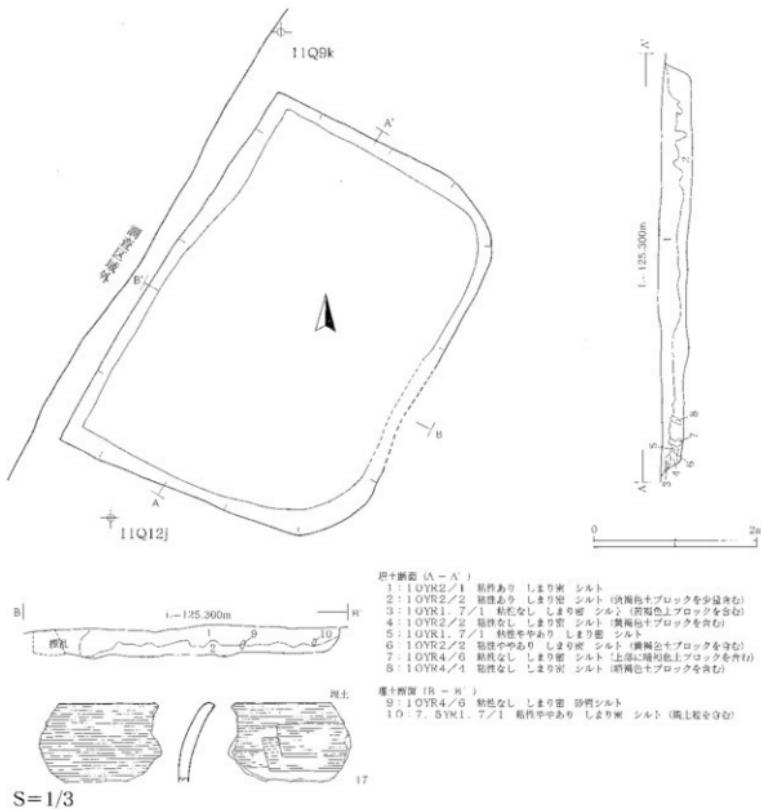
＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は7.05×6.18mを測る。

＜埋土＞ 7層に細分されるが、主体は1層、2層、6層の黒色～黒褐色土でレンズ状に堆積している。

＜壁・床＞ 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっているが、上部で外傾する。壁高は南東壁52cm、北西壁70cm、南西壁73cm、北東壁56cmを測る。床は部分的に凹凸があるものの全体的に平坦で締まっている。貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ あわせて17基の土坑、柱穴状土坑を検出した。主柱穴は1号土坑、4号土坑、P3およびP4と思われる。

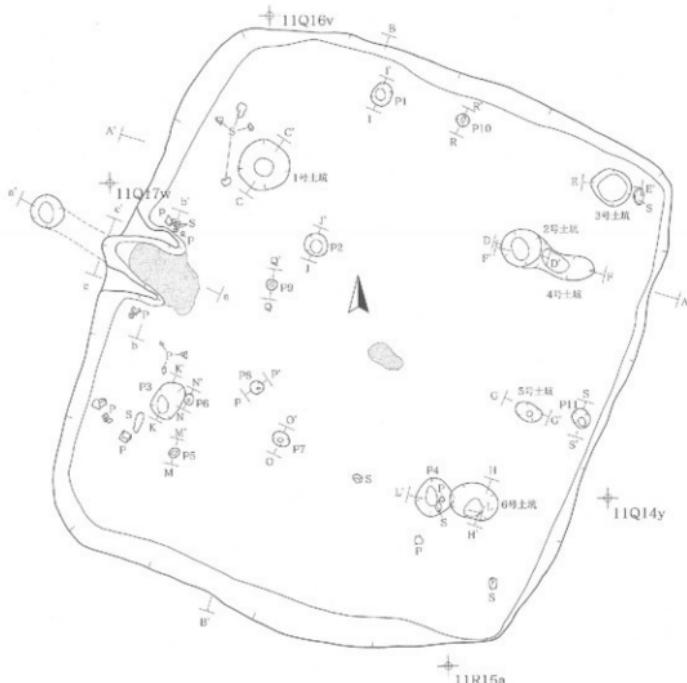
No.	1号土坑	2号土坑	3号土坑	4号土坑	5号土坑	6号土坑
直径cm	52×51	49×47	50×43	69×39	34×22	58×44
深さcm	48	16	11	49	16	28
No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6
直径cm	28×23	28×26	46×32	47×(45)	14×11	12×11
深さcm	23	33	36	45	7	14



第15図 RA017堅穴住居跡・出土遺物

No.	P7	P8	P9	P10	P11
直径cm	22×17	17×16	14×12	17×15	24×24
深さcm	15	17	11	20	16

<カマド> 北西壁の中央付近に位置する。天井部は崩落しているが、残存状況は良好である。袖部はIV層を削りだして造られており、芯材として砾や土器の使用は認められない。燃焼部は径92×69cmの楕円形で、厚さ約5cmの焼土を形成している。煙道部は倒れ抜き式で長さ1.16mを測り、燃焼部から傾やかに下りながら煙出し部に至る。煙出し部は径41×40cm、深さ93cmの円形の土坑が掘り込まれている。



四十一

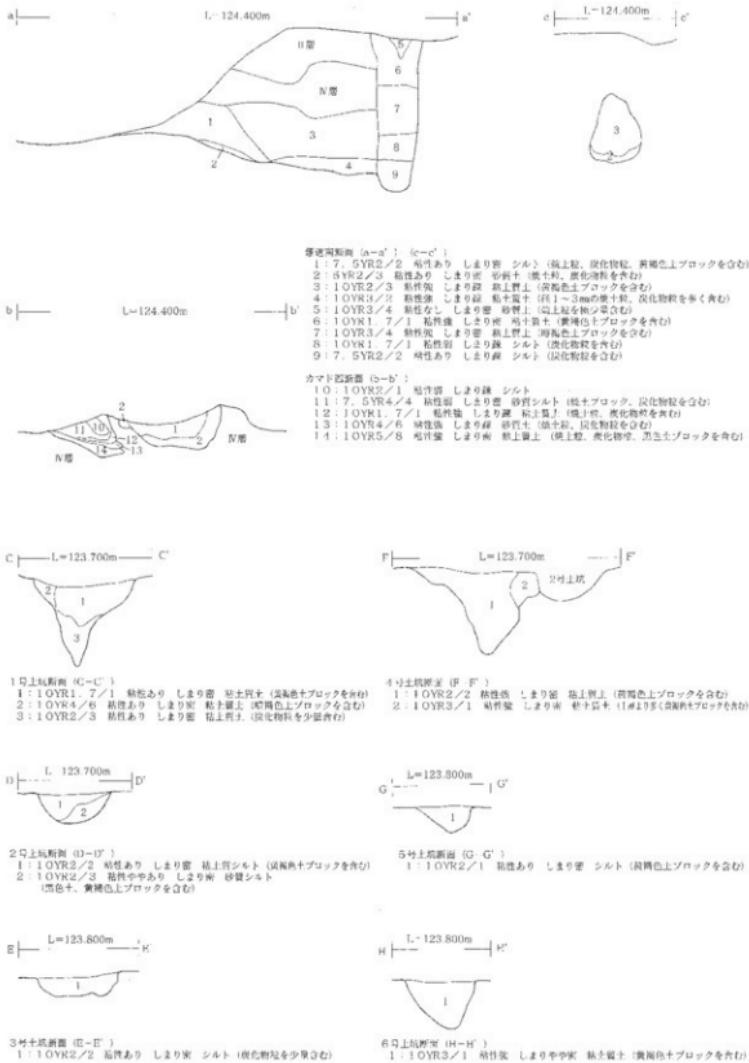
1. I₁ O_{2YR2}/1 棒性ありしまりヨウサクシルト(灰白色火山灰小プロックを多く含む)
 2. I₂ O_{2YR2}/1 棒性ありしまりヨウサクシルト
 3. I₃ O_{2YR2}/1 棒性ありしまりヨウサクシルト(黄褐色土炭を少含む)
 4. I₄ O_{2YR2}/2 棒性ありしまりヨウサクシルト
 5. I₅ O_{2YR2}/2 棒性ありしまりヨウサクシルト(灰白色火山灰小プロックを多く含む)
 6. I₆ O_{2YR2}/2 棒性ありしまりヨウサクシルト(黄褐色土炭、堆積土炭を含む)



理上來斷言 $(B-B^*)$

- 7:10YR1.7/1 黏性強 しまりやや硬 粘土質シルト(黄褐色土ブロックを含む)

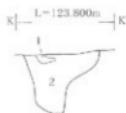
第16図 RA021竪穴住居跡 (1)



第17図 RA021堅穴住居跡 (2)



P-1断面 (I-I')
1: 1 OYR2/1 硬性あり しまり無 黏土質土
(黄褐色土ブロックを含む)



P-3断面 (K-K')
1: 1 OYR1-7/1 硬性無 しまり有 シルト
2: 1 OYR2/1 硬性あり しまり無 黏土質土



P-5断面 (M-M')
1: 1 OYR2/1 硬性あり しまり無 シルト
2: 1 OYR3/4 硬性あり しまり無 黏土質土



P-7断面 (O-O')
1: 1 OYR2/1 硬性あり しまり無 黏土質土



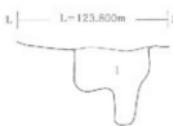
P-9断面 (Q-Q')
1: 1 OYR2/1 硬性無 しまり有 シルト



P-11断面 (S-S')
1: 1 OYR2/1 硬性強 しまり無 黏土質土



P-2断面 (I-I')
1: 1 OYR2/1 硬性あり しまりやや弱 黏土質土
(黄褐色土ブロックを含む)



P-4断面 (L-L')
1: 1 OYR2/2 硬性あり しまり強 黏土質土
(黄褐色土ブロックを含む)



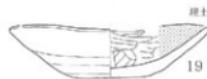
P-6断面 (N-N')
1: 1 OYR1-7/1 硬性あり しまり有 シルト



P-8断面 (P-P')
1: 1 OYR2/1 硬性あり しまり無 黏土質土

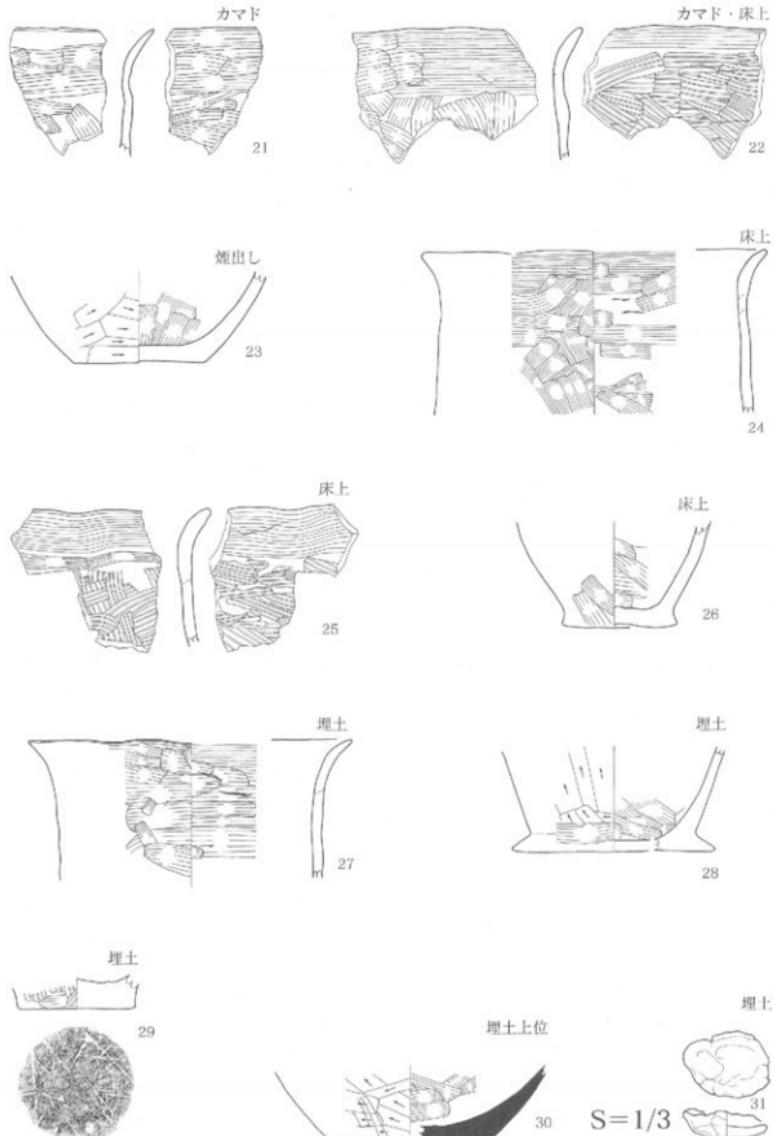


P-10断面 (R-R')
1: 1 OYR1-7/1 硬性あり しまり有 シルト



S=1/3

第18図 RA021竪穴住居跡 (3)・出土遺物 (1)



第19図 RA021竪穴住居跡出土遺物 (2)

＜遺物＞ カマド、煙出し、床面、埋土からロクロ不使用の土師器の壺・甕・手捏ねのミニチュア土器、須恵器の甕が出土している。18は丸底、19・20は平底の壺である。18・19は体部外面に段が巡り、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。21・22はカマドから出土した土師器の甕の口縁部である。ともに外反して立ち上がりしている。23は煙出し部から出土した甕の底部で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナテ調整されている。24～26は床面から出土した土師器の甕である。24は口縁部ヨコナデ、体部ヘラナテ調整され、25は口縁部ヨコナデ、体部ハケメ調整されている。26は底部で、内外面ともヘラナテ調整である。27～31は埋土から出土で、27～29は土師器の甕、30は須恵器の甕の底部である。30は埋土上層からの出土であり、周辺の他の遺構から流れ込んだ可能性が考えられる。31は手捏ねのミニチュア土器である。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から奈良時代（8世紀後半）と考えられる。

RA026堅穴住居跡（写真図版12, 59, 60, 61, 62）

＜位置＞ A調査区やや西寄りで、11R区の西端、11Q区との境界付近に位置する。北西側約3mにはRG015溝跡を挟んで前述のRA021堅穴住居跡（奈良時代）が接する。

＜検出状況＞ II層上面では確認できずIV層上面において黒色土の広がりとして確認した。検出面において灰白色火山灰の混入は見られない。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈しており、規模6.57×6.16mを測る。

＜埋土＞ 黒色～黒褐色土による14層に分けられるが、埋土主体は約40cmと最も厚層のある2層である。

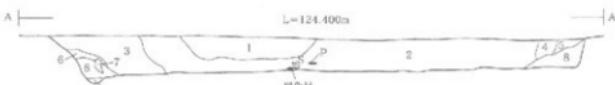
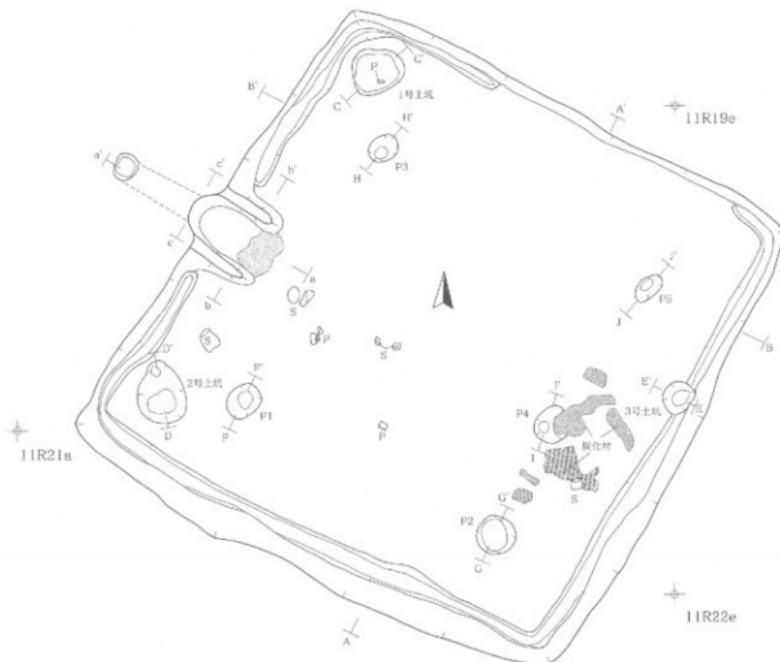
＜壁・床＞ 壁はやや外傾気味に立ち上がり、壁高は南東壁48cm、北西壁44cm、南西壁58cm、北東壁35cmを測る。床は平坦で堅く繋まっている。貼り床は確認されない。南東壁際の床面から検出された炭化材はケヤキ材との肉眼鑑定による結果を得ている。

＜柱穴・他の施設＞ 3基の土坑と5基の柱穴状土坑を検出した。位置的にみてP1、P2、P3、P5の4本か5柱穴と思われるが、P2については他の3基と様相が異なり主柱穴にならないことも考えられる。

No.	1号土坑	2号土坑	3号土坑	P1
直径cm	65×57	77×60	42×36	46×37
深さcm	10	24	29	66
No.	P2	P3	P4	P5
直径cm	48×46	38×31	47×46	38×23
深さcm	66	49	35	57

＜カマド＞ 北西壁中央付近に位置している。天井部は崩落しており上部構造は不明であるが、残存状況は比較的良好である。袖部はIV層を削りだして造られており、芯材に磚や土器の使用は認められない。燃焼部は55×33cmの楕円形で、厚さ約9cmの焼土を形成している。煙道部は削り抜き式で長さ1.33mを測り、緩やかに下りながら煙出し部に至る。煙出し部には33×27cmの円形の土坑が掘り込まれている。

＜遺物＞ カマドおよびその周辺、床面、埋土からロクロ不使用の土師器の壺・甕、小型の壺、須恵器の甕、手捏ねのミニチュア土器、磁石、鉄製品が出土している。32・33は土師器の壺である。32の底部は平底で、体部を巡る段は見られない。内外面ともヘラミガキ調整されている。33は口縁部を欠損しているが、底部丸底で、体部の外面向のみに段が巡っている。器面調整はヘラミガキ調整で、内面はさらに黒色処理されている。34～37はカマドおよびその周辺から出土した土師器の甕である。34は口縁部ヨコナデ、体部外面向がハケメ、内面



表土面断面 (A-A')

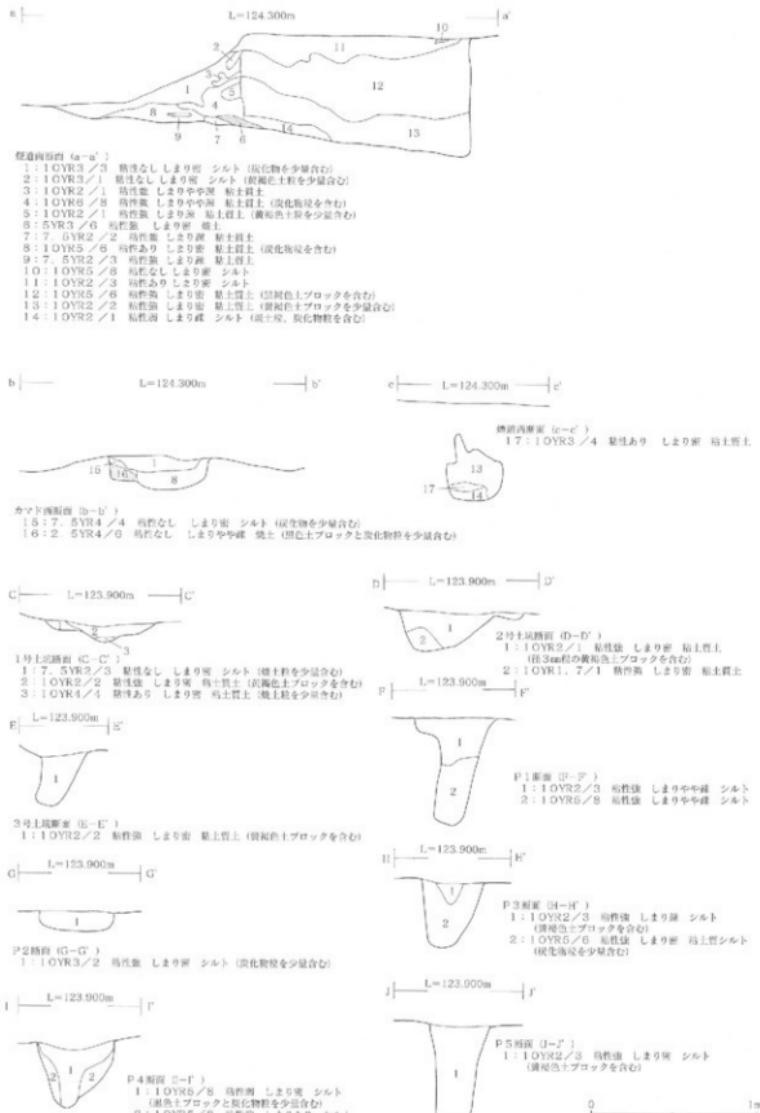
- 1: 1 OYR1, 7/I 著性あり しまり密 シルト
- 2: 1 OYR2/1 著性あり しまり密 表面シルト (下層に黄褐色土ブロックを少含む)
- 3: 1 OYR2/2 著性なし しまり密 シルト
- 4: 1 OYR2/2 著性なし しまり密 シルト
- 5: 1 OYR2/1 著性なし しまり密 シルト
- 6: 1 OYR2/1 著性なし しまり密 粘土質土
- 7: 1 OYR2/2 著性あり しまり密 シルト
- 8: 1 OYR1, 7/I 著性あり しまり密 シルト (下層に黄褐色土ブロックを少含む)
- 9: 1 OYR2/1 著性あり しまり密 基土質土



表土面断面 (B-B')

- 10: 1 OYR2/1 著性あり しまり密 シルト (淡褐色土ブロックを含む)
- 11: 1 OYR2/1 著性あり しまり密 シルト (10層より黄褐色土ブロックを含む)
- 12: 1 OYR2/3 著性あり しまり密 シルト (淡褐色土ブロックを含む)
- 13: 1 OYR1, 7/I 著性強 しまり密 砂土質土
- 14: 1 OYR1, 7/I 著性強 しまり密 砂土質土

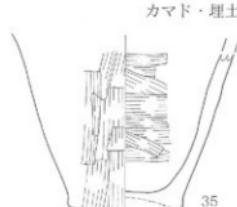
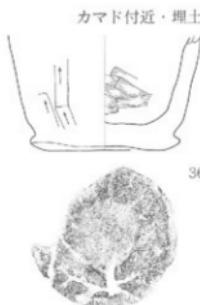
第20図 RA026堅穴住居跡 (1)



第21図 RA026堅穴住居跡 (2)



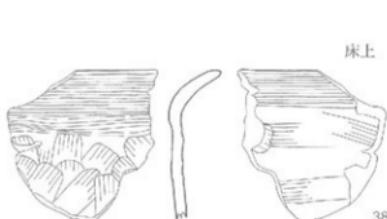
カマド



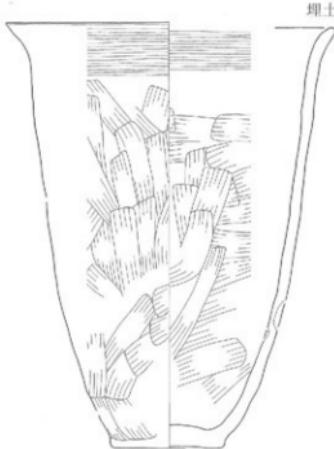
カマド・埋土



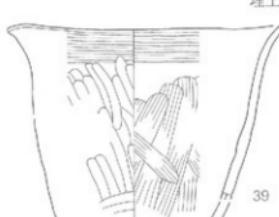
カマド付近



床上



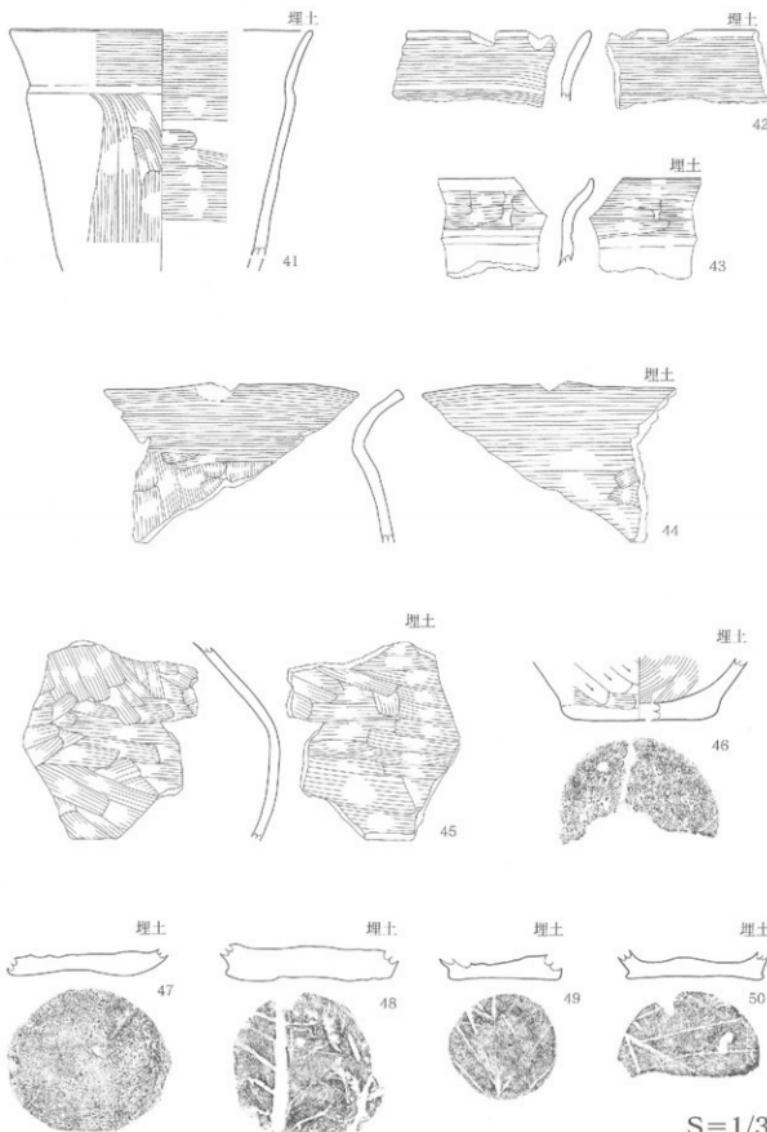
埋土



40

第22図 RA026竪穴住居跡出土遺物 (1)

S=1/3

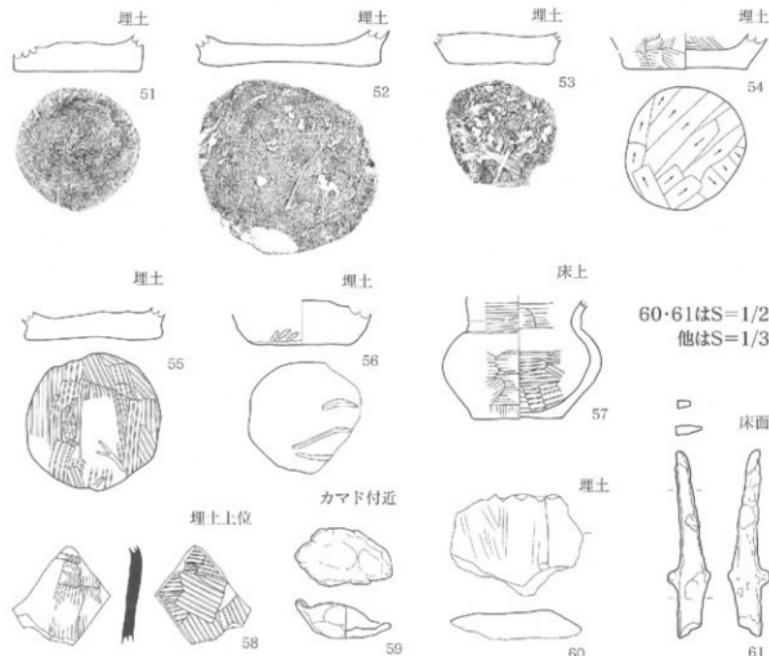


第23図 RA026竪穴住居跡出土遺物 (2)

$S=1/3$

がヘラナデ調整されている。35は内外面ともヘラナデ、36と37は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。38は床面から出土した土師器の甕の口縁～体部上半である。口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデ調整されている。39～56は埋土から出土した土師器の甕である。39～41は口縁部～体部である。器面調整は口縁部がすべてヨコナデ、体部はヘラナデ調整であるが、39の体部外面はヘラミガキである。42・43は口縁部である。44・45はその器形から球胴甕と思われる。46～56は土師器の甕の底部で、特徴的なものを掲載した。46・47は外底面に砂粒が確認できる砂底である。46は平底で径2mm程の砂粒が付着しているのに対し、47は底部中央がやや凹み、その周辺に中央部より粗めの砂粒が環状に付着している。48～52は木葉痕が確認できる。53には布漬状のものが確認できる。54はヘラケズリ、55はハケメ調整が施され、56は細い棒状のものによるケズリ状痕が見られる。57は床面から出土したロクロ不使用の小型甕である。口縁部は欠損しており、詳細は不明である。体部は強く外側へ張り出し、歪んでいる。頭部はヨコナデ、体部外面はヘラナデ、内面はハケメ調整されている。58は本遺構から出土した唯一の須恵器で、ロクロ不使用の甕の体部である。埋土上層からの出土であり、周辺の他の遺構から流れ込んだ可能性が考えられる。59は手程ねのミニチュア土器である。RA014・RA021堅穴住居跡からも同様のものが出土しているが、いずれも用途等の詳細は不明である。60は砥石、61は鉄製品で刀子と思われる。

<時期> 出土した遺物から奈良時代（8世紀後半）と考えられる。



第24図 RA026堅穴住居跡出土遺物 (3)

RA027堅穴住居跡（写真図版13, 14, 62）

＜位置＞ A調査区南寄り、11R区と12R区にわたって位置している。南東側約2mにはRA029堅穴住居跡（平安時代）が近接する。

＜検出状況＞ II層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円方形を基本とするが、南東隅に舌状の張り出し部が見られる。規模は3.02×2.75cmを測る。

＜埋土＞ 黒色土主体の9層に細分され、レンズ状に堆積した様相を呈している。

＜壁・床＞ 舌状に張り出す部分は外傾し緩やかに立ち上がるが、それ以外はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南東壁51cm、北西壁46cm、南西壁52cm、北東壁49cmを測る。土坑以外の床面は平坦で締まっている。貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴は確認されない。床面中央に径約1.8m、深さ18cmの円形の土坑を検出し、この土坑の埋土を除去したところ、さらに床面から浅い柱穴状土坑2基を確認した。また、南東隅には南側に向かつて90×82cmの舌状の張り出しが見られる。

＜カマド＞ 北西壁中央付近に位置する。天井部は崩落しており、上部構造は不明であるが、残存状況は比較的良好である。袖部はIV層を削りだして造られており、芯材に礫、土器の使用は認められない。燃焼部は42×35cmの楕円形で、厚さ約2cmの焼土を形成している。煙道部は削り抜き式で長さ1.2mを測り、緩やかに下りながら煙出し部に至る。煙出し部は38×38cmの円形の土坑が掘り込まれている。

＜遺物＞ 検出面および埋土から上部器、須恵器が出上している。62～66はロクロ不使用の土器部の甕である。64は口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデ調整されている。66の内面はヘラミガキではなくハケメ調整された後、黒色処理が施されている。64～66の底部には木葉痕が残っている。67は埋土上位から出土した須恵器の甕の体部である。ロクロ成形され、外面には浅い波状文が施されている。

＜時期＞ 出土した遺物から奈良時代（8世紀代）と考えられる。

RA030堅穴住居跡（写真図版15）

＜位置＞ A調査区の南寄り、12R区に位置し、西側約1mにはRA029堅穴住居跡（平安時代）が近接する。

＜検出状況＞ III層上面において黒色～黒褐色土の広がりとして確認した。検出面で灰白色火山灰は確認されない。

＜平面形・規模＞ 楕円方形を基本とするが、南東隅は円形気味である。規模は2.58×2.55mを測る。

＜埋土＞ 9層に細分されるが、主体は黒色・黒褐色土からなる1層～3層と褐色土からなる4層であり、レンズ状堆積の様相を呈している。

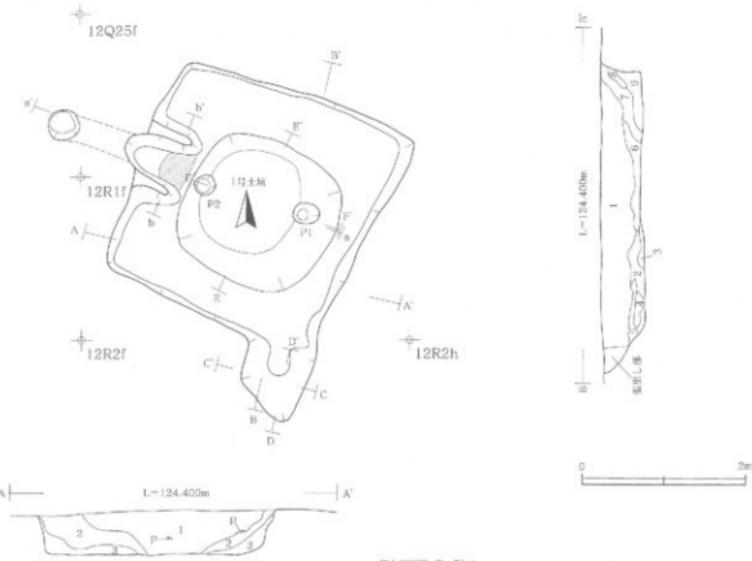
＜壁・床＞ 壁はやや外傾気味に立ち上がり、壁高は南東壁39cm、北西壁26cm、南西壁31cm、北東壁24cmを測る。床は平坦で堅く締まっている。貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 確認されない。

＜カマド＞ カマドは確認されない。南隅に径65×32cmの楕円形の焼土が確認されたが、非常に薄く現地性の焼土であるか不明である。

＜遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ カマド、出土遺物とも確認されないため時期は不明であるが、周辺の遺構との比較から奈良時代と思われる。



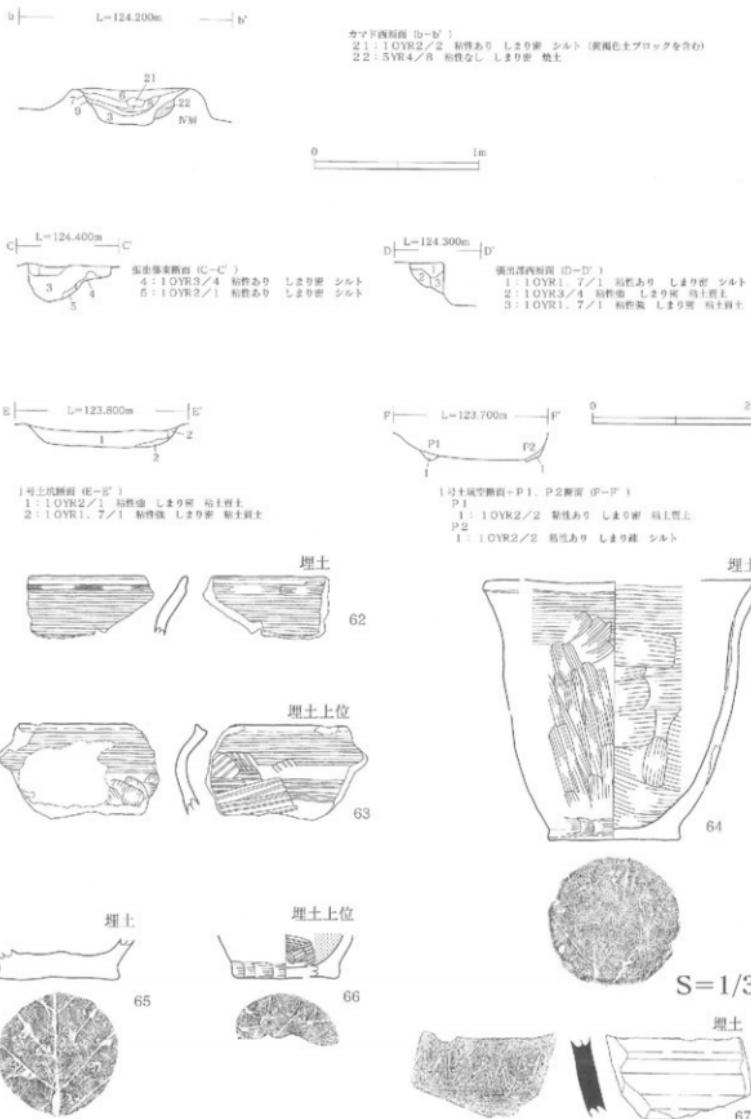
埋土西断面 (A-A')

- 1: 1 OYR1, 7/1 粘性あり しまり岩 砂土質土
- 2: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 砂土質土 (炭酸化土ブロックを含む)
- 3: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 砂土質土
- 4: 1 OYR3/4 粘性なし しまり岩 砂質シルト
- 5: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 砂質シルト
- 6: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 砂土質土
- 7: 1 OYR2/1 粘性あり しまり岩 シルト
- 8: 1 OYR1, 7/1 粘性あり しまり岩 シルト
- 9: 1 OYR1, 7/1 粘性あり しまり岩 シルト (炭酸化土ブロックを含む)
- 10: 1 OYR2/2 粘性なし しまり岩 シルト (炭酸化物質を含む)
- 11: 1 OYR2/2 粘性なし しまり岩 シルト (炭酸化物質・粘土質土を含む)
- 12: 1 OYR4/4 粘性なし しまり岩 砂土
- 13: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 シルト
- 14: 1 OYR3/4 粘性なし しまり岩 砂質シルト
- 15: 1 OYR3/4 粘性なし しまり岩 シルト
- 16: 1 OYR3/4 粘性なし しまり岩 シルト
- 17: 1 OYR2/2 粘性あり しまり岩 砂土質土
- 18: 1 OYR3/4 粘性あり しまり岩 シルト
- 19: 1 OYR1, 7/1 粘性あり しまり岩 砂土質土
- 20: 1 OYR1, 7/1 粘性あり しまり岩 砂土質土

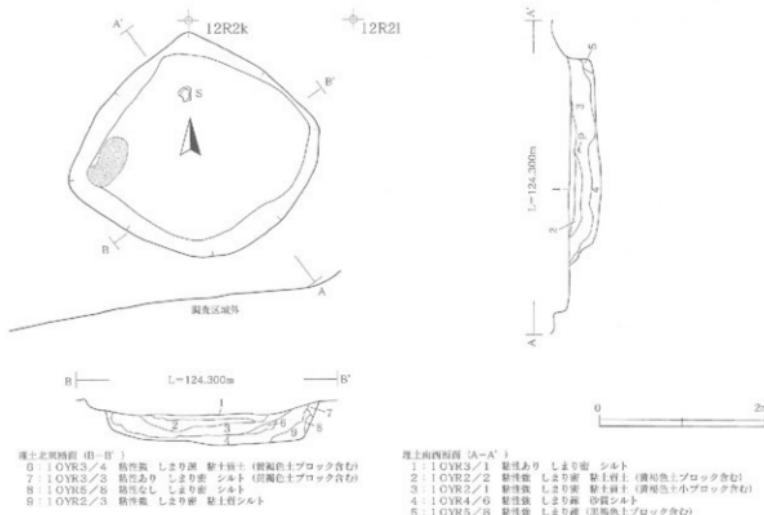
カマド源追跡断面 (a-a')

- 1: 1 OYR1, 7/1 粘性あり しまり岩 砂土質土
- 2: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 砂土質土 (炭酸化土ブロックを含む)
- 3: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 砂土質土
- 4: 1 OYR3/4 粘性なし しまり岩 砂質シルト
- 5: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 砂質シルト
- 6: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 砂質シルト
- 7: 1 OYR3/4 粘性なし しまり岩 砂質シルト (炭酸化土ブロックを含む)
- 8: 1 OYR1, 7/1 粘性あり しまり岩 シルト (炭酸化土ブロックを含む)
- 9: 1 OYR2/2 粘性なし しまり岩 シルト (炭酸化物質を含む)
- 10: 1 OYR2/2 粘性なし しまり岩 シルト (炭酸化物質・粘土質土を含む)
- 11: 1 OYR2/2 粘性なし しまり岩 砂土
- 12: 1 OYR4/4 粘性なし しまり岩 砂土
- 13: 1 OYR1, 7/1 粘性無 しまり岩 シルト
- 14: 1 OYR3/4 粘性なし しまり岩 砂質シルト
- 15: 1 OYR3/4 粘性なし しまり岩 シルト
- 16: 1 OYR3/4 粘性なし しまり岩 シルト
- 17: 1 OYR2/2 粘性あり しまり岩 砂土質土
- 18: 1 OYR2/2 粘性あり しまり岩 シルト
- 19: 1 OYR3/4 粘性あり しまり岩 シルト
- 20: 1 OYR1, 7/1 粘性あり しまり岩 砂土質土

第25図 RA027堅穴住居跡 (1)



第26図 RA027竪穴住居跡 (2) · 出土遺物



第27図 RA030堅穴住居跡

RA032堅穴住居跡（写真図版16, 63）

＜位置＞ A調査区中央、11R区に位置し、西側約5mにはRA033堅穴住居跡が近接する。また、北側約1mで段丘縁辺部に至る。

＜検出状況＞ 本遺構の位置する区域はかなり削平を受けており、表土（1層）を除去した直下のIV層、しかも下面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は4.05×3.86mを測る。

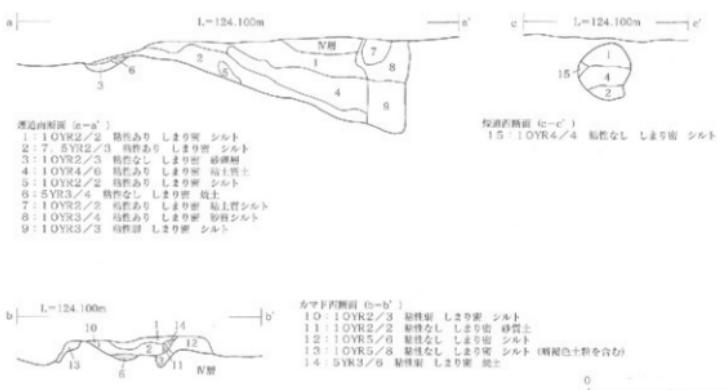
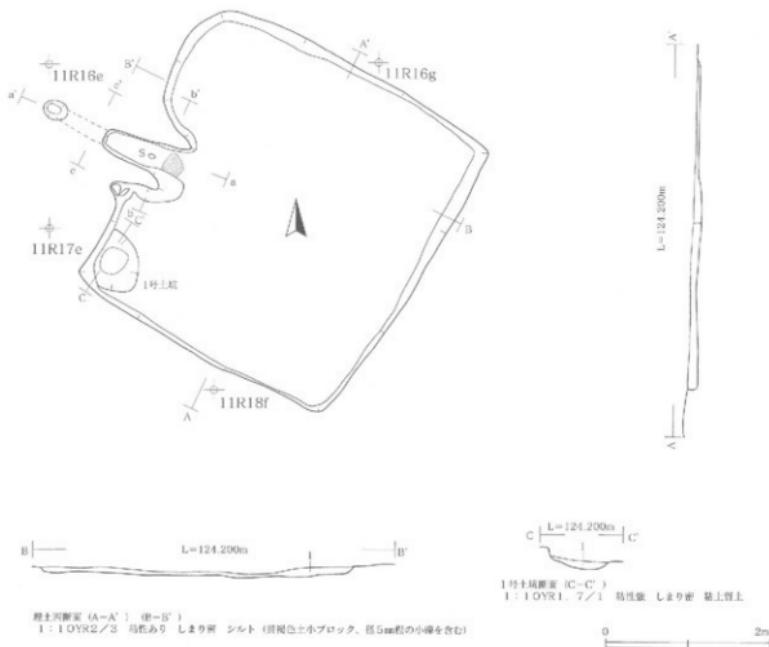
＜理土＞ 黒褐色土の単層からなり、黄褐色土の小ブロックと、径5mm程の小砾を含んでいる。

＜壁・床＞ 壁はやや外傾気味に立ち上がり、壁高は南東壁7cm、北西壁8cm、南西壁13cm、北東壁4cmを測る。床面は平坦で堅く結まっているが、V層の砂礫層が部分的に露呈している。貼り床は確認されない。

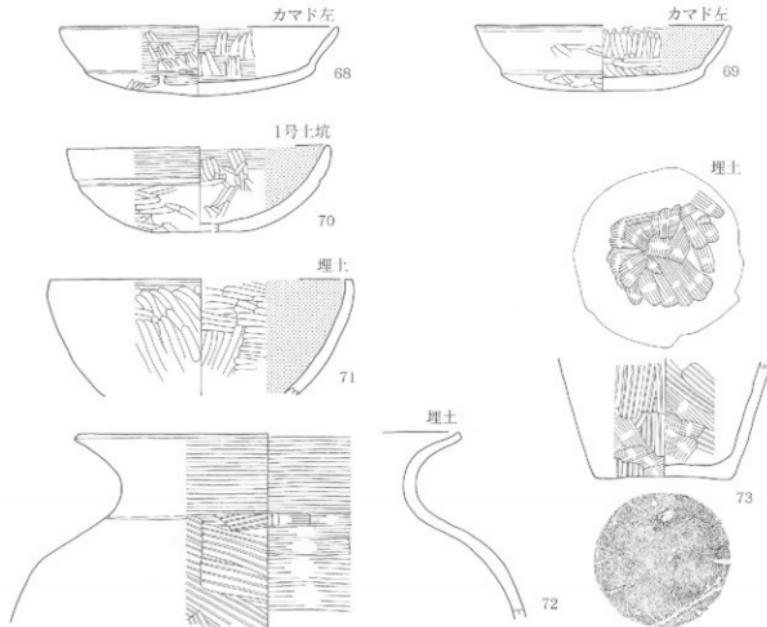
＜柱穴・他の施設＞ 柱穴は確認されない。南西隅に土坑1基を検出した。規模は68×56cmで、平面形は楕円形を呈している。埋土は粘性の強い黑色粘土質土の単層である。

＜カマド＞ 北西壁の中央付近に位置している。削平を受けているため上部構造は不明である。袖部はIV層を削りだして造られており、芯材としての礫や土器の使用は認められない。燃焼部は25×24cmの楕円形で、厚さ4cmの焼土を形成している。煙道部は割り抜き式で長さ1.30mを測り、やや急な下り勾配で煙出し部に至る。煙出し部は径29×25cm、深さ56cmの楕円形の土坑が掘り込まれている。燃焼部の奥には支脚も検出された。

＜遺物＞ カマドの左脇、1号土坑、埋土からロクロ不使用の环、甕が出土している。68・69はカマドの左脇から出土した土解器の环である。内外面とも体部と底部の境に段があり、丸底である。器面調整はヘラミガキ



第28図 RA032堅穴住跡



第29図 RA032堅穴住居跡出土遺物

S=1/3

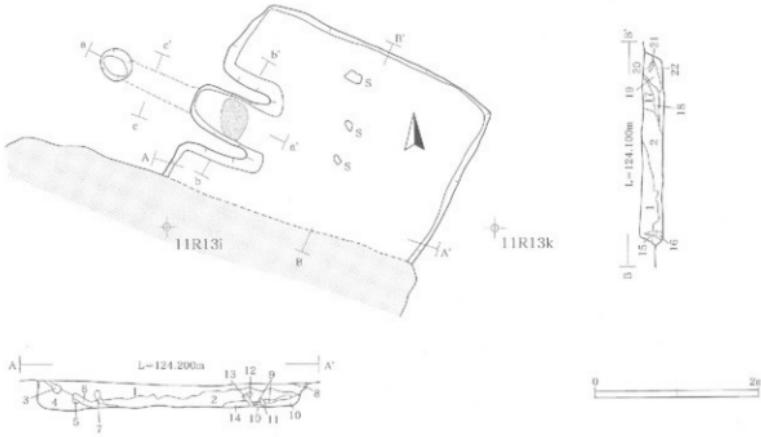
が主で、69は内面が黒色処理されている。70は1号土坑から出土した土師器の壊で、口縁部と体部の境に外面のみ段がある。底部は丸底であるが、68・69より平底風である。器面調整はヘラミガキが主となるが、口縁部にはヨコナデ調整も見られる。また、内面には黒色処理が施されている。71は埋土からの出土で、内面黒色処理された壊であるが、68～70より器高が高くなり椀状となる。口唇部も平坦である。内外面ともヘラミガキ調整されているが、特に内面は丁寧に磨かれている。72は丸洞腹の口縁～体部上半にかけてである。口縁部はヨコナデ、体部は外面がハケメ、内面がヘラナデ調整されている。73は壊の体部下半～底部である。体部がハケメ・ヘラナデ調整され、底部内面はヘラナデ調整されている。底部外面上には木葉痕が確認できる。

<時期> 出土した遺物から古墳時代末（7世紀後半）～奈良時代と考えられる。

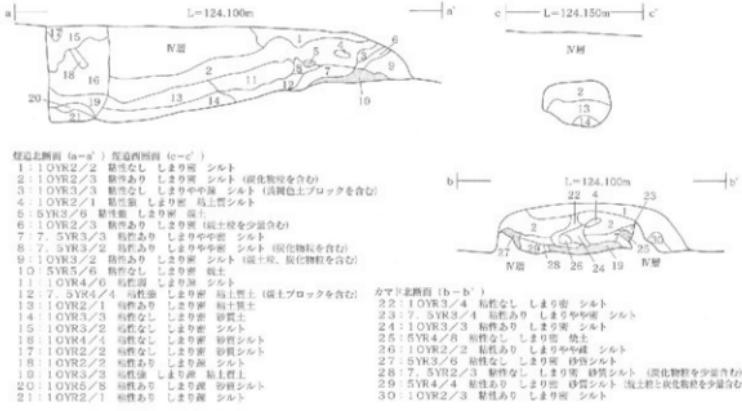
RA035堅穴住居跡（写真図版17, 63）

<位置> A調査区の11R区に位置し、RA034堅穴住居跡と重複関係にあり、RA034堅穴住居跡に切られていることから本遺構の方が古い。今回の調査区内において唯一住居跡同士の重複関係である。また、北東側約3.5m程で段丘線辺部に至る。

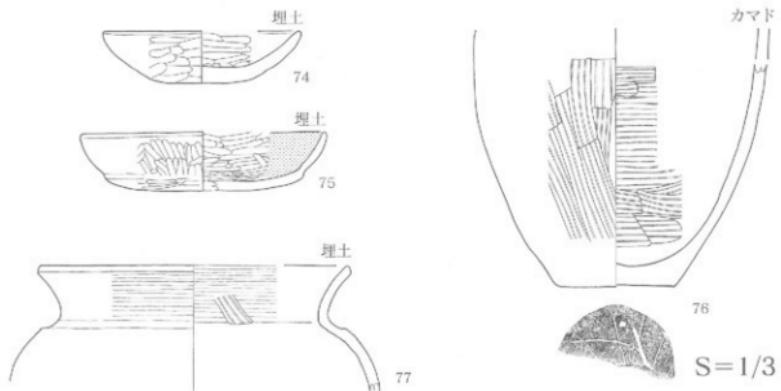
<検出状況> II層、III層は削平を受けており、I層を除去した直下のIV層上面において黒褐色土の広がりと



本土北東洋 (A-1)
1 : I OVR4/1 難易性なし しまり弱 シルト
2 : I OVR4/2 難易性あり しまり強 シルト
3 : I OVR4/4 難易性なし しまり弱 シルト
4 : I OVR2/2 難易性なし しまり強 シルト [浜面色上部プロックを含む]
5 : I OVR4/2 難易性なし しまり弱 シルト [樹木干枯を伴う]
6 : I OVR2/2 難易性なし しまり強 シルト [樹木干枯を少額含む]
7 : I OVR1.7/1 難易性なし しまり強 シルト
8 : I OVR2/3 難易性なし しまり強 サンド
9 : I OYN1.7/1 難易性なし しまり強 サンド
10 : I OVN4/4 難易性なし しまり強 シルト
11 : I OVR4/4 難易性なし しまり弱 シルト
12 : I OVN4/6 難易性なし しまり弱 サンド
13 : I OVR2/2 難易性なし しまり強 シルト
14 : I OVR2/2 難易性なし しまり弱 シルト



第30図 RA035堅穴住居跡



第31図 RA035竪穴住居跡出土遺物

して確認した。

＜平面形・規模＞ RA034竪穴住居跡に切られているため平面形、規模の全容は不明であるが、残存する部分から平面形は隅丸方形を呈していると思われる。規模は残存する南東辺2.10m、北西辺2.45m、北東辺3.00mを測る。

＜埋土＞ 黄褐色土の混入状況等により22層に細分されるが主体は黒褐色土からなる1層、2層である。5層、6層には焼土粒が見られるが、床面で焼土は確認されておらず移地性のものである可能性が高い。

＜壁・床＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は南東壁27cm、北西壁33cm、北東壁22cmを測る。床面は平坦で堅く締まっている。貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 確認されていない。

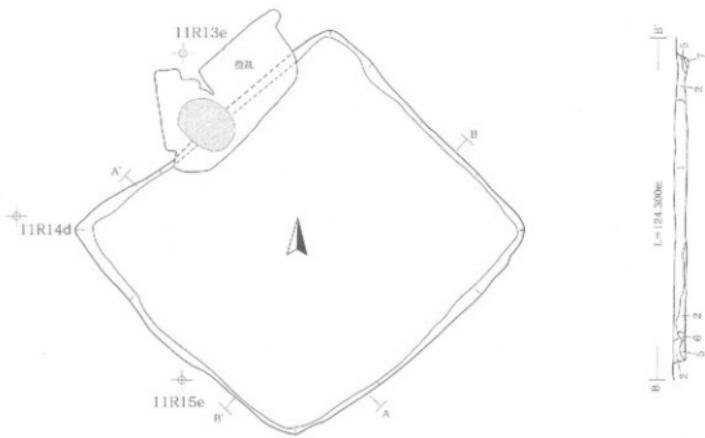
＜カマド＞ 北西壁の一部がRA034竪穴住居跡に切られるため詳細は不明であるが、北西壁中央付近に位置すると思われる。袖部はIV層を割りだして造られており、芯材に礫や土器の使用は認められない。燃焼部は43×32cmの楕円形で、厚さ約5cmの焼土を形成している。煙道部は割り抜き式で長さ1.30mを測り、下りながら煙出し部に至る。煙出し部には径37×37cmのやや楕円形気味の土坑が掘り込まれている。

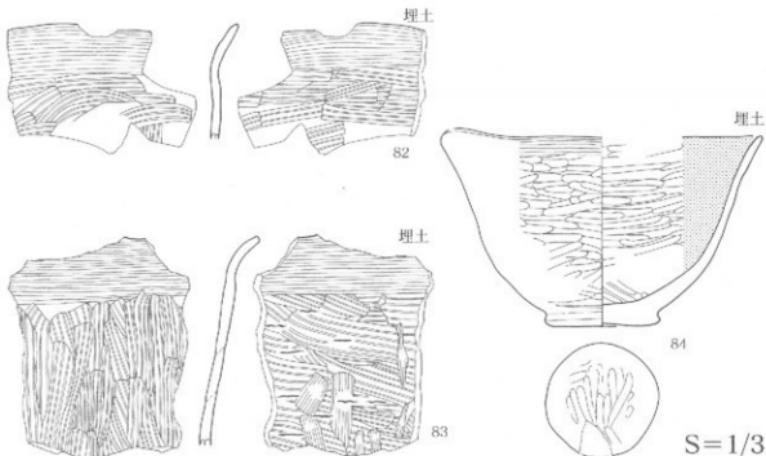
＜遺物＞ カマドおよび埋土からロクロ不使用の壺、甕が出土している。74・75は土師器の壺で、ともにヘラミガキ調整されている。74は平底で体部に段は見られない。75は平底甕で、体部と底部の境に内外面ともに段があり、内面に黒色処理が施されている。76はカマドから出土した上部器の甕の体～底部である。内外面ともハケメ調整され、底部には木葉痕も見られる。77は球胴甕の口縁～体部上半である。

＜時期＞ 出土した遺物から奈良時代（8世紀後半）と考えられる。

RA036竪穴住居跡（写真図版18, 64）

＜位置＞ A調査区の11R区やや西寄りに位置する。東側1mにはRA034竪穴住居跡（平安時代）、南隣に





第33図 RA036堅穴住居跡出土遺物 (2)

はRA037堅穴住居跡(平安時代)が近接する。

<検出状況> II層、III層は削平されており、表土(I層)を除去した直下のIV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。表土(I層)はかなり薄く、搅乱を受けている部分も多い。

<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は4.04×3.83mを測る。

<埋土> 7層に細分されるが、主体は黒褐色土からなる1層、2層である。1層には炭化物粒と黄褐色土ブロックが含まれている。

<壁・床> 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がりっているが、上部はほとんどが削平されている。壁高は南東壁15cm、北西壁13cm、南西壁18cm、北東壁15cmを測る。床面は平坦で堅く結まっている。貼り床は確認されない。

<柱穴・他の施設> 確認されていない。

<カマド> カマドが位置していたと思われる北西壁中央付近が搅乱により壊されているため、本体部・煙道部・煙出し部とも残存しておらず、焼土が確認できるだけである。確認された焼土の規模は72×54cmである。

<遺物> 埋土からロクロ不使用の环、甕、鉢が出土している。78・79は土師器の环である。78は丸底で、外面の口縁部と体部の境に段がある。器面調整はヘラミガキが主であるが、一部ハケメ調整される。79は平底で、体部は底部から外傾し直線的に口縁部に至る。口縁部はヨコナデ、体部はヘラミガキ調整されている。80は手捏ねの小型上器で、ヘラナデ調整される。81～83は土師器の甕で、いずれも口縁部がヨコナデ、体部がハケメ調整されている。83には輪積痕が明瞭に確認できる。84は上器鉢で、体部は底部から外傾し、膨らみながら立ち上がっている。口縁部は低い波状を呈している様子がうかがえる。器面調整はヘラミガキが主で、内面は黒色処理も施されている。底部外面にもヘラミガキ痕が見られる。

<時期> 出土した遺物の特徴から奈良時代(8世紀後半)と考えられる。

RA038竪穴住居跡（写真図版19, 64, 65）

＜位置＞ A調査区の12Q区に位置し、北西側4mにはRA023竪穴住居跡（平安時代）が近接する。また、RG015溝跡と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

＜検出状況＞ II層、III層は削平されており、表土（I層）を除去した直下のIV層上面において黒色～黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は2.40×2.35mを測る。

＜埋土＞ 20層に細分されるが、多くは黒色～黒褐色土からなり、よく締まっている。

＜壁・床＞ 壁は床面から外傾して立ち上がっている。壁高は南東壁24cm、北西壁59cm、南内壁27cm、北東壁43cmを測る。床は北東側に長方形の土坑状の掘り込みがあり、2段に分けられる。南東側の高い部分には貼り床が施されている。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴は確認されない。北西側には規模1.75×0.57m（下幅計測）の長方形の土坑状の掘り込みが確認されているが、用途は不明である。

＜カマド＞ カマドについては本体部・爐道部・煙出し部いずれも確認されていない。

＜遺物＞ 墓土からロクロ不使用の壺、高壺、甕が出土している。85～88は土師器の壺である。85・86はともに丸底で、内外面に段を持っている。器面調整はヘラミガキ調整後、内面は黒色処理されている。87・88も土師器の壺であるが段は体部外面のみに確認できる。87は丸底、器高が低く皿に近い器形をしている。88はヘラミガキ調整後内面黒色処理されている。89は器形が明瞭に分かれる上部壺の高壺である。壺部は外面にのみ段を持ち、内面はヘラミガキ調整後黒色処理されている。脚部はヨコナデ調整後ヘラミガキされている。90～98は土師器の甕である。90～92・94・95は長胴甕の口縁～体部で、口縁部はヨコナデ、体部はハケメ調整されている。93は球形甕で体部内面はヘラナデ調整である。96は土師器の甕の体部で外向は下から上に向かってヘラケズリ調整されている。97・98は土師器の甕の体部下半～底部である。97はハケメ、98は外向ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整されている。97の底部には木葉痕が確認でき、98の底部は中央部がやや低くなっている。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から奈良時代（8世紀前半）と考えられる。

（2）平安時代

平安時代の竪穴住居跡はA調査区からのみ15棟検出されている。

RA016竪穴住居跡（写真図版20, 66）

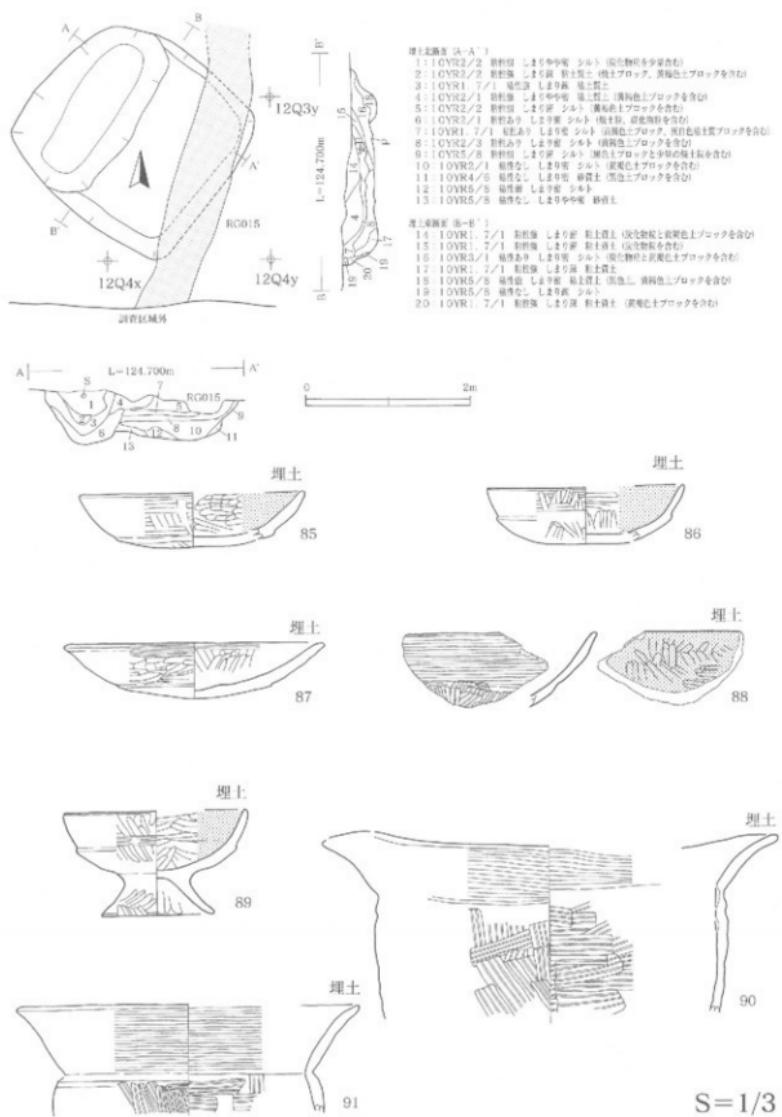
＜位置＞ A調査区の11S区に位置し、RG008溝跡と重複関係にある。RG008溝跡に切られていることから、本遺構の方が古い。また、南側にはRG014溝跡が近接する。

＜検出状況＞ 表土（I層）を数cm除去したIV層下面において暗褐色土の広がりで確認した。本遺構の位置する区域は耕作等による削平が激しく、部分的にV層が露呈しているところも見られる。

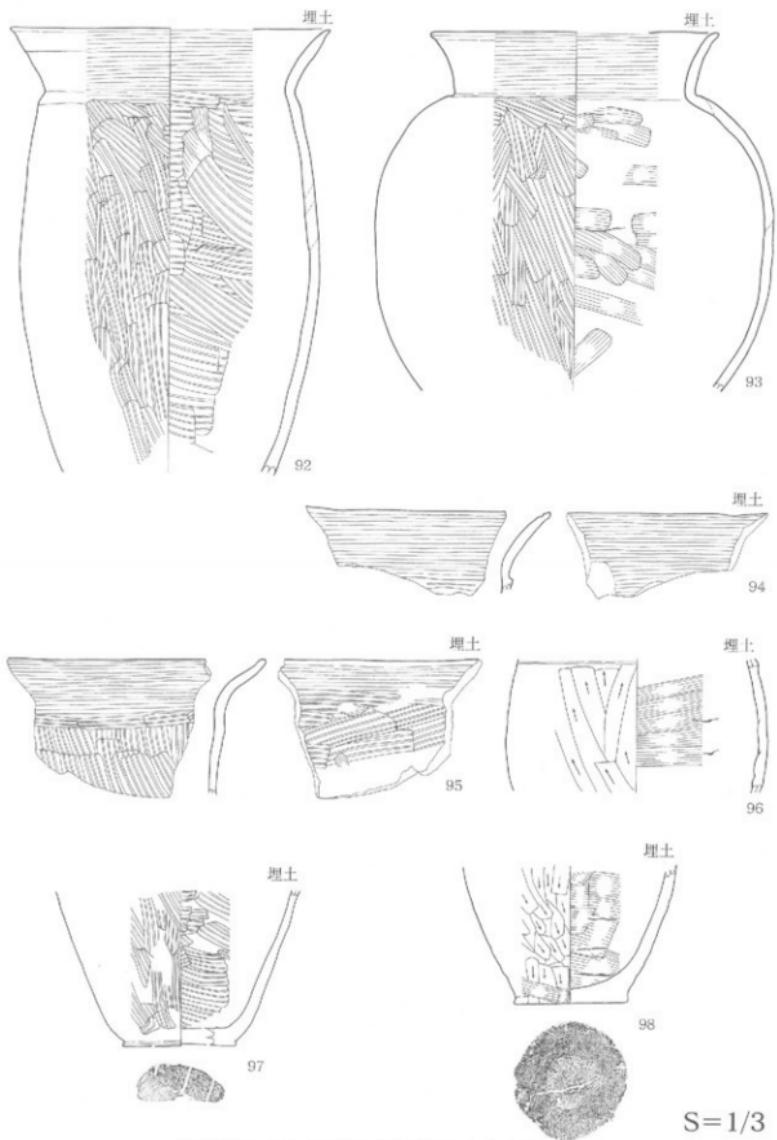
＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は4.40×4.25mを測る。

＜埋土＞ 14層に細分されるが、主体は暗褐色の砂質シルトからなる3層と、黒褐色土の9層である。

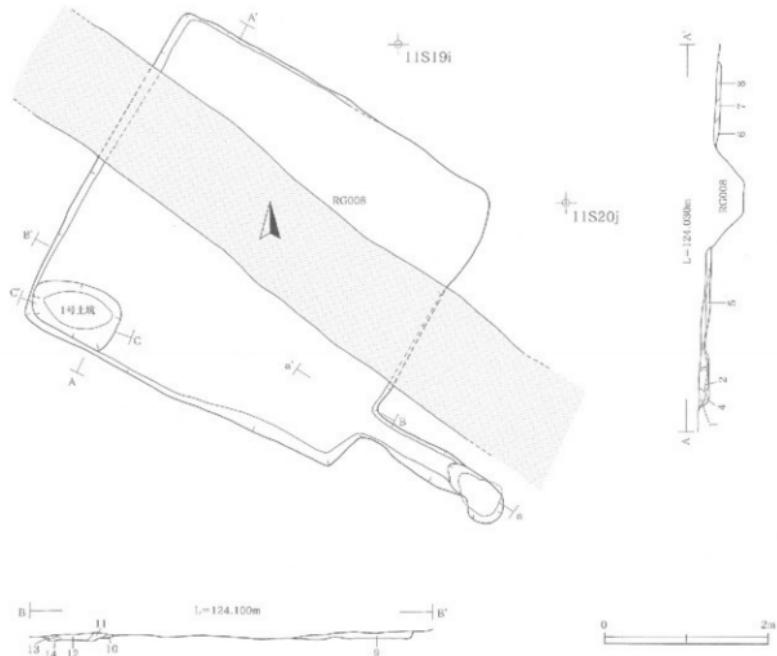
＜壁・床＞ 壁の大部分は削平されているが、やや外傾気味に立ち上がるようである。壁高は南東壁6cm、北西壁9cm、南西壁12cm、北東壁4cmを測る。床面は中央部がRG008溝跡に切られているため詳細は不明である。



第34図 RA038竪穴住居跡・出土遺物(1)



第35図 RA038竪穴住居跡出土遺物 (2)



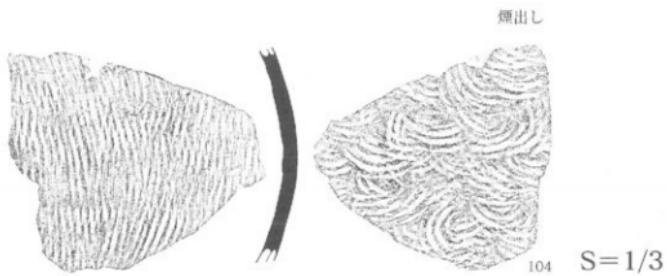
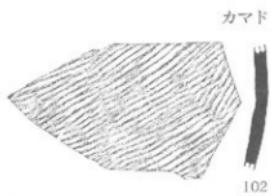
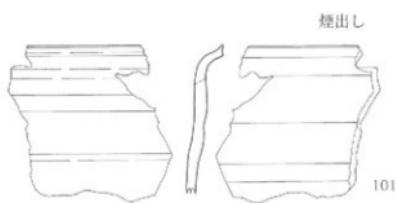
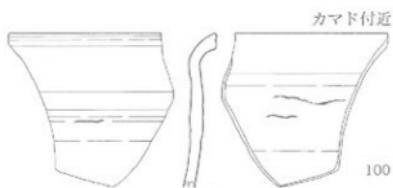
燃道面断面 (a - a')

- 1 : I OYR2 / 2 硬性なし しまり無 シルト
- 2 : I OYR4 / 4 硬性なし しまり無 シルト
- 3 : I OYR2 / 3 硬性なし しまり無 シルト (炭化物鉱を少額含む)
- 4 : I OYR3 / 3 硬性なし しまり無 シルト

1号土坑断面 (C - C')

- 1 : I OYR4 / 9 硬性やあり しまり無 基土質シルト
- 2 : I OYR4 / 9 硬性なし しまり無 砂質シルト
(径1.0~2.0mmの小砾を含む)
- 3 : I OYR4 / 6 硬性なし しまり無 砂質層

第36図 RA016竪穴住居跡



第37図 RA016竪穴住居跡出土遺物

るが、華靡よりやや高くなるようで、堅く締まっている。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴は確認されない。南西側に土坑1基を検出した。規模は1.13×0.11m、深さ11cmで、平面形は長楕円形を呈している。

＜カマド＞ 南東壁の南東隅寄りに位置しているが、削平により上部構造と袖部の造りは不明である。煙道部も削平を受けているため割り嵌き式か否かは不明である。長さは1.97mを測り、緩やかに下りながら煙出し部に向かうが、途中から更に約25cm程下がり煙出し部に至る。煙出し部の埋土上位から須恵器片が出土している。

＜遺物＞ カマドおよびその周辺と煙出し部から上飾器の环、甕、および須恵器の甕が出土している。99はロクロ使用の土師器の环で底部の切り離し技法は回転糸切りである。100・101はロクロ使用の土師器の甕で、ともに口縁部は頭部から短く外反している。102はカマドから、103・104は煙出し部から出土した須恵器で甕の体部である。外面にはタタキ目、内面には平行もしくは波文状のアテ貝痕が確認できる。

＜時期＞ 出土した遺物から平安時代（10世紀中葉）と考えられる。

RA018豎穴住居跡（写真図版21,66）

＜位置＞ A測査区のIIQ区南側に位置する。重複する遺構や特に近接する遺構は見られず、東側約13mにRA022竪穴住居跡が、北側約10mにRA024竪穴住居跡が位置している。

＜検出状況＞ II層上面において、灰白色の火山灰の小ブロックが方形に点在することによって確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形を呈しており、規模は3.80×3.49mを測る。

＜埋土＞ 5層に細分されるが、土体は黒色土からなる1層および2層で、どちらも粘性がありよく締まっている。灰白色的火山灰ブロックは1・2層ともに確認できるが、2層の方が大きめの火山灰ブロックが含まれ、黄褐色土ブロックも混入する。

＜壁・床＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北西側はやや外傾気味に立ち上がっている。壁高は南東壁22cm、北西壁44cm、南西壁40cm、北東壁42cmを測る。床面は平坦で締まっている。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴は確認されない。土坑は、床面ほぼ中央に平面形が長方形を呈す規模の大きなもの1基、北西壁際に円形のもの1基、南西壁間に

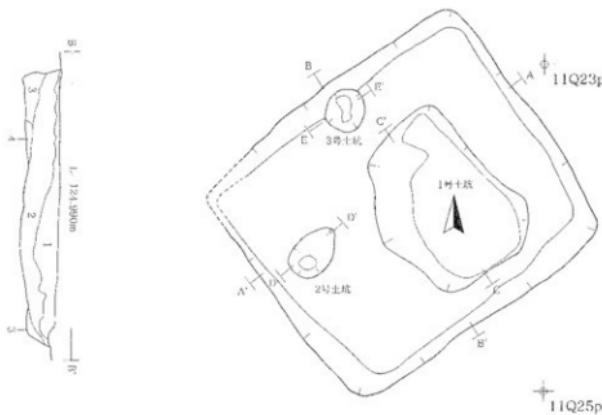
楕円形のもの1基の計3基検出した。1号土坑の埋土は黒色の粘土質シルトからなり、灰白色火山灰ブロックと黄褐色土ブロックを含んでいる。住居の埋土の2層に似ているが、1号土坑の埋土の方は粘性が強い。

＜カマド＞ 検出されなかった。

＜遺物＞ 掲載した遺物はすべて埋土からの出土である。105はロクロ使用の土師器の环で、底部の切り離し技法は回転糸切りである。106も土師器の环と思われるが、口縁部に焼成前にあけられた孔が確認できる。小破片であり、器形や器面調整等の詳細は不明である。107はロクロ不使用の上飾器の巣环の脚部、埋土の上位からの出土であり、周辺の他の遺構から流れ込んだものと思われる。108は凝灰岩を利用した砥石である。

＜時期＞ 出土遺物が少なく、出土した遺物からでは時期を特定するには至らないが、埋土に十和田a層下火山灰と思われる火山灰が含まれることから平安時代と思われる。

No.	1号土坑	2号土坑	3号土坑
直径cm	207×154	85×45	52×48
深さcm	38	14	15

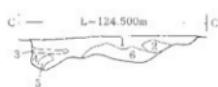


sondage (A - A')

- 1 : 1 OYR2 / 1 槌性あり しまり岩 シルト (灰白色火山灰は見られない)
- 2 : 1 OYR1 / 1 槌性あり しまり岩 シルト
(1層より2層の間に有る) (灰白色火山灰と黄褐色土ブロックを少数含む)
- 3 : 1 OYR1, 7 / 1 槌性あり しまり岩 シルト
(2層より2層の間に有る) (灰白色火山灰は見られない)
- 4 : 1 OYR1 / 6 槌性ややあり しまり岩 シルト (噴出物を含む)
- 5 : 1 OYR1, 7 / 1 槌性あり しまり岩 粘土質シルト
(2層より粘性が遅い) (3.0m程の灰白色火山灰と黄褐色土ブロックを含む)

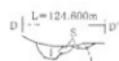
sondage (B - B')

- 1 : 1 OYR2 / 1 槌性あり しまり岩 シルト
(灰白色火山灰の小ブロックを少数含む)



sondage (C - C')

- 1 : 1 OYR1, 7 / 1 槌性強 しまり岩 粘土質シルト
(灰白色火山灰土ブロックと黄褐色土ブロックを含む)
- 2 : 1 OYR1 / 6 槌性強 しまり岩 粘土質シルト
(1層より2層の間に有る)
- 3 : 1 OYR2 / 3 槌性あり しまり岩 粘土質シルト
- 4 : 1 OYR1, 7 / 1 槌性強 しまり岩 粘土質シルト
- 5 : 1 OYR3 / 3 槌性あり しまり岩 粘土質シルト
(灰褐色土ブロックを含む)
- 6 : 1 OYR3 / 4 槌性ややあり しまり岩 粘土質シルト
(灰褐色土ブロックと往々0.5m程の断続を含む)



sondage (D - D')

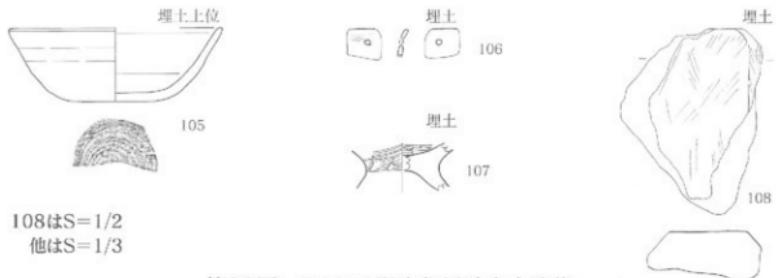
- 1 : 1 OYR1, 7 / 1 槌性あり しまり岩 粘土質シルト
(灰褐色土ブロックを含む)



sondage (E - E')

- 1 : 1 OYR1, 7 / 1 槌性強 しまり岩 粘土質シルト
(灰褐色土ブロックを含む)

第38図 RA018堅穴住居跡



第39図 RA018堅穴住居跡出土遺物

RA019堅穴住居跡（写真図版22, 66, 67, 68）

＜位置＞ 大部分はA調査区の11Q区に位置するが、2基のカマドの煙道部と煙出し部は東隣の11R区に位置している。南側約9mにRA025が位置する。また、RG017溝跡と重複関係にあるが、本遺構がRG017溝跡を切っていることから、本遺構の方が新しい。

＜検出状況＞ 表土（I層）を除去した直下のIV層上面において、黒色土の広がりとして確認した。II・III層は耕作等により削平されたと考えられる。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円方形を呈しており、規模は6.22×5.85mを測る。

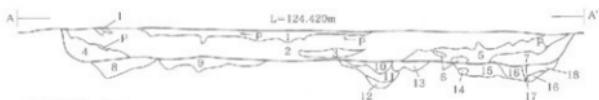
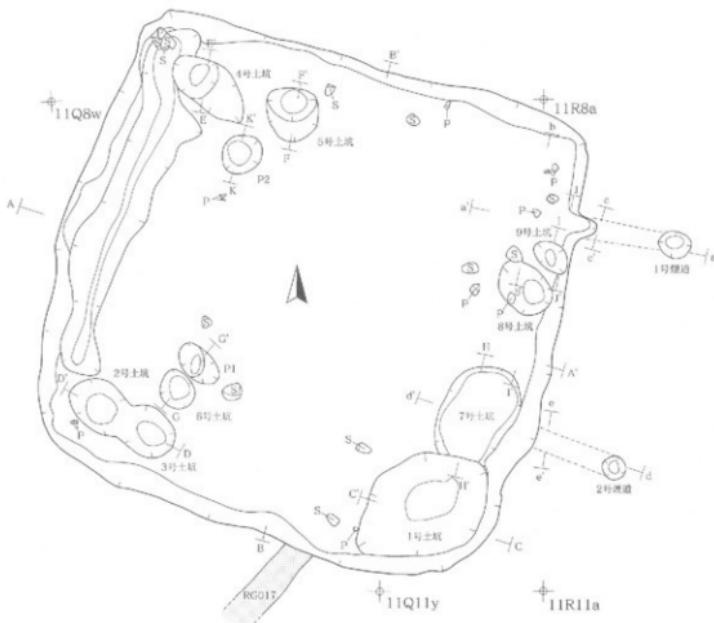
＜埋土＞ 21層に細分されるが、主体は黒色シルトからなる1・2層である。5層に少量ではあるが、灰白色の火山灰小ブロックが含まれている。

＜壁・床＞ 壁は外傾し、床面から比較的緩やかに立ち上がっている。壁高は東壁35cm、西壁39cm、南壁36cm、北壁25cmを測る。床はほぼ平坦でよく締まっているが、黒色および黒褐色土と黄褐色土の混合土による貼り床が施されている。また、西壁沿いにのみ幅約60cm、長さ4.45mの壁溝状の掘り込みが確認された。

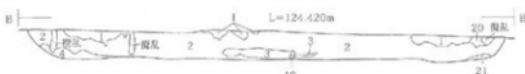
＜柱穴・他の施設＞ 小大あわせて11基検出した。柱穴としてはP1、P2が考えられるが、他の対応する柱穴が見られないため主柱穴となるかどうかは不明である。7号土坑は2号カマドを使用しなくなった後に掘り込まれており、埋土中に少量の焼土粒や炭化物粒が確認された。

No.	1号土坑	2号土坑	3号土坑	4号土坑	5号土坑	6号土坑
直径cm	180×126	62×47	125×58	108×59	70×64	45×42
深さcm	31	31	41	26	27	14
No.	7号土坑	8号土坑	9号土坑	P1	P2	
直径cm	119×90	73×52	45×31	60×38	49×47	
深さcm	26	20	48	50	49	

＜カマド＞ 東壁において2基確認された。1号カマド（新）は東壁の北寄りに位置し、袖部を含む本体部は崩壊しており、燃焼部のみ確認できる。燃焼部の焼土範囲は34×18cmの不整形で、厚さ7cmを測る。煙道部は割り貫き式で、長さ1.4mを測り、下り勾配で煙出し部に至る。煙出し部には径39×34cm、深さ73cmの円形の土坑が掘り込まれており、埋土の上位から中位にかけては疊や土器片が含まれている。2号カマド（旧）は東壁の南寄りに位置しているが、本体部が位置していたと思われる部分に7号土坑が掘り込まれており、煙道部と煙出し部が残存するのみである。煙道部は割り貫き式で、残存する長さは1.16m、緩やかに下りながら煙



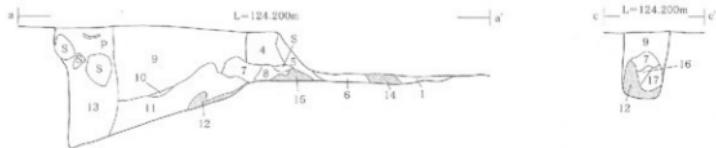
- 地土剖面 (A - A')
- 1 : 1 OYR1. 7 / 1 畜生なし しまり窓 シルト
 - 2 : 1 OYR2 / 1 畜生なし しまり窓 シルト (黒褐色土ブロックを含む)
 - 3 : 1 OYR2 / 2 畜生なし しまり窓 黄土質 (黒褐色土と合む)
 - 4 : 1 OYR1. 7 / 1 畜生なし しまり窓 黄土質 (黒褐色土は含まれない)
 - 5 : 1 OYR2 / 2 畜生なし しまり窓 シルト (黒褐色大山灰と少量含む) 2層より後褐色土層の混合が增多る)
 - 6 : 1 OYR1. 7 / 1 畜生なし しまり窓 黄土質 (黒褐色土ブロックを少量含む)
 - 7 : 1 OYR1. 7 / 1 畜生なし しまり窓 黄土質 (黒褐色土を少量含む)
 - 8 : 1 OYR2 / 3 畜生あり しまり窓 黄土質 (黄褐色土との混合をみると)
 - 9 : 1 OYR1. 4 / 4 畜生なし しまり窓 黄土質 (黄褐色土との混合である)
 - 10 : 1 OYR1. 7 / 1 畜生なし しまり窓 シルト (1層のロックを含む)
 - 11 : 1 OYR5 / 4 畜生あり しまり窓 黄土質
 - 12 : 7. 5YR4 / 4 畜生なし しまり窓 黃土
 - 13 : 1 OYR4 / 4 畜生なし しまり窓 シルト (黒褐色土との混合である)
 - 14 : 1 OYR4 / 4 畜生なし しまり窓 シルト (黒褐色土との混合である)
 - 15 : 1 OYR4 / 4 畜生なし しまり窓 シルト (黒褐色土との混合である)
 - 16 : 1 OYR1. 7 / 1 畜生なし しまり窓 シルト (黒褐色土ブロックを含む)
 - 17 : 1 OYR1. 7 / 1 畜生なし しまり窓 シルト (褐色物質を少量含む)
 - 18 : 1 OYR2 / 2 畜生なし しまり窓 シルト (極少量の炭化物質と灰土粒を含む)



- 地土剖面 (B - B')
- 19 : 1 OYR3 / 4 畜生なし しまり窓 黄土質
 - 20 : 1 OYR1. 7 / 1 畜生なし しまり窓 黄土質
 - 21 : 1 OYR4 / 6 畜生なし しまり窓 黄土質

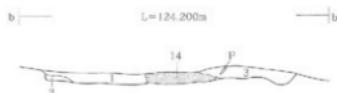
0 2m

第40図 RA019竪穴住居跡 (1)



- 1号カマド断面図 (a-a')
- 4 : 1) OYR1/2 / 1 植生あり しまり岩 砂質シルト
 - 5 : 1) OYR2/2 / 2 植生あり しまり岩 砂質土
 - 6 : 1) OYR2/2 / 3 植生あり しまり岩 砂質土
 - 7 : 1) OYR2/2 / 4 植生あり しまり岩 砂質土
 - 8 : 1) OYR2/2 / 5 植生あり しまり岩 砂質土
 - 9 : 1) OYR2/2 / 6 植生あり しまり岩 砂質土ブロック (底土部分である)
 - 10 : 1) SYR3/1 / 1 植生なし しまり岩 砂質シルト
 - 11 : 1) OYR2/2 / 3 植生あり しまり岩 砂質土
 - 12 : 1) SYR3/4 / 4 植生なし しまり岩 砂質土
 - 13 : 1) OYR2/2 / 3 植生あり しまり岩 シルト
 - 15 : 1) SYR3/4 / 4 植生なし しまり岩 泥土

- 1号カマド断面図 (c-c')
- 16 : 1) OYR5 / 5 植生なし しまり岩 泥質土 (底土ブロックを含む)
 - 17 : 1) SYR4 / 4 植生なし しまり岩 泥質土 (底土ブロックと底層の炭化物を含む)



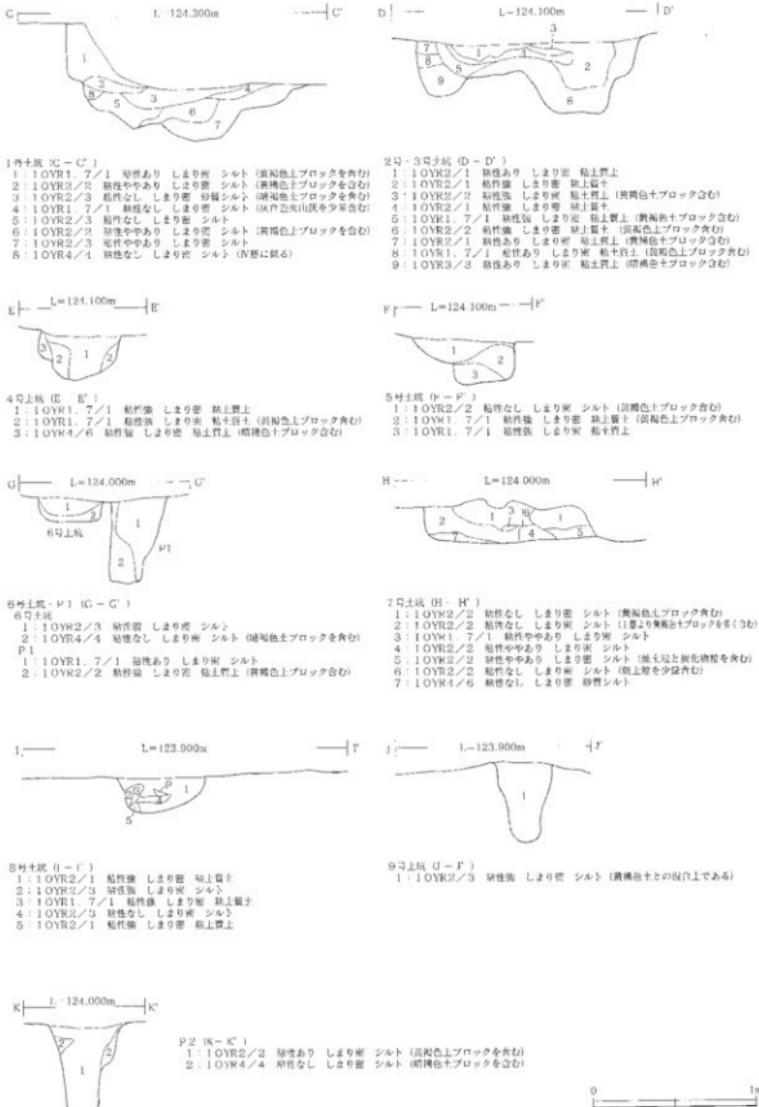
- 1号カマド北側断面 (b-b')
- 1 : 1) SYR2/2 / 3 植生あり しまり岩 シルト (底土、炭化物を含む)
 - 2 : 1) OYR1 / 2 / 1 植生あり しまり岩 シルト (底土上ブロックを含む)
 - 3 : 1) OYR1 / 2 / 1 植生あり しまり岩 砂質シルト (底土色+ブロック、炭化物を含む)
 - 4 : 1) SYR3 / 6 植生なし しまり岩 泥土



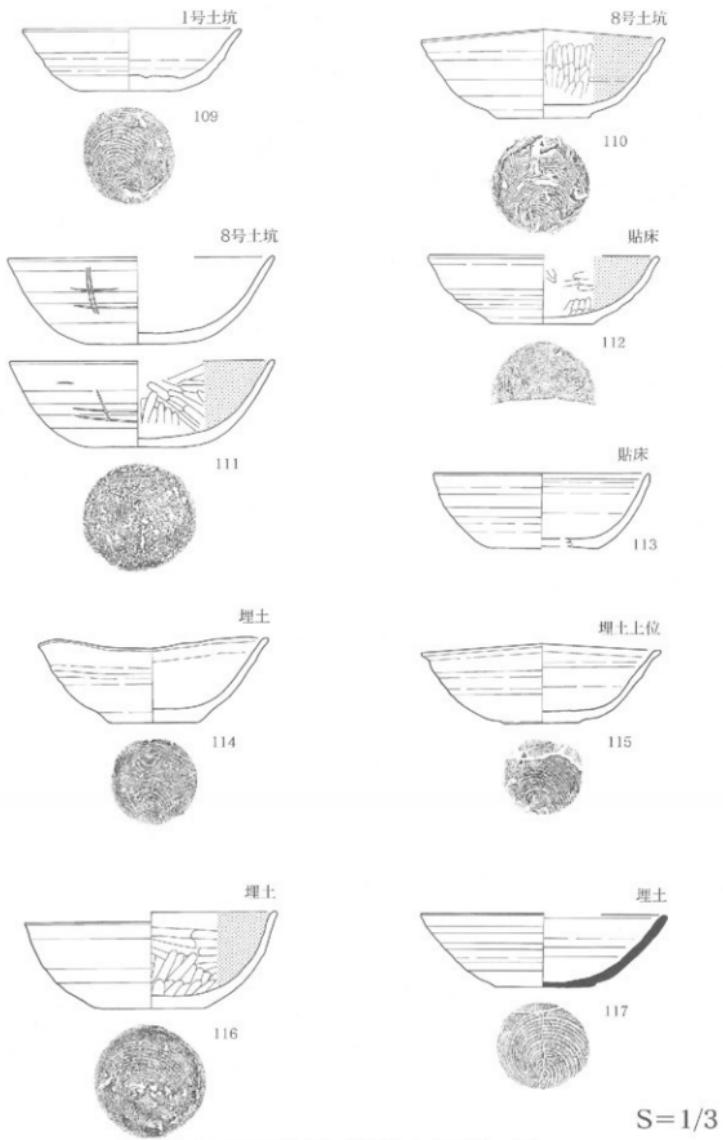
- 2号カマド東側断面 (d-d')
- 1 : 1) OYR2/2 / 1 植生なし しまり岩 シルト (底土上ブロックを含む)
 - 2 : 1) OYR3/1 / 1 植生なし しまり岩 シルト (底土色土粒を少量含む)
 - 3 : 1) OYR2/2 / 3 植生ややあり しまり岩 シルト
 - 4 : 1) OYR5 / 6 植生なし しまり岩 シルト (黒褐色土粒を少量含む)
 - 5 : 1) OYR5 / 8 植生なし しまり岩 泥質シルト
 - 6 : 1) OYR2/2 / 3 植生なし しまり岩 シルト
 - 7 : 1) OYR2/3 / 3 植生なし しまり岩 泥質シルト (底土色土粒を少含む)
 - 8 : 1) OYR3/1 / 1 植生あり しまり岩 泥質土 (炭化物を少含む)
 - 9 : 1) OYR2/2 / 2 植生あり しまり岩 泥質シルト (底土色)

- 2号カマド東側断面 (e-e')
- 10 : 1) OYR5 / 8 植生なし しまり岩 泥質土 (底土ブロックを含む)
 - 11 : 1) OYR5 / 8 植生なし しまり岩 泥質土 (底土色を含む)
 - 12 : 1) OYR5 / 8 植生ややあり しまり岩 泥質土 (底土色上ブロックと炭化物を含む)
 - 13 : 1) OYR3 / 2 植生ややあり しまり岩 シルト (底土色上ブロックと炭化物を含む)
 - 14 : 1) OYR3 / 2 植生ややあり しまり岩 シルト (底土色上ブロックと炭化物を含む)

第41図 RA019堅穴住居跡 (2)



第42図 RA019竪穴住居跡 (3)



第43図 RA019竪穴住居跡出土遺物 (1)



118



119



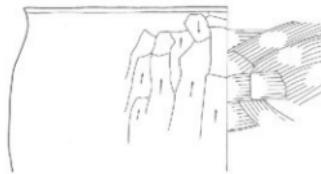
120

床上



121

2号カマド煙出し

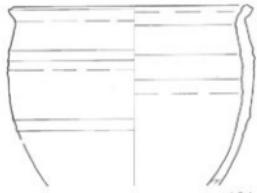


122



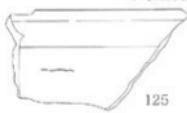
123

1号土坑



124

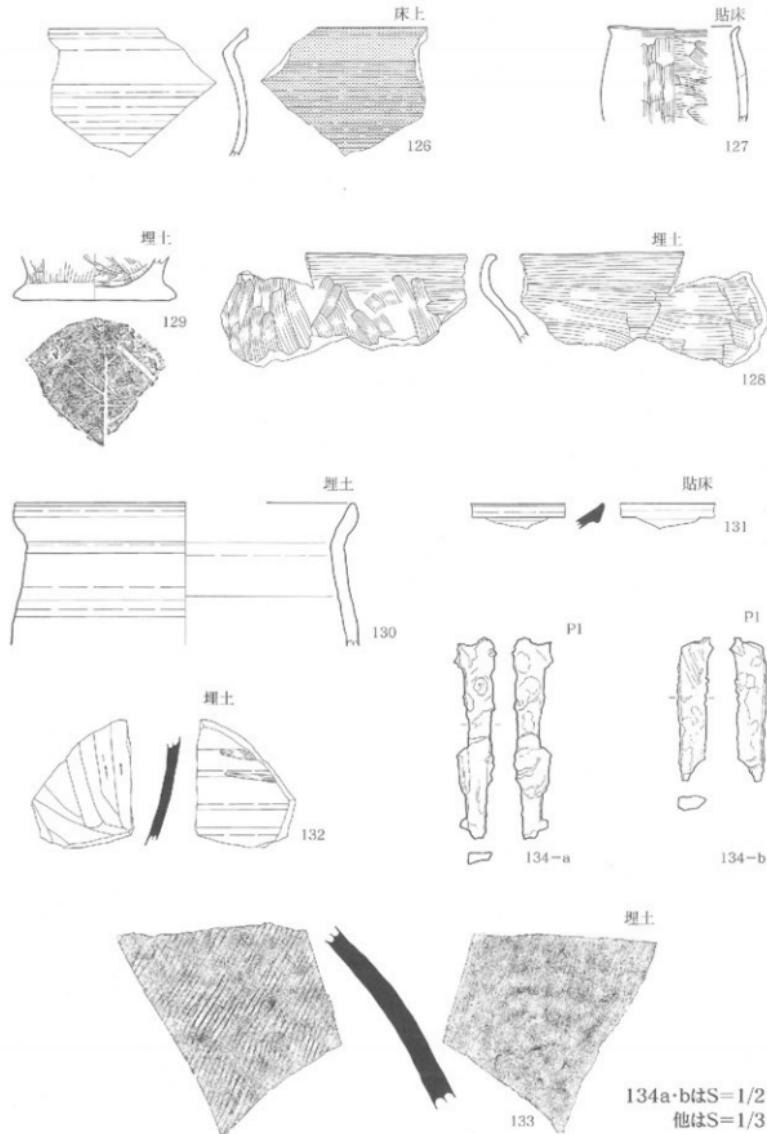
7号土坑



125

 $S=1/3$

第44図 RA019竪穴住居跡出土遺物 (2)



第45図 RA019竪穴住居跡出土遺物 (3)

出し部に至る。煙出し部には幅30×29cm、深さ66cmの円形の土坑があり込まれており、埋土の下位には土器片が含まれるほか、標準部を窓ぐやのような形で幅約26cmの隙が認められる。

＜遺物＞ カマド煙道部、土坑、床面、貼り床、埋土から土師器、須恵器が出土している。109は1号土坑から出土したロクロ使用の土師器の环で、底部切り離し技法は回転糸切りである。110・111は8号土坑から出土したロクロ使用の土師器の环で、ともに内面がヘラミガキ調整後黒色処理されている。底部切り離し技法は回転糸切りであるが、111は再調整されている。また111の体部には2ヶ所の線刻が認められる。112は貼り床からの出土である。113～116はロクロ使用の土師器の环で、埋土からの出土である。底部の切り離し技法は、すべて回転糸切りである。116の内面はヘラミガキ調整後黒色処理されている。117はロクロ使用の須恵器の环で、本遺跡からは2点出土しているが、豊穴住居跡内からの出土はこれ1点のみである。118は1号土坑から、119・120は床面から出土した高台付の台部で、いずれも短い「ハ」の字状をしている。121は床面から完形で出土したロクロ使用の土師器の皿である。柱状の短い台部はヘラナデ調整されているが、他に黒色処理等は見られない。本遺跡からの出土はこれ1点のみである。122・123は2号カマド煙出し部から出土したロクロ不使用の土師器の甕で、体部外面はヘラケズリ調整されている。124は1号土坑、125は7号土坑、126は床面から出土したロクロ使用の土師器の甕である。126の内面はカキメ調整後黒色処理されている。127は貼り床から出土した土師器の小型甕である。128・129は埋土から出土したロクロ不使用の土師器の甕である。128は口縁部、129は底部で木葉痕が確認できる。130も埋土から出土したロクロ使用の土師器の甕で、底部を欠損している。131は須恵器の長頸瓶の口縁部で、貼り床からの出土である。この131と同一個体の破片がR D031土坑から出土している。132はロクロ使用の須恵器の甕である。外面はヘラケズリ調整されている。133も須恵器の甕であるが、ロクロ不使用で外面にはタタキメが確認できる。134はP1から出土した鉄製品である。腐食のため二つに折れてしまったが、元々は一個体であったものである。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から平安時代（9世紀後葉～10世紀前葉）と考えられる。

RA020豊穴住居跡（写真図版23, 24, 68）

＜位置＞ A調査区の11Q区中央付近に位置し、西側約3mにはRA017豊穴住居跡が、南側4mにはRA024豊穴住居跡が接続する。

＜検出状況＞ 表土（I層）を除去した後のII層上面において、灰白色火山灰小ブロックが方形に点在することによって確認した。

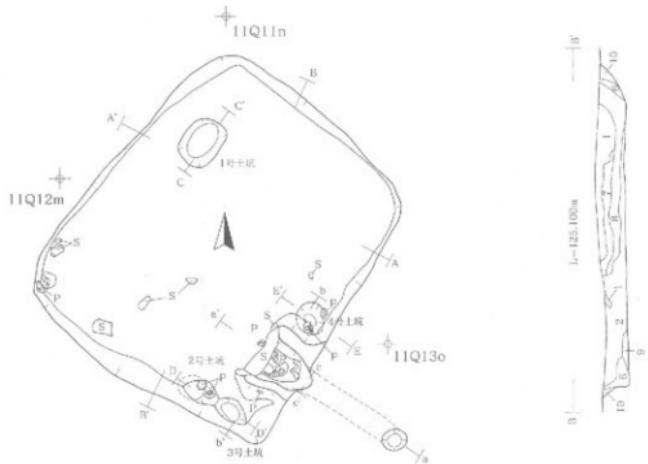
＜平面形・規模＞ 囲丸長方形（やや台形気味）を呈しており、規模は4.09×3.49mを測る。

＜埋土＞ 10層に細分されるが、主体となるのは黒色粘土質土からなる2層で灰白色火山灰の小ブロックと黄褐色土ブロックが混入する。各層とも粘性が比較的強いのが特徴である。

＜壁・床＞ 南西壁のみ外傾して立ち上がるが、それ以外はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は南東壁30cm、北西壁35cm、南西壁33cm、北東壁31cmを測る。床面は平坦で締まっている。貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴は確認されない。土坑は北西壁北側に1基、南西壁カマド寄りに2基、南東壁カマド左袖横に1基の計4基検出した。このうち3号土坑上位からは土師器の环が出土している。

No.	1号土坑	2号土坑	3号土坑	4号土坑
直径cm	61×46	44×29	44×26	38×34
深さcm	22	37	12	24

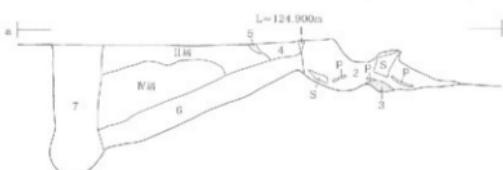


堆土断面 (A-A')

- 1 : 1 GYR1, 7/1 動性あり しまり層 稲土質シルト
(炭化火土岩ブロックを含む)
- 2 : 1 GYR2/1 動性強 しまり層 稻土質土
- 3 : 1 GYR1, 7/1 動性強 しまり層 稲土質土 (炭化火土岩ブロックを少草含む)
- 4 : 1 GYR1/4 動性強 しまり層 稲土質土 (炭化火土岩ブロックを少草含む)
- 5 : 1 GYR1, 7/1 動性強 しまり層 稲土質土
- 6 : 1 GYR2/1 動性強 しまり層 稲土質土

堆土断面 (B-B')

- 7 : 1 GYR2/2 動性あり しまり層 稲土質土
(炭化火土岩、黄褐色土ブロックを少混合)
- 8 : 1 GYR1, 7/1 動性あり しまり層 稻土質土
(炭化火土岩ブロックを少混合)
- 9 : 1 GYR3/4 動性なし しまり層 砂質シルト
(砂質土ブロックを含む)
- 10 : 1 GYR1, 7/1 動性強 しまり層 稲土質土



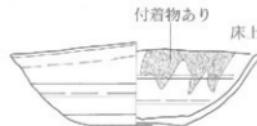
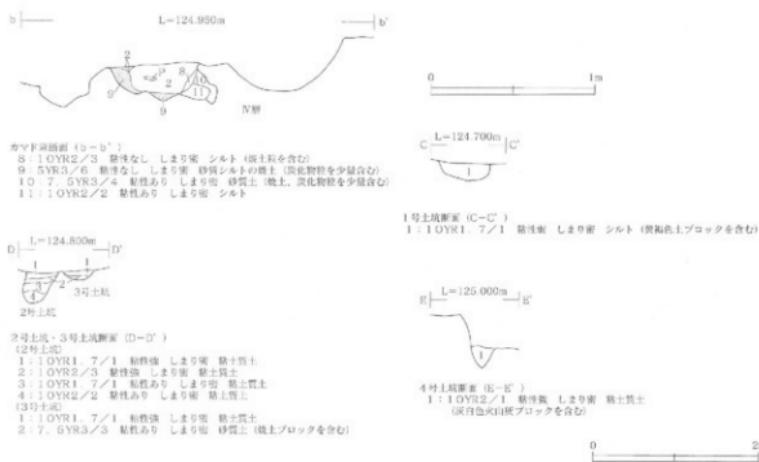
カマド跡断面 (a-a')

- 1 : 7. 5YR2/2/3 動性なし しまり層 シルト
(炭化火土岩、板状ブロックを含む)
- 2 : 1 GYR1, 7/1 動性あり しまり層 シルト
(炭化火土岩、板状ブロックを含む)
- 3 : 7. 5YR3/4 動性あり しまり層 シルト (縦土)
- 4 : 1 GYR3/3 動性なし しまり層 砂質シルト
- 5 : 5YR2/2 動性なし しまり層 砂質シルト
- 6 : 1 GYR1, 7/1 動性強 しまり層 稲土質シルト (炭化物含む)
- 7 : 1 GYR1, 7/1 動性あり しまり層 シルト (板状ブロックを含む)

堆土断面 (c-c')

- 12 : 7. 5YR1, 7/1 動性層 しまり層 シルト
- 13 : 7. 5YR1, 7/1 動性あり しまり層 稲土質シルト

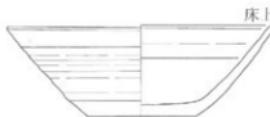
第46図 RA020竪穴住居跡 (1)



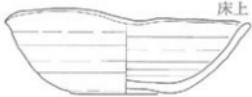
135



136

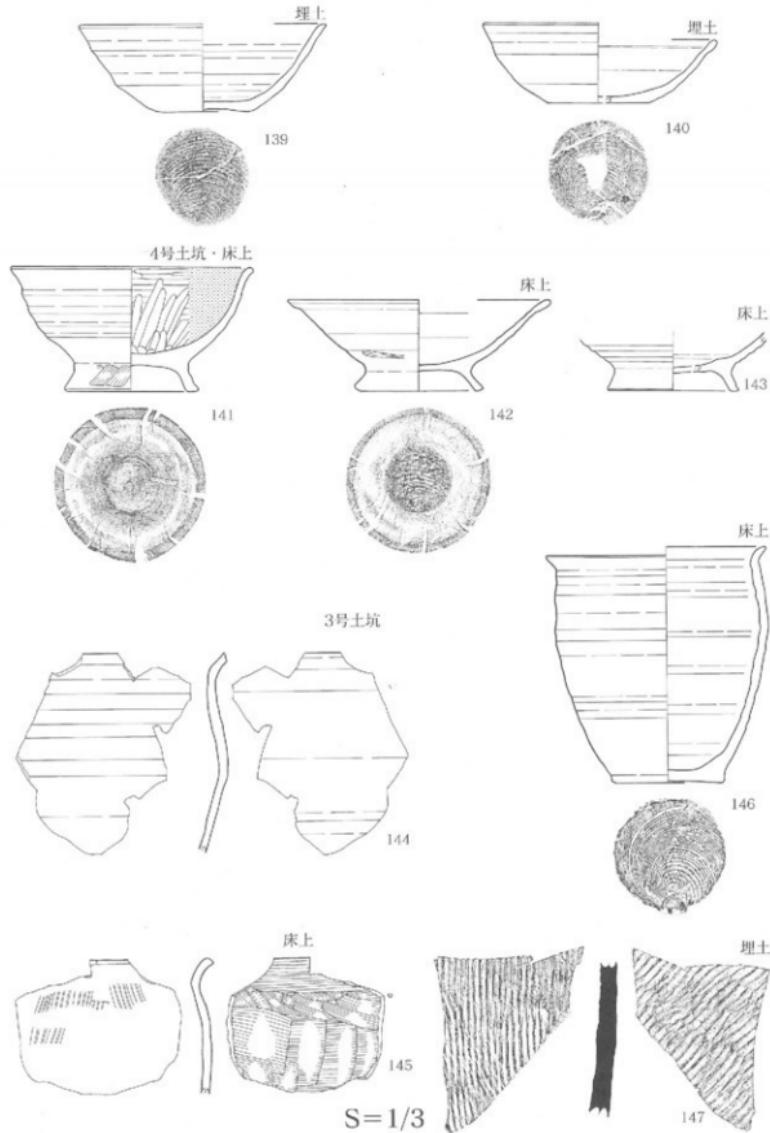


137



S=1/3

第47図 RA020竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)



＜カマド＞ 南東壁の南西寄りに位置している。本体部は芯材に用いた亜角砾と天井石が残存している。袖部はIV層を主体とする黄褐色土で構築されている。燃焼部には径18×16cmの楕円形で、厚さ約8cmの焼土が形成されている。煙道部は割り貫き式で長さ1.48mを測り、下り勾配で煙出し部に至る。煙出し部は径28×28cm、深さ79cmの円形の土坑が掘り込まれている。

＜遺物＞ 上坑、床面、埋土からロクロ使用の土師器を中心に出土している。135～138は床面から、139・140は埋土から出土した上解器の环で、ロクロ成形されている。底部の切り離し技法はすべて回転糸切りで、再調整はされていない。135の口縁部内面には炭化物と思われる付着物がある。138は口縁部の歪みが大きい。141は4号土坑と床面から、142・143は床面から出土したロクロ使用の土師器の高台付环である。141は内面ヘラミガキ調整後黒色処理されており、器形が他とは異なり、环部が器高の高い椀状となる。142・143の环部は台部から外傾し、直線的に立ち上がっている。台部はいずれも短い「V」の字状をしている。144は3号土坑から出土した土師器の壺の口縁～体部で、ロクロ成形されている。145・146は床面から出土した土師器の壺である。145はロクロ不使用で、口縁部は体部から外反して立ち上がっている。146はロクロ使用の小型壺で、底部に回転糸切り痕が明瞭に確認できる。147は埋土から出土した須恵器の壺である。外面にはタタキメ、内面にはアテ具痕が見られる。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から平安時代（10世紀中葉）と考えられる。

RA022堅穴住居跡（写真図版25, 69）

＜位置＞ A調査区11Q区の南東側に位置し、南側約4mにはRA023堅穴住居跡が、東側約2.5mにはRG015溝跡が接する。他の遺構との重複関係は見られない。

＜検出状況＞ 表土（I層）を除去した直下のII層において、黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は4.04×3.75mを測る。

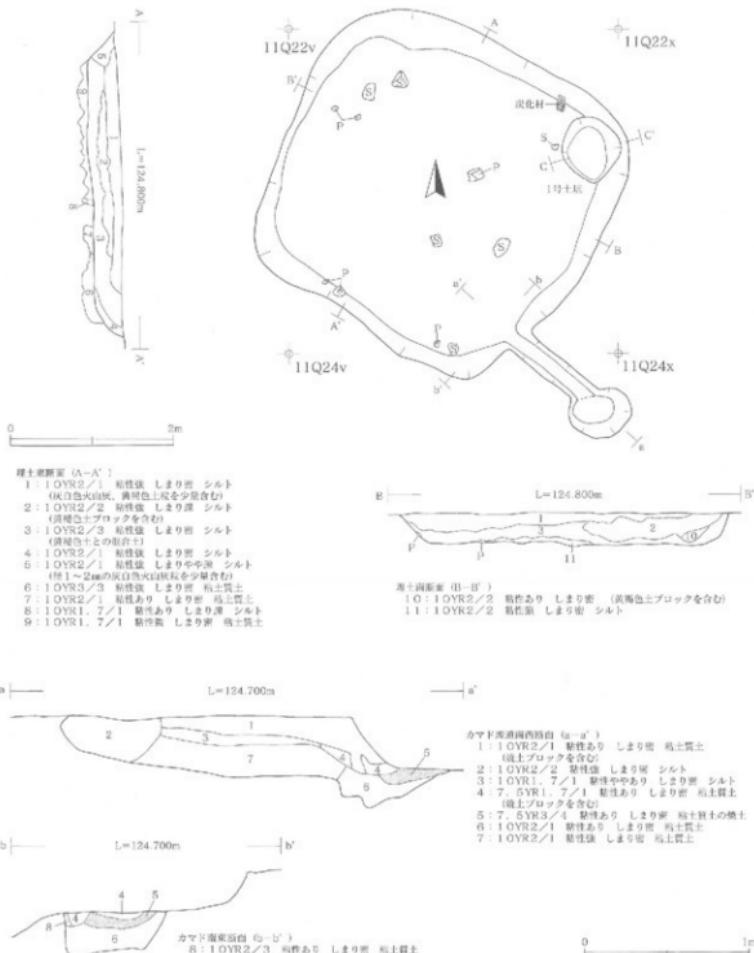
＜埋土＞ 墓上は11層に細分されるが、主体となるのは粘性の強い黒色・黒褐色シルトからなる1～3層である。1層には灰白色火山灰の小ブロックと黄褐色土粒が含まれるほか、2層には黄褐色土の小ブロックが混入する。他の住居跡と比較して粘性の強い層位が多い。

＜壁・床＞ 南東壁と北東壁は外傾して、南西壁と北西壁は床面から外傾気味に緩やかに立ち上がっている。壁高は南東壁37cm、北西壁38cm、南西壁31cm、北東壁36cmを測る。床面は南西壁から中央付近にかけてやや高くなっているが、全体としては平坦である。貼り床が黒色・暗褐色粘土質土によって施されている。

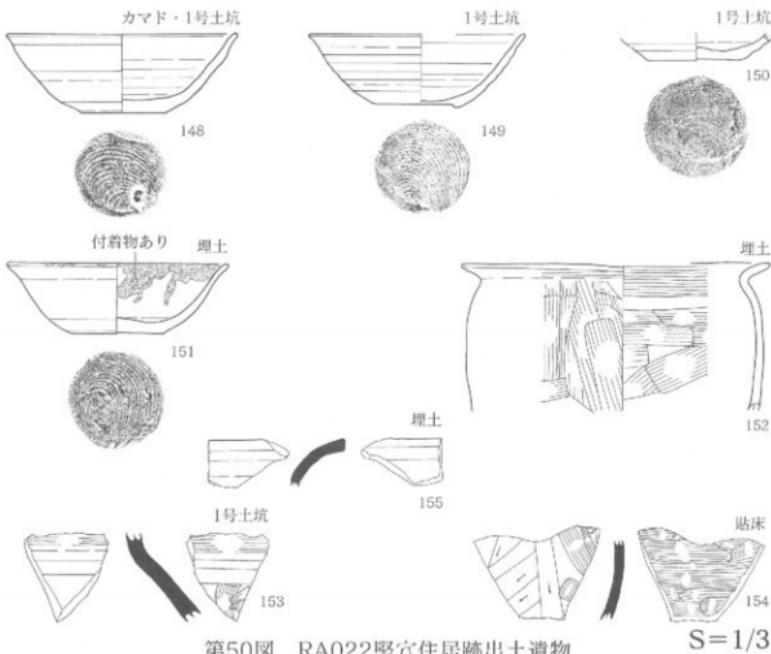
＜柱穴・他の施設＞ 柱穴は確認されない。北東隅に土坑1基を検出した。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は82×71cm、深さ23cmを測る。埋土より須恵器片が出土している。

＜カマド＞ 南東壁の南隅寄りに位置している。本体部は袖部も含めて崩壊しており、燃焼部のみ確認できる。煙道部は削平されており、割り貫き式か否かは不明である。長さは1.65mを測り、やや登り勾配で煙出し部に至る。煙出し部には径58×57cm、深さ25cmの円形の土坑が掘り込まれている。

＜遺物＞ カマド、土坑、埋土から土師器、須恵器が出土している。148～151はロクロ使用の土師器の环である。底部の切り離し技法は回転糸切りで、再調整はされていない。150のみ再調整されている。148はカマドと1号土坑から出土した破片を接合したもの、149・150は1号土坑、151は埋土からの出土で、口縁部内側に炭化物と思われる付着物がある。152は埋土から出土したロクロ不使用の土師器の壺で、口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ調整されている。153～155は須恵器の壺である。153は1号土坑、155は埋土からの出土でとも



第49図 RA022豎穴住居跡



第50図 RA022竪穴住居跡出土遺物

にロクロ成形されている。154は貼り床からの出土で、外側はヘラケズリ、ヘラナテ調整されている。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から平安時代（10世紀中葉）と考えられる。

RA023竪穴住居跡（写真図版26, 69）

＜位置＞ A調査区の12Q区北東側に位置し、一部が11Q区にまたがっている。重複する遺構はなく、北側約4.5mにRA022竪穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ 表土（I層）を除去した直下のIV層上面において暗褐色土の広がりとして確認した。II・III層は削平され確認されない。

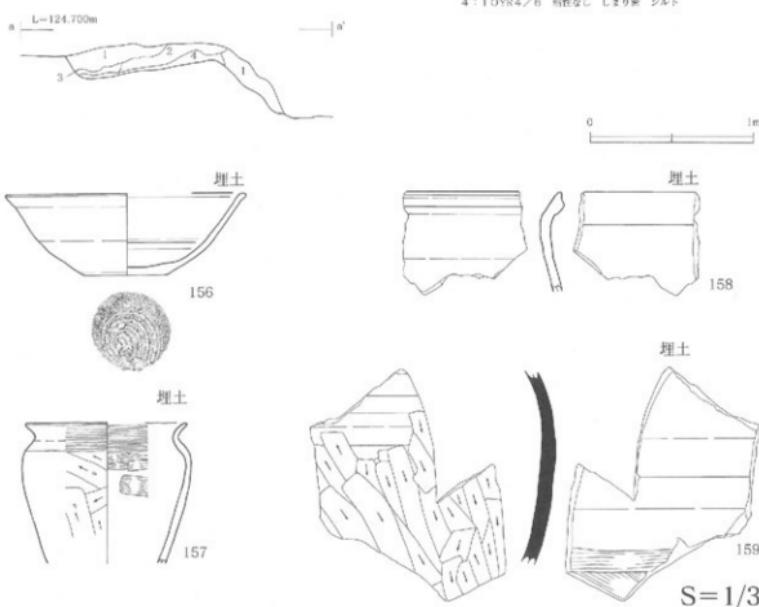
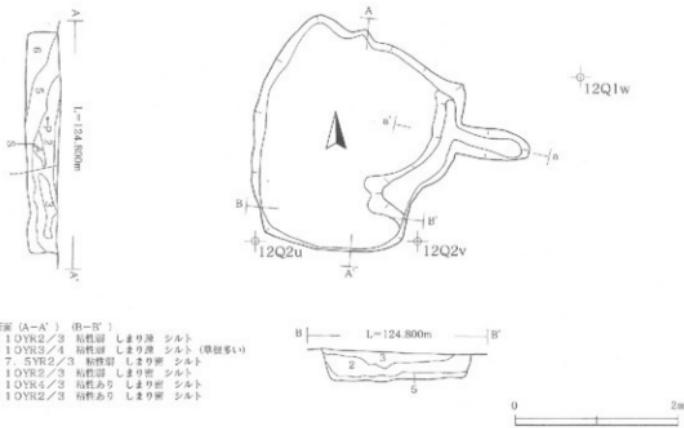
＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を基調とするが不整形気味である。規模は2.70×2.48mを測る。

＜埋土＞ 6層に細分されるが、主体は暗褐色・にぶい暗褐色シルトからなる2層と5層である。

＜壁・床＞ 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は南東壁28cm、北西壁37cm、南西壁34cm、北東壁37cmを測る。床面は平坦で締まっているが、部分的に砂礫層まで掘り込まれている。貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴・他の施設とも確認されない。

＜カマド＞ 南東壁の北東隅寄りに位置している。袖部を含む本体部は崩壊しており、詳細は不明である。燃



第51図 RA023竪穴住跡・出土遺物

焼部も確認されない。煙道部はかなり削平を受けており、割り貫き式かは不明であるが、緩やかな下り勾配で煙出し部に至る。

＜遺物＞ 埋土から壺、甕が出土している。156はロクロ使用の土師器の壺で、底部切り離し技法は回転糸切りである。157はロクロ不使用の土師器の小壺甕である。口縁部はヨコナデ、体部は外面へラケズリ、内面ヘラナデ調整されている。158も土師器の甕であるが、ロクロ成形されている。159は須恵器の甕の体部で上半は内外面ともロクロナデ、下半は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整されていると思われる。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から平安時代（10世紀前葉）と考えられる。

RA024堅穴住居跡（写真図版27, 28, 69, 70, 71, 72, 73）

＜位置＞ A調査区11Q区の中央やや南寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北側約4mにはRA020堅穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ 表土（1層）を除去した直下のII層上面において、黒色土の広がりとして確認した。検出時に灰白色火山灰の混入は確認されなかった。

＜平面形・規模＞ 平面形は、隅丸であるか西隅がやや張り出した台形を呈しており、規模は4.80×4.00mを測る。

＜埋土＞ 14層に細分されるが、主体となるのは黒色シルト・粘土質シルトからなる1層および2層である。1層では確認されないが、2層中には灰白色火山灰のブロックと炭化物粒が確認できる。埋土下部には焼土と炭化材が多く見られる。

＜壁・床＞ 壁は床面からやや外傾気味に立ち上がり、壇高は南東壁65cm、北西壁は77cm、南西壁は78cm、北東壁は66cmを測る。床面は平坦で、中央付近が特に堅く締まっている。床面中央から北側にかけて炭化材が多く見られることから焼失家屋と思われる。これら埋土下位～床面直上にかけて検出された炭化材はケヤキ・クリ・ナラ・イタヤ材との肉眼鑑定による結果を得ている。このうちケヤキ材の割合が最も高い。

貼り床は粘性の強い黒色粘土質土によって施されている。

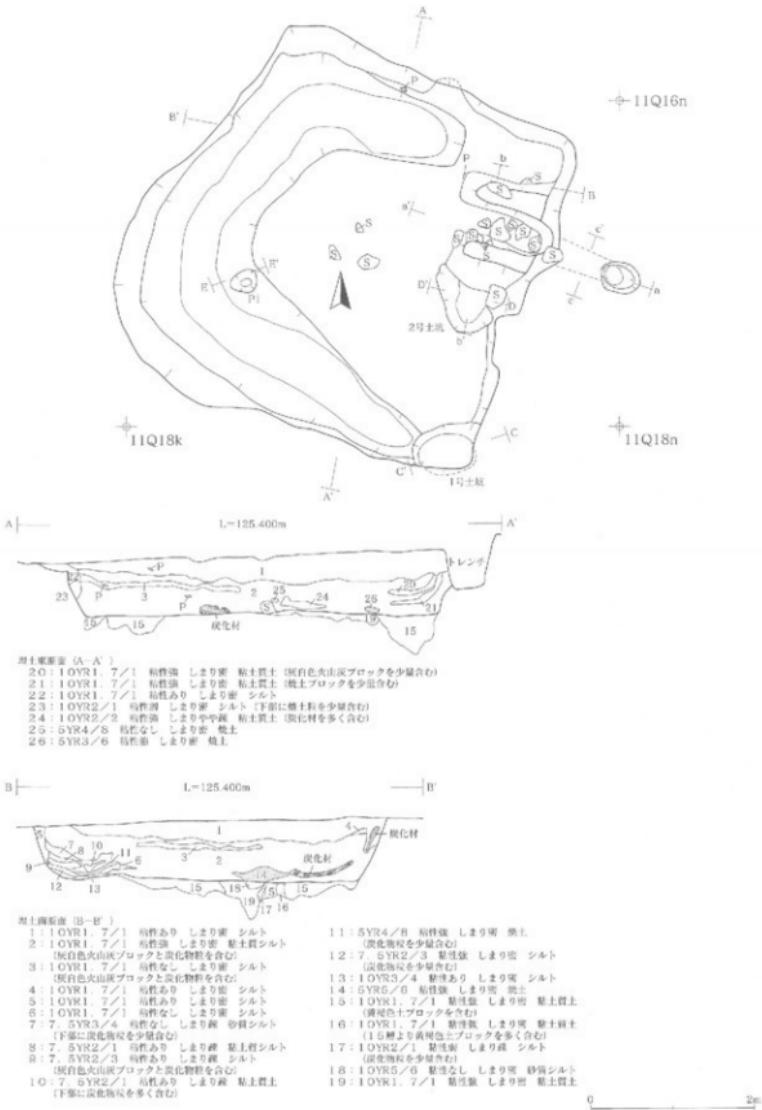
＜柱穴・他の施設＞ 大小あわせて3基検出した。1号土坑は南隅に位置し、壁を一部掘り込んでいる。埋土の最上面には炭化物粒を含む暗赤褐色の焼土が見られる。

2号土坑はカマド右袖横に位置し、埋土に炭化物粒を含んでいる。どちらからも遺物が出土しており貯蔵穴と考えられる。柱穴状の土坑はP1のみで他は検出されていない。また、北東壁～北西壁～南西壁間にかけて床面に壁溝状の掘り込みが確認された。幅43cm～145cm、深さ約50cmを測る。

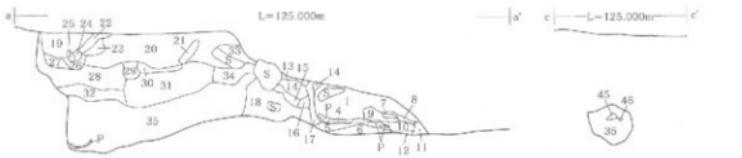
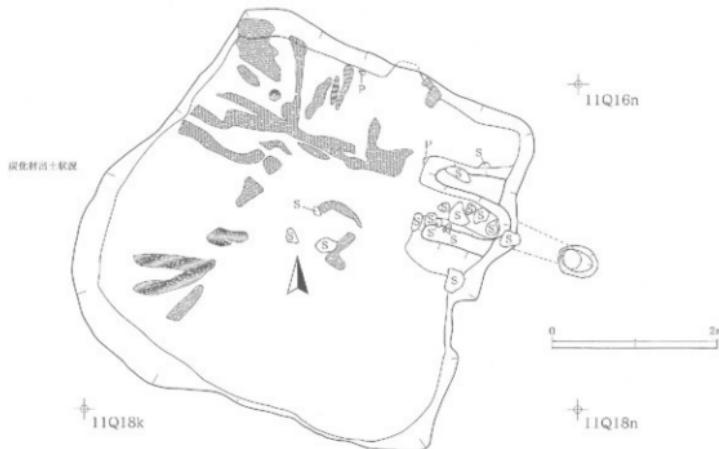
＜カマド＞ 南東壁のやや北寄りに位置する。芯材に多量の礫を用いており、左袖側は4個の亜円礫と5個の亜角礫を、右袖側は7個の亜円礫と2個の亜角礫を使用して構築されている。燃焼部は30×25cm、厚さ約4cmの楕円形の焼土が形成されている。煙道部は割り貫き式で長さ1.22mを測り、緩やかな下り勾配で煙出し部に至る。煙出し部には径49×37cm、深さ73cmの楕円形の土坑が掘り込まれており、床面に土師器の甕の底部が埋えられている。

＜遺物＞ カマドとその周辺、土坑、床面、埋土から土師器、須恵器、土製品、鉄製品が出土している。160～175はロクロ使用の土師器の壺である。底部の切り離し技法はすべて回転糸切りであるが、160・162には一部に再調整された痕が見られる。174は内面がヘラミガキ調整され、175は体部外面に線刻が認められる。

No.	1号土坑	2号土坑	P1
直径cm	70×60	65×57	31×29
深さcm	21	19	64



第52図 RA024堅穴住居跡（1）

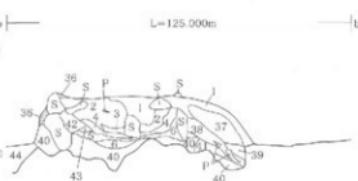


カマド周辺断面図 (a-a')

- 1 : SYR3/4 稀性なし しまり密 砂質シルト
- 4 : OVR1. 7/1 稀性弱 しまり密 砂質シルト (廃土粒を含む)
- 5 : SYR2/2 稀性なし しまり密 砂質シルト (廃土粒を含む)
- 6 : OVR1. 7/1 稀性あり しまり密 シルト
- 7 : SYR3/4 稀性なし しまり密 砂質シルト
- 8 : OVR1. 7/1 稀性あり しまり密 シルト
- 9 : OVR1. 7/1 稀性あり しまり密 シルト
- 10 : 7. SYR3/3 稀性なし しまり密 砂質土
- 11 : OVR2/3 稀性なし しまり密 シルト (廃土粒、炭化物粒を少量含む)
- 12 : OVR3/4 稀性なし しまり密 砂質土
- 13 : OVR2/3 稀性なし しまり密 シルト
- 14 : 7. SYR2/3 稀性なし しまり密 砂質土
- 15 : 7. SYR2/2 稀性なし しまり密 砂質土
- 16 : OVR1. 7/1 稀性なし しまり密 砂質土
- 17 : 7. SYR1. 7/1 稀性なし しまり密 シルト
- 18 : OVR1. 7/1 稀性なし しまり密 シルト (炭化物粒を含む)
- 19 : OVR2/2 稀性なし しまり密 シルト (廃土粒を含む)
- 20 : OVR2/1 稀性なし しまり密 シルト (廃白色土の廃土ブロックを少量含む)
- 21 : OVR1. 7/1 稀性なし しまり密 シルト
- 22 : 7. SYR2/2 稀性なし しまり密 シルト
- 23 : 7. SYR1. 7/1 稀性なし しまり密 シルト
- 24 : 7. SYR1. 7/1 稀性なし しまり密 シルト
- 25 : SYR2/3 稀性なし しまり密 砂質土
- 26 : 7. SYR1. 7/1 稀性弱 しまり密 シルト (廃白色土ブロックを少量含む)
- 27 : 7. SYR1. 7/1 稀性弱 しまり密 シルト (廃白色土ブロックを少量含む)
- 28 : OVR2/1 稀性あり しまり密 シルト
- 29 : 7. SYR2/2 稀性あり しまり密 シルト
- 30 : 7. SYR1. 7/1 稀性あり しまり密 シルト
- 31 : OVR4/6 稀性あり しまり密 シルト
- 32 : 7. SYR2/1 稀性あり しまり密 シルト
- 33 : 7. SYR2/1 稀性なし しまり密 シルト (廃白色土ブロックを少量含む)
- 34 : OVR1. 7/1 稀性弱 しまり密 砂質シルト
- 35 : 7. SYR1. 7/1 稀性あり しまり密 砂質シルト

廻路西面断面 (c-c')

- 4.5 : 7. SYR3/4 稀性なし しまり密 砂質シルト
- 4.6 : OVR3/4 稀性なし しまり密 埋土

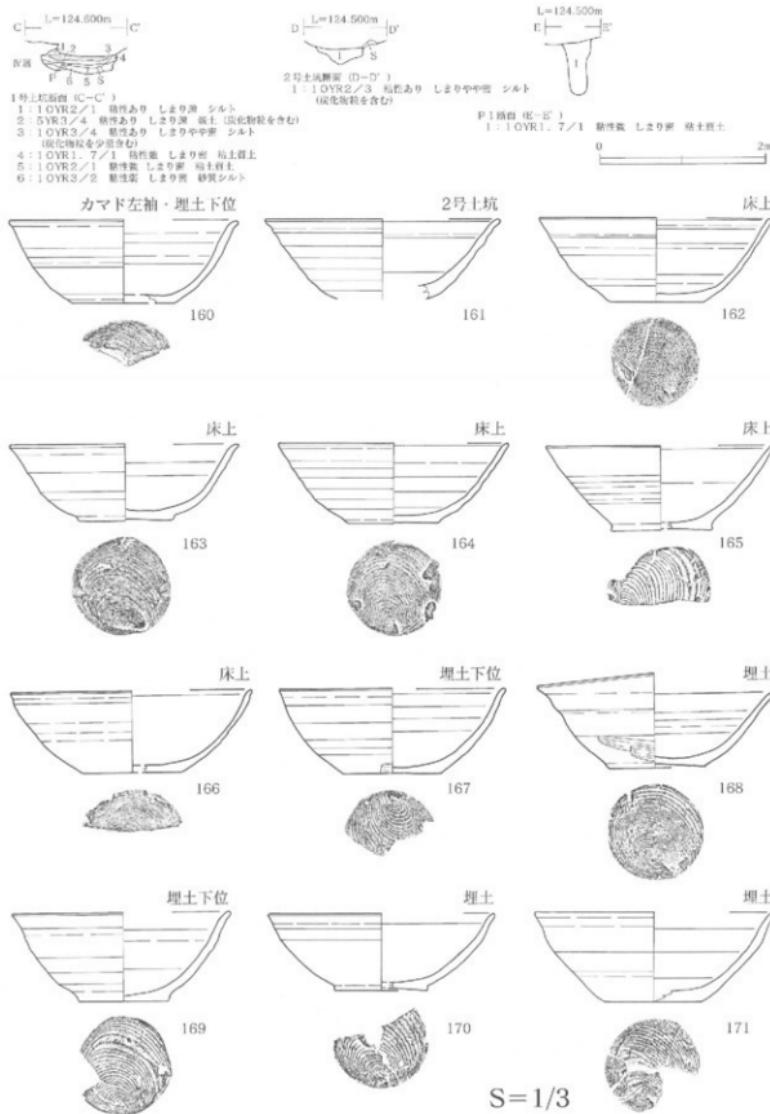


カマド裏面断面 (b-b')

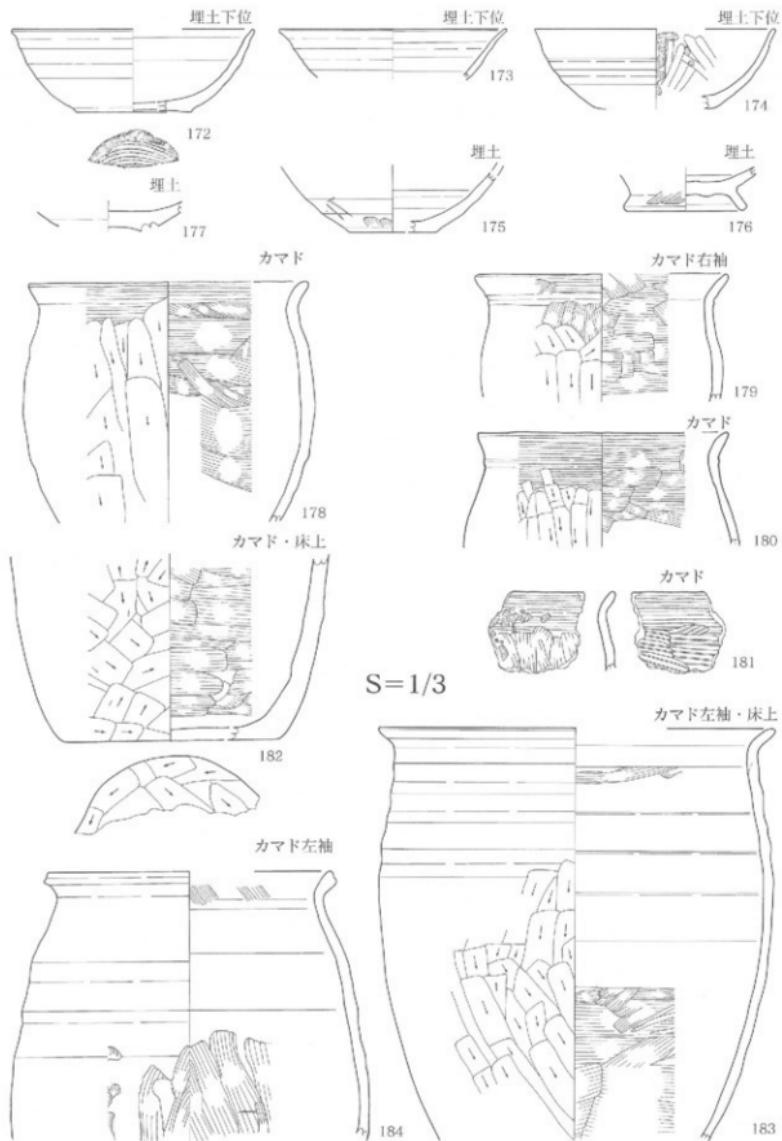
- 2 : OVR1. 7/1 稀性あり しまり密 シルト
(埋5~10cmの廃土ブロックを含む)
- 3 : 7. SYR2/1 稀性なし しまり密 砂質シルト (廃土粒を含む)
- 3.5 : 7. SYR2/1 稀性あり しまり密 砂質シルト
- 3.6 : 7. SYR2/2 稀性あり しまり密 シルト
- 3.9 : SYR2/2/1 稀性あり しまり密 埋土壁上
- 4.0 : 7. SYR1. 7/1 稀性あり しまり密 シルト
- 4.1 : 7. SYR2/2 稀性あり しまり密 埋土質 (炭化物粒を含む)
- 4.2 : OVR1. 7/1 稀性弱 しまり密 シルト (廃土粒、炭化物粒を含む)
- 4.3 : 7. SYR1. 7/1 稀性弱 しまり密 埋土質
- 4.4 : OVR1. 7/1 稀性弱 しまり密 埋土質



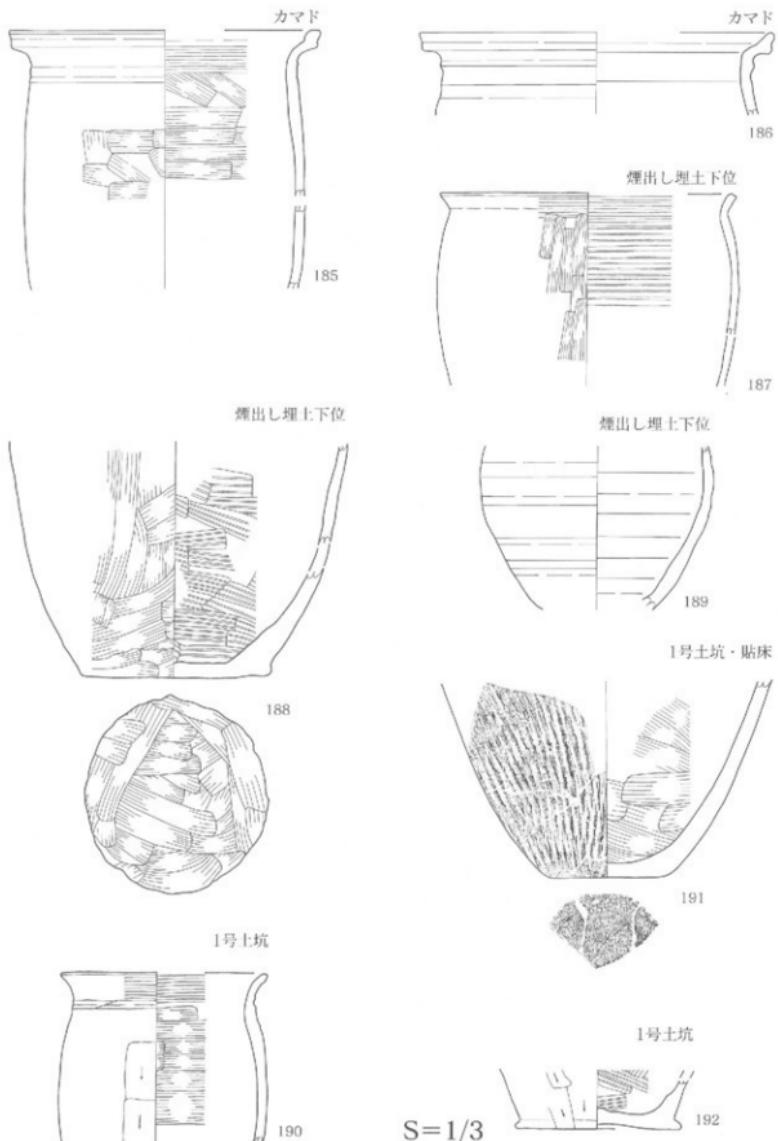
第53図 RA024堅穴住居跡 (2)



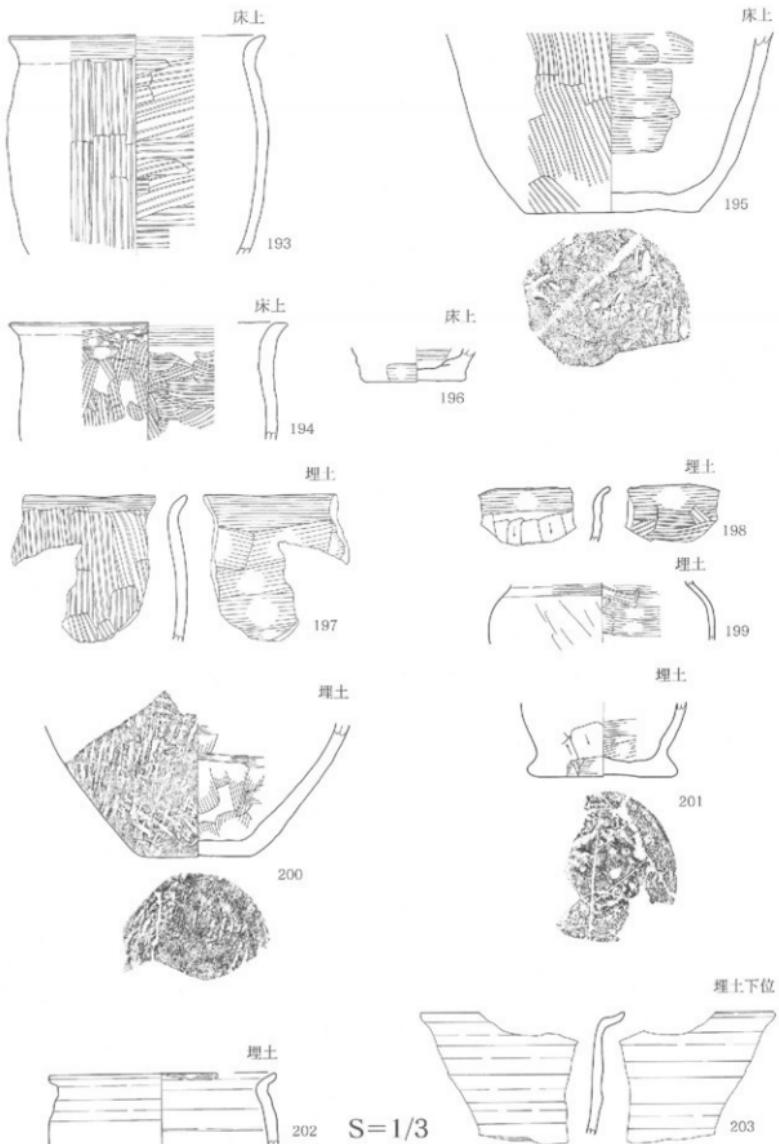
第54図 RA024竪穴住居跡 (3) · 出土遺物 (1)



第55図 RA024竪穴住居跡出土遺物 (2)

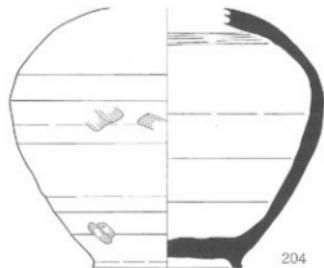


第56図 RA024竪穴住居跡出土遺物 (3)



第57図 RA024竪穴住居跡出土遺物 (4)

カマド・床上



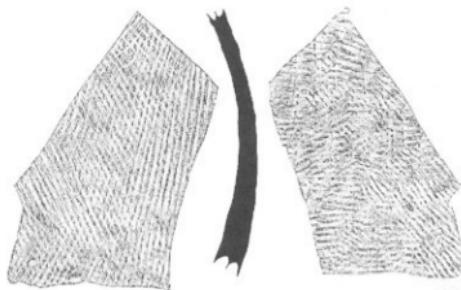
204

床上



205

埋土



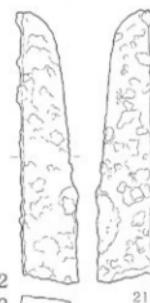
207

埋土



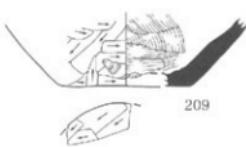
208

カマド右袖



211

埋土



209

カマド左袖付近



210

211はS=1/2
他はS=1/3

第58図 RA024竪穴住居跡出土遺物（5）

176・177は埋土から出土した土師器の高台付环で、环部を欠損している。178～189はカマドや煙出し部から出土した土師器の甕である。178～182・187・188はロクロ不使用、183～186・189はロクロ使用である。ロクロ使用、不使用にかかわらず、体部外面がヘラケズリ調整されているものが多く、内面はヘラナデ、ハケメ調整が目立つ。190～192は1号上坑から出土した土師器の甕である。191は体部外面にタタキメが、内面にはアテ具痕はなくヘラナデ調整が施されている。外底面にはタタキメではなく、体部下半を成形後に底部を成形したものと思われ、さらに径1mm以下の細かい砂粒が付着した砂底となっている。193～196は床面から出土したロクロ不使用の上煎器の甕である。体部はハケメ、ヘラナデ調整が施されている。197～203は埋土から出土した上煎器の甕である。197～200はロクロ不使用でハケメ、ヘラナデ、ヘラケズリ調整が見られる。200は191と同様に体部外面にタタキメ、内面はヘラナデ調整が見られる。外底面にもタタキメの痕跡が残るが、再調整されている。202・203はロクロ成形されている。204～209は須恵器の甕もしくは壺である。204はカマドおよび床面から出土した須恵器の長頸瓶もしくは広口壺で、底部は低い高台状を呈している。205は床面から出土した甕の体部下半、206は甕の体部で自然釉が見られる。207・208は甕の体部で外側にはタタキメ、内面にはアテ具痕が確認できる。208は小さな放射状のアテ具痕である。209は甕の底部で体部外面および外底面はヘラケズリ調整され、体部内面はヘラナデ調整が施されている。210は土製の筋鉢車で、一部欠損しているがほぼ完形でカマド左袖付近から出土したものである。円錐台形をしており、中央部に径8mmの穿孔が施されている。筋鉢車の出土はこれ1点だけである。211は刀子の刃部先端でカマド右袖付近から出土したものである。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴と炭化材の年代測定の結果から平安時代（10世紀中葉）と考えられる。

RA025豎穴住居跡（写真図版29, 73）

＜位置＞ A調査区IIQ区東側に位置する。RG017と重複関係にあるが、本遺構がRG017溝跡を切っていることから本遺構の方が新しい。北側約3mにはRA019豎穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ 表土（I層）除去後のIV層上面において黒色土の広がりとして確認した。II・III層は削平により確認されない。

＜平面形・規模＞ 平面形は椭丸方形を呈しており、規模は2.74×2.66mを測る。

＜埋土＞ 8層に細分されるが主体となるのは黒色シルトの1層と黒褐色シルトで黄褐色土ブロックと径3mmほどの炭化物粒を含む4層である。

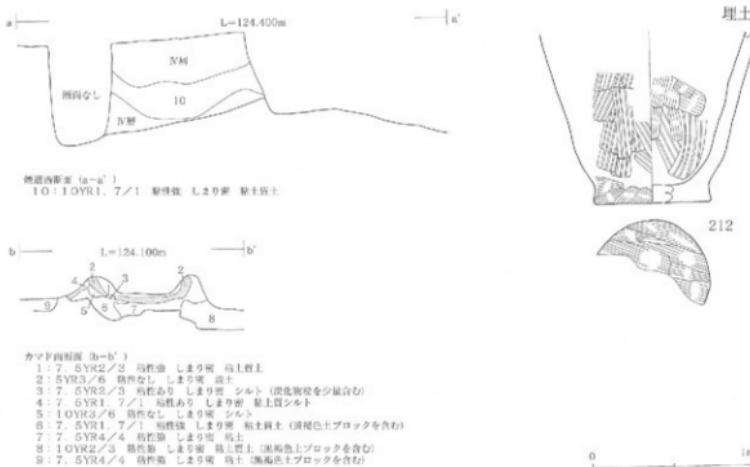
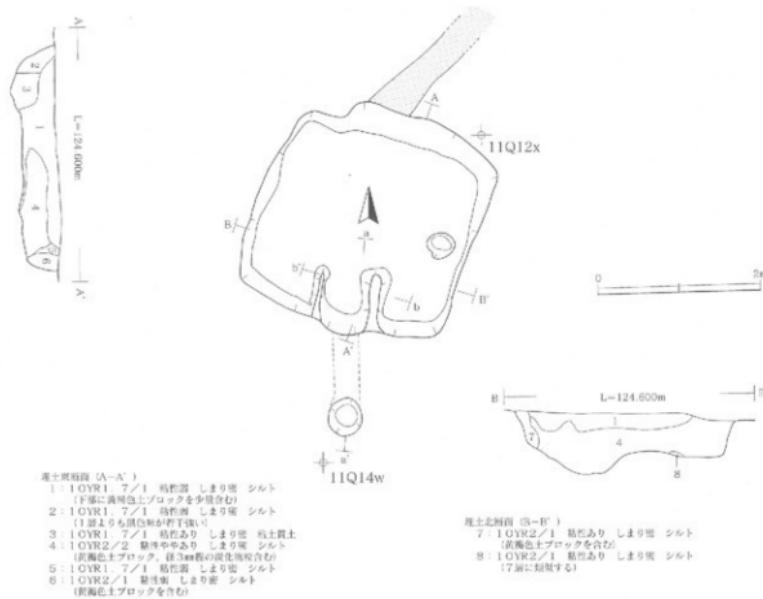
＜壁・床＞ 東壁と南壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁と北壁は外傾して立ち上がる。壁高は東壁44cm、西壁41cm、南壁39cm、北壁40cmを測る。床面は堅く締まっているが、西壁際に長方形の土坑状の掘り込みがあり、平坦ではない。貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴状の小土坑が1基検出された。規模は33×32cmで、梢円形をしている。

＜カマド＞ 南壁の中央付近に位置している。調査の不手際により本体部の断面はないが、袖部はIV層を割りたして構築されている。芯材に礫の使用は認められない。燃焼部には厚さ4cmの燒上が形成されている。煙道部は割り貫き式で長さ1.37mを測り、一度下った後、登り勾配で煙出し部に至る。煙出し部は径47×42cm、深さ60cmの円形の土坑が掘り込まれている。

＜遺物＞ 212は埋土から出土したロクロ不使用の土師器の甕である。体部は外面ハケメ、内面ヘラナデ、ハケメ調整され、外底面もヘラナデ調整されている。

＜時期＞ 出土遺物が少なく時期を特定するには至らないが、カマドの方向から平安時代と思われる。



第59図 RA025堅穴住居跡・出土遺物

RA028堅穴住居跡（写真図版30, 73, 74）

＜位置＞ A調査区11R区南側、12R区との境界付近に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南西側約3.5mにRA030堅穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ 表土（1層）を除去した後のII層上面において、黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は4.22×4.19mを測る。

＜埋土＞ 12層に細分されるが、主体となるのは黒色シルトからなる1～3層と黒褐色シルトの6層である。

1～3層は色調が類似するが、混入する黄褐色土ブロックの割合によって細分される。床面直上の6層には黄褐色土ブロックのほかに炭化物粒も含まれる。

＜壁・床＞ 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南東壁47cm、北西壁41cm、南西壁41cm、北東壁46cmを測る。北西壁際で検出された炭化材はササとの肉眼鑑定による結果を得ている。床面は平坦でよく締まつており、貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴は確認されない。土坑1基を南東隅に1基検出した。平面形は楕円形を呈しており、規模径98×82cm、深さ23cmを測る。

＜カマド＞ 南東壁中央よりやや北東側に位置する。本体部は崩落しており、上部構造は不明である。芯材に使用されたと思われる亞円礫を1個検出した。袖部はIV層を土台とし、その上に黒褐色シルトを積み上げるかたちで構築されている。燃焼部は47×27cmの楕円形で、極めて薄い焼土が形成されている。煙道部は削り貫き式で、長さ1.25mを測り、ほぼ水平に煙出し部に至る。煙出し部は43×34cm、深さ87cmの楕円形の土坑が掘り込まれている。底面には径15cm程の亞円礫が据えられている。

＜遺物＞ カマドおよび理上から土師器、須恵器が出土している。213～217はロクロ使用の土師器の壺で、底部切り離し技法は回転糸切りである。215のみ内面がヘラミガキ後黒色処理されている。218はロクロ使用の土師器の高台付壺である。219～221はカマドから出土したロクロ不使用の土師器の壺で、219・220の体部はヘラナデ調整されている。221は底部であるが非常に粗雑な作りである。222は埋土から出土したロクロ不使用の土師器の壺の底部で、内外面ともヘラナデ調整されている。223はカマドから、224は埋土から出土した須恵器の壺の体部である。223はロクロ使用で、さらに外側がヘラケズリ、内面下部がヘラナデ調整されている。224は外側にタキメ、内面にアテ具痕が確認できる。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から平安時代（10世紀前葉）と考えられる。

RA029堅穴住居跡（写真図版31, 32, 74, 75, 76）

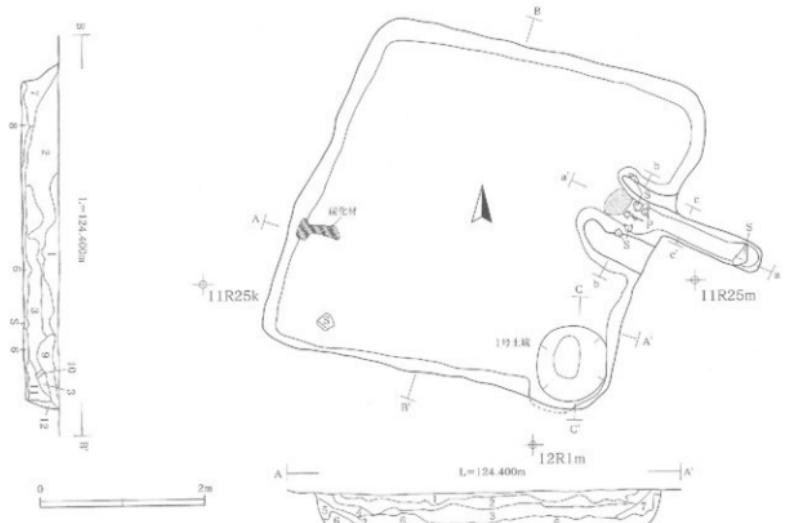
＜位置＞ A調査区12R区北側に位置する。他の遺構との重複関係は見られない。東隣にはRA030堅穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ 表土（1層）を除去した後のII層上面において、黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 南側が攪乱を受けているため平面形・規模の全容は不明である。確認された規模は東辺2.35m、西辺2.60m、北辺2.72mを測る。北東隅と北西隅は隅丸を呈する。

＜埋土＞ 7層に細分されるが、主体となるのは黒色シルトからなる1～3層である。いずれの層にも炭化物粒が含まれている。

＜壁・床＞ 南壁については攪乱のため詳細は不明であるが、西壁、北壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。東壁も同様であるが、カマドの右側には舌状の張り出しが現れる。壁高は東壁33cm、西壁37cm、北壁33cmを測る。床面は平坦で堅く締まっている。貼り床は確認されない。中央から西壁にかけて炭化材（クリ）が多い。

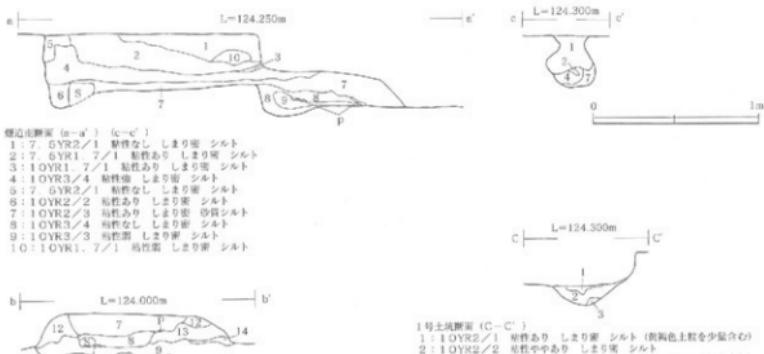


瑞士离西向《第一册》

- 8: 1 OYR2/2 黏性あり しまり密 シルト (黄褐色土ブロックを含む)
 9: 1 OYR1 7/1 黏性弱 しまり密 シルト
 (少量の灰白色火山灰ブロックと黄褐色土小ブロックを含む)
 10: 1 OYR1, 7/1 黏性弱 しまり密 シルト (碳化物鉄を少含む)
 11: 1 OYR1, 7/1 黏性強 しまり密 土質覆土 (炭化物鉄を少含む)
 12: 1 OYR4/4 黏性なし しまり密 粘土質

理土之断面 (A-A')

- 1: 1. OYR1 / 7.0/ / 菊麻なし しまり葉 シルト (黄菊色上小ブロッカを含む)
2: 1. OYR1 / 7.0/ / 菊麻なし しまり葉 シルト
3: (1層) 1. OYR1 / 7.0/ / 滅菌色土小ブロッカの割合(%)
3: OYR1 / 7.0/ / 菊麻無 しまり葉 シルト (滅菌色上小ブロッカを含む)
4: 4. OYR2/2 / 菊麻なし しまり葉 シルト
4: 4. OYR2/2 / 菊麻なし しまり葉 シルト (乾土粒、滅菌色土ブロッカを含む)
5: 5. OYR2/2 / 菊麻なし しまり葉 シルト (乾土粒、滅菌色土ブロッカを含む)
6: 6. OYR2/2 / 菊麻性 しまり葉 シルト (乾化黒土)
7: 7. OYR1 / 7.0/ / 菊麻性あり しまり葉 シルト (黄菊色上ブロッカを含む)



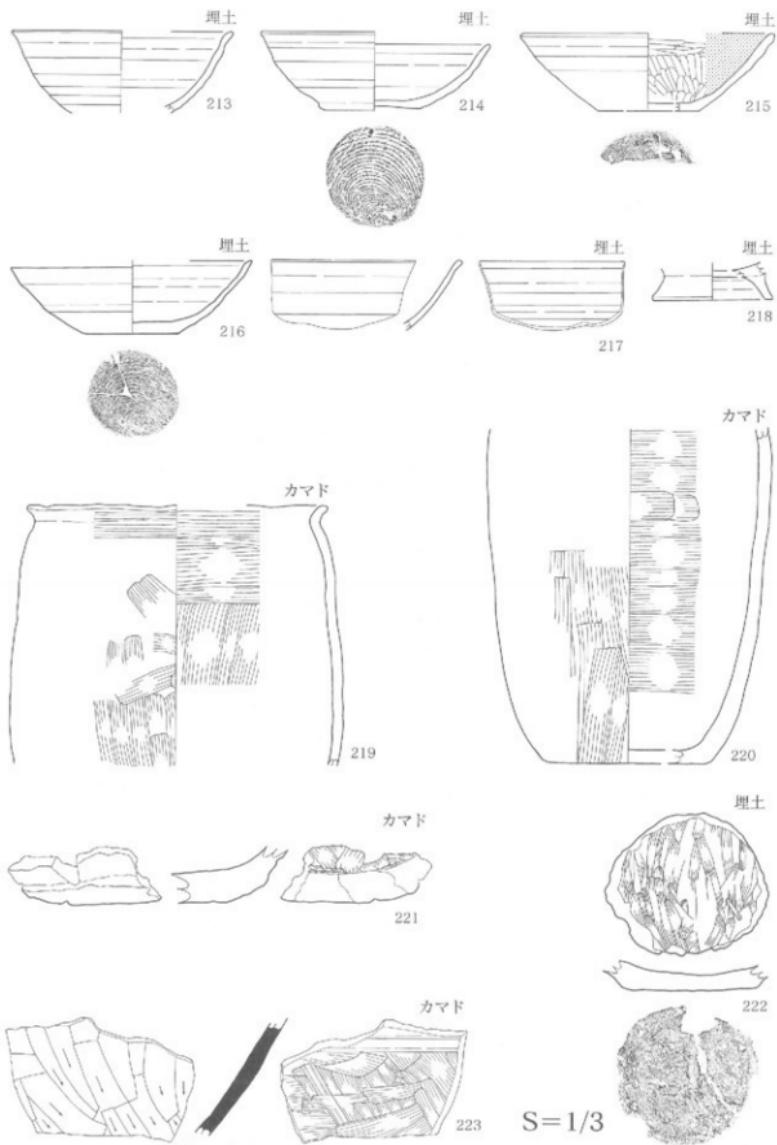
11

- | カマド断面図(b'-b') | |
|---------------|---|
| 1.1 | 1 OYRZ/2 黏性あり |
| 1.2 | 1 OYRZ/2 黏性なし |
| 1.3 | 1 OYR5/6 黏性なし |
| 1.4 | 1 OVR3/3 黏性なし |
| 1.5 | 1 OYRZ/2 黏性あり
しまりやや密
シルト (炭化物鉱を含む) |
| 1.6 | 1 OYRZ/2 黏性なし
しまり密
シルト (鰐土層、炭化物鉱、黄褐色土ブロックを含む) |
| 1.7 | 1 OYR5/6 黏性なし
しまり密
シルト |
| 1.8 | 1 OYR3/3 黏性なし
しまり密
シルト |

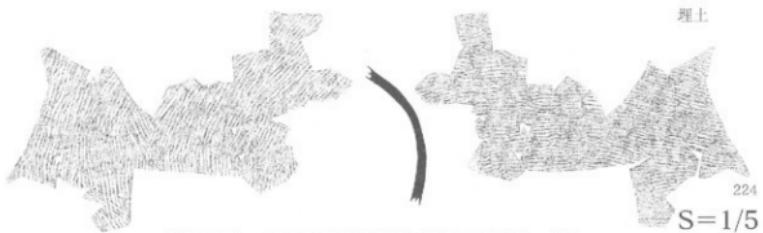
1号土坑断面(C-C')
1:10XR2/1 稚作あり しまり密 シルト(黄褐色土粒を少混合)
2:10XR2/2 粘性ややあり しまり密 シルト

- 2 : LOYR2 / 2 耐性ややあり じまわり シルト (黄褐色土を含む)

第60図 RA028堅穴住居跡



第61図 RA028竪穴住居跡出土遺物 (1)



第62図 RA028竪穴住居跡出土遺物（2）

く見られることから焼失家屋と思われる。床面中央へ北西隅にかけて検出された炭化材はクリ材との肉眼鑑定による結果を得ている。

＜柱穴・他の施設＞ 3基の土坑を検出した。1号土坑、2号土坑は位置的に見て主柱穴になるかと思われたが、対応する残りの柱穴がないことと、断面から判断して主柱穴にはならないようである。3号土坑はカマドの右横に置しており、貯蔵穴の可能性が高い。

＜カマド＞ 南側が擾乱を受けているため詳細は不明であるが、東壁の中央付近に位置していると思われる。本体部の芯材、天井材とも比較的良好な状態で残存している。芯材は左側に5個、右側に6個の亜円碟を配している。袖部はIV層と黒褐色土の混合土によって構築されており、左袖は芯材の上に使用しなくなった土師器の甕の破片を張り付けるように配し、その上から混合土で覆い整形している。天井材は燃焼部のほか、煙道部の入り口にも見られる。煙道部は割り貫き式で、長さ1.37mを測り、約60cm程緩やかに上ったあと下りながら煙出し部に至る。煙出し部には径45×43cm、深さ55cmの円形の土坑が盛り込まれている。

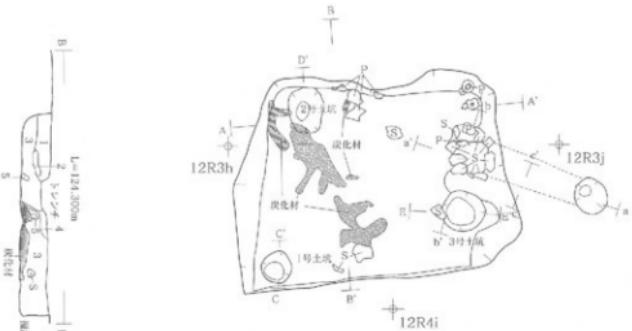
＜遺物＞ カマド、煙道、煙出し部およびその周辺を中心多く出土している。225～234はカマド・煙道・煙出し部、およびその周辺から出土したロクロ使用の土師器の壊である。225は底部を欠損しているため詳細は不明であるが、他の底部切り離し技法は回転系切りで、231のみ切り離し後再調整されている。225・229・231の内面はヘラミガキ後黒色処理されている。227・234の体部外面には刻書があり、232の体部外面には墨書き確認できる。235・236はカマドとその周辺から出土した土師器の高台付环で、ロクロ成形されている。235は内面がヘラミガキ調整のみで、黒色処理が施されない数少ない高台付环である。RA040から出土したものと2点のみの掲載である。237～247はカマドとその周辺、煙出し部から出土した土師器の甕である。237～244はロクロ不使用で口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラナデ、ハケメ、ヘラケズリ、内面はヘラナデ、ハケメ調整されている。242・243は接合できなかったが、器形や外面調整が類似することから同一個体と判断した。外底面には木薙痕が確認できる。244は体部外面に刻書きされている。245・246はロクロ使用の土師器の甕で、体部外面下半分はヘラケズリ調整されている。245は外底面に細かい砂が付着している砂底である。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から平安時代（10世紀前葉）と考えられる。

RA031竪穴住居跡（写真図版33, 77）

＜位置＞ A調査区11R区の南東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南側2mにはRA010竪

No.	1号土坑	2号土坑	3号土坑
直徑cm	39×37	54×43	53×48
深さcm	17	32	36

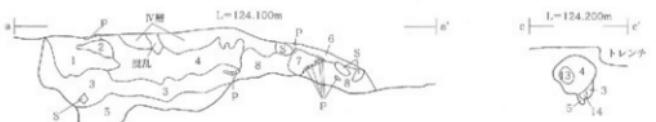


雙子座編譯 (卷一四)

- 理工系問題 15-15 :
1. 1 OYR1, 7/1 活性あり しまり密 シルト (炭化物粒を少含む)
2. 1 OYR2/2, 1 活性あり しまり密 シルト (炭化物粒と黄褐色土豆ロッブを含む)
3. 1 OYR1, 7/1 活性あり しまり密 シルト (炭化物粒と角黒色土豆ロッブを含む)
4. 1 OYR1, 7/1 活性低 しまり密 シルト
5. 1 OYR3/4, 4 活性なし しまり密 テンペ西シルト

第七章

- ヨリ土外障壁 (A-A')
6:1 OYR2/2 粘性弱 しまり強 シルト
7:1 OYR2/2 粘性あり しまり強 シルト

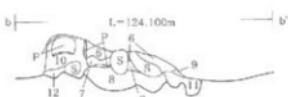


假設檢驗 (a = 5%)

- | 追加四脚目(第一歩) | | | | |
|--------------------|------|------|-----|--|
| 1 : 1 CYR1 / 7 / 1 | 粘性あり | しまり密 | シルト | |
| 2 : 1 CYR2 / 2 | 粘性あり | しまり密 | シルト | |
| 3 : 1 CYR2 / 3 | 粘性なし | しまり密 | 砂質土 | |
| 4 : 1 CYR2 / 2 | 粘性なし | しまり密 | シルト | |
| 5 : 1 CYR2 / 2 | 粘性なし | しまり密 | 砂質土 | |

物理基础

- 発達西蘭語 (c-c) :
13:1 OYR2/1 和性あり しまり街 シルト
14:1 OYR4/6 和性なし しまり街 砂質土

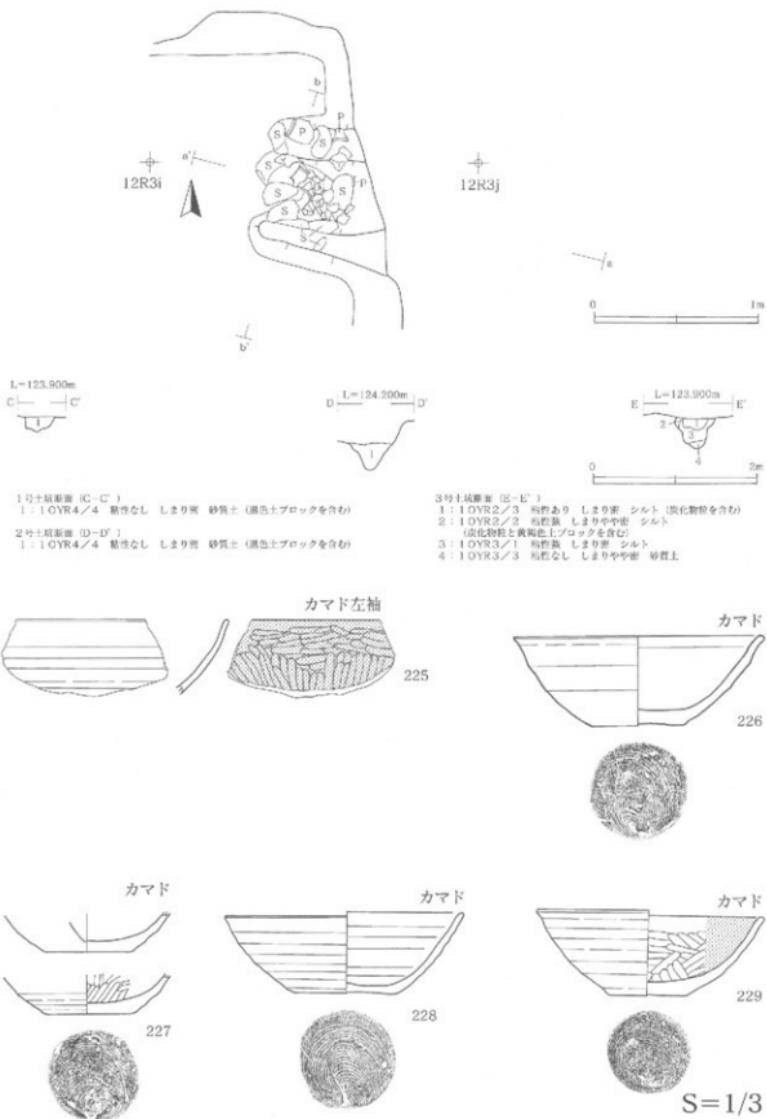


卷四

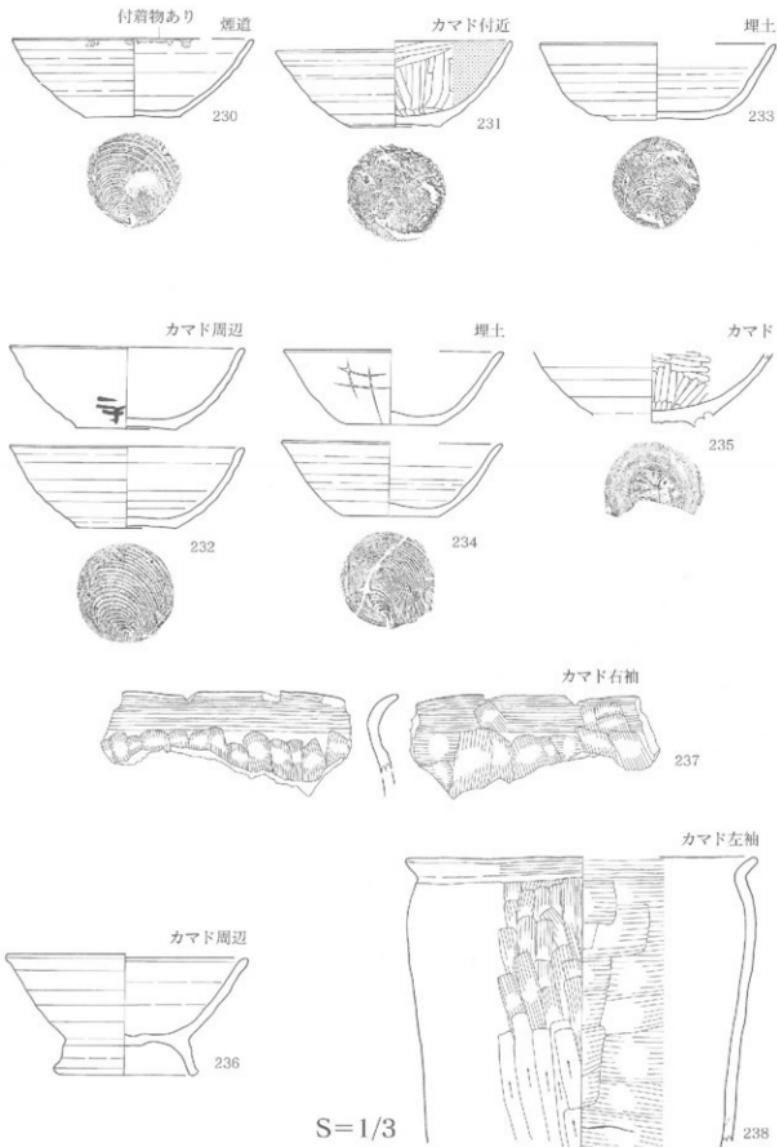
- | ヤマト通販 | | 通販 |
|-------|-----------|--------------------------------|
| 6-1 | GYVR1-7-1 | 耐熱樹脂
しまり密
耐土質 |
| 7-7 | 5YR2-2/3 | 耐熱樹脂
しまり密
シルト(土壁ブロックを含む) |
| 8-7 | 5YR2-2/3 | 耐熱樹脂
しまり密
シルト(一層熱膜を受ける) |
| 9-1 | GYVR1-7-1 | 耐熱樹脂
しまり密
シルト(整土ブロックを含む) |
| 10-1 | GYVR2-3 | 耐熱樹脂
しまり密
シルト |
| 11-1 | GYR4-4/4 | 耐熱樹脂
しまり密
粘土上質 |
| 12-7 | 5YR3-2/2 | 耐熱樹脂
しまり密
シルト |

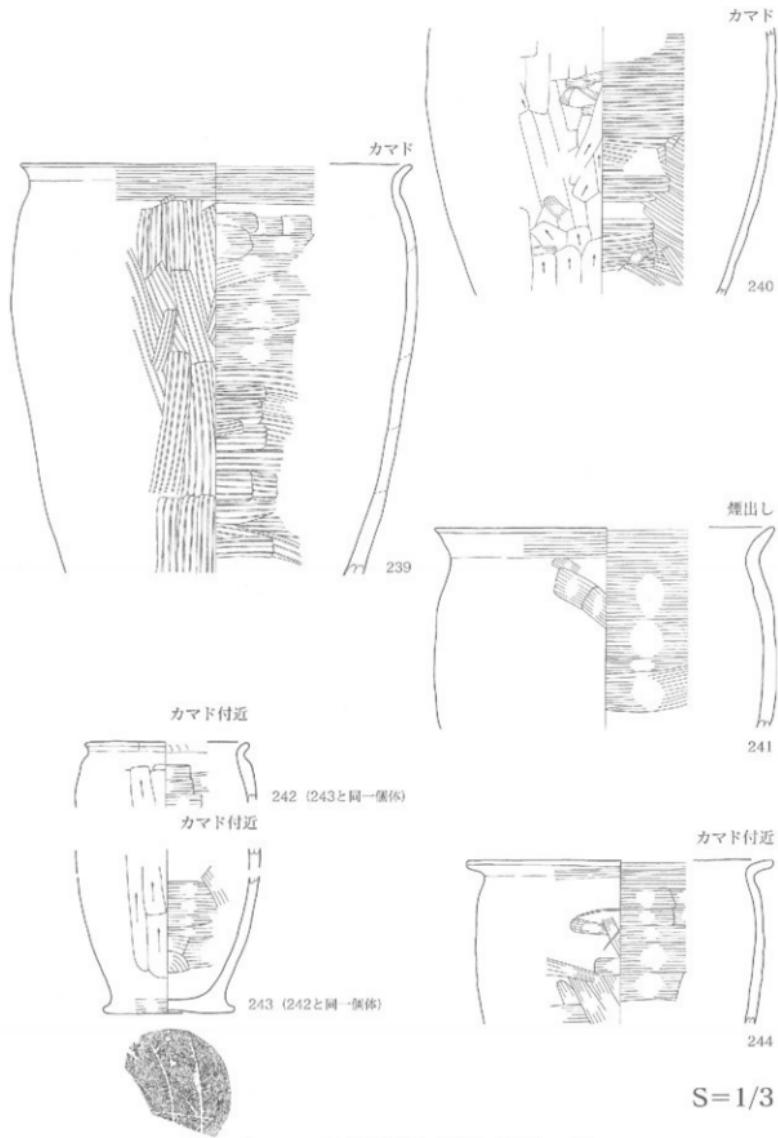


第63図 RA029竪穴住居跡（1）

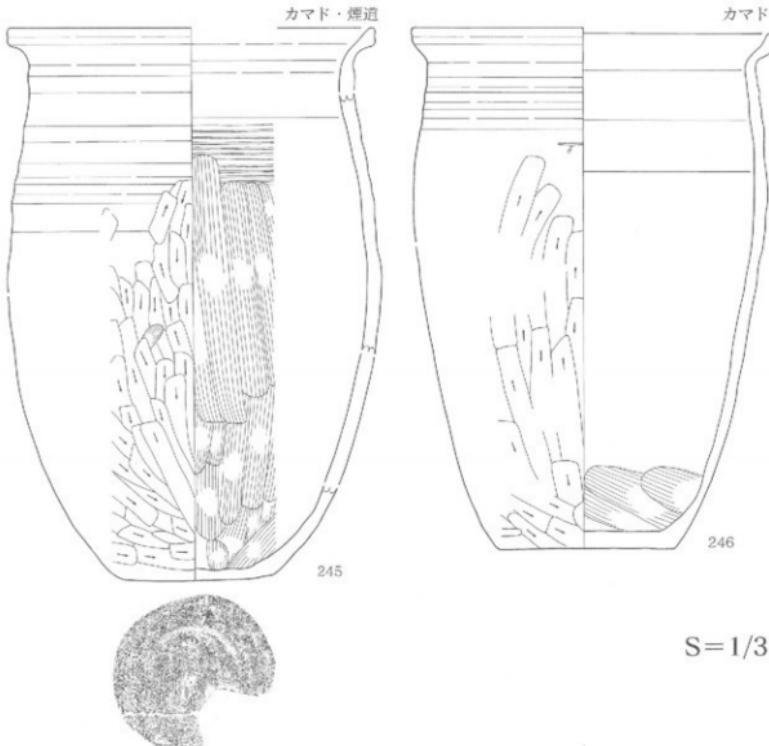


第64図 RA029豎穴住居跡 (2)・出土遺物 (1)





第66図 RA029竪穴住居跡出土遺物 (3)



第67図 RA029堅穴住居跡出土遺物 (4)

穴住居跡（盛岡市教委により調査済み）が近接する。

＜検出状況＞ 表土（I層）を除去した後のIV層上面において黒色土の広がりとして確認した。II・III層は削平され見られない。

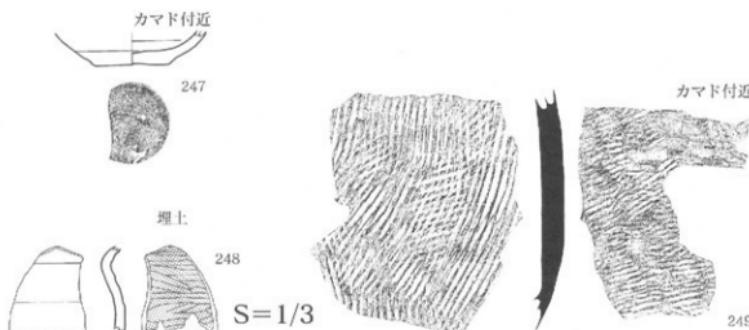
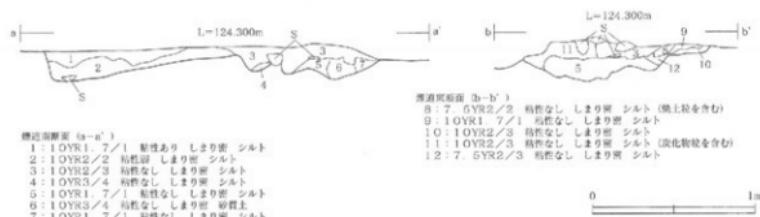
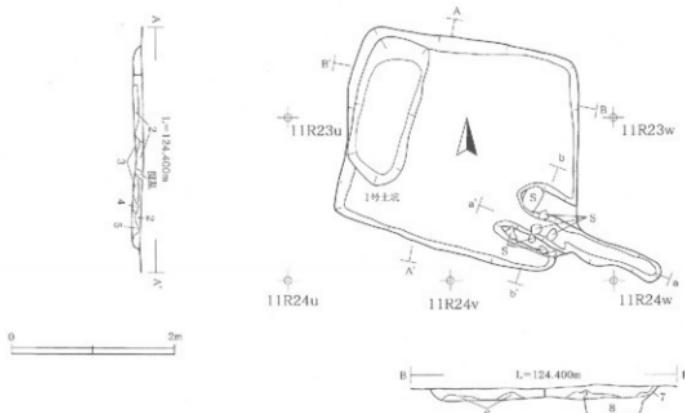
＜平面形・規模＞ 平面形は卵円方形を呈しており、規模は 2.80×2.53 mを測る。

＜埋土＞ 8層に縦分されるが、主体となるのは黒色粘土質土からなる1層で、草根を多く含んでいる。

＜壁・床＞ 壁の大半は削平されているが、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は東壁14cm、西壁13cm、南壁10cm、北壁10cmを測る。床面は平坦で締まっているが、北側は一部砂礫層まで掘り込まれている。また西壁際の床面に長方形の土坑状の掘り込みが見られる。貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴・他の施設とも確認されない。

＜カマド＞ 東壁の南側に位置している。本体部・袖部とも削平され、袖部がわずかに残っているだけである。芯材に礫を用い、袖部はIV層を主体にして構築されたと思われる。埋土に焼土粒は若干見られるものの、明確



第68図 RA031竪穴住居跡・出土遺物

な燃焼部は確認されなかった。煙道部は長さ1.30mを測り、緩やかに下りながら煙出し部に至る。煙出し部の底面には礫が確認できるが、構造は不明である。

＜遺物＞ 247はカマド付近から出土したロクロ使用の土師器の壺で、底部は回転糸切り後再調整されている。

248はロクロ使用の土師器の壺の頭～体部で、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。249はカマド付近から出土した須恵器の壺の体部で、タタキメ、アテ具痕が確認できる。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から平安時代と思われる。

RA033堅穴住居跡（写真図版34, 77, 78, 79, 80）

＜位置＞ A調査区IIIR区中央付近に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、東側約5mにRA032堅穴住居跡、西側約1.5mにRA034堅穴住居跡が近接する。また、北側約4mで段丘線辺部に至る。

＜検出状況＞ 表上（Ⅰ層）を除去した後のⅣ層上面において、黒褐色土の広がりとして確認した。耕作等によりⅡ・Ⅲ層は見られない。

＜平面形・規模＞ 平面形は圓丸方形を呈しており、規模は4.20×3.79mを測る。

＜埋土＞ 13層に細分されるが、主体となるのは黒褐色砂質土からなる1層で、黄褐色土小ブロックが混入する。下層の3層と5層には焼上粒が見られる。

＜壁・床＞ 南西壁・北西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南東壁・北東壁は外傾して立ち上がっている。南東壁側は一部搅乱を受けているが、壁高は南東壁25cm、北西壁32cm、南西壁32cm、北東壁34cmを測る。床面は平坦でよく締まっている。貼り床は確認されない。

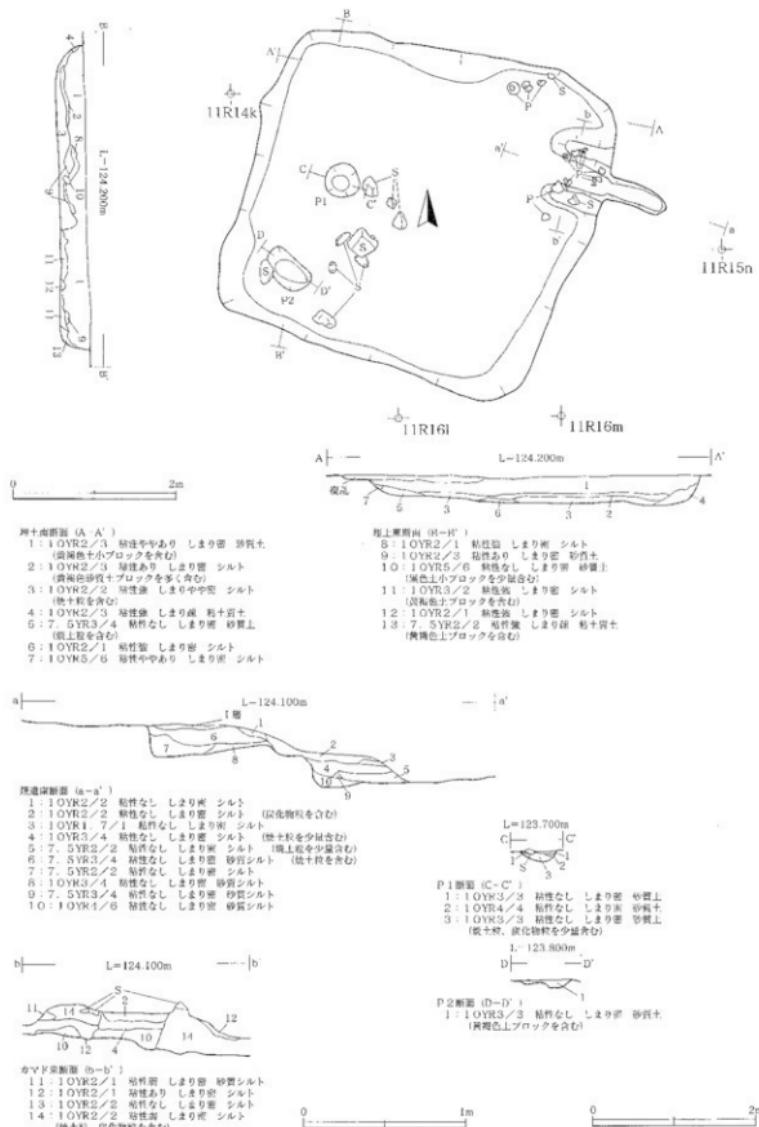
＜柱穴・他の施設＞ 柱穴は確認されない。土坑は2基検出した。

1号土坑は床面中央よりやや西寄りに、2号土坑は西隅に位置している。1号土坑の平面形は円形を呈しており、埋土に少量の焼上粒と炭化物粒が混入する。2号土坑の平面形は横円形を呈しており、埋土には黄褐色土小ブロックが含まれる。

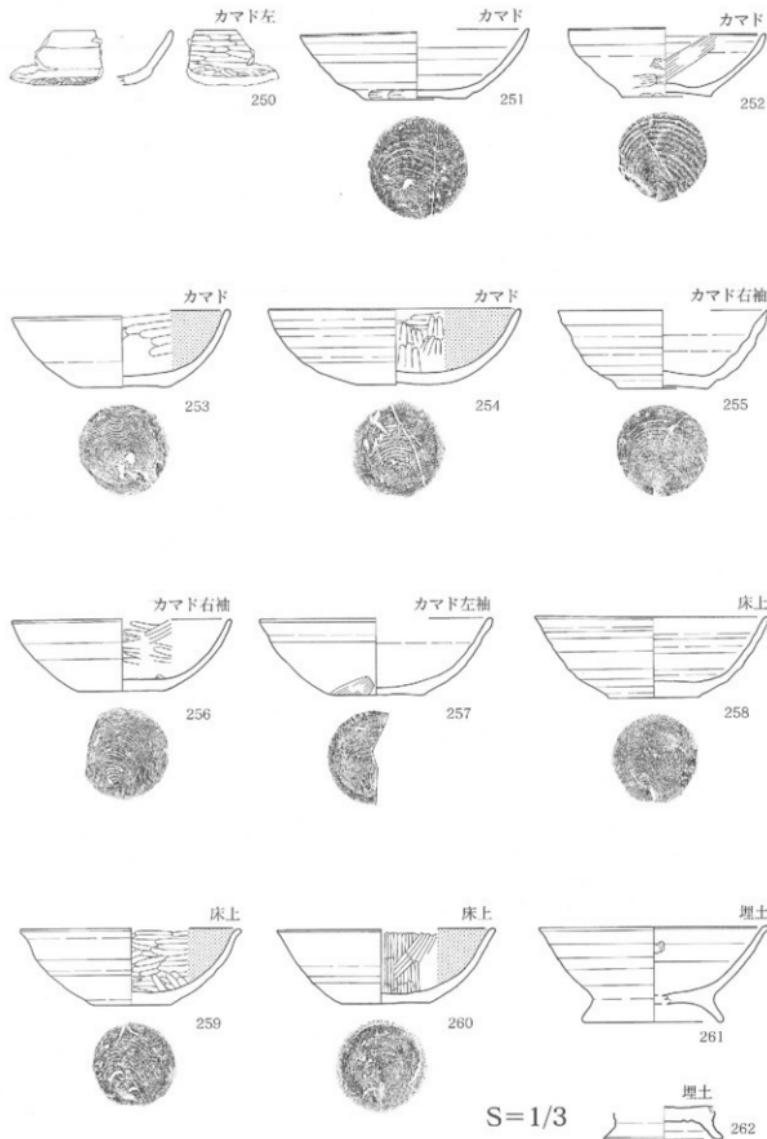
No.	1号土坑	2号土坑
直径cm	42×42	61×34
深さcm	11	9

＜カマド＞ 南東壁の北東側に位置する。本体部は崩壊し、詳細は不明であるが、芯材に礫を用い、袖部は黒褐色シルトによって構築されている。埋土中に焼上粒、炭化物粒は確認できるが、明確な燃焼部は確認できない。煙道部は削平を受けていたため割り貫き式か否かは不明である。長さ77cmを測り、緩やかに下りながら煙出し部に至る。煙出し部は木根により壊されているため、構造は不明である。

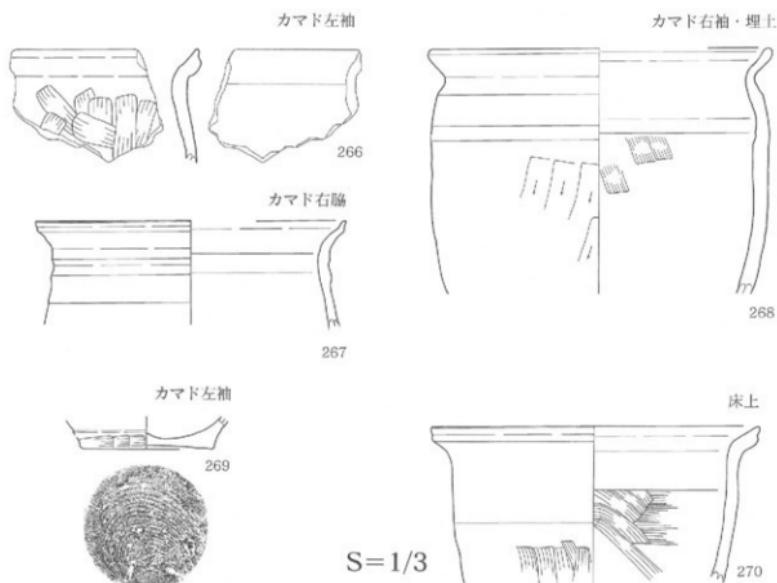
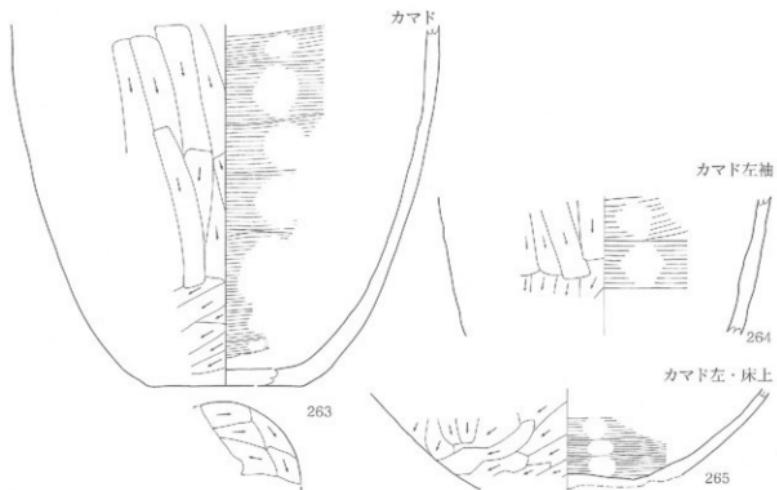
＜遺物＞ カマドとその周辺、床面、埋土から土師器、須恵器を中心に多くの遺物が出土している。250～257はカマドとその周辺から出土した土師器の壺である。250はロクロ不使用で内面、外底面ともヘラミガキ調整されており、他の壺より古いものと思われる。251～257はロクロ使用で、底部切り離し技法は回転糸切りである。251・254・255・257はその後再調整された痕跡が見られる。253・254の内面はヘラミガキ後黒色処理されている。258～260は床面から出土したロクロ使用の土師器の壺である。底部切り離し技法は回転糸切りであるが258・259はその後再調整されている。259・260の内面はヘラミガキ調整後黒色処理されている。261・262は埋土から出土した土師器の高台付杯である。263～269はカマドとその周辺から出土した土師器の壺である。263～265はロクロ不使用で体部外面は下方向へのヘラケズリ、内面はヘラナナ调整されている。265は球窓蓋である。266～269はロクロ成形されている。270は床面から出土したロクロ使用の土師器の壺で、体部はヘラナナ调整されている。271～275は埋土から出土した土師器の壺である。271・272はロクロ不使用で、カマドやその周辺から出土した壺と同様に体部外面はヘラケズリ調整されている。



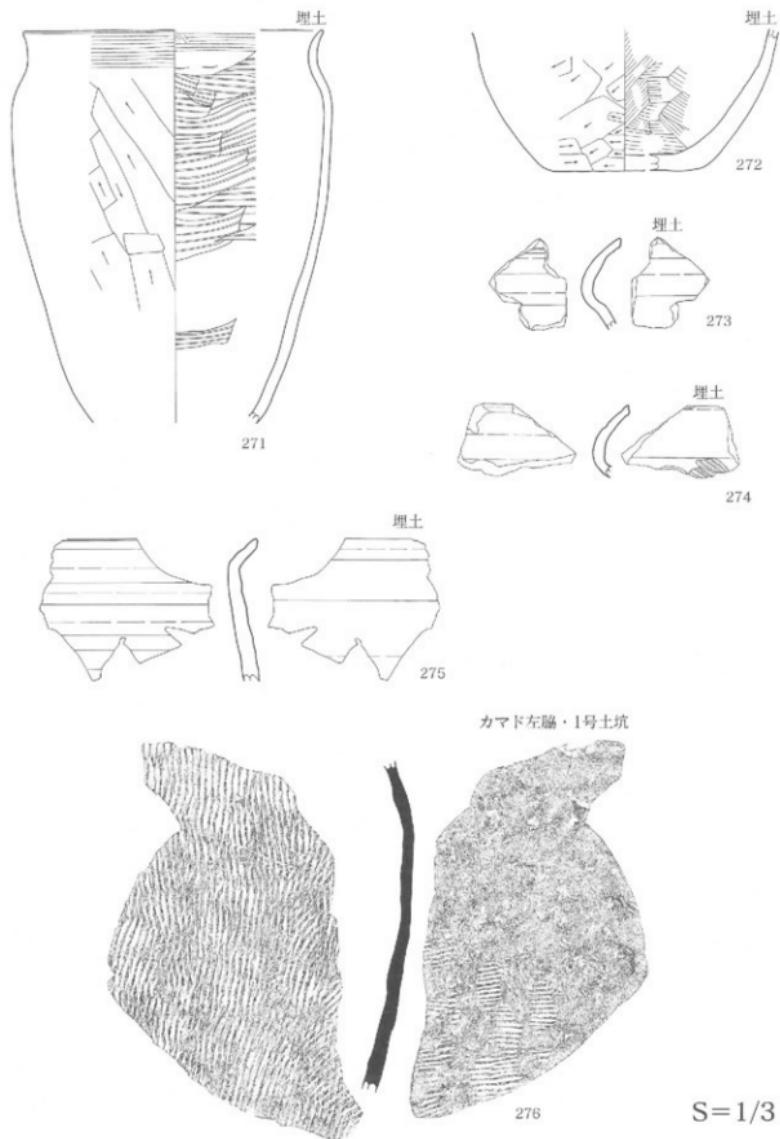
第69図 RA033竪穴住居跡



第70図 RA033竪穴住居跡出土物（1）

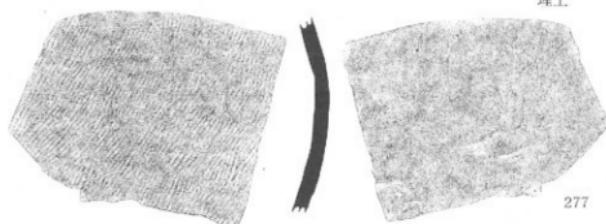


第71図 RA033竪穴住居跡出土遺物 (2)



第72図 RA033竪穴住居跡出土遺物 (3)

埋土



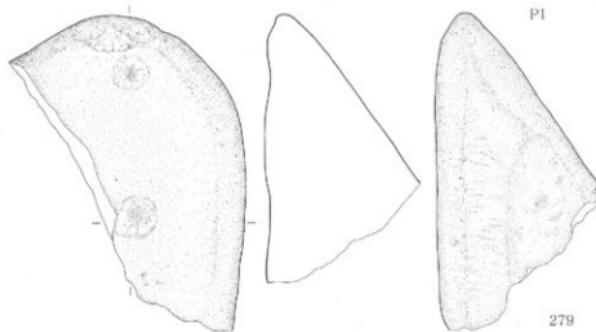
277

埋土



278

P1



279

検出面



279はS=1/2
278・280はS=1/3
277はS=1/4



280

第73図 RA033竪穴住居跡出土遺物 (4)

273～275はロクロ使用で、口縁部は体部から外反し立ち上がっている。276～278は須恵器の壺の体部である。276・277はロクロ使用で、外面にはタタキメ、内面にはアテ具痕が見られる。278はロクロ成形されている。279はP1から出土した礫である。2ヶ所の使用痕がある円石で、一部削り面が確認できる。280は他の流れ込みで、検出面から出土した17～18世紀代に属すると思われる唐津産の陶器で、施釉されている。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から平安時代（9世紀後葉～10世紀前葉）と考えられる。

RA034堅穴住居跡（写真図版35, 80, 81, 82）

＜位置＞ A調査区11R区の中央よりやや西側に位置する。北東壁側がRA035堅穴住居跡と重複する。本遺構がRA035堅穴住居跡を切っていることから、本遺構の方が新しい。今回の調査区内において唯一住居跡同士の重複関係である。また、東側1.5mにRA033堅穴住居跡が、西側約1mにはRA036堅穴住居跡が近接する。北東側約5mで段丘線辺部に至る。

＜検出状況＞ 表上（I層）を除去した後のIV層上面において、黒褐色土の広がりとして確認した。南西壁中央～北西壁中央にかけては擾乱を受けているが、これは南側に位置する鉄塔建設によるものと考えられる。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕丸方形を呈しており、規模は5.41×4.94mを測る。

＜埋土＞ 12層に細分されるが、主体となるのは黒褐色シルトからなるI層で、黄褐色土ブロックを含んでいる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。壁高は南東壁28cm、北西壁17cm、南西壁24cm、北東壁19cmを測る。床面は平坦で締まっているが、中央部が特に堅く締まっている。貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 土坑1基と柱穴状上坑2基を検出した。1号土坑はカマド右横に位置し、平面形は梢円形を呈し、埋土に炭化物粒を含んでいる。P

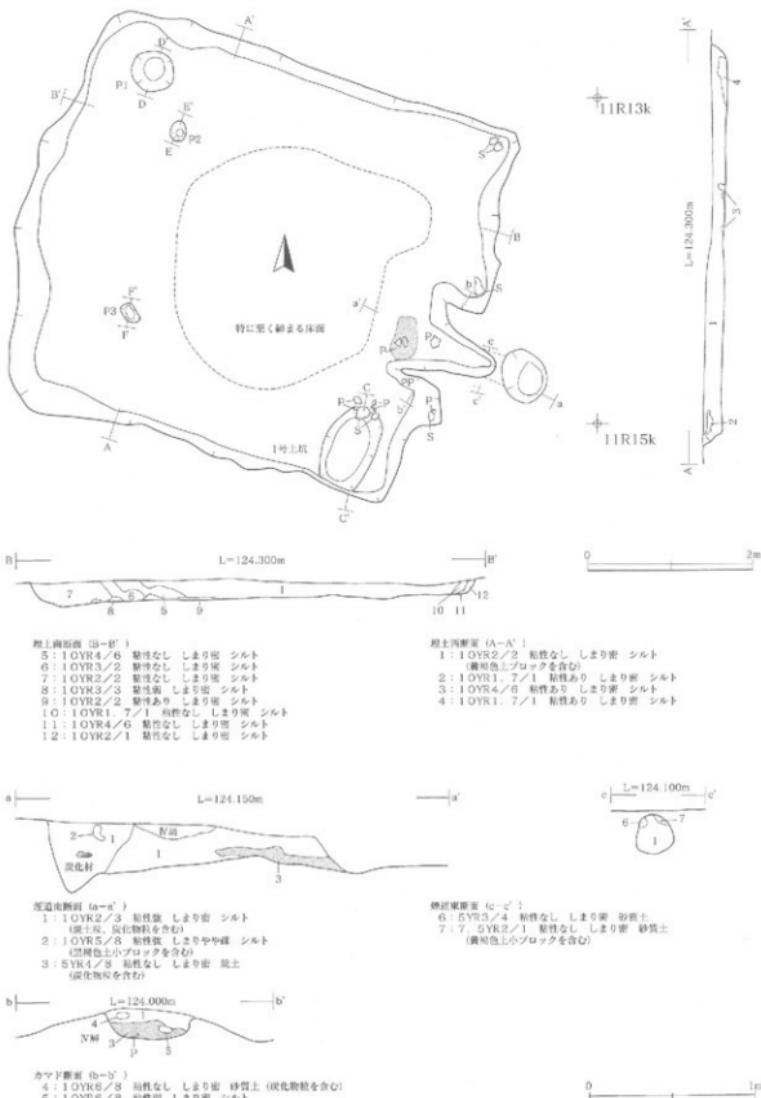
1は北隅に位置し、平面形は円形で、埋土の1層には焼土ブロック、炭化物粒を含んでいる。
P2、P3平面形は梢円形を呈している。

No.	1号土坑	P1	P2	P3
直径cm	100×63	51×50	27×20	27×17
深さcm	22	23	34	22

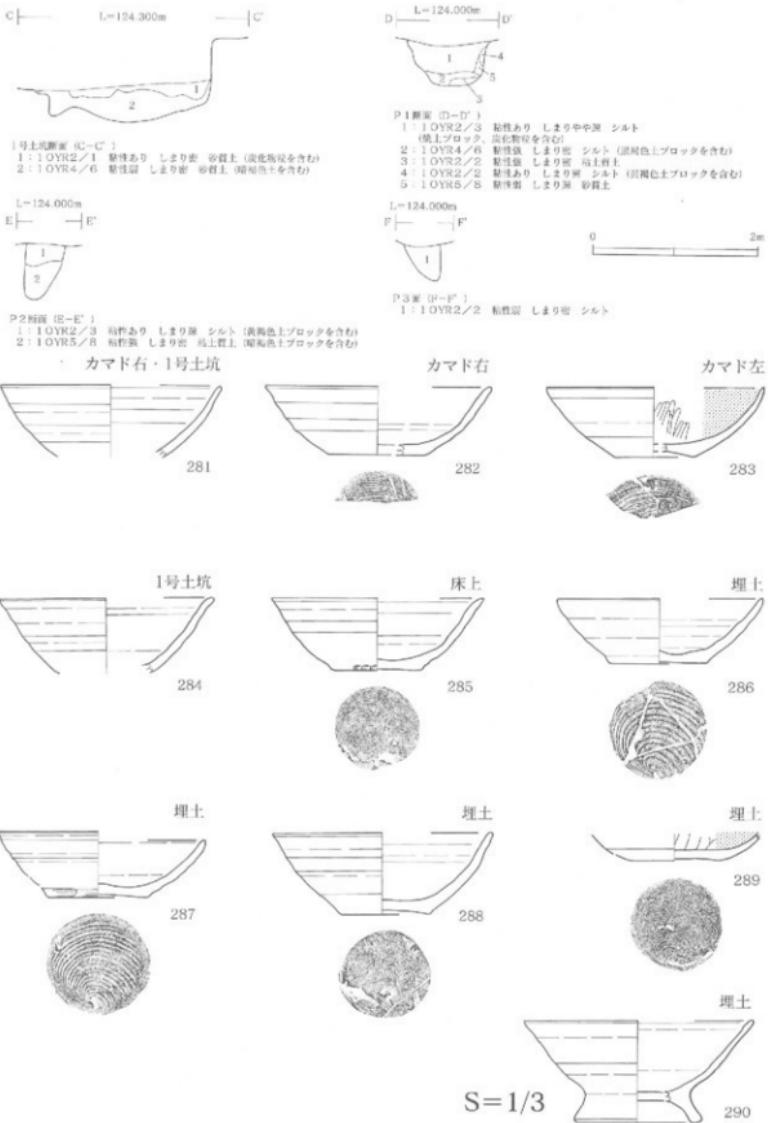
＜カマド＞ 南東壁やや南寄りに位置している。

本体部は崩壊しており、袖部のみ確認された。袖部はIV層主体で構築されており、芯材としての礫の使用は認められない。燃焼部は52×32cm、厚さ約10cmの梢円形の焼上を形成している。煙道部は割り貫き式で、長さ1.10m、緩やかに下りながら煙出し部に至る。煙出し部は径60×58cm、深さ43cmの円形の土坑が掘り込まれている。また、この他に南西壁中央付近に多量の焼土粒が確認された。おそらくカマドが位置していたと考えられるが、擾乱により壊された可能性が高い。

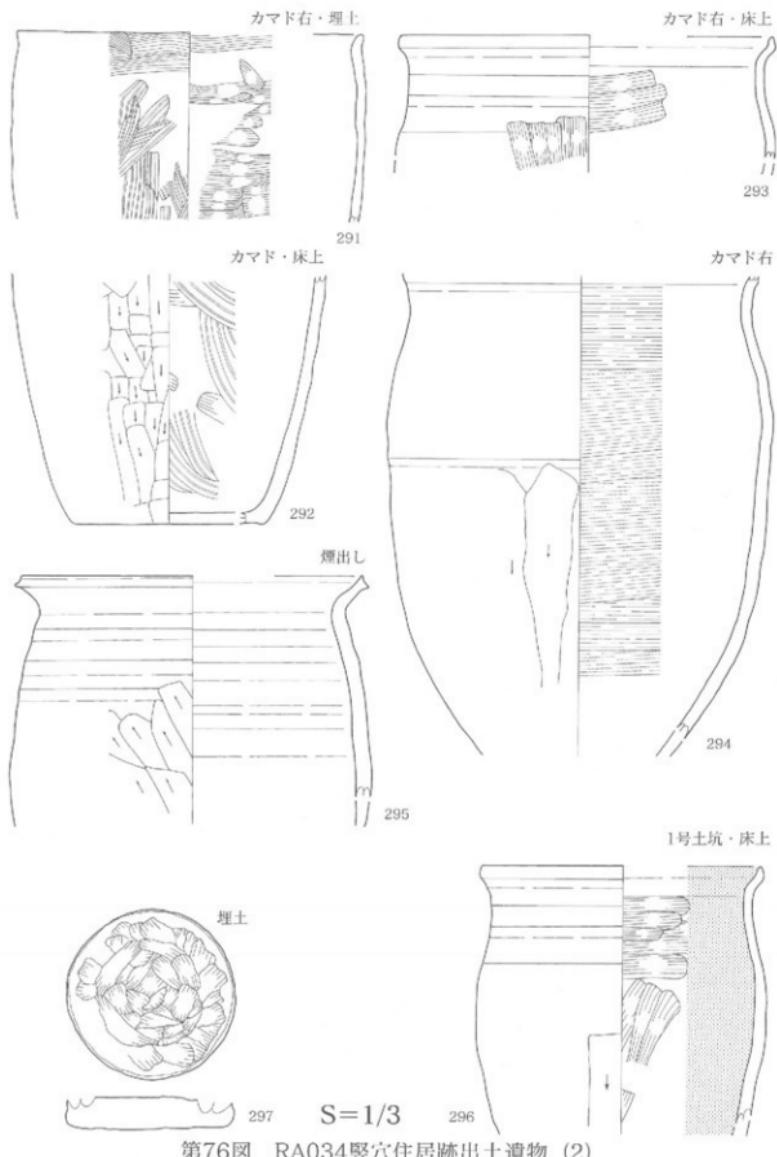
＜遺物＞ カマドとその周辺、土坑、床面、埋土から上解器、須恵器を中心多くの遺物が出土している。281～283はカマドとその周辺、284は1号土坑、285は床面、286～289は埋土からの出土で、すべてロクロ使用の土師器の环で、底部切り離し技法は回転糸切りである。283・289のみ内面ヘラミガキ後黒色処理されている。290は埋土から出土のロクロ使用の高台付环で、台部は短い「ハ」の字状をしている。291・292はロクロ不使用、293～296はロクロ使用で、カマドおよび煙出し部から出土した土師器の甕である。291の口縁部は短くやや外反するものの、体部から直線的に立ち上がっている。292は体部外表面が底部方向に向かってヘラケズリ調整されている。293はカマド右脇から、296は1号土坑からの出土で、さらに内面が黒色処理されていたため別個体と捉えていたが同一個体である。ロクロ成形されているにもかかわらず、口縁～体部上半



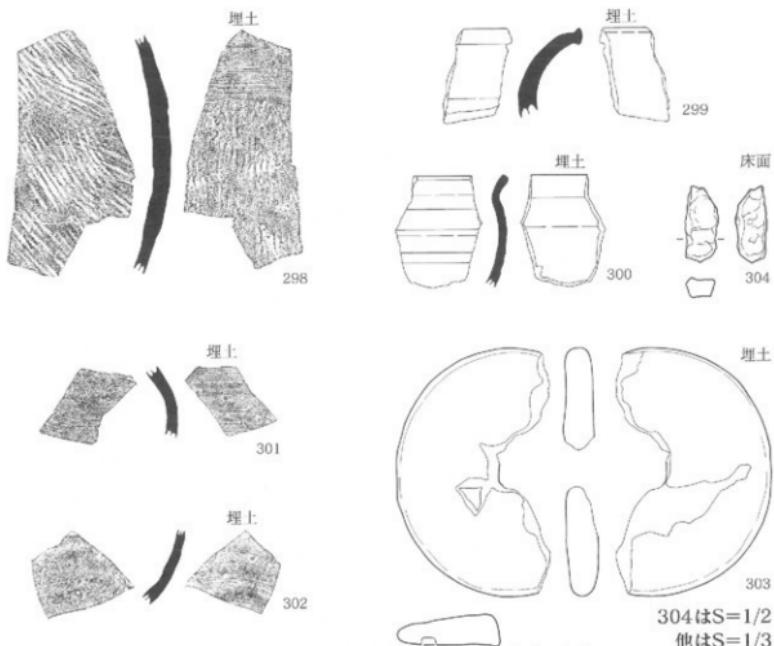
第74図 RA034堅穴住居跡 (1)



第75図 RA034堅穴住居跡 (2) · 出土遺物 (1)



第76図 RA034竪穴住居跡出土遺物 (2)



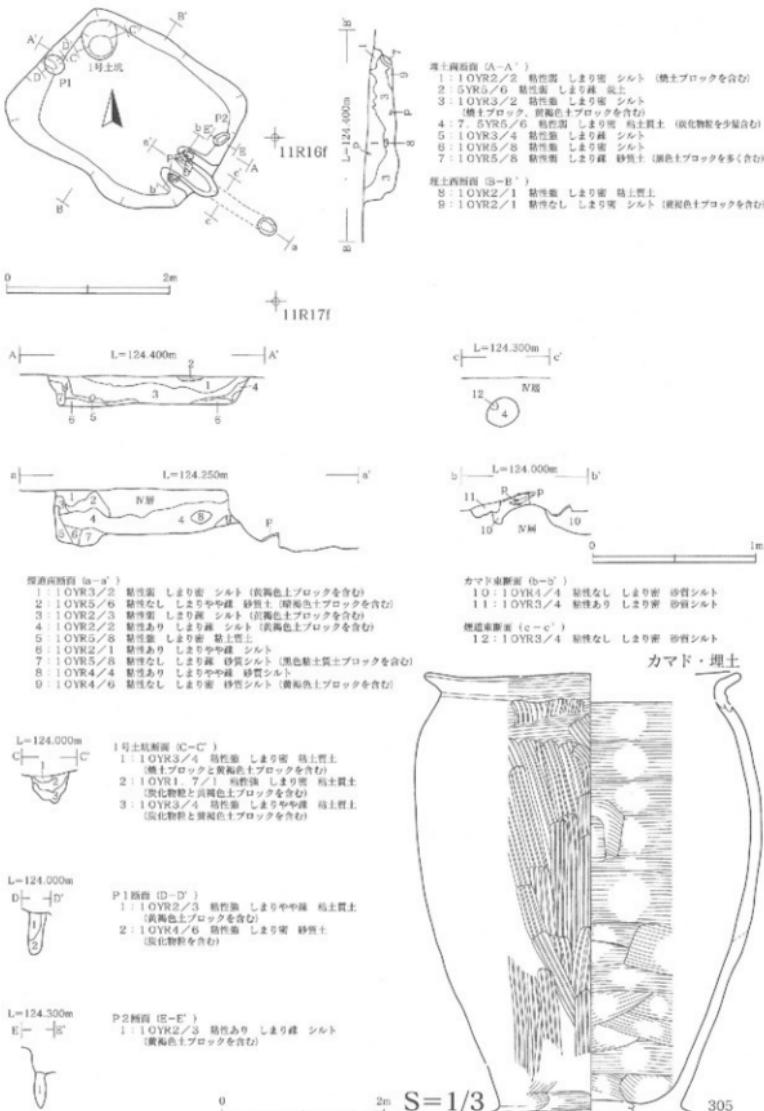
第77図 RA034堅穴住居跡出土遺物（3）

は歪んで梢円形を呈している。294はカマド右脇からの出土で、体部外面下半はヘラケズリ、内面はカキメ調整されている。カキメ調整される上器は少なく、掲載したのは126と294だけである。295は煙出し部からの出土で、体部外面下半は斜め下方向からヘラケズリ調整されている。297は埋土から出土したロクロ不使用的土師器の甕の底部で、内底面はヘラナデ調整されている。298~302は埋土から出土した須恵器である。298は甕の体部で外面にはタタキメ、内面上半はヘラナデ調整され、下半にはアテ具痕が残っている。299は甕、300は壺の口縁部、301・302は壺の体部でいずれもロクロ成形されている。303は埋土から出土した土製品で、1/2を欠損しているが円盤状を呈し、中央部に穿孔が施されていたと考えられる。本遺跡からの出土はこれ1点で詳細は不明である。304は床面から出土した鉄製品である。両端を欠損しており、器種等は不明である。

〈時期〉 出土した遺物の特徴から平安時代（10世紀前葉）と考えられる。

RA037堅穴住居跡（写真図版36, 82）

〈位置〉 A調査区11R区西側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、すぐ北側にはRA036堅穴住居跡が近接する。



第78図 RA037竪穴住居跡・出土遺物

＜検出状況＞ 表土（Ⅰ層）を除去した後のⅣ層上面において、一部焼土粒の混ざった黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は南西隅が直角、隅丸長方形を呈している。規模は2.50×1.92mを測る。

＜埋土＞ 9層に細分されるが、主体となるのは黒褐色シルトからなる1層と3層である。どちらにも焼土ブロックが含まれるが、3層の方が粘性が強い。2層は明赤褐色の焼土であるが、住居に伴うものではなく後年の耕作等によって入り込んだ可能性が高い。

＜壁・床＞ 壁は北西壁と北東壁が外傾して、南東壁と南西壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は南東壁36cm、北西壁32cm、南西壁36cm、北東壁27cmを測る。床面は平坦でよく締まっており、貼り床は確認されない。

＜柱穴・他の施設＞ 土坑1基と柱穴状土坑2基を検出した。1号土坑は北隅に位置し、平面形は円形を呈している。埋土は3層に細分されるが、各層とも粘性が強い粘土質土からなり、黄褐色土ブロックが含まれる。さらに1層には焼土ブロックが、2・3層には炭化物粒が混入する。P1・P2とも平面形は楕円形を呈している。

No.	1号土坑	P1	P2
直径cm	48×42	26×22	22×12
深さcm	33	51	42

＜カマド＞ 南東壁のやや南西側に位置している。本体部は崩壊し、袖部の一部が残っているだけである。袖部は芯材に土師器片を用い、褐色砂質シルトによって構築されている。燃焼部と考えられる部分に明確な焼上は見られず、炭化物粒がわずかに確認できる程度である。煙道部は割り貫き式で、長さ1.07mを測り、ほぼ水平に煙出し部に至る。煙出し部は径25×20cm、深さ35cmの円形の土坑が掘り込まれている。

＜遺物＞ 305はカマド袖部の芯材に転用されたロクロ不使用の土師器の壺である。口縁部はヨコナデ、体部外側はハケメ、内面がヘラナテ調査されている。

＜時期＞ 出土遺物が少なく、遺物から時期の特定はできないが、カマドの方向から判断して平安時代と思われる。

RA039竪穴住居跡（写真図版37）

＜位置＞ A調査区11R区の東側に位置する。本遺跡で検出された竪穴住居跡では唯一段丘の下側に位置する竪穴住居跡である。RG010と他遺跡が重複関係にあり、本遺構が切られていることから本遺構の方が古い。

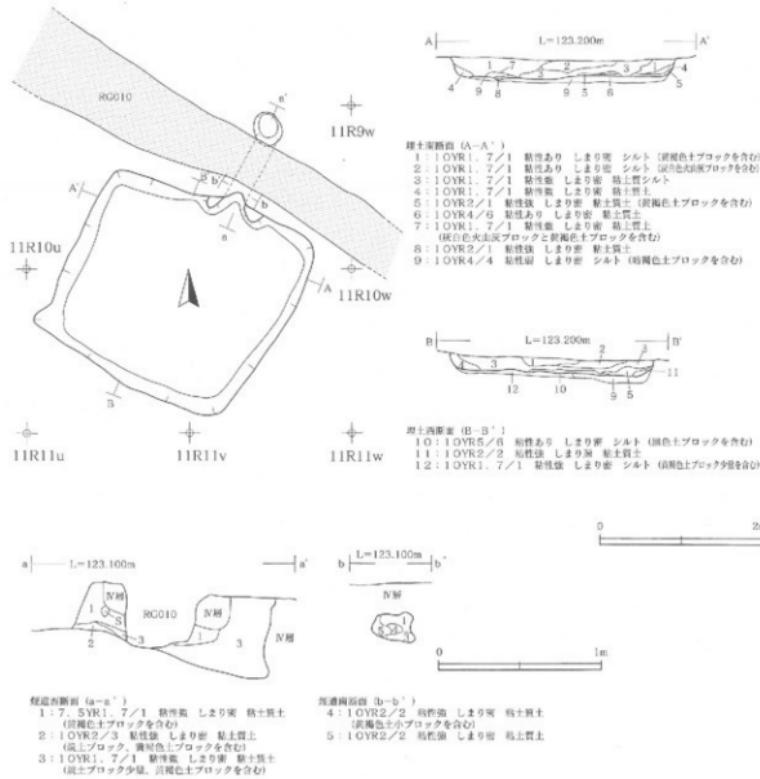
＜検出状況＞ 表土（Ⅰ層）を除去した後のⅡ層上面では確認されず、更にⅡ・Ⅲ層を除去したⅣ層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は2.75×2.43mを測る。

＜埋土＞ 12層に細分されるが、主体となるのは黒色シルトからなる1・2層と粘土質シルトからなる3層である。このうち1層には黄褐色土小ブロックが、2層には灰白色火山灰の小ブロックが混入する。9・10・12層は貼り床部分である。

＜壁・床＞ 壁はやや外傾気味に立ち上がっている。壁高は南東壁23cm、北西壁22cm、南西壁18cm、北東壁19cmを測る。床面は一部に凹凸も見られるが、ほぼ平坦でよく締まっている。貼り床は黒色シルト、黄褐色シルトによって施されている。

＜柱穴・他の施設＞ 柱穴、他の施設は確認されない。



第79図 RA039竪穴住居跡

＜カマド＞ 北東壁の中央付近に位置している。本体部は崩壊しており、袖部が僅かに確認できるのみである。袖部はIV層を削りだして構築されていたと思われる。燃焼部と思われる部分に明確な焼土は見られず、少量の炭化物粒が確認できただけである。煙道部はRG010溝跡に切られているが、削り貫き式で、長さ1.18mを測り、下りながら煙出し部に至る。煙出し部は径40×35cm、深さ59cmの円形の土坑が掘り込まれている。

＜遺物＞ 小破片のため図下には至らないが、ロクロ使用の土師器片が僅かに出土している。

＜時期＞ 土器片と埋土の特徴から平安時代と思われる。

RA040堅穴住居跡（写真図版38, 39, 83, 84）

＜位置＞ A区12R区東側に位置する。他の遺構との重複関係は確認されない。

＜検出状況＞ 表土（I層）を除去した後のII層上面では確認できず、更にII層を除去したIII層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円方形を呈しており、規模は3.26×3.10mを測る。

＜埋土＞ 6層に細分されるが、主体となるのは黒褐色シルトからなる1・2層と黒色シルトからなる4層である。1層には灰白色ブロックが混入し、4層には焼土粒、炭化物粒が少量含まれている。3層・5層・6層は色調が異なるが、共通して黄褐色土ブロックが混入する。南西側埋土から検出された炭化材はケヤキとの肉眼鑑定による結果を得ている。

＜壁・床＞ 壁はやや外傾気味に立ち上がっている。壁高は南東壁34cm、北西壁35cm、南西壁27cm、北東壁39cmを測る。床面は平坦でよく締まっている。貼り床は確認されない。

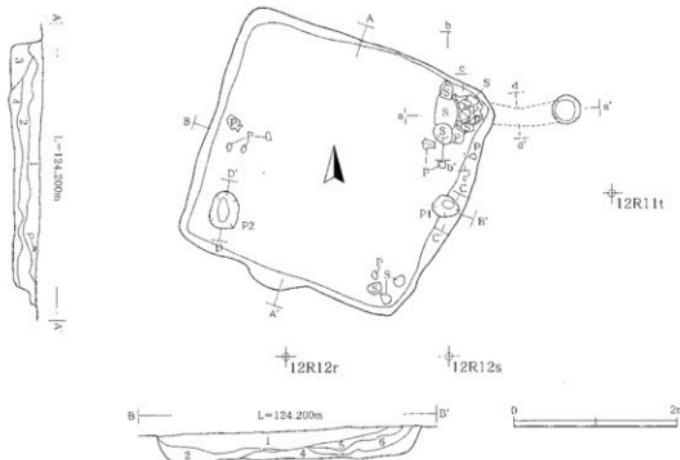
＜柱穴・他の施設＞ 柱穴状の小土坑を2基検出した。深さ、位置と検出数から判断して主柱穴にはならないと考えられる。P1の平面形は梢円形を呈しており、埋土は黒色粘土質土および粘土質シルトからなる。P2は南西隅付近に位置し平面形は長梢円形を呈している。埋土は黒色粘土質土からなり、黄褐色土ブロックが混入する。

No.	I号土坑	P1
直径cm	32×27	45×32
深さcm	41	7

＜カマド＞ 東隅に位置している。本体部は崩壊しており、芯材と天井材に用いられた礫が確認された。芯材は左側・右側ともに大小2個の亜円礫を用い、手前側に大きめの礫を、煙道側に小さめの礫を配している。天井材には長さ33cm、幅27cm、厚さ8cmの亜円礫を、支脚には長さ18cm、幅16cm、厚さ14cmの玄武岩を使用している。燃焼部と思われる部分に明確な焼土は確認されない。煙道部は割り貫き式で、長さ98cmを測る。やや左に湾曲し、緩やかに下りながら煙出し部に至る。煙出し部は径36×34cm、深さ40cmの円形の土坑が掘り込まれており、埋土から須恵器の大甕の破片が出土している。

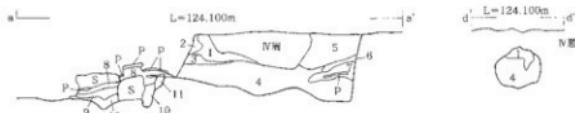
＜遺物＞ カマドおよび煙出し部、床面、埋土から土器類、須恵器が出土している。306～308はロクロ使用の土器の坏で、底部切り離しは回転糸切りである。307は体部外面に墨書きが認められる。309・310はロクロ使用の高台付坏である。309の内面はヘラミガキ調整されるが、黒色処理されない数少ない土器である。311は煙出し部から出土したロクロ不使用の上部器の甕である。体部外面は斜め下方向へハラケズリ調整されている。外底面にはハケメと思われる調整痕が見られる。312も煙出し部から出土した須恵器の大甕の口縁～体部上半で、口縁～頸部はロクロ成形されている。体部は外面にタタキメ、内面にアテ具痕が確認できる。313はカマドの埋土上位から出土した須恵器の大甕の体部で、312と同一個体と考えられ、同様のタタキメとアテ具痕が残っている。314はカマド、315は床面、316は埋土下位から出土した須恵器の大甕である。314・315は体部で、外面にタタキメ、内面にアテ具痕が確認できる。316は頸部～体部上半で、頸部外面がハラナテ調整、体部外面にはタタキメ、内面はハラナテ調整痕が残っている。

＜時期＞ 出土した遺物の特徴から平安時代（9世紀後葉～10世紀前葉）と考えられる。

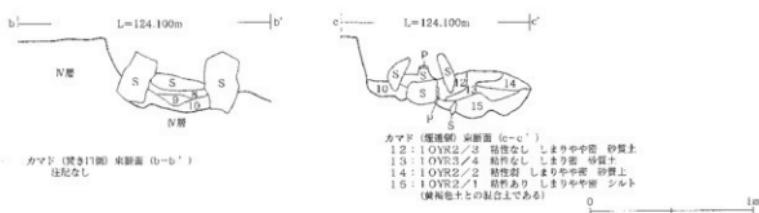


壁上実断面 (A-A')
 1: 1 OYR2/3 粘性あり しまり密 シルト
 (黄褐色火成ブロックを含む)
 2: 1 OYR1/2 粘性あり しまり密 黏土質
 3: 1 OYR3/1 粘性あり しまり密 シルト
 (黄褐色土ブロックを含む)
 4: 1 OYR2/1 粘性強 しまり密 シルト
 (粘土、炭化物質を少量含む)

壁上断面 (B-B')
 5: 1 OYR3/3 粘性弱 しまり密 シルト
 (黄褐色土ブロックを含む)
 6: 1 OYR1 7/1 粘性あり しまり密 シルト
 (黄褐色土ブロックを少量含む)



側面実断面 (a-a')
 1: 1 OYR1 7/1 粘性強 しまり密 シルト (黄褐色土ブロックを含む)
 2: 1 OYR1/2 粘性弱 しまり密 黏土質
 3: 1 SYR4/4 粘性なし しまり密 砂質シルト
 4: 7: 1 SYR2/1 粘性弱 しまり密 砂質シルト
 5: 1 OYR1 7/1 粘性強 しまり密 砂質シルト
 6: 1 OYR3/4 粘性なし しまり密 砂質シルト
 7: 1 OYR2/1 粘性強 しまり密 シルト
 8: 1 OYR1/2 粘性強 しまり密 砂質シルト
 9: 7: 5SYR2/3 粘性強 しまり密 砂質シルト
 10: 1 OYR2/1 粘性ややあり しまり密 砂質シルト (黄褐色土ブロックを含む)
 11: 1 OYR1 7/1 粘性あり しまりやや密 砂質シルト (黄褐色土ブロックを含む)



第80図 RA040竪穴住居跡 (1)

L=124.000m

C—C'



L=123.800m

D—D'



P2断面 (D—D')

1: 1 OYR1. 7/1 磨性あり しまり密 粘土質土
(黄褐色土ブロックを少量含む)

2m

0

カマド・床上



306

床上



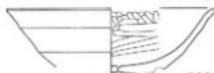
307

埋土



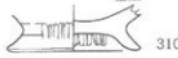
308

カマド



309

埋土



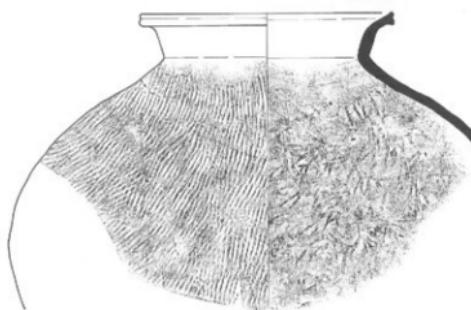
310

煙出し



311

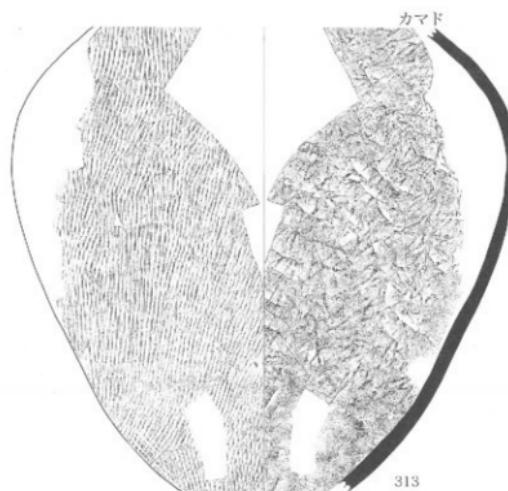
煙出し



306~311はS=1/3
312はS=1/4

312

第81図 RA040竪穴住居跡 (2) · 出土遺物 (1)



313



カマド

314



床上

315



埋土下位

316

S=1/3

第82図 RA040竪穴住居跡出土遺物 (2)

3. 土坑

土坑はA調査区から38基、B調査区から9基の合計47基検出された。時期は、A調査区が奈良時代・平安時代・時期不明に、B調査区が備文時代・時期不明に大別される。ここでは遺構番号順に記述し、各土坑の詳細については第3・4表に一括して掲載した。

R D017土坑（第83, 91図 写真図版40, 85）

＜位置＞ A調査区の12S区や北西寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られない。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。

＜平面形・規模＞ 平面形は橢円形を呈し、規模は開口部で165×69cm、深さ7cmを測る。

＜埋土＞ 黒色シルトの单層からなる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっており、床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 南東端付近からロクロ使用の須恵器の壺317が出土しており、平安時代の墓塚と思われる。

R D018土坑（第83図 写真図版40）

＜位置＞ A調査区の12R区北西寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られない。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。

＜平面形・規模＞ 平面形は橢丸長方形を呈し、規模は開口部で232×98cm、深さ17cmを測る。

＜埋土＞ 3層に細分され、シルトおよびシルト質土からなる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっており、床面には凹凸がある。

＜遺物・時期＞ 出土遺物がなく遺物から時期の特定はできないが、形状がR D017土坑に類似しており、平安時代の墓塚と思われる。

R D019土坑（第83, 91図 写真図版40, 85）

＜位置＞ A調査区の12S区や西寄りに位置する。R D020土坑と重複関係にあり、R D020土坑を切っていることから、本遺構の方が新しい。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈し、規模は開口部で186×(180)cm、深さ75cmを測る。

＜埋土＞ 4層に細分され、1・2層は黒色シルト、3・4層は黒色土と地山との混合土からなる。

＜壁・床＞ 壁は床面よりやや外傾し、緩やかに立ち上がっている。床面は平坦で、砂礫層まで掘り込まれている。

＜遺物・時期＞ 埋土の上～中位よりロクロ不使用の土師器の壺の口縁部片318が1点出土した。出土した遺物はこれ1点のみで、他から流れ込んだ可能性も高く、時期については特定するに至らない。

R D020土坑（第83図 写真図版41）

＜位置＞ A調査区の12S区や西寄りに位置する。前述のR D019土坑と重複関係にあり、R D019土坑に切られていることから本遺構の方が古い。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

<平面形・規模> 隅丸方形を呈していると思われるが、一部R D019土坑に切られるため全容は不明である。確認された規模は開口部で215×(218)cm、深さ20cmを測る。

<埋土> 黒褐色シルトの単層からなり、黄褐色土ブロックと径2～3cmの小礫を含んでいる。

<壁・床> 壁は外傾して立ち上がりっている。床面は平坦で、砂礫層まで掘り込まれている。

<遺物・時期> 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D021土坑 (第83, 91図 写真図版41, 85)

<位置> A調査区の12S区北西寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北東側約1mにはR D018土坑が隣接する。

<検出状況> IV層上面において暗褐色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。

<平面形・規模> 平面形は円形を呈し、規模は開口部で69×67cm、深さ13cmを測る。

<埋土> 暗褐色シルトの単層からなり、黄褐色土小ブロックが含まれる。

<壁・床> 壁は外傾して立ち上がりており、床面には凹凸が見られる。

<遺物・時期> 球状鉄製品319と獸骨の小片が出土している。鉄製品の状況から判断して、近代以降と思われる。

R D022土坑 (第84図 写真図版41)

<位置> A調査区の12S区や北西寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北西側約2mにR D018土坑が、南東側約2.5mにR D017土坑が隣接する。

<検出状況> IV層上面において黒色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。

<平面形・規模> 平面形は長楕円形気味の不整形を呈し、規模は開口部で86×33cm、深さ18cmを測る。

<埋土> 2層に細分されるが、主体は黒色シルトの1層で、径5mm程の炭化物粒が含まれる。

<壁・床> 壁は外傾して立ち上がりっている。床面は平坦であるが、北側が若干低くなっている。

<遺物・時期> 獣骨の小片が出土しているが、詳細は不明である。R D021土坑からも獸骨の小片が出土しており、同様に近代以降と思われる。

R D023土坑 (第84図 写真図版41)

<位置> A調査区の12S区北西寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、東側にR D018土坑、南東側にR D021土坑が隣接する。

<検出状況> IV層上面において黒色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。

<平面形・規模> 平面形は不整形を呈し、規模は開口部で112×62cm、深さ17cmを測る。

<埋土> 黑褐色シルトの1層と褐色シルトの2層からなる。

<壁・床> 壁は外傾して立ち上がりている。床面には凹凸が見られる。

<遺物・時期> 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D024土坑 (第84図 写真図版42)

<位置> A調査区の12S区や北寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南西側にはR D026土坑が隣接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。
＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形を呈し、規模は開口部で163×75cm、深さ22cmを測る。
＜埋土＞ 黒褐色・黒色シルトによって3層に細分される。1層には褐色土が2層には褐色砂質土が混入する。
＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦である。
＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D025土坑（第84図 写真図版42）

＜位置＞ A調査区の12S区北寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北側にはRG013溝跡が隣接する。
＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。
＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形を呈し、規模は開口部で72×52cm、深さ31cmを測る。
＜埋土＞ 黒褐色土の単層からなり、径約1cmの小砾を含んでいる。
＜壁・床＞ 壁はやや外傾気味に立ち上がっている。床面は平坦である。
＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D026土坑（第84図 写真図版42）

＜位置＞ A調査区の12S区やや北寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北東側にRD024土坑が隣接する。
＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。
＜平面形・規模＞ 平面形は円形を呈し、規模は開口部で68×67cm、深さ23cmを測る。
＜埋土＞ 黒褐色シルトの1層と褐色砂質シルトの2層からなる。1層には暗褐色土が、2層下部には径約1cmの小砾が含まれている。
＜壁・床＞ 壁はやや外傾気味に立ち上がりしている。床面は平坦である。
＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D027土坑（第84図 写真図版42）

＜位置＞ A調査区の12S区やや西寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南西側約2mにはRA015堅穴住居跡が、西側約1.5mにはRG012溝跡が近接する。
＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。
＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈し、規模は開口部で88×73cm、深さ20cmを測る。
＜埋土＞ 5層に細分されるが、主体は黒色シルトの2層である。
＜壁・床＞ 壁はやや外傾して緩やかに立ち上がりしている。床面は平坦である。
＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D028土坑（第84図 写真図版43）

＜位置＞ A調査区の12S区西側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、東側約3mにRA015堅穴住居跡およびRG012溝跡が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形を呈し、規模は開口部で208×178cm、深さ44cmを測る。

＜埋土＞ 5層に細分される。1層～3層は黒色粘土質土・粘土質シルト、4～5層は暗褐色粘土質シルトからなる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦で砂層となる。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D029土坑 (第83図 写真図版43)

＜位置＞ A調査区の12S区や西側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南側にはR D019・R D020土坑が隣接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形を呈し、規模は開口部で80×75cm、深さ23cmを測る。

＜埋土＞ 黒褐色シルトの単層からなり、径3～5cmの小礫と黄褐色土ブロックを含んでいる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D030土坑 (第85, 91図 写真図版43, 85)

＜位置＞ A調査区の11Q区西寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南東側約6mにRA024竪穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は開口部で160×105cm、深さ17cmを測る。

＜埋土＞ 5層に細分され、主体となるのは黒色粘土質土の1層である。中位には暗褐色土の焼上が含まれる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は西側は平坦であるが、東側は凹凸がある。

＜遺物・時期＞ 埋土からロクロ不使用で、ヘラナデ調整された土師器の裏の底片320が出土しており、奈良時代の墓窓と思われる。

R D031土坑 (第85, 91図 写真図版43, 85)

＜位置＞ A調査区の11Q区北側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北側にRD032土坑が隣接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形を呈し、規模は開口部で148×103cm、深さ33cmを測る。

＜埋土＞ 4層に細分される。主体となるのは黒色シルトで径約2cmの小礫を含む1層、黒褐色砂質シルトの2層、黒色砂質土の4層である。

＜壁・床＞ 壁は西側がほぼ垂直に立ち上がるのに対して、東側は外傾し、緩やかに立ち上がっている。床面は平坦であるが、砂礫層まで掘り込まれている。

＜遺物・時期＞ 内面がヘラミガキ後に黒色処理されたロクロ使用の土師器の杯の体～底部321と、ロクロ成形された須恵器の長颈瓶の口縁部322が埋土上位から出土している。この長颈瓶の口縁部はRA019竪穴住居

跡の貼り床から出土した破片と同一個体のものである。これらの出土遺物から判断して本遺構は平安時代に属すると思われる。

R D032土坑（第85図 写真図版44）

＜位置＞ A調査区の11Q区北側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南側に前述のR D031土坑が隣接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈し、規模は開口部で157×140cm、深さ37cmを測る。

＜埋土＞ 3層に細分され、黒色砂質シルトの1層、黒色シルトで径10cm程の砾と黄褐色土ブロックを含む2層、黒色砂質シルトで黄褐色土ブロックを含む3層からなる。

＜壁・床＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、R D031土坑と同様に砂礫層まで掘り込まれている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はないが、隣接するR D031土坑と規模等が似ることから平安時代に属すると思われる。

R D033土坑（第85, 91図 写真図版44, 85）

＜位置＞ A調査区の基準点1の南側で、12Q区と12R区にわたって位置している。他の遺構との重複関係は見られず、西側約1mにR G015溝跡が近接する。

＜検出状況＞ II層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は開口部で225×158cm、深さ58cmを測る。

＜埋土＞ 8層に細分されるが、主体となるのは1～3層および6層である。1層は黒褐色シルトで粘性がなく、黄褐色土ブロックと微量の炭化物粒を含んでいる。2層は粘性の強い黒色粘土質土からなり、黄褐色土ブロックを斑に含んでいる。3層は粘性の強い黒褐色粘土質土からなる。6層は粘性の強い黒褐色粘土質土からなり、黄褐色砂質土が混入する。

＜壁・床＞ 壁は、東側がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、西側は外傾し緩やかに立ち上がっている。床面には凹凸が見られる。

＜遺物・時期＞ 埋土からクロコロ不使用の土師器の甕の頭～体部323と底部324が出土している。出土したこれらの遺物から判断して奈良時代の墓跡と思われる。

R D034土坑（第85図 写真図版44）

＜位置＞ A調査区の11R区南側、12R区との境界近くに位置している。他の遺構との重複関係は見られず、西側約5mにRA028竪穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ II層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈し、規模は開口部で93×70cm、深さ8cmを測る。

＜埋土＞ 2層に分けられるが、主体は黒色シルトの1層で、黄褐色砂質土がブロック状に含まれる。

＜壁・床＞ 壁はやや外傾して立ち上がっている。床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D035土坑（第85図 写真図版44）

＜位置＞ A調査区の11R区南東側に位置する。他の遺構と重複関係は見られず、北東側約1mにRA031壁穴住居跡、南側約1mにRD036土坑が隣接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形を呈し、規模は開口部で160×95cm、深さ48cmを測る。

＜埋土＞ 3層に細分されるが、主体は黒色シルトで下部に黄褐色土が斑状に混入する1層と黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土からなる2層である。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面には凹凸が見られる。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D036土坑（第85図 写真図版45）

＜位置＞ A調査区の11R区と12R区の境界東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、東側約1mにRA010壁穴住居跡（盛岡市教委調査済み）、北側約1mにRD035土坑が隣接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認したが、耕作等によりかなり削平されている。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢丸長方形を呈し、規模は開口部で230×78cm、深さ37cmを測る。

＜埋土＞ 3層に分けられる。1層は黒色シルトで径約5mmの小砾を含み、2層は黒褐色シルトで明黄褐色土ブロックが混入する。3層は粘性の強い黒色シルトからなっている。

＜壁・床＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で砂層まで掘り込まれている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく時期は不明であるが、形状から判断して墓壙の可能性も考えられる。

R D037土坑（第86図 写真図版45）

＜位置＞ A調査区の11R区中央に位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、南北側約1mにRA033壁穴住居跡が隣接する。また、北側約1.5mで段丘縁辺部に至る。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は凹形を呈し、規模は開口部で134×131cm、深さ25cmを測る。

＜埋土＞ 8層に細分されるが、1・2層および8層は黒褐色土、埋土の中位から下位の3～7層は色調の異なる焼土からなる。床面直上の7層が最も赤褐色をしており、よく締まっていることから現地性の焼土と考えられる。微量の炭化物粒は見られるものの他に特徴的な遺物等は見られない。

＜壁・床＞ 壁は南側はほぼ垂直に立ち上がるが、北側はやや外傾して立ち上がっている。床面は平坦で、砂礫層まで掘り込まれている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D038土坑（第86図 写真図版45）

＜位置＞ A調査区の11R区南西側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南北側2mにRA027壁穴住居跡、東側4mにRA028壁穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ II層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢丸長方形を呈し、規模は開口部で204×103cm、深さ42cmを測る。

＜埋土＞ 6層に細分される。1・2層、4・5層は黒色粘土質土およびシルトからなり、2層・5層には黄

褐色土ブロックが混入する。3層・6層は黒褐色シルトで、6層に黄褐色土ブロックが含まれる。

〈壁・床〉 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦ではなく凹凸が目立つ。

〈遺物・時期〉 出土遺物はなく、時期は不詳である。

RD039土坑（第86, 91, 92図 写真図版45, 85）

〈位置〉 A調査区の11R区西側に位置する。RG016溝跡と重複関係にあり、RG016溝跡に切られることから本遺構の方が古い。

〈検出状況〉 IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

〈平面形・規模〉 北西隅が岩下舌状に張り出しが、隅丸長方形を呈し、規模は開口部で219×167cm、深さ38cmを測る。

〈埋土〉 11層に細分される。主体は黒褐色シルトおよび砂質シルトからなる1層・3~5層、および暗褐色砂質シルトからなる11層である。1層・3~5層には割合が異なるものの黄褐色土ブロックが混入し、4層には少量の炭化物粒も含まれる。

〈壁・床〉 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦である。

〈遺物・時期〉 墓土からロクロ使用で内面へラミガキ調整後黒色処理された土師器の环の口縁部325と、ロクロ使用の土師器の高台付环326、さらにロクロ不使用で口縁部がヨコナデ、体部外面がハケメ、内面がヘラナデ調整された土師器の壺327、同じく土師器の壺で口縁部ヨコナデ、体部外面がヘラナデ、内面がハケメ調整された328が出土している。これらの遺物から平安時代に属すると思われる。

RD040土坑（第87, 92図 写真図版46, 85）

〈位置〉 A調査区の11R区北西寄りで、段丘縁辺の斜面上に位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、南東側約7mにRA034・RA035堅穴住居跡が近接する。

〈検出状況〉 IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

〈平面形・規模〉 平面形は不整形を呈し、規模は開口部で313×127cm、深さ51cmを測る。

〈埋土〉 31層に細分されるが、人為堆積の様相を呈している。埋土中位の18~19層・26層は炭化物粒を含む焼土で、土師器片も含まれている。26層はよく焼まっており、ある程度下の層が堆積した後に形成された現地性の施土と考えられる。土師器片の他に特徴的な遺物等は見られない。

〈壁・床〉 南側の壁はほぼ垂直に立ち上がり、北および西側の壁は外傾して立ち上がっている。東側の壁は立ち上がらず、段丘の縁に至る。床面は平坦ではなく凹凸が激しい。

〈遺物・時期〉 墓土中位から、口縁部ヨコナデ、体部ハケメ調整されたロクロ不使用の上部器の長胴形の壺329が出土している。出土した遺物から奈良時代に属すると思われる。

RD041土坑（第86, 92図 写真図版46, 85, 86）

〈位置〉 A調査区の11R区北西側で、段丘の下側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、周囲には柱穴状小土坑が僅かに位置している。柱穴状小土坑以外では前述のRD040土坑が最も近い遺構である。

〈検出状況〉 IV層上面において黑色土の広がりとして確認した。

〈平面形・規模〉 平面形は円形を呈し、規模は開口部で126×124cm、深さ37cmを測る。

〈埋土〉 10層に細分されるが、主体は1層・3~5層、9層である。1層は黒色粘土質土からなり、炭化物

粒を含んでいる。3層は極暗褐色シルトで焼土ブロックと炭化物粒が含まれる。4・5層は粘性の強い黒褐色粘土質土で、5層には炭化物粒が混入する。9層は褐色砂質シルトで黒色粘土質土が斑状に含まれ、炭化物粒も混入する。

＜壁・床＞ 東側の壁は外傾して立ち上がっているが、西側は一度オーバーハングしてから垂直気味に立ち上がっている。床面は平坦ではなく、凹凸が激しい。

＜遺物・時期＞ 埋上中からロクロ不使用の土師器の破片が出土している。330は口縁部ヨコナデ、体部がハケメ調整され、輪積み痕が明瞭に残る甕、331～334は全てロクロ不使用の土師器の甕の底部で、外底面はハケメやヘラナデ調整されている。これらの出土した遺物から奈良時代に属すると思われる。

R D042土坑（第87図 写真図版46）

＜位置＞ A調査区の11R区や東より、段丘縁辺部の斜面下側に位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、南北西側約4mにR A032窓穴住居跡、北東側約5.5mにR A039窓穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は横円形を呈し、規模は開口部で294×39cm、深さ45cmを測る。

＜埋土＞ 3層に細分される。1層は粘性の強い黒色粘土質土、2層は黄褐色粘土質土、3層は黒褐色の砂疊である。

＜壁・床＞ 東西の壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、南北の壁はややオーバーハングして立ち上がっている。床面はほぼ平坦であるが、砂疊層まで削り込まれている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はないが、その形状から判断して弥生時代の陥し穴と思われる。

R D043土坑（第87図 写真図版46）

＜位置＞ A調査区の12R区北東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、東側約1.5mにRD044土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色・黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形を呈し、規模は開口部で100×92cm、深さ18cmを測る。

＜埋土＞ 2層に分けられる。1層は黒色土で、上位に灰白色火山灰ブロックが混入する。2層は黒褐色土で褐色土ブロックが含まれている。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床は凹凸があり、平坦ではない。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D044土坑（第87図 写真図版47）

＜位置＞ A調査区の12R区北東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、西側約1.5mに前述のRD043土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は横円形を呈し、規模は開口部で75×55cm、深さ40cmを測る。

＜埋土＞ 黒褐色土の単層からなり、下部に褐色土ブロックが少量混入する。

＜壁・床＞ 西壁はやや外傾して立ち上がるが、他はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D045土坑（第87図 写真図版47）

＜位置＞ A調査区の12R区北東寄りに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、南東側約1mにR D053土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は、擾乱により北側を一部壊されているが、梢円形を呈していると思われる。規模は開口部で58×55cm、深さ47cmを測る。

＜埋土＞ 3層に分けられるが、いずれも黒褐色土からなり黄褐色土ブロックの混入状況によって細分される。

＜壁・床＞ 壁はやや外傾して立ち上がっている。床面は丸みを帯びている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D046土坑（第88図 写真図版47）

＜位置＞ A調査区の12R区や東寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、南西側約1.5mにR A040堅穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形を呈し、規模は開口部で67×50cm、深さ26cmを測る。

＜埋土＞ 2層に分けられる。1層は粘性の強い黒色粘土質上、2層は黒褐色シルトからなっている。

＜壁・床＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は凹凸もなく平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D047土坑（第88図 写真図版47）

＜位置＞ A調査区の12R区の東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、西側約1mにR D051土坑、東側約1mにR D052土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形を呈しており、規模は開口部で170×68cm、深さ43cmを測る。

＜埋土＞ 4層に細分されるが、主体となるのは黒褐色土で暗褐色土が粒状に混入する1層と、同じく黒褐色土で褐色土が少量含まれる3層である。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は北側が浅くなり1段高くなるが、ほぼ平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D048土坑（第88図 写真図版48）

＜位置＞ A調査区の12R区東寄りに位置する。他の遺構と重複関係は見られないが、北側約1.5mにR A040堅穴住居跡が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において暗褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形を呈し、規模は開口部で105×76cm、深さ24cmを測る。

＜埋土＞ 2層に分けられる。1層は暗褐色土上、2層は黒褐色土からなり、共に褐色土が混入する。

＜壁・床＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦であるが、南側が1段低く掘り込まれている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D049土坑（第88図 写真図版48）

＜位置＞ A調査区の12R区南東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、南東側約2.5mにR D050土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形を呈し、規模は開口部で150×97cm、深さ34cmを測る。

＜埋土＞ 6層に細分される。大部分が黒褐色土からなるが、にぶい黄褐色土や褐色土の混入具合によつて細分される。4層のみが黒色土からなるが、同様ににぶい黄褐色土が含まれる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は凹凸が見られる。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D050土坑（第88図 写真図版48）

＜位置＞ A調査区の12R区南東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北西側約2.5mに前述のR D049土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は、一部が調査区域外へ延びるため全容は不明であるが、楕円形を呈していると思われる。規模は現存する開口部で69×58cm、深さ12cmを測る。

＜埋土＞ 黒褐色土の単層からなり、褐色土が少量混入する。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がる。床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D051土坑（第88図 写真図版48）

＜位置＞ A調査区の12R区東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、東側約1mに既述のR D047土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形で、規模は開口部で157×80cm、深さ33cmを測る。

＜埋土＞ 黒褐色土の単層からなり、下部にはにぶい黄褐色土が少量含まれる。

＜壁・床＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D052土坑（第88図 写真図版49）

＜位置＞ A調査区の12R区東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、西側約1mに既述のR D047土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において暗褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で70×55cm、深さ38cmを測る。

＜埋土＞ 2層に分けられる。1層は暗褐色土に褐色土ブロックが、2層はにぶい黄褐色土に黒褐色土と共に少量混入する。

＜壁・床＞ 壁はやや外傾して立ち上がっている。床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

RD053土坑（第88図 写真図版49）

＜位置＞ A調査区の12R区北東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南東側約3.5mに既述のRD046土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形を呈し、規模は開口部で90×57cm、深さ35cmを測る。

＜埋土＞ 4層に細分されるが、主体となるのは粘土質土からなる1・2層と4層である。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

RD054土坑（第89図 写真図版49）

＜位置＞ A調査区の12R区南東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南西側約3mに既述のRD050土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形を呈し、規模は開口部で60×47cm、深さ28cmを測る。

＜埋土＞ 2層に分けられる。どちらも黒色粘土質土からなるが、2層の方が黒色が強くなる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は丸みを帯びている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

RD055土坑（第89図 写真図版49）

＜位置＞ B調査区の10M区南東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北西側約3mにRD059土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は溝状を呈し、規模は開口部で385×73cm、深さ31cmを測る。

＜埋土＞ 3層に分けられるが、主体となるのは黒色シルトの1層と、黒褐色粘土質土からなる3層である。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦ではなく凹凸が見られる。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はないが、形状から判断して縄文時代の陥し穴の可能性が高い。

RD056土坑（第89図 写真図版50）

＜位置＞ B調査区の11M区南東側に位置する。他の遺構と重複関係は見られず、南東側約1.5mにRD057土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は溝状を呈し、規模は開口部で409×130cm、深さ65cmを測る。

＜埋土＞ 9層に細分されるが、主体となるのは黒色シルトの1層と褐色砂質シルトの2層、および黒褐色粘土質土の9層である。断面中央部付近から堆積した様子が窺えることから、人为堆積と思われる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面には凹凸が見られる。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はない。形状から判断して縄文時代の陥し穴の可能性も考えられる。

R D057土坑（第89図 写真図版50）

＜位置＞ B調査区の11M区南東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北西側約1.5mに既述のR D056土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形を呈し、規模は129×128cm、深さ73cmを測る。

＜埋土＞ 2層に分けられる。2層とも粘性の強い黒色粘土質土からなるが、黄褐色土ブロックの含まれる割合によって細分される。

＜壁・床＞ 壁はやや外傾して立ち上がる。床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D058土坑（第89図 写真図版50）

＜位置＞ B調査区の11M区南西側に位置する。他の遺構との重複関係はみられず、周辺に近接する遺構もない。最も近い遺構は北東側約15mに位置するR D060土坑である。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は長径円形を呈し、規模は開口部で293×104cm、深さ15cmを測る。

＜埋土＞ 5層に細分される。主体は粘性の強い黒色粘土質土からなる1層である。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦で凹凸は見られない。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D059土坑（第90図 写真図版50）

＜位置＞ B調査区の10M区南東側に位置する。他の遺構と重複関係は見られず、南東側約3mに既述のR D055土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形を呈し、規模は288×154cm、深さ52cmを測る。

＜埋土＞ 8層に細分される。主体となるのは径3mm程の炭化物粒と少量の黄褐色土ブロックを含む黒褐色シルトの1層と黒色シルトの2層である。

＜壁・床＞ 壁はかなり外傾して立ち上がっている。床面は凹凸があり、平坦な部分はほとんどない。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

R D060土坑（第90, 92図 写真図版51, 86）

＜位置＞ B調査区の11M区や南東寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、東側約3.5mに既述のR D057土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形を呈し、規模は131×118cm、深さ22cmを測る。

＜埋土＞ 3層に分けられる。主体となるのは粘性の強い黒色粘土質土からなる1層である。

＜壁・床＞ 壁は外傾して緩やかに立ち上がっている。床面は平坦である。

＜遺物・時期＞ 埋土下位より石錐1点335が出土している。川土した遺物より縄文時代に属するとと思われる。

RD061土坑（第90図 写真図版51）

＜位置＞ B調査区の11M区南東側に位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北西側約7mに前述のRD060土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は溝状を呈し、規模は305×113cm、深さ75cmを測る。

＜埋土＞ 3層に分けられる。主体となるのは黒色粘土質土からなる1・2層で、2層には黄褐色土ブロックが含まれる。

＜壁・床＞ 壁はほぼ垂直に立ち上がるが途中から外傾する。床面は一部に凹凸が見られるがほぼ平坦である。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明であるが縄文時代の墳丘穴の可能性もある。

RD062土坑（第90図 写真図版51）

＜位置＞ B調査区の11M区やや東寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、北東側約3mにRD063土坑が近接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は長楕円形を呈し、規模は開口部で270×70cm、深さ64cmを測る。

＜埋土＞ 6層に割分される。主体となるのは粘性の強い黒色粘土質土の2層・4層・6層である。

＜壁・床＞ 壁は北西側はほぼ垂直に立ち上がるが、南東側は外傾して立ち上がっている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。

RD063土坑（第90図 写真図版51）

＜位置＞ B調査区の11M区やや東寄りに位置する。他の遺構との重複関係は見られず、南西側約3mにRD062土坑が近接する。

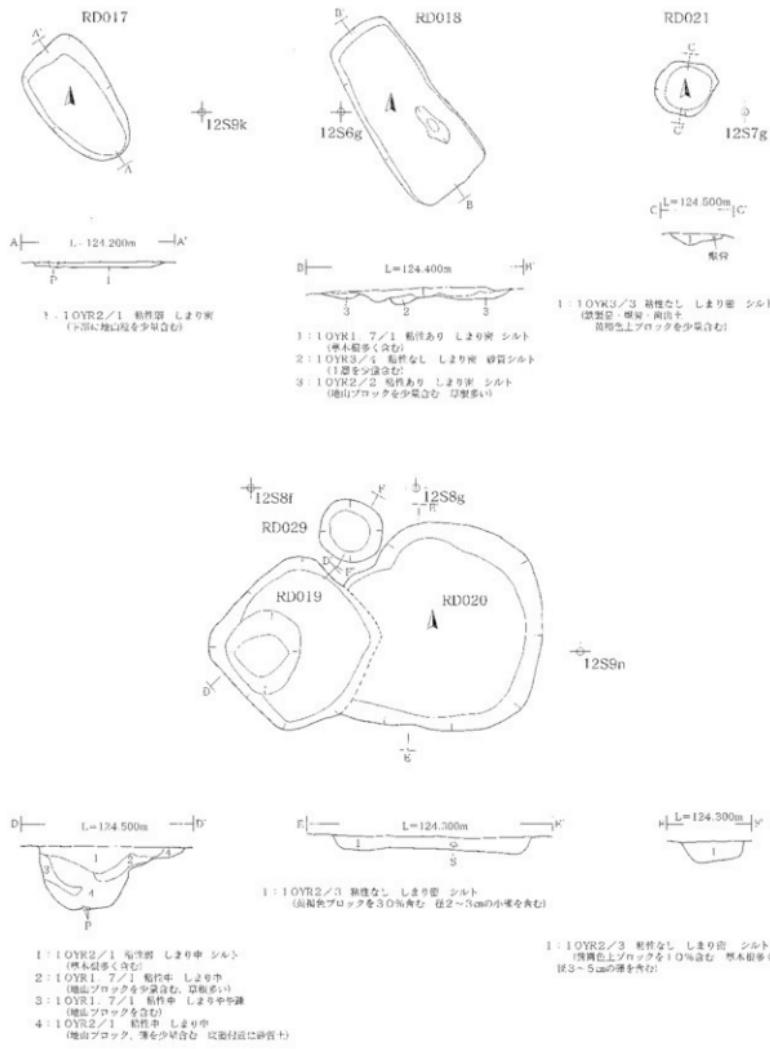
＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形を呈し、規模は113×90cm、深さ54cmを測る。

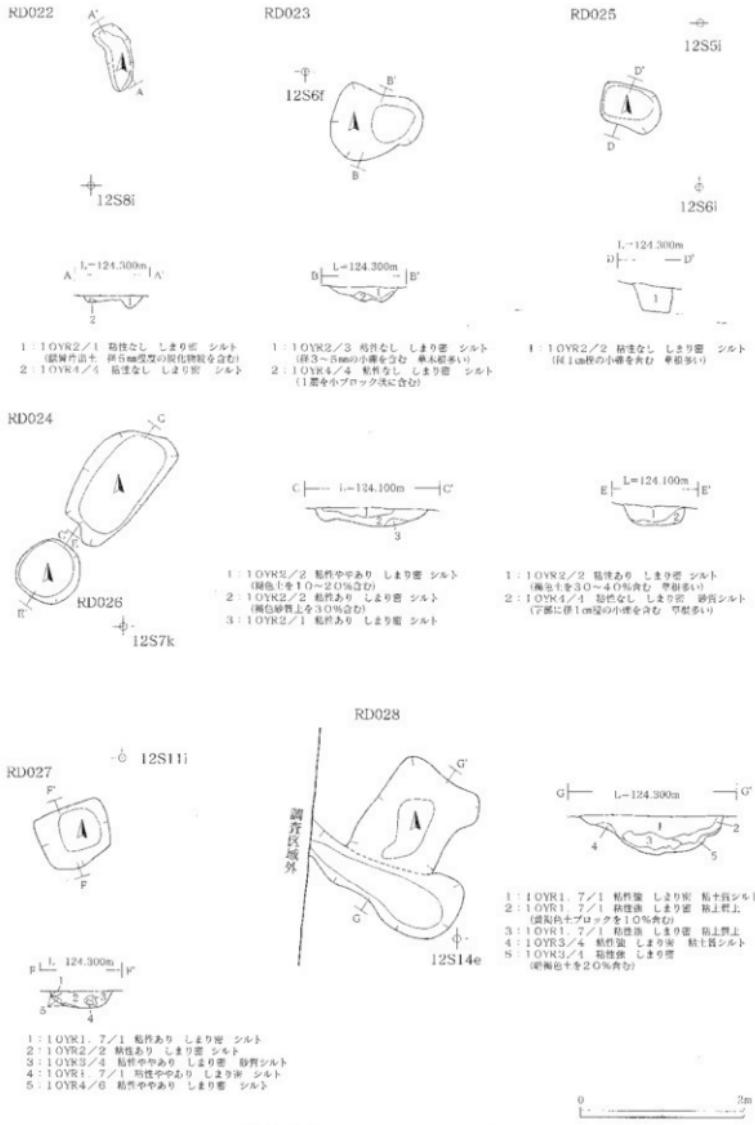
＜埋土＞ 3層に分けられる。1層は粘性の強い黒褐色土、2層は黒褐色土とにぶい黄褐色土の混合土、3層は黒褐色粘土からなる。

＜壁・床＞ 壁は東側がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、西側はやや外傾し、緩やかに立ち上がっている。

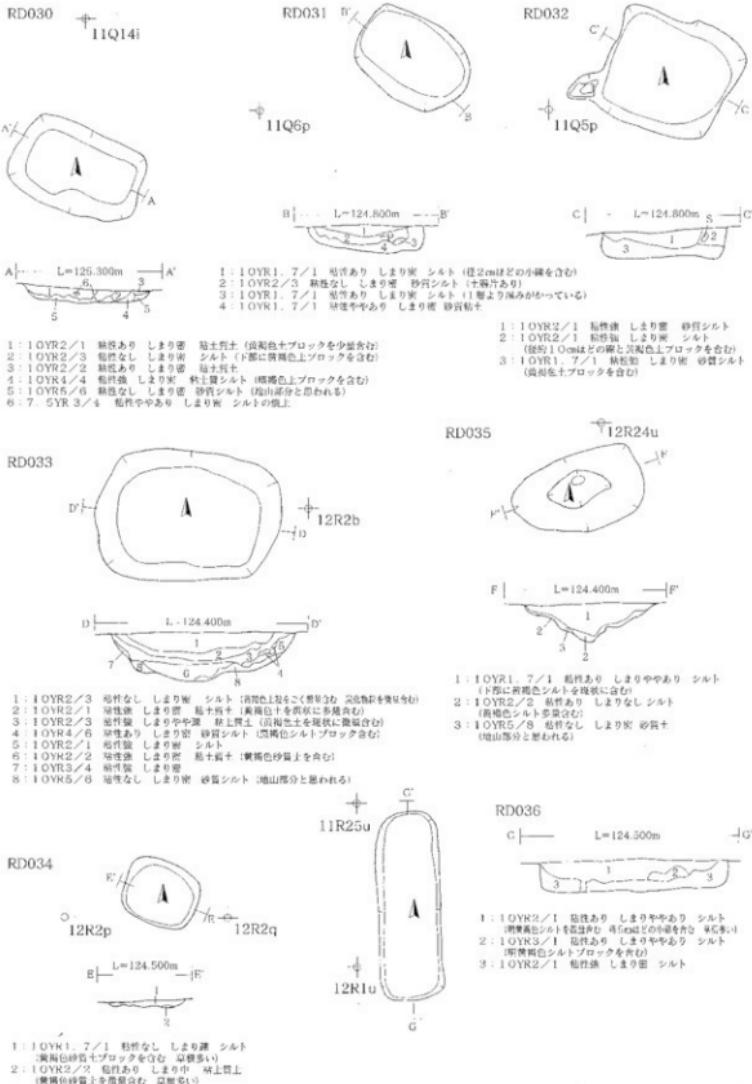
＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期は不明である。



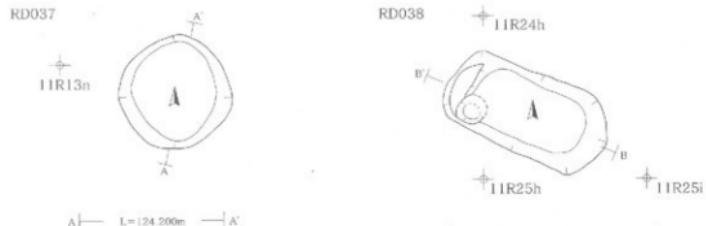
第83図 RD017~021・029土坑



第84図 RD022~028土坑

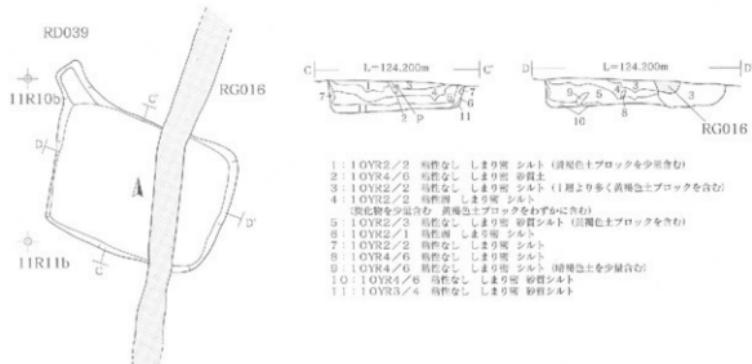


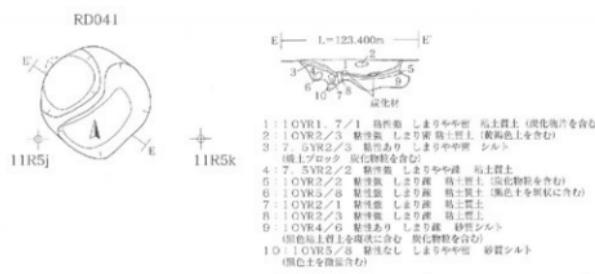
第85図 RD030~036土坑



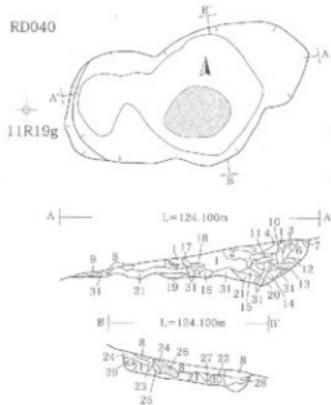
- 1) 1YQRZ/2_ 順性なし さとう 順ルート
(高耐候性の上塗、化粧剤を含む)
2) 1YQRZ/1_ 順性あり さとう 順化粧剤仕様ブロックを含む)
3) 5_VMR/1_ 順性なし しまりや 静鉛の燃性 (黒鉛シルトを含む)
4) 1YQRZ/1_ 順性なし さとう 高化粧剤仕様混合合
(明色の内装材を含む)
5) 1YQRZ/1_ 順性なし さとう 順ルート
(明色の内装材を含む)
6) 1YQRZ/2_ 順性なし さとう 順の底塗
(化粧剤仕様上塗を含む)
7) 5YRZ/3_ 順性なし さとう 鋼の底塗 (化粧剤を含む)
8) 1YQRZ/2_3_ 順性強 しまりや 順の底塗
(底塗～2mmの混合合)
化粧剤を含むが

- 1: CYR1. 7/1 慣性あり しまる碌 猿土貴士
 - 2: CYR2/1 慣性あり しまり街 シルト
(黒闘牛バップを含む)
 - 3: CYR2/3 慣性なし しまり街 シルト
 - 4: CYR1. 7/1 慣性なし しまる碌 猿土貴士
 - 5: CYR1. 7/1 慣性あり しまる碌 猿土貴士
(黒闘牛バップを含む)
 - 6: CYR2/2 慣性あり しまり街 シルト
(黒闘牛バップを含む)

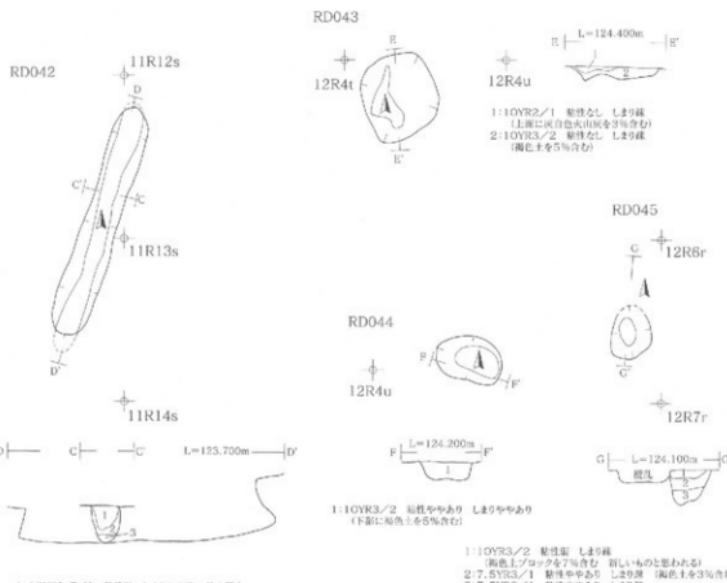




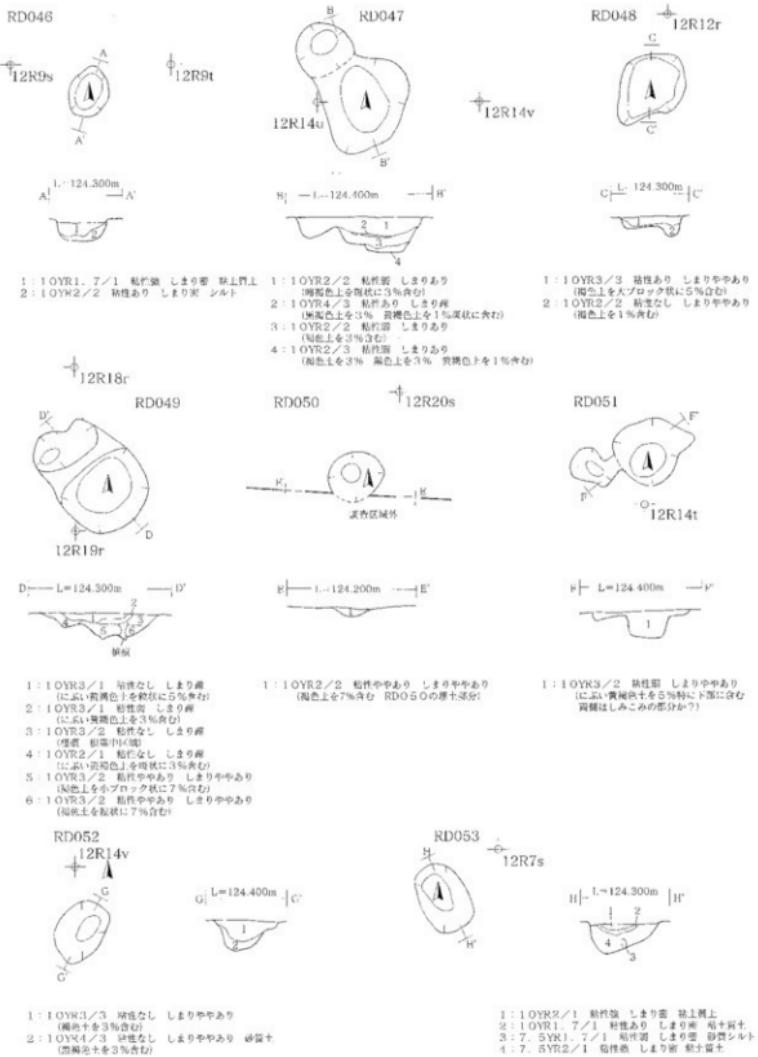
第86図 BD037≈039:041土坑



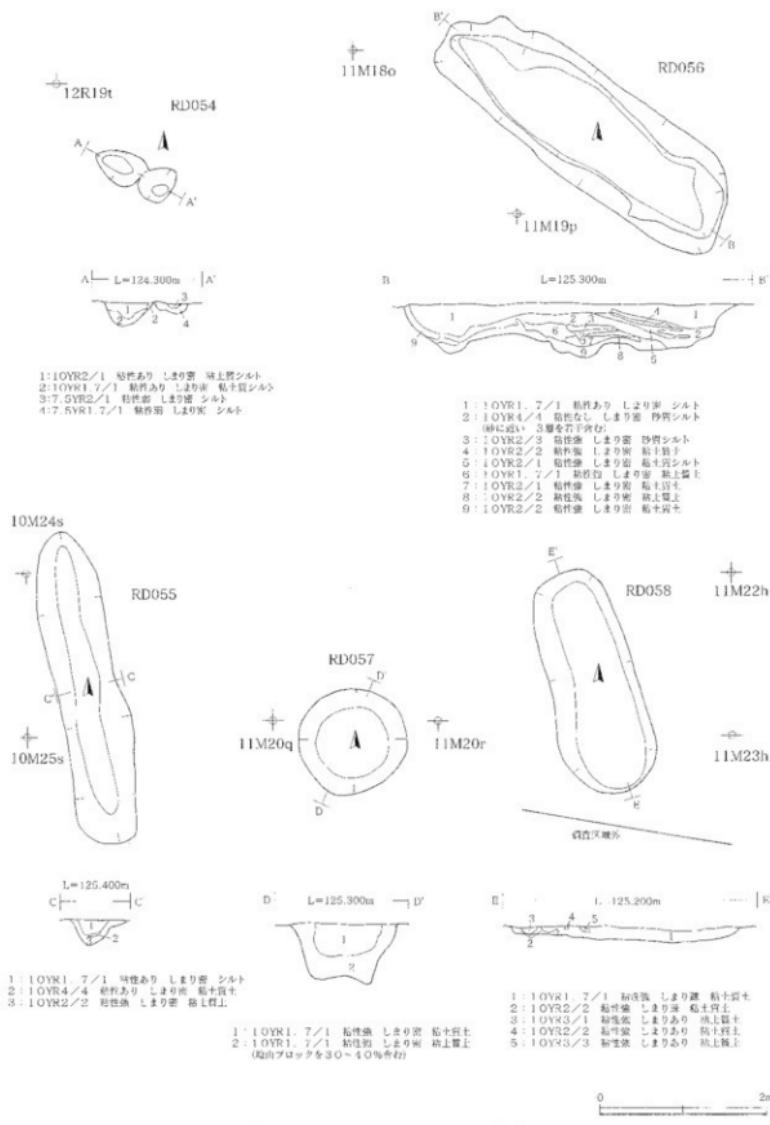
- 1:10YR2/3 黄色あり しまり斑 (黄褐色シルトを斑状に含む 灰化物を幾重合む)
 2:10YR1/7/1 黄色あり しまりやや薄 シルト
 3:10YR2/2 黄色斑 しまり斑 シルト
 4:10YR2/1 黄色斑 しまり斑 シルト
 5:10YR3/ 黄色斑 しまり斑
 6:10YR5/0 黄色なし しまりやや薄 クレセント(黑色土ブロックを含む)
 7:10YR2/1 黄色斑 しまり斑 シルト(黑色物質を含む)
 8:10YR2/1 黄色斑 しまり斑 シルト(黑色物質を含む)
 9:10YR3/ 黄色斑 しまり斑 各の空洞の土
 10:10YR2/3 黄色斑 しまり斑 シルト(黑色シルトブロックを含む)
 11:10YR1/7/1 黄色斑 しまり斑 シルト
 12:10YR1/7/1 黄色斑 黄褐色 施士質土 (黄褐色シルトブロックを含む)
 13:10YR2/1 黄色斑 しまり斑 シルト(黑色物質を含む)
 14:10YR2/1 黄色斑 しまり斑 粘土質土
 15:10YR5/6 黄色なし しまり斑 砂質土
 16:10YR5/6 黄色あり しまり斑 シルト(黑色シルトブロックを含む)
 17:10YR2/7 黄色斑 しまり斑
 18:10YR2/7 黄色斑 しまり斑 シルト(灰化物を含む)
 19:10YR2/7 黄色斑 しまり斑 シルト(灰化物を含む)
 20:10YR1/7/1 黄色斑 しまり斑 施士質土
 21:10YR3/3 黄色斑 しまり斑 粘土質土
 22:10YR2/2 黄色斑 しまり斑 (粘土を含む)
 23:10YR2/3 黄色あり しまり斑 シルト(黄色シルトを含む)
 24:10YR5/8 黄色斑 しまり斑 シルト(灰化物を含む)
 25:10YR5/8 黄色斑 しまり斑 シルト
 26:GYR3/6 黄色あり しまり斑 シルト(粘土を含む)
 27:10YR2/1 黄色あり しまり斑
 28:10YR3/1 黄色斑 しまり斑 施士質土(黄色土粘土質土を含む)
 29:10YR6/8 黄色斑 しまり斑 粘土質土
 30:10YR5/6 黄色あり しまり斑 シルト(粘土シルトブロックを含む)
 31:10YR5/8 黄色なし しまりやや薄 施士土(東側部分と思われる)



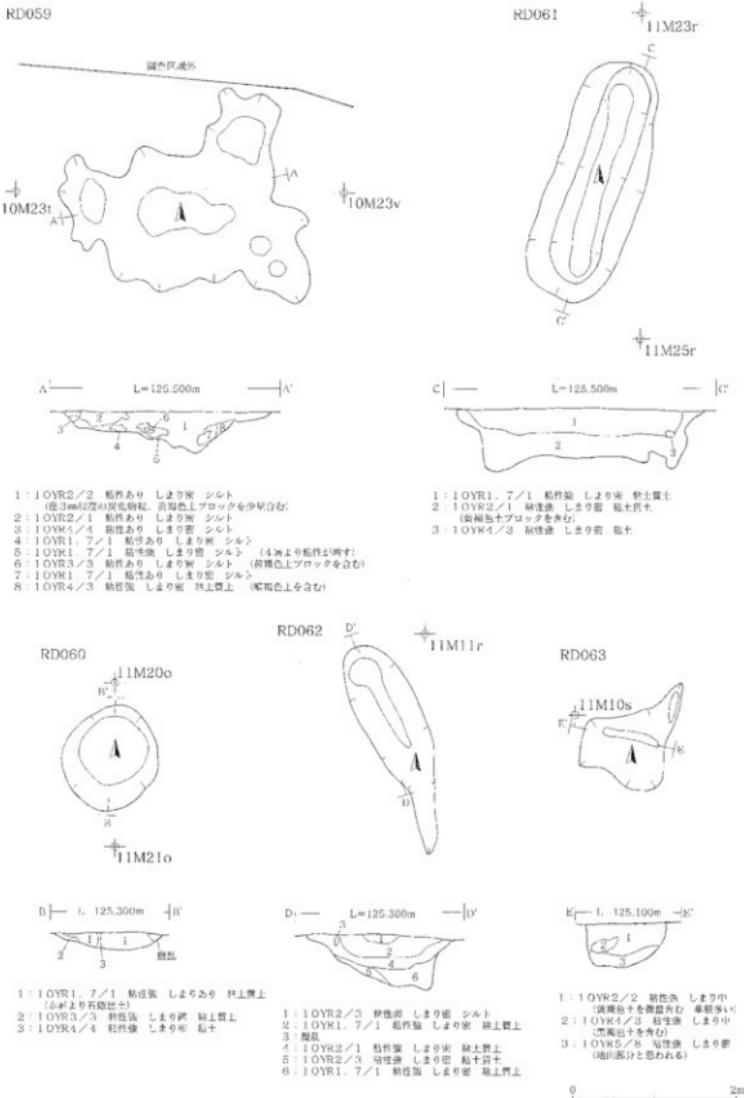
第87図 RD040・042~045土坑



第88図 RD046~053土坑



第89図 RD054~058土坑



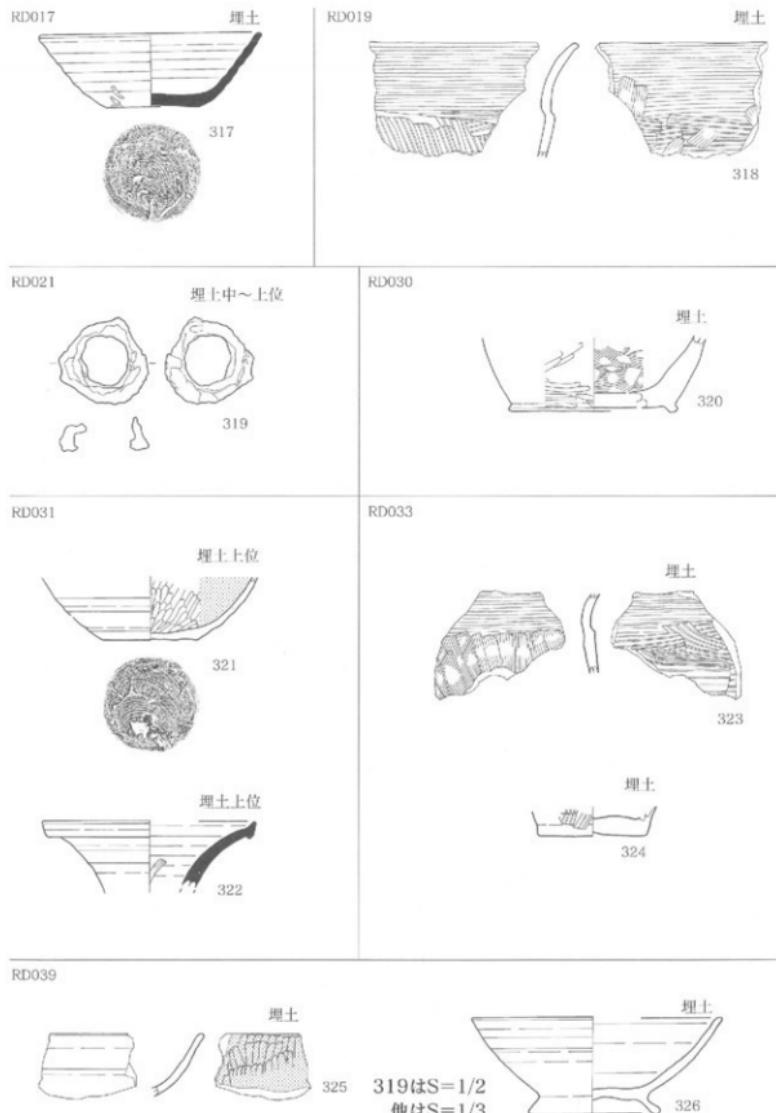
第90図 RD059～063土坑

第3表 十統一覧(1)

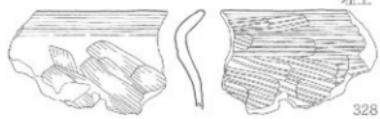
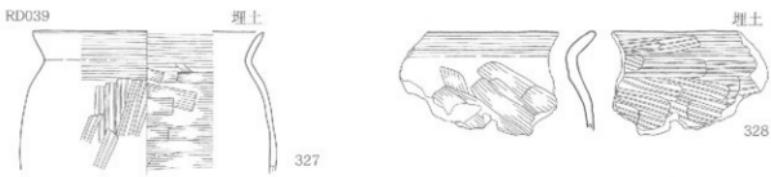
No.	遺構名	位置	平面形	開口部cm	底部cm	深さcm	時期	備考
1	RD017	12S8j	楕円形	165×94	149×69	7	平安	
2	RD018	12S5g6g	隅丸長方形	232×98	228×86	17	平安	
3	RD019	12S8f9f	隅丸方形	186×180	160×155	75	不明	RD019と重複
4	RD020	12S8g9g	隅丸方形	260×248	215×218	20	不明	RD019と重複
5	RD021	12S6f	円形	69×67	58×52	13	近代?	環状鉄製品、頭骨
6	RD022	12S7i	不整形	86×33	78×20	18	近代?	頭骨
7	RD023	12S6f	不整形	112×62	53×45	17	不明	
8	RD024	12S6k8j	楕円形	163×75	120×50	22	不明	
9	RD025	12S5h	楕円形	72×52	61×45	31	不明	
10	RD026	12S6j	円形	68×67	58×44	23	不明	
11	RD027	12H11h	隅丸方形	88×73	50×49	20	不明	
12	RD028	12S15f	不整形	208×178	138×42	44	不明	
13	RD029	12S8f	円形	80×75	51×45	23	不明	
14	RD030	11Q14h	隅丸長方形	160×105	120×60	17	奈良	土師器片出土
15	RD031	11Q5p5q	楕円形	148×103	108×68	33	平安	土器片出土
16	RD032	11Q4p	隅丸方形	157×140	140×115	37	平安	
17	RD033	12R1a2a	隅丸長方形	225×158	173×115	58	奈良	上器片出土
18	RD034	12R3p	隅丸方形	93×70	80×68	8	不明	
19	RD035	12R3t3u	楕円形	160×95	77×44	48	不明	
20	RD036	12R1u2u	隅丸長方形	230×78	218×64	37	古代?	
21	RD037	11R13m	円形	134×131	100×96	25	不明	
22	RD038	11R24h	隅丸長方形	204×103	143×68	42	不明	
23	RD039	11R10b	隅丸長方形	219×167	210×150	38	平安	RG016と重複
24	RD040	11R8g8h	不整形	313×127	221×70	51	奈良	土師器片出土
25	RD041	11R4j5j	円形	126×124	85×45	37	奈良	土師器片出土
26	RD042	11R12r	溝状	294×39	300×19	45	縦文	縦し穴
27	RD043	12R4t	隅丸方形	100×92	77×20	18	不明	
28	RD044	12R3u4u	楕円形	75×55	43×33	40	不明	
29	RD045	12R6q	楕円形	58×55	35×19	47	不明	
30	RD046	12R9s	楕円形	67×50	35×30	26	不明	
31	RD047	12R13u	不整形	170×68	90×54	43	不明	
32	RD048	12R12q	不整形	105×76	82×67	24	不明	
33	RD049	12R18r	不整形	150×97	67×49	34	不明	
34	RD050	12R20r	楕円形	69×58	25×23	12	不明	
35	RD051	12R13t	不整形	157×80	45×37	33	不明	

第4表 上坑一覧(2)

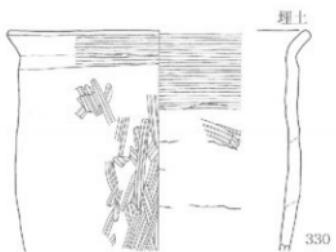
No.	遺構名	位置	平面形	開口部cm	底部cm	深さcm	時期	備考
36	RD052	I2R14v	楕円形	70×55	33×20	38	不明	
37	RD053	I2R7r	楕円形	90×57	42×15	35	不明	
38	RD054	I2R19	楕円形	60×47	19×15	28	不明	
39	RD055	I0M24s	溝状	385×73	332×19	31	縄文	
40	RD056	I1M18p	溝状	409×130	375×98	65	縄文?	
41	RD057	I1M20q	円形	129×128	88×87	73	不明	
42	RD058	I1M22g	長椭円	293×104	260×60	15	不明	
43	RD059	I0M23u	不整形	288×154	68×46	52	不明	
44	RD060	I1M20n	円形	131×118	80×78	22	縄文	石器出土
45	RD061	I1M23q	溝状	305×113	244×22	75	縄文?	陥し穴?
46	RD062	I1M11q	長椭円	270×70	125×16	64	不明	
47	RD063	I1M10s	不整形	113×90	65×9	54	不明	



第91図 RD土坑出土遺物（1）



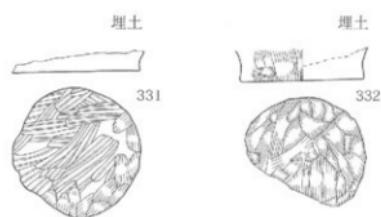
RD041



RD060



$S=1/2$



第92図 RD土坑出土遺物 (2)

4. 溝跡

溝跡はA調査区において大小併せて9条検出された。ここでは確認された溝跡について遺構番号順に記述し、詳細は第5表に一括して掲載した。

R G008溝跡（第93、96図 写真図版52、86）

＜位置＞ A調査区の11S区南西側に位置する。RA016堅穴住居跡と重複関係にあり、RA016堅穴住居跡を切っていることから本遺構の方が新しい。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜方向・規模＞ 南東～北西方向に延びると思われるが、南東端は攪乱を受け、北西端は段丘線と合流するため全容は不明である。今回確認された規模は長さ約23m、上幅2～1.3m、下幅80～30cm、深さ53～35cmを測る。

＜埋土＞ 4層に細分される。主体となるのは黒褐色シルトで黄褐色土層を含んでいる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦で、砂礫層まで掘り込んでいる。

＜遺物・時期＞ 墓土中から上臘器、須恵器の破片が出土している。336はロクロ使用の土臘器の环もしくは高台付环の底部で、回転糸切り痕が確認できる。337はロクロ使用の上臘器の高台付环で内面ヘラミガキ調整後黒色処理されている。338はロクロ使用の須恵器の甕の体部で、外面ヘラケズリ、内面ヘラナナデ調整されている。川土遺物とRA016堅穴住居跡との重複関係から平安時代に属すると思われる。

R G009溝跡（第93図 写真図版52）

＜位置＞ A調査区の11S区南西側で、前述のRG008溝跡と並行するかたちで位置する。北西端がRG008溝跡と重複するが、埋土の様相から判断して本遺構の方が新しい。

＜検出状況＞ 南東端側はIV層上面において黒色土の広がりとして、北西端側は黒褐色土の広がりとして確認した。

＜方向・規模＞ 南東～北西方向に延びると思われるが、南東端はRG008溝跡と同様に攪乱を受け、北西端はRG008溝跡と重複し、段丘線と合流するため全容は不明である。今回確認された規模は長さ23.5m、上幅1.75～1.30m、下幅65～35cm、深さ20～12cmを測る。

＜埋土＞ 4層に分けられる。黒色～暗褐色シルトからなり、一部に小砾が混入する。

＜壁・床＞ 壁は外傾して緩やかに立ち上がっている。南東側の床は砂礫層まで掘り込まれている。北西側に向かうに従ってII層上面のみを掘り込むようになり、浅くなる。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はないが、RG008溝跡との埋土の比較から平安時代に属すると思われる。

R G010溝跡（第94、96図 写真図版53、86）

＜位置＞ A調査区の11R区の北東側で、調査区際に沿うように位置する。11S区にも延びると思われたが確認できなかった。RA039堅穴住居跡の煙道部と重複関係にあり、煙道部を切っていることから本遺構の方が新しい。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜方向・規模＞ 南東～北西方向に延びると思われるが北西側は途中で消滅し、南東側は調査区外へ延びると

思われるため全容は不明である。また、RA039堅穴住居跡付近から枝分かれし、北東方向へも延びていく部分も確認された。今回確認された規模は長さ28m、上幅60cm、下幅35cm、深さ31~25cm、枝分かれしている部分の規模は長さ2.2m、上幅40~20cm、下幅24~8cm、深さ27cmを測る。

＜埋土＞ 場所によって若干異なり、粘性の強い黒色もしくは暗褐色粘土質土によって2~4層に分けられる。

＜壁・床＞ 壁はやや外傾して立ち上がっている。床面は平坦で堅く締まっている。枝分かれしている部分の床面は狭くV字に近い断面形をしている。

＜遺物・時期＞ 339はクロ不使用の土師器の甕の底部に、意図的に穿孔を施したものである。これ以外の出土遺物はなく、遺物から時期を推定することはできないが、RA039堅穴住居跡との重複関係から平安時代に属すると思われる。

RG012溝跡（第94図 写真図版53）

＜位置＞ A調査区の12S区西側に位置する。RA015堅穴住居跡と重複関係にあり、RA015堅穴住居跡を切っていることから本遺構の方が新しい。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりによって確認した。

＜方向・規模＞ 北側は南北方向に延びると思われるが、RA015堅穴住居跡付近で方向を南西~北東方向に変えて延びている。北側は削平され、南西側は擾乱を受けているため全容は不明である。今回確認された規模は長さ12.5m、上幅55~30cm、下幅20~38cm、深さ6~11cmを測る。

＜埋土＞ 黒色シルトからなり、黄褐色土小ブロックの混入状況によって2層に分けられる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦で締まっている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はないが、RA015堅穴住居跡との重複関係から古代に属すると思われる。

RG013溝跡（第94、96、97、98図 写真図版54、86、87、88）

＜位置＞ A調査区の12S区北西側に位置する。他の遺構との重複関係は見られないが、北側約4mに既述のRA014堅穴住居跡が接し、南側にRD024土坑やRD025土坑が隣接する。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜方向・規模＞ 東西方向に延びると思われるが、東端・西端とも擾乱を受けているため全容は不明である。今回確認された規模は長さ18.6m、上幅50cm、下幅20cm、深さ26cmを測る。

＜埋土＞ 4層に細分される。主体は黒色粘土質土からなる1層と黒褐色粘土質シルトの4層である。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は平坦であるが、砂礫層まで掘り込まれている。

＜遺物・時期＞ 本来の溝跡と思われる部分から遺物は出土していないため時期は不明である。東端の擾乱部からは近世の陶磁器・瓦が出土している。340~345は染め付けの碗・小皿・瓶類、346は土瓶、347は水滴、348~353は鉢・甕・壺類、354~356は小型陶磁器類を一括した。355は焼成前に底部中央付近に穿孔が施されている。356は器種不明であるが、やはり焼成前に体部の一部を切断し、加工している箇所が認められる。357~358は掘り鉢、359は堀炉の体部下半~底部で、内面には成形の際につけたと思われる型の痕が残っている。また、体部には焼成前に施された3ヶ所の加工痕が確認できる。360~362は瓦で、360は丸瓦、361、362は平瓦である。

RG014溝跡（第93図 写真図版54）

＜位置＞ A調査区の11S区南西側に位置する。南側にRA014堅穴住居跡、北側にRA015堅穴住居跡が隣接する。また、東端がRG008溝跡と重複関係にあり、RG008溝跡と合流している。

＜検出状況＞ IV層上面において黒褐色土の広がりとして確認した。

＜方向・規模＞ 東西方向に延びると思われるが、東端はRG008溝跡と重複し、西端は削平され消滅することから全容は不明である。今回確認された規模は長さ10m、上幅75~35cm、下幅40~18cm、深さ3~7cmを測る。

＜埋土＞ 黒褐色シルトの単層からなる。

＜壁・床＞ 壁は外傾し、床面から緩やかに立ち上がっている。床面は平坦でよく締まっている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物がないため詳細は不明であるが、RG008溝跡と重複し、本遺構が切られることから古代に属すると思われる。

RG015溝跡（第95, 98図 写真図版54, 88）

＜位置＞ A調査区の12Q区～11Q区～11R区にわたって位置する。既述のRA021堅穴住居跡とRA026堅穴住居跡の間を縫うように位置し、RA038堅穴住居跡と重複関係にある。RA038堅穴住居跡を切っていることから本遺構の方が新しい。

＜検出状況＞ 北側（11R区）はIV層上面において、南側（12Q区～11Q区）は2層上面において黒色および黒褐色土の広がりとして確認した。

＜方向・規模＞ ほぼ南北方向に延びると思われるが、南側は調査区域外に延びているため全容は不明である。今回確認された規模は長さ31m、上幅90~45cm、下幅40~20cm、深さ32~25cmを測る。また、北端には径126×98cm、深さ61cmの桟円形の土坑が掘り込まれている。

＜埋土＞ 黒色および黒褐色土主体の4層からなる。南側から中央付近にかけては粘性の強い埋土であるが、北側および付属する土坑では粘性がそれよりも弱くなる。

＜壁・床＞ 壁は外傾して立ち上がっている。床面は全体として平坦でよく締まっている。土坑部分は東側の壁がほぼ垂直に立ち上がるのにに対し、西側は外傾して立ち上がっている。

＜遺物・時期＞ 埋土中から上層階の破片が数点出土している。363はロクロ使用の环の底部で、回転系切り痕が確認できる。RA038堅穴住居跡との重複関係や出土遺物から平安時代に属すると思われる。

RG016溝跡（第95図 写真図版55）

＜位置＞ A調査区の11R区西側に位置する。前述のRG015溝跡の延長線上に位置し、RD039土坑と重複関係にある。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。

＜方向・規模＞ ほぼ南北方向に延びると思われるが、北側は調査区域外に延び、南側は擾乱を受けているため全容は不明である。今回確認された規模は長さ10m、上幅55~25cm、下幅25~15cm、深さ14~7cmを測る。

＜埋土＞ 黒色シルトの単層からなり、少量の黄褐色砂質土を斑状に含んでいる。

＜壁・床＞ 壁はやや外傾して立ち上がっている。床面は平坦で締まっている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく詳細は不明であるが、RD039土坑との重複関係やRG015溝跡との位置関

係、規模が似ることから平安時代に属すると思われる。

R G017溝跡（第95図 写真図版55）

＜位置＞ A調査区の11Q区東側に位置する。既述のRA019・025竪穴住居跡と重複関係にあり、両竪穴住居跡に切られていることから本遺構の方が古い。

＜検出状況＞ IV層上面において黒色土の広がりとして確認した。一部つながらない部分もあるが、規模・方向・埋土の様相がほぼ同じであることから、同一の溝跡として扱った。

＜方向・規模＞ 北東～南西方向に延びると思われるが、北東端がRA019竪穴住居跡に、南西端がRA025竪穴住居跡にそれぞれ切られているため全容は不明である。

＜埋土＞ 黒色粘土質土を主体とする5層に細分される。

＜壁・床＞ 壁は外傾し、床面から緩やかに立ち上がりしている。床面は凹凸が多く平坦ではない。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく詳細は不明であるが、平安時代に属するRA019・025竪穴住居跡と重複関係にあることから判断して古代と思われる。

5. 柱穴状土坑（第99、100図）

今回の調査で柱穴状土坑はA・B調査区から合わせて45基検出されている。ここでは各調査区ごとの概要を記述し、詳細は第6表に一括して掲載した。

A調査区（段丘下側）

＜位置＞ 11R区北東側に位置し、23基検出された。1基のみRG010溝跡と重複関係にあり、RG010溝跡に切られている。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形5基、橢円形5基、不整形13基である。確認された規模は長軸径が15～62cm、短軸径14～44cmの範囲に収まり、長軸径20～30cm台のものが過半数を占める。深さは11.5～36.5cmを測り、10～20cm台のものが8割以上を占めている。柱根が確認できたものはない。

＜埋土＞ 埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とする単層からなり、粘性がありよく縫まっている。炭化物や焼土はいずれからも確認されていない。底面に亜円窪が確認できたのは1基だけである。

＜遺物・時期＞ いずれからも出土遺物はなく、時期についての詳細は不明であるが、RG010溝跡との重複関係や検出状況、埋土の様相から判断して古代に属すると思われる。

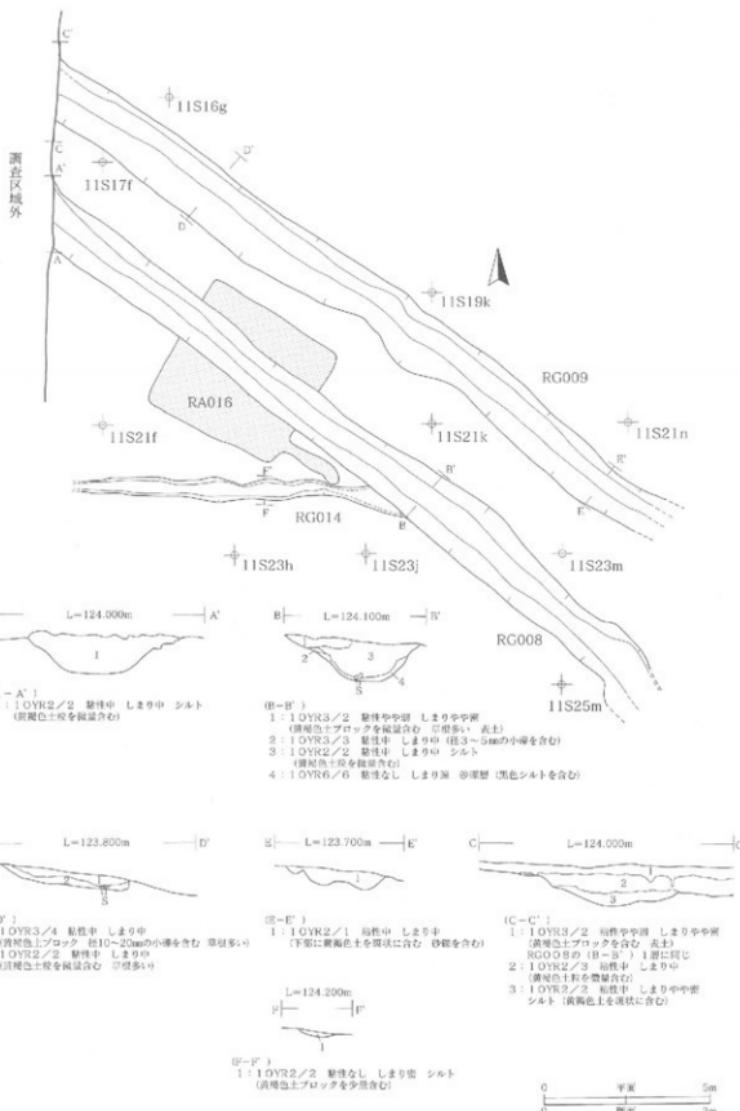
A調査区（調査区西側）

＜位置＞ 11Q区やや西寄りに位置し、8基検出された。他の遺構との重複関係は見られず、北側にRD030上坑が隣接する。

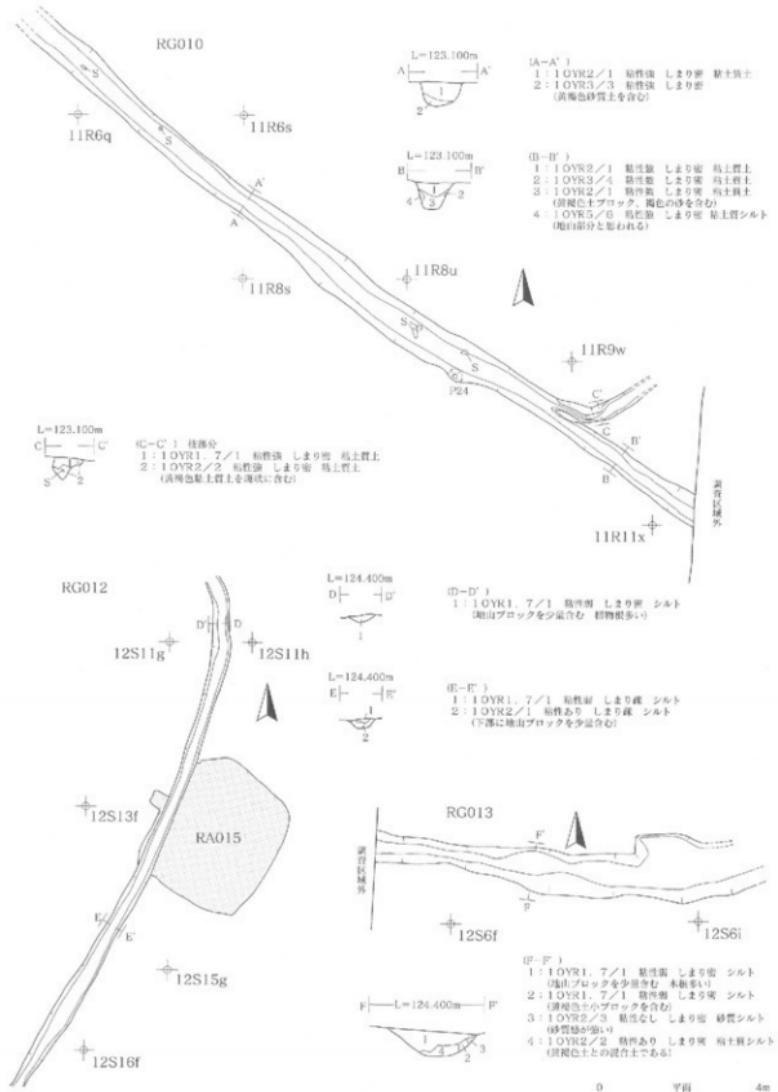
＜平面形・規模＞ 平面形は円形1基、不整形7基である。確認された規模は長軸径が36～52cm、短軸径が35～47cmの範囲に収まり、深さは7.8～36.5cmを測る。柱痕を確認できたものはない。

＜埋土＞ 埋土は黒褐色～暗褐色シルトを主体とする単層からなり、粘性がありよく縫まっている。

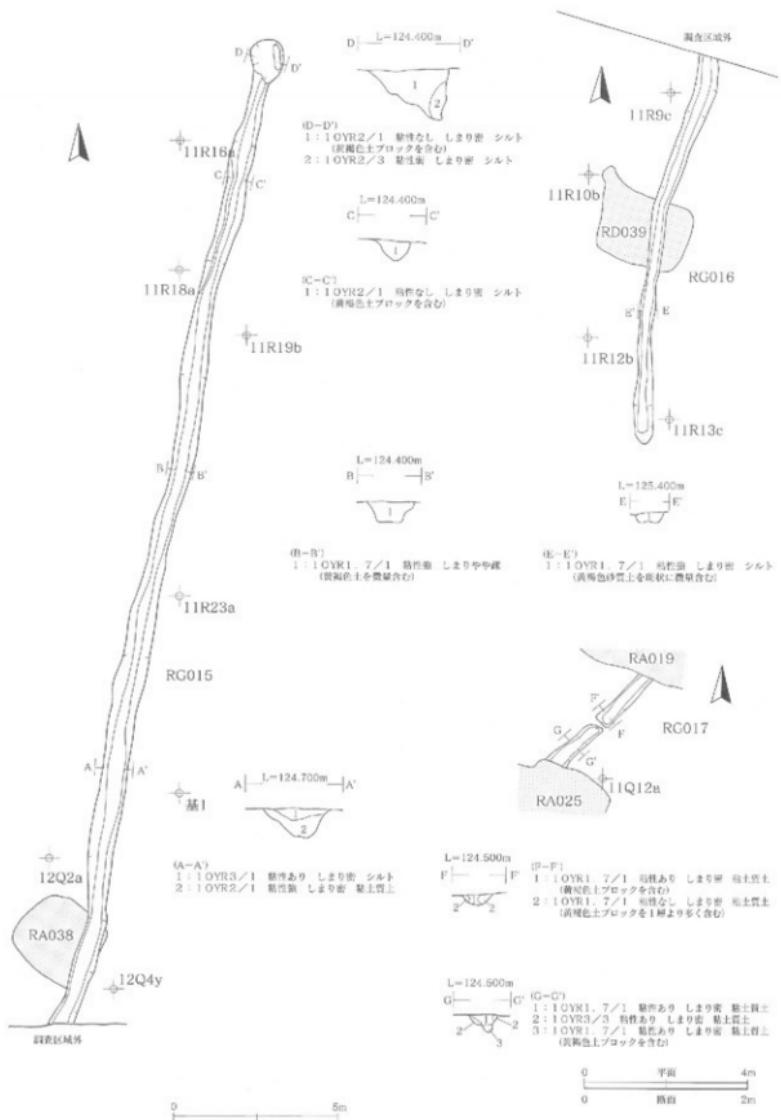
＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期については不明である。



第93図 RG008・009・014溝跡



第94図 RG010・012・013溝跡



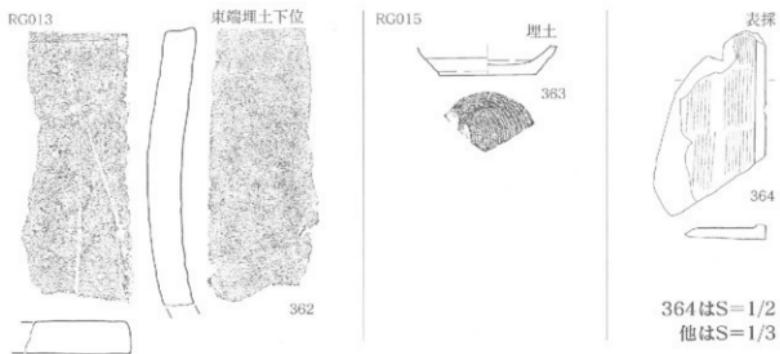
第95図 RG015~017溝跡



第96図 RG溝跡出土遺物（1）



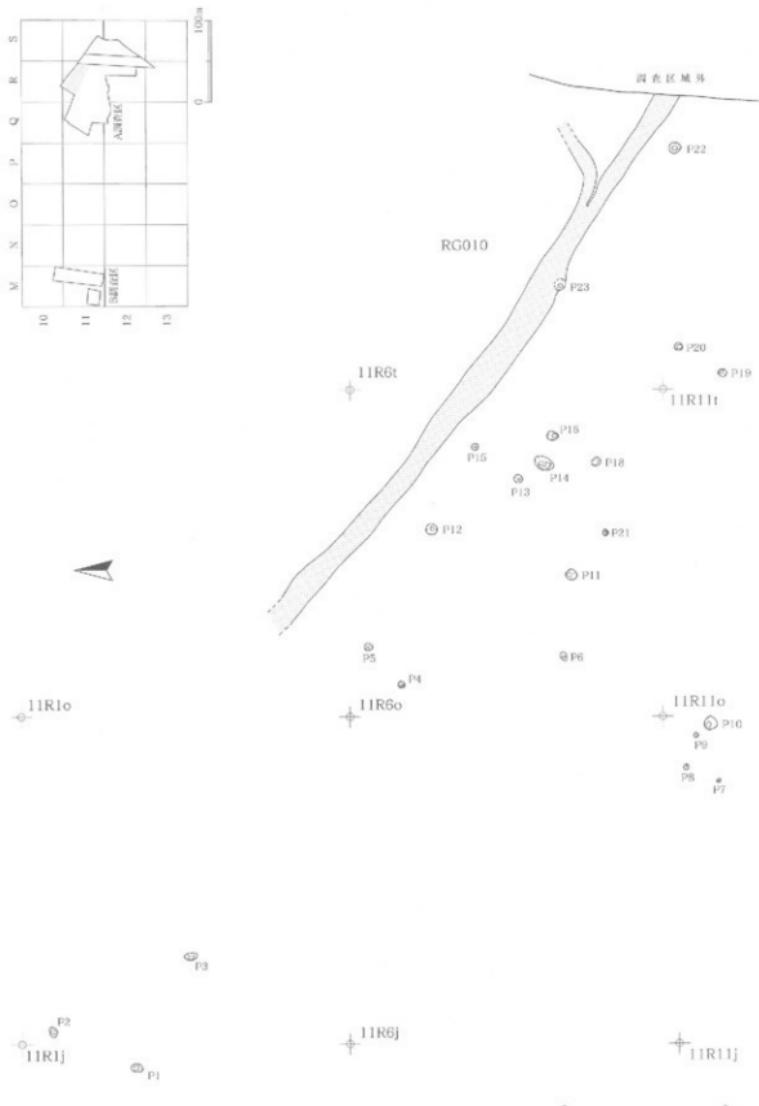
第97図 RG溝跡出土遺物 (2)



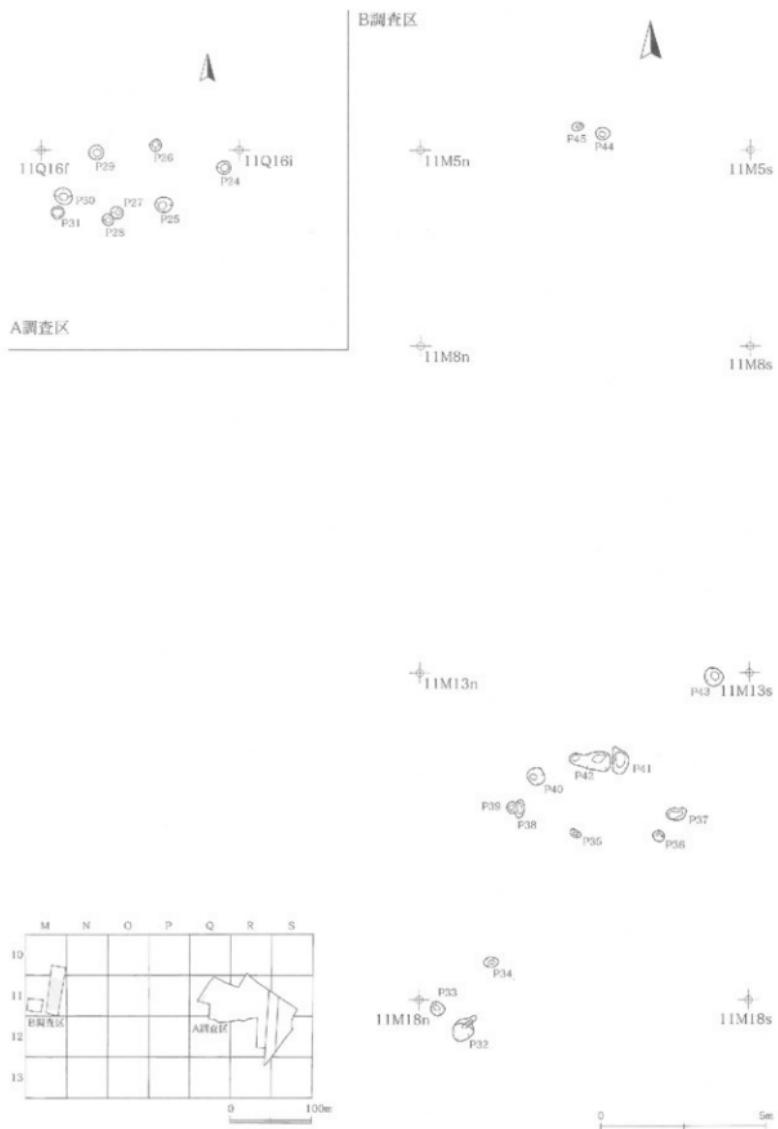
第98図 RG溝跡出土遺物（3）

第5表 溝跡一覧

No.	遺構名	位置	上幅cm	下幅cm	深さcm	長さcm	方向	備考(重複・時期)
1	RG008	11R~11S	200~130	80~30	53~35	23	北西—南東	RG009に切られる 平安
2	RG009	11R~11S	175~130	35~65	20~12	23.5	北西—南東	RG008を切る 平安
3	RG010	11R~11S	60	35	31~25	28	北西—南東	平安
	RG010 枝部分	11R	40~20	24~8	27	2.2	北東—南西	平安
4	RG012	12S	55~30	38~20	6~12	12.5	北—南 北東—南東	RA015を切る 古代
5	RG013	12S	50	20	26	18.6	東—西	東端部攢乱 時期不明
6	RG014	11S	75~35	40~18	7~3	10	東—西	RG008と重複 古代
7	RG015	11R~11Q ~12Q	90~45	40~20	32~25	31	南—北	北端部に土坑、南端は 調査区域外へ・平安
8	RG016	11R	55~25	25~15	14~7	10	南—北	RD039を切り北端は 調査区域外へ・平安
9	RG017	11Q	50~35	31~16	20~7	2.9	北東—南西	RA019・025に切られ る・古代



第99図 A調査区柱穴状土坑群 (1)



第100図 A・B調査区柱状土坑群 (2)

B調査区

＜位置＞ 11M区に位置し、14基検出された。他の遺構との重複関係は見られず、周辺にはRD056土坑やRD062土坑が位置している。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形1基、梢円形3基、不整形10基である。今回確認された規模は長軸径32cm～126cm、短軸径22～60cmの範囲に収まる。深さは7.1～90.4cmを測るが、30cm以下のものが8割近くを占める。

＜埋土＞ 黒色～黒褐色シルトを主体とする单層からなるものが大半であるが、僅かに褐色シルトを主体にするものがある。いずれも粘性がありよく締まっている。

＜遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期については不明であるが、埋土が褐色シルトからなるものは他の柱穴状土坑より古い可能性がある。

6. 遺構外出土遺物（第98回 写真図版88）

A・B調査区とも、近・現代の耕作等により遺構外からの出土遺物はほとんどが現代のものであった。本次調査では、表土から出土し時期の判断ができなかった1点のみを掲載した。364は硯の側面部である。剥離した状態で出土したため、形状や大きさについては不明である。奥羽山脈産と思われる頁岩を利用している。

第6表 柱穴状土坑一覧

A調査区柱穴状土坑一覧(段丘下側)

柱穴No	開口部cm	深さcm	形 状
P1	37×29	18.5	不整円
P2	30×23	25	楕円形
P3	43×26	22	楕円形
P4	21×19	12	不整円
P5	29×23	22.5	楕円形
P6	29×19	14	楕円形
P7	15×12	17.5	不整円
P8	18×16	19	不整円
P9	15×14	20	円 形
P10	40×38	27.5	不整円
P11	33×30	15	不整円
P12	33×32	31	円 形
P13	25×23	12	円 形
P14	62×44	11.5	楕円形
P15	20×16	20	不整円
P16	35×29	36.5	不整円
P17	36×28	35	不整円
P18	27×25	19.5	不整円
P19	25×23	19	不整円
P20	24×24	22	円 形
P21	20×17	25.5	不整円
P22	32×31	14	円 形
P23	36×(32)	21	不整円

A調査区柱穴状土坑一覧(西側)

柱穴No	開口部cm	深さcm	形 状
P24	40×39	10	円 形
P25	51×47	36.5	不整円
P26	36×35	8.5	不整円
P27	41×37	10	不整円
P28	37×36	10.5	不整円
P29	46×42	9	不整円
P30	52×46	8	不整円
P31	39×37	8	不整円

B調査区柱穴状土坑一覧

柱穴No	開口部cm	深さcm	形 状
P32	96×60	90	不整円
P33	40×39	23	不整円
P34	45×32	13	不整円
P35	35×22	11	楕円形
P36	37×32	22	不整円
P37	54×35	26	不整円
P38	48×(27)	7	楕円形
P39	32×(30)	10	円 形
P40	55×52	26	不整円
P41	87×53	31	不整円
P42	126×43	45	不整円
P43	58×50	18	不整円
P44	45×40	14.5	不整円
P45	34×25	12	楕円形

第7表 濃縮内出土土器一覧(1)

編號	登場場所	遺物名	出土地の部位	高さ	形	「」括弧内	形態	「」括弧内	形態	()は推定値		()は残存値	
										底部	ヘラミガキ	底部	ヘラミガキ
1	RAO14 地上	土師器	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	16.8	5.7	16.8	5.7
2	2.75	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	—	—	—	—
3	3	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	19.8	5.9	32.2
4	4.5	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	(19.1)	7.5	36.4
5	5	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	(19.1)	10.1	33
6	6	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	(17.8)	(6.8)	32.8
7	7	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	(16.4)	(7.6)	31
8	8	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	7.2	(29.6)
9	9	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
10	10	8	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	17.8	7.4	19.7
11	11	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	8.4	16.5	11
12	12	402	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	10
13	13	4015	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	8
14	14	11	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
15	15	12	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
16	16	RAO17 地上	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
17	17	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
18	18	66	RAO21 地上	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
19	19	63	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
20	20	62	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
21	21	277	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
22	22	69	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
23	23	41	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
24	24	68	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
25	25	70	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
26	26	71	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
27	27	67	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
28	28	72	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
29	29	278	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
30	30	60	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
31	31	403	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
32	32	135	RAO26 カマド付近	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
33	33	136	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
34	34	147	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
35	35	137	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
36	36	138	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
37	37	144	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
38	38	148	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
39	39	139	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
40	40	160	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
41	41	145	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
42	42	142	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
43	43	149	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
44	44	146	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
45	45	143	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
46	46	141	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—
47	47	151	n	土師器	1.5	手口	「」ミガキ	「」ミガキ	「」ミガキ	木蓋	—	—	—

第8表 漢樹内川土器一覧(2)

番号	通名	遺構名	出土地点	地形	成形	器種	基盤	上縁	底縁	口部	〔輪形外/内〕		底部外/内	底部	〔 〕は既存値		〔 〕は既存値	
											L16cm	W16cm	H16cm	幅	高さ	底面	木製板	木製板
45	RA026	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
49	153	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
50	155	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
51	157	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
52	150	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
53	158	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
54	152	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
55	156	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
56	154	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
57	140	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
58	161	n	周土上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
59	405	n	カマド内	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
62	310	RA027	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
63	311	n	周土上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
64	307	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
65	369	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
66	368	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
67	162	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
68	179	RA032	カマド内	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
69	178	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
70	180	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
71	181	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
72	182	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
73	183	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
74	236	RA035	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
75	237	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
76	239	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
77	240	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
78	241	RA036	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
79	242	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
80	247	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
81	245	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
82	246	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
83	244	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
84	243	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
85	252	RA038	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
86	251	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
87	249	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
88	253	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
89	260	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
91	255	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
92	262	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
93	263	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
94	257	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
95	259	n	周土	上縁	縫	手口クロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第9表 滅構内所土器一覧(3)

通巻	遺構名	出土場所・層位	口縁形	底形	側面	全体外/内	()は推定値		備考	
							口径cm	底径cm		
95 57	RA038 扇土	上階器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	(6.9) —	(3.3) —	A.1? 傷痕有 底土に落合有 96-256
98 261	n	土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	(7.0) —	(9.5) —	A.1? A.1? 97-255
99 216	RA016 カマド付	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	(13.9) —	(5.8) —	底土に金属性有 98-261
100 14	n	カマド付	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	断面浅底 99-276
102 15	n	カマド	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 100-13
103 16	n	煙函	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 101-14
104 17	n	煙函	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 102-5
105 19	RA018 地上部	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 103-16
106 21	n	扇土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 104-17
107 29	n	扇土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 105-19
109 23	RA019 1号+灰	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 106-21
110 29	n	8号土坑	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 107-20
111 28	n	施灰	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 108-21
112 27	n	施灰	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 109-21
113 25	n	扇土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 110-21
114 22	n	扇土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 111-21
115 24	n	扇土+灰	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 112-21
116 30	n	扇土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 113-21
117 44	n	扇土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 114-21
118 26	n	扇土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 115-21
119 31	n	床土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 116-21
120 32	n	床土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 117-21
121 33	n	床土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 118-21
122 36	n	24号土坑	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 119-21
123 39	n	24号土坑	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 120-21
124 34	n	1号土坑	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 121-21
125 35	n	7号土坑	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 122-21
126 42	n	8号土坑	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 123-21
127 40	n	8号土坑	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 124-21
129 43	n	8号土坑	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 125-21
130 38	n	8号土坑	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 126-21
131 47	n	能床	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 127-21
132 45	n	能床	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 128-21
133 46	n	能床	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 129-21
135 48	RA020 H.上	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 130-21
136 49	n	床土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 131-21
137 51	n	R.上	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 132-21
138 52	n	R.上	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 133-21
139 50	n	床土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 134-21
140 54	n	床土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 135-21
141 56	n	4号火窯・床土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 136-21
142 53	n	床土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 137-21
143 55	n	床土	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	上縁器・底 土器	—	—	—	底土に金属性有 138-21
—	145	—								

通巻	通巻名	出子点数	器皿	口鉢形	体高(深)/四	底形	底径	()は指定価			
								口徑cm	底径cm	深さcm	分量
144 58	RA020	3444点	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	144.55
145 57	n	14点	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	145.57
146 61	n	14点	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	146.61
147 59	n	14点	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	147.59
148 74	RA022	方寸115点	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	148.74
149 73	n	1号44点	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	149.73
150 75	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	150.75
151 76	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	151.76
152 77	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	152.77
153 141	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	153.141
154 130	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	154.130
155 132	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	155.132
156 78	RA023	丸子	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	156.78
157 79	n	丸子	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	157.79
158 80	n	丸子	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	158.80
159 81	n	丸子	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	159.81
160 94	RA024	5575点	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	160.94
161 92	n	2号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	161.92
162 84	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	162.84
163 85	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	163.85
164 86	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	164.86
165 90	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	165.90
166 91	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	166.91
167 82	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	167.82
168 83	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	168.83
169 87	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	169.87
170 88	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	170.88
171 89	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	171.89
172 93	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	172.93
173 98	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	173.98
174 99	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	174.99
175 95	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	175.95
176 97	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	176.97
177 98	n	1号上煎	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	177.98
178 103	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	178.103
179 115	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	179.115
180 124	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	180.124
181 279	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	181.279
182 104	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	182.104
183 100	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	183.100
184 101	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	184.101
185 102	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	185.102
186 116	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	186.116
187 117	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	187.117
188 106	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	188.106
189 110	n	カマド	土鍋	12.2φ	ロクロナード/ロクロナード	ロクタナード/ロクタナード	—	—	—	—	189.110

第12表 這柄內出土器一覽(6)

漁獲量(頭数)		出港地点(位置)		漁獲量(頭数)		出港地点(位置)	
漁獲量	漁獲率	漁獲量	漁獲率	漁獲量	漁獲率	漁獲量	漁獲率
323	322	RA029	カニア不海	漁獲量	漁獲率	漁獲量	漁獲率
2,393	323	RA029	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
240	168	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
242	173	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
243	169	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
244	171	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
245	167	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
246	174	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
247	175	RA031	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
248	176	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
249	177	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
250	197	RA032	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
251	196	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
252	190	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
253	195	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
254	196	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
255	187	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
256	188	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
257	185	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
258	184	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
259	193	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
260	194	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
261	192	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
262	191	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
263	204	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
264	199	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
265	198	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
266	207	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
267	206	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
268	201	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
269	189	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
270	205	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
271	200	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
272	209	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
273	203	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
274	202	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
275	212	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
276	211	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
277	210	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
278	219	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
279	217	RA034	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
280	220	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
281	218	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率
282	219	n	カニア不海	上漁場	漁獲率	上漁場	漁獲率

〔 〕往來存摺

第14表 遷拂内出土器一覧(5)

番號No	地點名	出土点	種類	形状	底形	底外/内	底外/内	底外/内	底外/内	底外/内	()は推定値	()は現存値
236 237	RGOG08 墓上	上部	口クロ	口輪外/内	ロクロナダ	—	—	—	—	—	—	参考
237 238	n	土器	口クロ	—	ロクロナダ	—	—	—	—	—	—	336 297
333 300	n	土器	口クロ	—	ロクロナダ	—	—	—	—	—	—	337 298
339 259	RGOG10 墓上	美濃路/底	口クロ	—	ロクロナダ	—	—	—	—	—	—	338 300
363 306	RGOG15 墓上	土器底/底	口クロ	—	ロクロナダ	—	—	—	—	—	—	339 299
			土器底/环	ロクロ	ロクロナダ	—	—	—	—	—	—	363 306

第15表 土器品一覧

番號No	番號No	地點名	出土地点	種類	()は推定値		時期	備考
					長さcm	幅cm		
210	404	RAO24	力方立桶附近	彩漆串	4.6	4.4	41.07	平安
303	406	RAO34	埋土	十數円盤?	(15.3)	(9.4)	(2.0)	236.91 平安 印心彌耳瓦1/2次鉢

第16表 石器石製品一覧

番號No	番號No	地點名	出土地点	種類	()は現存値		時期	備考
					長さcm	幅cm		
16	601	RAO15	埋土	砾石?	(8.3)	(3.3)	85.27	平安(谷山10)
60	603	RAO26	埋土	砾石?	(4.2)	(5.4)	18.53	奈良(谷山10)
108	602	RAO18	1層	砾石	(7.7)	(5.5)	166.90	平安(谷山10)
279	604	RAO33	P1	円窓・縫合	(12.9)	(9.8)	507.24	平安(谷山10)
335	605	RDG60	埋土	石鏡	2.6	1.4	0.4	繩文
364	606	表土	表土	鏡	(7.6)	(4.4)	(0.7)	平安(西御山10)

番號No	地點名	出土地点	種類	長さcm	幅cm	時期	備考
16							昭和No 参照
60							601
603							603
108							108
279							604
335							335
364							364

第17表 銀製品一覧

掘削No	番種名	出土地点/層位	直径	長さcm	幅cm	厚さcm	時代	備考	掘削No
61 503	RAO26 厚面	刀子	8.6	1.7	0.4	6.89	奈良	1.34±0.1 偏心	61 503a
134a 501a	RAO19 p1	刀子	8.2	1.7	0.5	9.55	平安	1.34±0.1 偏心	134a 501a
134b 501b	RAO19 p1	刀子	5.8	1.4	0.6	5.65	平安	1.34±0.1 偏心	134b 501b
211 502	RAO24 おマド軒刺	刀子	11.2	2.3	0.5	26.3	平安	211 502	
304 504	RAO34 厚面	刀子	3.1	1.3	1.1	6.49	平安	304 504	
319 505	RQD21 細刃~[~]位	不明	3.5	3.6	—	11.53	不明	深軋、近・現代?	319 505

第18表 銅器一覧

掘削No	番種名	出土地点/層位	直角/斜面	口径cm	底径cm	高さcm	割面・斜面	製作地	年代	備考	掘削No
280 719	RCO13 楕円形	陶器? 下位	—	3.2	(1.4)	1.6	白色	奈良?	17C-18C	—	280 719
340 701	RCO13 重輪車下位	鐵器/鐵	(8.2)	(3.2)	4.4	—	白色	奈良?	19C代	—	340 701
341 702	RCO13 重輪車下位	鐵器/鐵	(10.4)	(4.7)	—	—	白色	奈良?	19C代	—	341 702
342 703	RCO13 重輪車下位	鐵器/鐵	—	3.8	(3.8)	—	白色	奈良?	18C代	—	342 703
343 704	RCO13 重輪車下位	鐵器/鐵	—	(4.8)	(3.4)	—	灰色	奈良?	18C代	—	343 704
344 707	RCO13 重輪車下位	鐵器/鐵	—	3.4	(2.9)	—	白色	奈良?	18C代~19C	無記載	344 707
345 709	RCO13 重輪車下位	鐵器/鐵	(9.3)	(4.5)	(3.8)	—	灰色	奈良?	18C代~19C	—	345 709
346 706	RCO13 重輪車下位	鐵器/鐵	—	—	—	—	浅灰褐色	奈良?	18C代~19C	—	346 706
348 708	RCO13 重輪車下位	陶器/灰	—	(2.2)	(2.2)	—	灰色	奈良?	18C代~19C	—	348 708
349 711	RCO13 重輪車下位	陶器/灰	—	(5.6)	(5.2)	—	褐色	奈良?	19C代?	—	349 711
350 712	RCO13 重輪車下位	陶器/灰	(1.4-4)	(6.3)	(6.3)	—	灰褐色	奈良?	19C代	—	350 712
351 716	RCO13 重輪車下位	陶器/灰	(11.4-2)	(6.4)	7.35	—	褐色	奈良?	19C代~	—	351 716
352 718	RCO13 重輪車下位	陶器/灰	—	(12.0)	(6.5)	—	灰色	奈良?	19C代?	—	352 718
353 714	RCO13 重輪車下位	陶器/木柄	(18.4)	(10.2)	—	—	褐色	奈良?	19C代?	—	353 714
354 713	RCO13 重輪車下位	陶器/木柄	—	—	(11.9)	—	灰褐色	奈良?	19C代	—	354 713
355 715	RCO13 重輪車下位	陶器/木柄	(10.4)	—	(6.7)	—	褐色	奈良?	19C代~	—	355 715
356 301	RCO13 重輪車下位	木柄(?)十器	(7.7)	3.2	4.0	—	褐色	奈良?	19C代?	無記載	356 301
357 717	RCO13 重輪車下位	陶器/木柄	(18.2)	6.8	(7.1)	—	褐色	奈良?	19C代?	—	357 717
358 710	RCO13 重輪車下位	陶器/木柄	(7.5)	(3.1)	—	—	褐色	奈良?	19C代?	—	358 710
359 302	RCO13 重輪車下位	陶器/木柄	—	—	—	—	褐色	奈良?	19C代?	内・城面型輪形工具	359 302
360 303	RCO13 重輪車下位	瓦/丸瓦?	—	—	—	—	褐色	奈良?	19C代?	—	360 303
361 305	RCO13 重輪車下位	瓦/半瓦	—	—	—	—	褐色	奈良?	19C代?	—	361 305
362 304	RCO13 重輪車下位	瓦/半瓦	—	—	—	—	褐色	奈良?	19C代?	—	362 304

V. まとめ

ここでは、第12次調査で確認された古墳時代末～奈良時代・平安時代の遺構と遺物を中心に整理し、補足を加えてまとめとする。

1. 遺構

(1) 穴住居跡

今回の調査で検出された穴住居跡は古墳時代末～奈良時代11棟、平安時代16棟の計27棟である。下記の各項目について要約する。

＜占地＞ 穴住居跡は、A調査区北東側の段丘縁辺部から南西側で、半径約50mの円内に大部分が収まる。古墳時代末～奈良時代・平安時代とも散在しているが、奈良時代の住居跡の方が比較的狭い範囲に集まっている傾向がうかがえる。

＜穴住居跡同上の重複関係＞ 古墳時代末～奈良時代・平安時代とも同時期での穴住居跡同上の重複関係はなく、単独で占められている。唯一重複関係が見られるのは奈良時代（RA035）と平安時代（RA034）の住居跡の重複1例だけである。

＜平面形・規模＞ 古墳時代末～奈良時代・平安時代とも一部に張り出しを持つものもあるが、隅丸方形を基調とするものが大部分を占める。隅丸長方形、隅丸不溝形もわずかに見られる。規模については①1辺が5.5m以上…超大型、②1辺が4.5m以上～5.5m未満…大型、③1辺が3.5m以上～4.5m未満…中型、④1辺が2.5m以上～3.5m未満…小型、⑤1辺が2.5m未満…超小型と基準を設定し、分類した。古墳時代末～奈良時代は超大型3棟、大型1棟、中型2棟、小型4棟、超小型1棟で、小・超小型で45%を占める。平安時代は超大型1棟、大型2棟、中型6棟、小型7棟、超小型0棟で、中・小型で全体の8割を占める。古墳時代末～奈良時代は超大型・大型か小型に偏る傾向が見られたが、平安時代は中・小型に偏る傾向がうかがえる。

＜埋土＞ どの住居跡も、埋土上に人為的な埋め戻しの痕跡は見られず、自然堆積の様相を示している。

＜床＞ 貼り床を施してある住居跡は古墳時代末～奈良時代2棟、平安時代3棟である。主に黒色～黒褐色土と黄褐色土の混合土からなり、粘性の強い粘土質の土が多く用いられている。

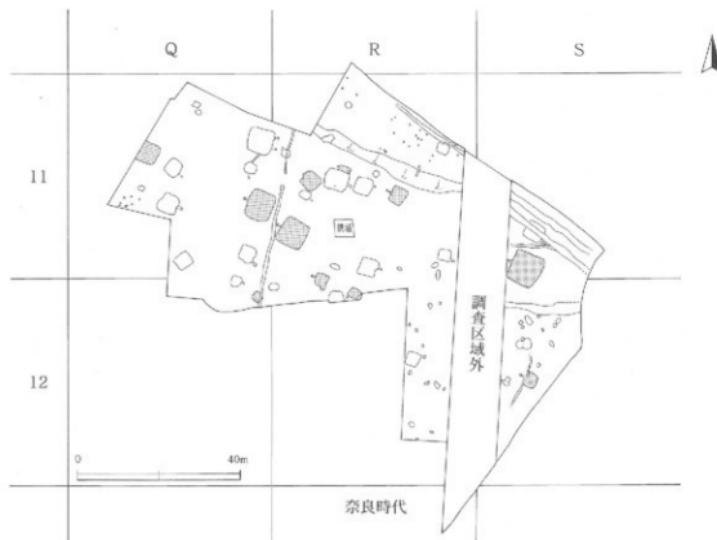
＜柱穴＞ 柱穴状土坑を確認できた住居跡は古墳時代末～奈良時代4棟、平安時代7棟である。このうち主柱穴が明確に確認できたものは古墳時代末～奈良時代3棟で、RA014穴住居跡が6本柱、RA021・026穴住居跡は4本柱である。平安時代の穴住居跡で主柱穴が確認できたものはない。

＜貯藏穴＞ カマドの両脇、もしくはカマドが設置されている壁側に設置されていることを優先した場合、奈良時代1棟、平安時代7棟となる。

＜壁溝＞ 削平されているため詳細が不明なものも含め、カマド部分を除いてほぼ全周するものと思われるものが古墳時代末～奈良時代の超大型穴住居跡で2棟確認されている。平安時代の穴住居跡では壁溝というよりは溝状に近い掘り込みが超大型・大型穴住居跡で1棟ずつ確認されている。

＜カマド＞ カマドの設置位置は、古墳時代末～奈良時代の住居跡では北西壁が9棟で75%を占め、北壁1棟、不明2棟である。平安時代の住居跡では南東壁9棟で60%を占め最も多く、東壁2棟、南壁1棟、東隅1棟、不明2棟となる。

本体部は削平されたり、崩壊しているが、天井材に使用された礫が残っているなど残存状況の比較的よい



奈良時代



平安時代

第101図 時代別堅穴住居分布図

第19表 奈良時代堅穴住居跡一覧

No	遺構名	平面圖	規 横m	カマドの位置	煙道	柱穴	貯蔵穴	壁溝	貼り床
1	RA014	隅丸方形	7.90×7.30	北西壁中央付近	削り貫き	6基	なし	あり	なし
2	RA015	隅丸長方形	3.43×2.86	北西壁中央付近	削り貫き	なし	なし	なし	なし
3	RA017	(隅丸方形)	4.90×(3.40)	(北西壁中央付近)	不明	なし	なし	なし	なし
4	RA021	隅丸方形	7.05×6.18	北西壁中央付近	削り貫き	4基	なし	なし	なし
5	RA026	隅丸方形	6.57×6.16	北西壁中央付近	削り貫き	4基	なし	あり	なし
6	RA027	隅丸方形	3.02×2.75	北西壁中央付近	削り貫き	なし	なし	なし	なし
7	RA030	隅丸方形	2.58×2.55	不 明	不明	なし	なし	なし	なし
8	RA032	隅丸方形	4.05×3.86	北西壁中央付近	削り貫き	なし	あり	なし	なし
9	RA035	隅丸方形	(一辺3.2m)	北西壁中央付近	削り貫き	なし	なし	なし	なし
10	RA036	隅丸方形	4.04×3.83	(北西壁中央付近)	不明	なし	なし	なし	なし
11	RA038	隅丸方形	2.40×2.35	不 明	不明	なし	なし	なし	あり

第20表 平安時代堅穴住居跡

No	遺構名	平面形	規 横m	カマドの位置	煙道	柱穴	貯蔵穴	壁溝	貼り床
1	RA016	隅丸方形	4.40×4.25	南東壁南寄り	不明	なし	なし	なし	なし
2	RA018	隅丸長方形	3.80×3.49	不 明	不明	なし	なし	なし	なし
3	RA019	隅丸方形	6.22×5.85	東 壁	削り貫き	なし	あり	なし	あり
4	RA020	隅丸長方形	4.09×3.49	南東壁南寄り	削り貫き	なし	あり	なし	なし
5	RA022	隅丸方形	4.04×3.75	南東壁南寄り	不明	なし	あり	なし	あり
6	RA023	隅丸方形	2.70×2.48	不 明	不明	なし	なし	なし	なし
7	RA024	隅丸方形	4.80×4.00	南東壁や北寄り	削り貫き	なし	あり	なし	あり
8	RA025	隅丸方形	2.74×2.66	南壁中央付近	削り貫き	なし	なし	なし	なし
9	RA028	隅丸方形	4.22×4.19	南東壁北東寄り	(削り貫き)	なし	あり	なし	なし
10	RA029	(隅丸方形)	(一辺2.9m)	東壁中央付近	削り貫き	なし	あり	なし	なし
11	RA031	隅丸方形	2.80×2.53	東壁南側	不明	なし	なし	なし	なし
12	RA033	隅丸方形	4.20×3.79	南東壁北東側	不明	なし	なし	なし	なし
13	RA034	隅丸方形	5.41×4.94	南東壁や南寄り	削り貫き	なし	あり	なし	なし
14	RA037	隅丸長方形	2.50×1.92	南東壁南寄り	削り貫き	なし	なし	なし	なし
15	RA039	隅丸方形	2.75×2.43	北壁中央付近	削り貫き	なし	なし	なし	あり
16	RA040	隅丸方形	3.26×3.10	東壁	削り貫き	なし	なし	なし	なし

ものもある。袖部は地山を削り出して構築しているもの、芯材に亞円錐や土師器片を転用し、黒色～黒褐色土と地山と思われる黄褐色土との混合土で被覆し構築したと思われるものがある。本年度調査では古墳時代末～奈良時代の住居跡のカマドの芯材に礫を用いているものは1棟もなく、芯材に礫が使用されているのは平安時代の住居跡のみであった。

煙道部は古墳時代末～奈良・平安時代ともに削り置き式のものが圧倒的に多く、推定のものを含め古墳時代末～奈良時代7棟、平安時代10棟である。他は削平により詳細が不明なもので、明らかに掘り込み式と判断できるものはない。煙出し部には、円形ないし橢円形の土坑が掘り込まれているものが多く、埋土の中～下位にかけて礫や土器片が含まれるものもみられる。

(2) 土坑

A調査区から38基、B調査区から9基の計47基検出している。平面形は隅丸方形、隅丸長方形、円形、橢円形、長楕円形、溝状、不整形と多岐にわたる。開口部の規模は径58cm～最大3.85m、深さ7～75cm前後を測る。これらのうち隅丸長方形や長楕円形のものは形状と出土遺物から古代の墓跡の可能性も考えられる。A調査区の11R区およびB調査区の溝状のものは縄文時代の陥落穴である可能性が高い。また、A調査区の12S区は本調査区の中で最も表土が薄く、耕作による削平や擾乱を受けている可能性が一番高い区域であり、出土遺物や形状から平安時代の墓跡と考えられるもの以外は近・現代のものと思われる。

(3) 溝跡

A調査区から9条検出している。規模は上幅0.25～2m、下幅0.15～1.25m、深さ3～53cm、長さ2.9～28mを測る。各溝跡とも調査区域外へ延びることや削平・擾乱により詳細は不明である。調査区北東際に位置するRG010溝跡は枝分かれし、調査区域外へ延びている。

(4) 柱穴状土坑

A調査区から31基、B調査区から14基の計45基検出された。確認された平面形は円形、楕円形、不整形である。A調査区のものは長軸径15～62cm、短軸径12～47cm、深さ7.8～36.5cmを測る。II層・III層を除去したIV層上面で検出されており、古代に属すると思われるが、規模や深さに規則性が見られず、建物跡を構成するには至らない。B調査区で検出したものは長軸径32cm～1.26m、短軸径22～60cm、深さ7.1～90.4cmを測る。A調査区と同様に、II層・III層を除去したIV層上面で検出されているが、現代の耕作痕も付近で確認されており、時期については不明である。14基のうち2基は他と埋土の様相が異なり古い時期のものである可能性がある。

2. 遺物

古墳時代末～奈良時代・平安時代の堅穴住居跡、土坑、溝跡等から出土している土器が主な遺物である。各時代の土器は「器種」と「焼成方法（酸化炎焼成・還元炎焼成）」によって大別し、これに成形技法および調整技法を加え細分した。焼成方法について、古墳時代末～奈良時代のものはA、B等のアルファベットの大文字を、平安時代のものについてはI、II等のローマ数字を分類の最初に用いることで時代の区別がわかりやすいようにした。掲載した遺物については第7～15表に一括して掲載している。

(1) 奈良時代

奈良時代の土器の分類は周辺の遺跡との比較検討のため、台太郎遺跡第18次調査報告書の分類を基に、同台太郎遺跡第23・26次調査報告書の分類を加味し行った。

今回の調査で出土した奈良時代の土器は、ほとんどが土師器である。器種は壺・高壺・鉢・甕（長胴・球胴・小型）・壺・手捏ねのミニチュア土器が確認されている。須恵器は甕の破片が極僅かに出土しているが、埋土の上層からの出土であり、他から流れ込んだものと考えられる。

<壺の分類>

焼成方法(群)	成形技法(類)	底部の形状	口縁部から底部にかけての段の有無		分類
			1:内外面とも有段	2:外面のみ有段	
A:酸化炎焼成 (土師器)	I:ロクロ不使用	M:丸底	1:内外面とも有段	A I M1	
			2:外面のみ有段	A I M2	
			3:内外面とも無段	A I M3	
		H:平底	1:内外面とも有段	A I H1	
			2:外面のみ有段	A I H2	
			3:内外面とも無段	A I H3	
	II:ロクロ使用	該当なし			
	B:還元炎焼成 (須恵器)	該当なし			

<甕の分類>

焼成方法(群)	成形技法(類)	器 形	分類	
			A I a	A I b
A:酸化炎焼成 (土師器)	I:ロクロ不使用	a:長胴形	A I a	
		b:球胴形		A I b
		c:小 型(器高25cm未満)	A I c	
	II:ロクロ使用	該当なし		
B:還元炎焼成 (須恵器)	該当なし			

<高壺>

出土数は極僅かで、器形が分かるのは89のみである。浅い壺部は内外面に段を持ち、脚部は短い「ハ」の字状をしている。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されている。

<壺>

壺については出土数が少ないため下記のように分類した。

A群……酸化炎焼成されているもの

B群……還元炎焼成されているもの（今回の調査では該当なし）

57は口縁部が欠損しているが、ほぼ完形に近いかたちでRA026竪穴住居跡の床面から出土した土器である。頭部と体部の境に段を持ち、体部は球胴に強く張り出している。体部内面はハケメ調整され、底部は平底である。

<鉢>

鉢についても出土数が少ないので下記のように分類した。

A群……酸化炭焼成されているもの

B群……還元炭焼成されているもの（今回の調査では該当なし）

掲載したのはRA036堅穴住居跡から出土した84の1点のみである。底部は短く直立して立ち上がり、体部下半は丸みを帯びている。口縁部はやや外傾している。内外面とも比較的丁寧にヘラミガキ調整され、内面には黒色処理も施されている。

<手捏ね>

RA014堅穴住居跡のカマド付近から2点、RA021堅穴住居跡から1点、RA026堅穴住居跡のカマド付近から1点、RA036の埋土から出土したものをミニチュア土器として掲載した。RA036から出土した80は平底、それ以外はすべて丸底で、胎土には金雲母が含まれている。31・59は「土器」とすべきではないかかもしれない。また、これら丸底のミニチュア土器が出土した堅穴住居跡はすべて1辺が6mを越える超大型の住居跡である。

上器の年代について

古墳時代末～奈良時代に属すると考えられる土器について概要をまとめると以下のようになる。

・壺はすべて酸化炭焼成され、体部内外面に段を持つもの、外面にのみ段または沈線を持つもの、内外面とも段を持たないものに分けられる。底部については丸底、平底共に見られるが丸底の割合が多い。
・壺も酸化炭焼成された長胴壺、球胴壺、小型壺（高さ25cm未満）に分けられるが、長胴壺が主体を占める。口唇部は丸いものが大半で、平坦なものは僅かである。底部は円盤状を成すものが多く、外側へ突出するものは少数である。この他の器種としては高杯、鉢、壺、手捏ねのミニチュア土器がある。また、確実に住居に伴うと考えられる須恵器は出土していない。

該期の土器について岩手県では、八木光則氏（1998）、伊藤博幸氏（1998）等の土器編年研究がある。これらを参考に本遺跡の遺構、遺物の年代を土器編年から考えてみたい。

RA032堅穴住居跡出土の壺（68・69）は、内外面に段を持ち、丸底で口縁部が直線的に外傾し聞く特徴から八木氏のB期、伊藤氏のc～d期に相当し、束縛式の新しい段階に併行する7世紀後半のものと思われる。RA038堅穴住居跡出土の壺（85・87・88）は内面無段で、外面のみに段を持つものの割合が高くなる。壺の口唇部は丸味を持ち、底部内底面は丸底風平底と平底が見られる。これらは八木氏のC期、伊藤氏のe期に相当し、国分寺下層式の古い段階にあたる8世紀前半のものと思われる。RA014・015堅穴住居跡出土の壺は外面のみ段を持ち、壺の口縁部は外反し、底部は円盤状で、内底面が平底を呈することから八木氏のC～D期、伊藤氏のe～g期に相当し、国分寺下層式にあたる8世紀代のものと思われる。RA021・026・035・036堅穴住居跡出土の壺は外面のみに段や沈線を持ち、平底状を呈するものが増えることから八木氏のD期、伊藤氏のf～g期に相当し、国分寺下層式の新しい段階に併行する8世紀後半のものと思われる。

以上から該期の上器は八木氏のB～D期、伊藤氏のd～g期にあたると考えられる。時期としては7世紀後半～8世紀後半が想定され、本遺跡も同時期の集落跡と考えられる。

(2) 平安時代

平安時代の土器の分類も周辺遺跡との比較検討のため、小幡遺跡第4次調査報告書の分類を基に、若干の変更を加え行った。各器種毎の分類は以下の通りである。

〈壺の分類〉

成形方法(群)	成形技法(種)	器面調整	分類
I : 煙化炎焼成 (土師器)	A : ロクロ使用で内面にヘラミガキ調整と 黒色処理が施されるもの	1 : 底部の切り離し技法が回転 糸切りで、再調整されない もの	I A 1
		2 : 底部の切り離し技法が回転 糸切りで、再調整されるも の	I A 2
		3 : 再調整のため底部切り離し 技法が不明なもの	I A 3
		4 : 底部の切り離し技法が静止 糸切りのもの	I A 4
		5 : 底部の切り離し技法が回転 ヘラ切りのもの	I A 5
	B : ロクロ使用で内外面ともロクロ横 の調節を持たないもの (赤焼き土器)	1 : 底部の切り離し技法が回転 糸切りのもの	I B 1
		2 : 底部の切離し技法が不明な もの	I B 2
		3 : 底部の切り離し技法が回転 ヘラ切りのもの	I B 3
		4 : 底部を切り離し後再調整し ているもの	I B 4
II : 運元炎焼成 (須恵器)	A : ロクロ使用で底部切り離し技法が回転 ヘラ切りのもの	1 : 底部切り離し後再調整され ないもの	II A 1
		2 : 底部切り離し後再調整され るもの	II A 2
	B : ロクロ使用で底部切り離し技法が回転 糸切りのもの	1 : 底部切り離し後再調整され ないもの	II B 1
		2 : 底部切り離し後再調整され るもの	II B 2

<高台付坏の分類>

焼成方法(群)	器面調整(類)	高台部の作り	分類
I : 酸化炎焼成 (土師器)	A : 内面にヘラミガキ調整と黒色処理が施されるもの	1 : 輪高台のもの 2 : 輪高台でないもの	I A 1 I A 2
	B : 内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないもの	1 : 輪高台のもの 2 : 輪高台でないもの	I B 1 I B 2
	C : 上記のA・Bどちらにも該当しないものの	1 : 輪高台のもの 2 : 輪高台でないもの	I C 1 I C 2
	II : 選元炎焼成 (須恵器)		該当なし
	<甕・壺の分類>		

<甕・壺の分類>

焼成方法(群)	器面調整(類)	分類
I : 酸化炎焼成 (土師器)	A : ロクロ使用のもの	I A
	B : ロクロ不使用のもの	I B
II : 選元炎焼成 (須恵器)	A : ロクロ使用のもの	II A
	B : ロクロ不使用のもの	II B

<耳皿> 今回の調査で出土した耳皿は、RA019堅穴住跡跡の1号カマド付近から完形で出土した121のみである。内外面ともロクロ痕以外の調整ではなく、柱状高台風の台には回転糸切り痕が確認できる。

上巻の年代について

- 平安時代に属すると考えられる土器について概要をまとめると以下のようになる。
 - ・坏は大部分が酸化炎焼成されたI群に属するもので、選元炎焼成されたII群に属するものは極少量で、掲載した2点(117・317)のみである。I群に属するものではロクロ痕以外の調整痕が見られないI群B類(赤焼き土器)の割合が多い。底部の切り離し技法は回転糸切りが上倒的に多く、その後に再調整されたと考えられるものは少数である。
 - ・甕は酸化炎焼成されたI群が多く、ロクロ使用のA類と不使用のB類が共伴して出土する例が多い。選元炎焼成されたII群は大型のものが多く、長頭瓶や小型の壺も見られるが少数である。

岩手県における該期の土器編年研究は既述の八木光則氏(1998)、伊藤博幸氏(1998)の他、相原康二氏(1981)、高橋信雄氏(1981)等の業績があり、これらを参考に本遺跡の遺構、遺物の年代を土器編年から考えていきたい。

RA019・033・040堅穴住跡跡出土の坏は、すべてロクロ成形されている。体部は丸味を持ち、内面黒色処理されるものと、ロクロ痕以外に調整の痕跡が認められないものが混在している。底部切り離し技法は回転糸切りで、再調整されるものは少数である。甕はロクロ使用のものと、不使用のものが共伴して出土している。これらの土器は八木氏のG~H期、伊藤氏のI~m期に相当し、9世紀後葉~10世紀前葉の上巻と

思われる。RA023・028・029・034堅穴住居跡出土の壺はすべてロクロ成形されたもので、多くがロクロ痕以外に調整痕を持たない壺である。底部切り離し技法は回転糸切りで、再調整は僅かである。壺はロクロ使用と不使用のものが共存して出土する。口縁部がゆるやかに矧く外反するものも見られることから八木氏のⅣ期、伊藤氏のm期に相当し、10世紀前葉の土器と思われる。RA016・020・022・024堅穴住居跡出土の壺はすべてロクロ成形されており、ほとんどがロクロ痕以外の調整痕を持たないものである。壺はロクロ不使用と使用のものが共存して出土するが、ロクロ使用的ものの割合が増加する。これらの土器は八木氏のⅠ期、伊藤氏のm～n期に相当し、10世紀中葉の土器と思われる。

以上から該期の土器は八木氏のG～Ⅰ期、伊藤氏のⅠ～n期、相原氏の第Ⅵ期、高橋氏のⅢ期—Ⅱ群にあると考えられる。時期は9世紀後葉～10世紀中葉と想定され、本遺跡も同時期の集落跡と考えられる。

3. 成果と課題

ここでは本年度調査で明らかとなった成果と今後の課題をあげまとめとしたい。

〔成果〕

- ①本遺跡は古墳時代末～奈良時代（7世紀後半～8世紀後半）と平安時代前半（9世紀後葉～10世紀中葉）に集落が営まれていたことが明らかとなった。
- ②本遺跡における東～北側にかけての段丘縁辺部における占地が明確になったことで、住居域が鹿妻塙農業用水路沿いの南北側に広がる可能性が考えられる。

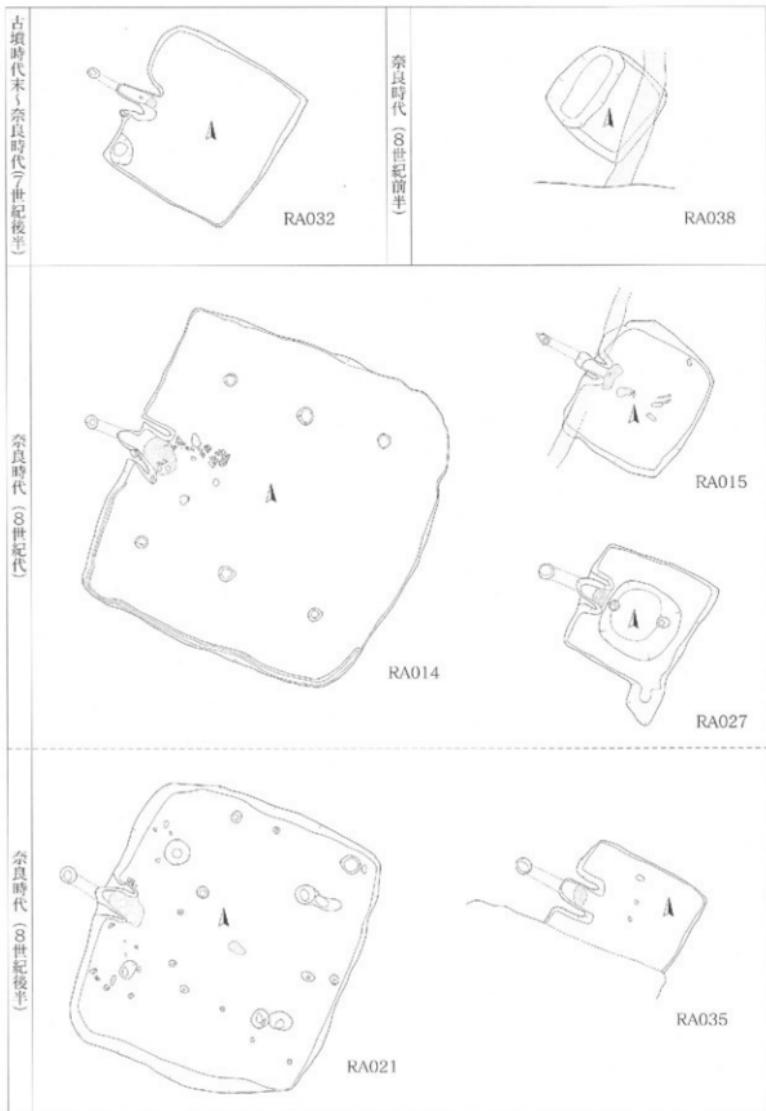
〔課題〕

- ①本遺跡から遺構、遺物が確認されていない、8世紀末～9世紀中葉の集落構造や変遷等について。
- ②（本年度調査では確認されなかったが、平成5・6年に盛岡市教育委員会が行った第6次および第6次補足調査において円形周溝1基が確認されていることから、）本遺跡と鹿妻塙農業用水路を挟んで隣接し、同様の円形周溝や古墳、方形周溝が多数確認されている飯岡沢田遺跡との関連について、および段丘下北東側に位置する熊堂B遺跡、および西北側約2kmに位置する古代城柵志波城跡との関連について。

これらの課題については、本遺跡を含めいずれの遺跡も来年度以降調査が継続されることから、その結果によって徐々に明らかになるものと思われる。最後に、本遺跡をはじめ周辺地域の調査が進み、当該地域の古代における集落構造や変遷が、より一層解明されることを期待する。

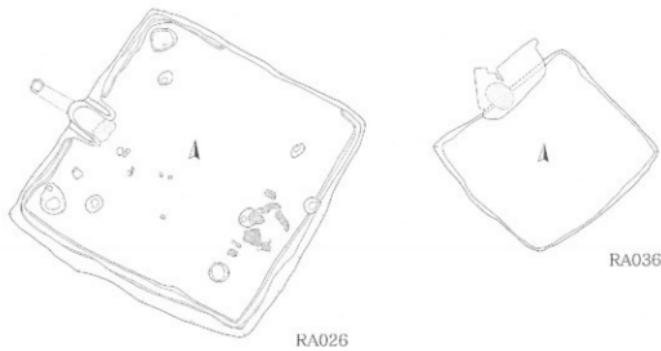
参考・引用文献

- 盛岡市教育委員会（1979）：「太田方八丁遺跡」昭和53年度発掘調査報告
仙台市教育委員会（1982）：「東北地方の古代城柵式官衙遺跡調査報告書」仙台市文化財調査報告書第43集
矢巾町教育委員会（1995）：「徳丹城跡—範囲確認調査、第1次3ヵ年計画」
盛岡市教育委員会（1998）：「盛岡市埋蔵文化財調査年報」平成5・6年度一
相原康二（1981）：「鳥海A遺跡」岩手県文化財調査報告書第59集 岩手県教育委員会
高橋信謙（1982）：「岩手の土器」岩手県立博物館
八木光則（1998）：「馬淵川流域」東北地方の古代集落 第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム資料
伊藤博幸（1998）：「北上盆地南部」東北地方の古代集落 第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム資料
羽柴直人・星 雅之（1994）：「白木野」II・III遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第200集
酒井宗孝（1996）：「小幡遺跡第4次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集
岩手県文化振興事業団（1999）：「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成9年度分）」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第282集
高橋義介（1999）：「台太郎遺跡第16次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第293集
小笠原健一郎（1999）：「熊堂B遺跡第5次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第293集
早坂 智（1999）：「宇田II遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第304集
菊地栄壽・小笠原健一郎（1999）：「本宮熊堂B遺跡第4次・鬼柳A遺跡第4次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第308集
高橋義介（1999）：「台太郎遺跡第15次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第309集
羽柴直人（2000）：「志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集
瀬清二郎（2000）：「向中野館跡第3次・小幡遺跡第10次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第338集
高橋義介（2001）：「台太郎遺跡第18次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集
村木 敬（2002）：「里浦跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第383集



第102図 竪穴住居跡集成図（1）

奈良時代（8世紀後半）

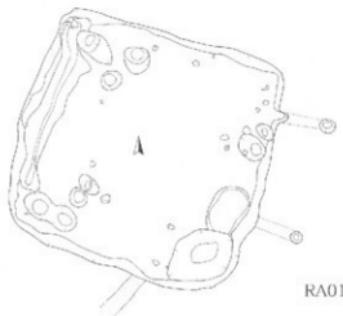


RA026



RA036

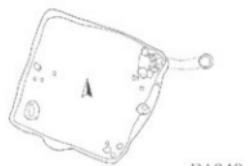
平安時代（9世紀後葉～10世紀後葉）



RA019

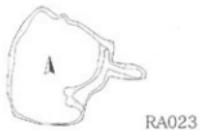


RA033



RA040

平安時代（10世紀前葉）



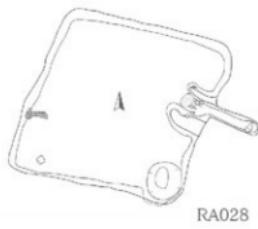
RA023



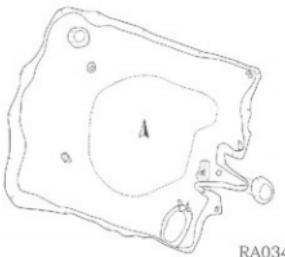
RA029

第103図 竪穴住居跡集成図（2）

平安時代
(10世紀前葉)

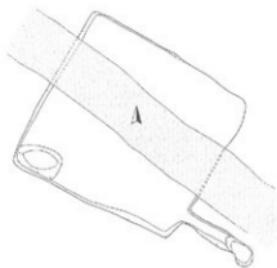


RA028



RA034

平安時代
(10世紀中葉)



RA016



RA020



RA022



RA024

第104図 窠穴住居跡集成図 (3)

奈良時代
(詳細不明)



RA017



RA030

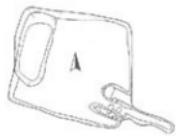
平安時代
(詳細不明)



RA018



RA025



RA031



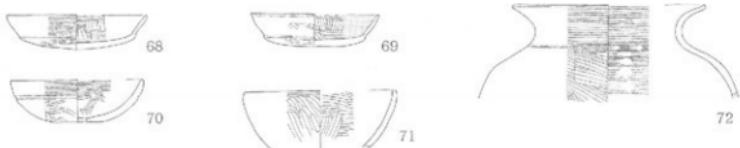
RA037



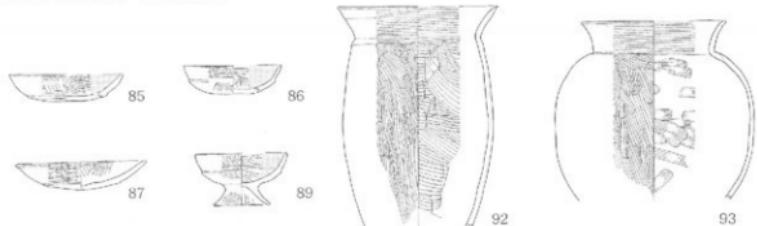
RA039

第105図 墓穴住居跡集成図 (4)

RA032 (古墳時代末～奈良時代 7世紀後半)



RA032 (奈良時代 8世紀前半)

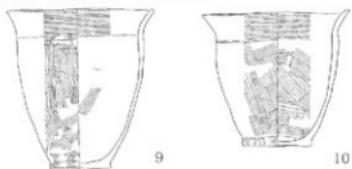


RA014 (奈良時代 8世紀代)

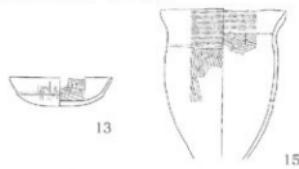


第106図 遺構別土器集成図（1）

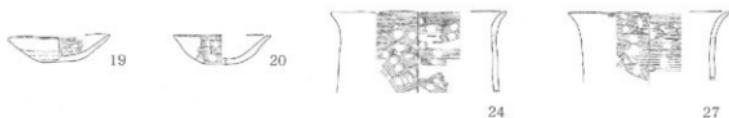
RA014 (奈良時代 8世紀代)



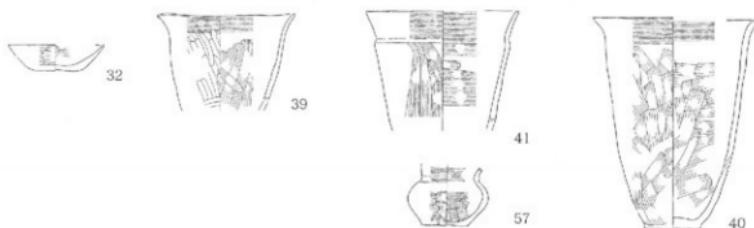
RA015 (奈良時代 8世紀代)



RA021 (奈良時代 8世紀後半)



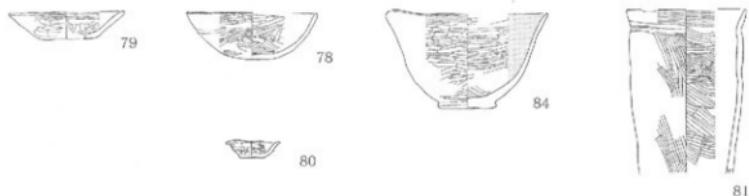
RA026 (奈良時代 8世紀後半)



RA035 (奈良時代 8世紀後半)

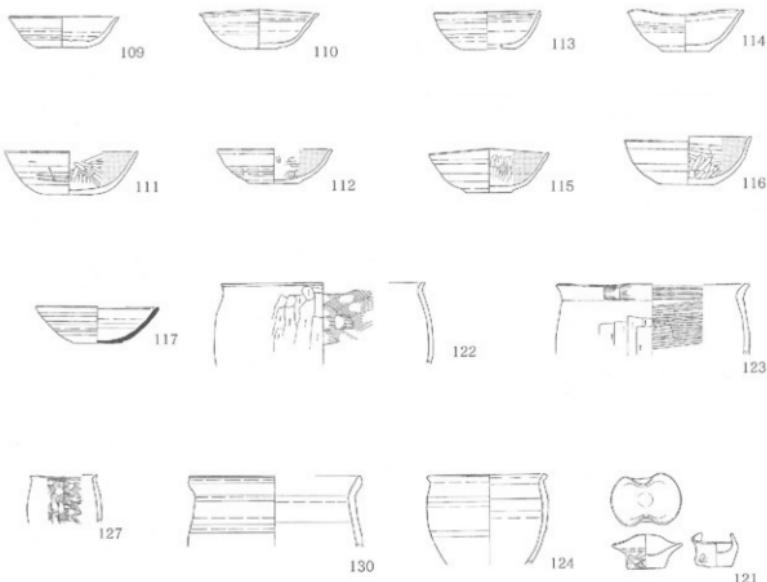


RA036 (奈良時代 8世紀後半)

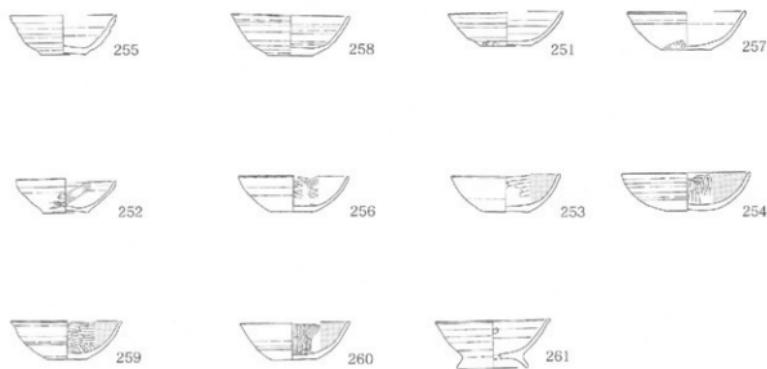


第107図 遺構別土器集成図 (2)

RA019 (平安時代 9世紀後葉～10世紀前葉)

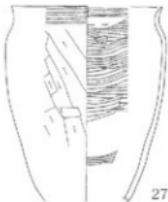


RA033 (平安時代 9世紀後葉～10世紀前葉)

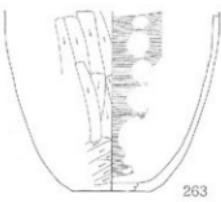


第108図 遺構別土器集成図（3）

RA033 (平安時代 9世紀後葉～10世紀前葉)



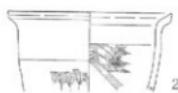
271



263



267



270



268

RA040 (平安時代 9世紀後葉～10世紀前葉)



307



309



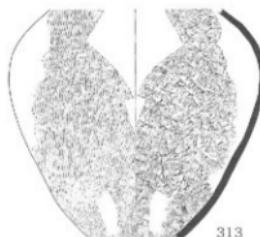
308



311

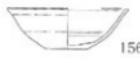


312



313

RA023 (平安時代 10世紀前葉)



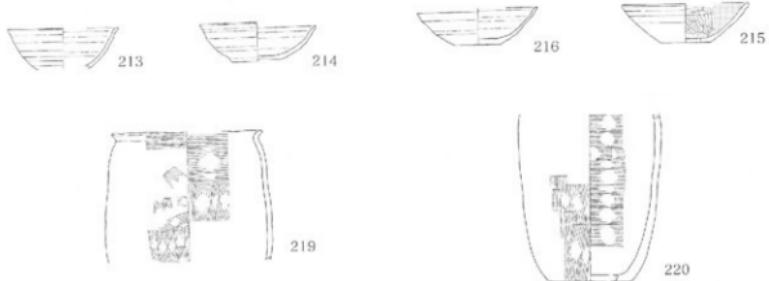
156



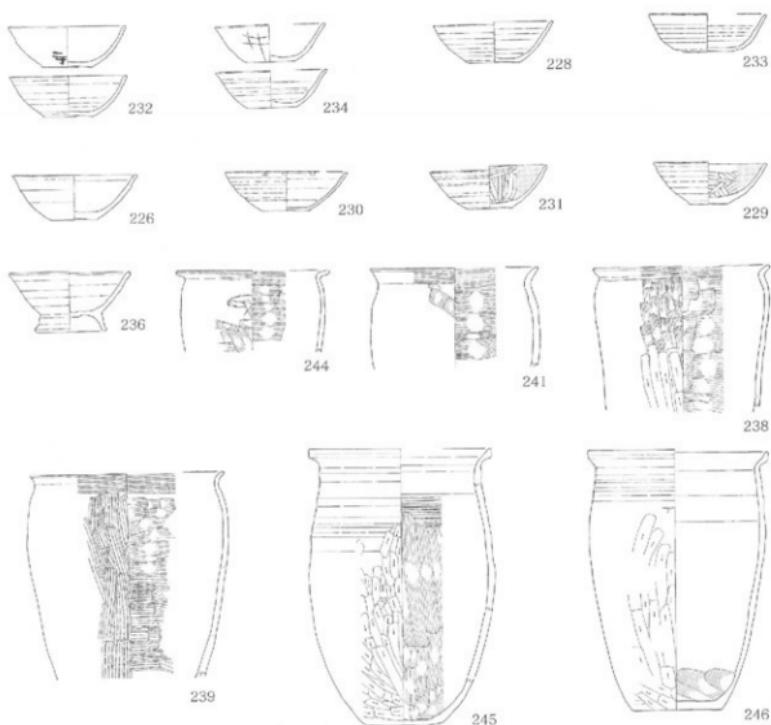
157

第109図 遺構別土器集成図 (4)

RA028 (平安時代 10世紀前葉)

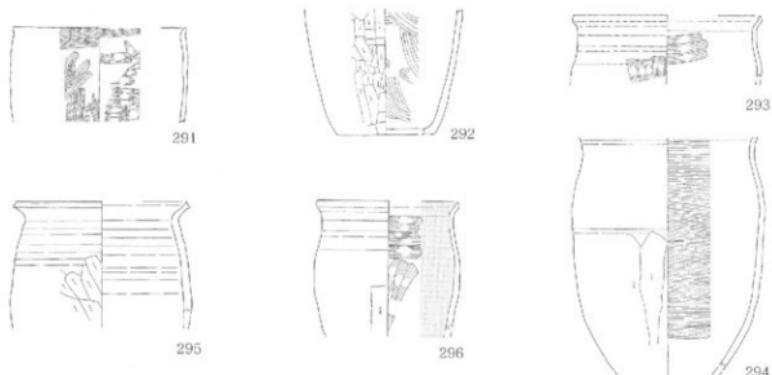
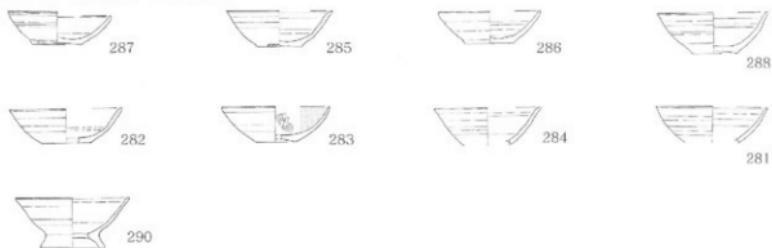


RA029 (平安時代 10世紀前葉)



第110図 遺構別土器集成図 (5)

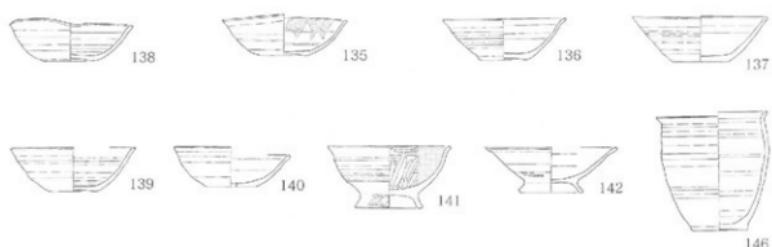
RD034 (平安時代 10世紀前葉)



RD016 (平安時代 10世紀中葉)



RD020 (平安時代 10世紀中葉)



第111図 遺構別上器集成図 (6)

RD022 (平安時代 10世紀中葉)



148



149



151



152

RD024 (平安時代 10世紀中葉)



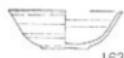
160



161



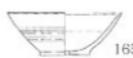
162



163



164



165



166



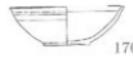
167



168



169



170



171



172



174



179



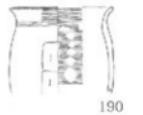
180



194



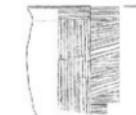
178



190



187



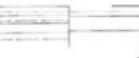
193



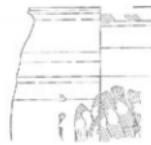
185



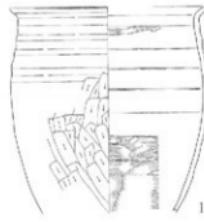
202



186



184



183



204

第112図 遺構別土器集成図 (7)

VI. 分析・鑑定結果

岩手県、野古A遺跡第12次調査における種実同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができます。

2. 試料

試料は、野古A遺跡第12調査、RA024（平安時代）の北側床面（サンプル1）、カマド右側（サンプル2）、カマド左側（サンプル3）より採取された堆積物3点である。

3. 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) サンプル1、2（50cm³）、サンプル3（6cm³）に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 搅拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。
- 3) 残りを双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 所見

分析の結果、野古A遺跡第12調査のRA024（平安時代）の北側床面（サンプル1）、カマド右側（サンプル2）、カマド左側（サンプル3）の堆積物からは種実は検出されなかった。もともと種実遺体が堆積されなかつたか、堆積はしたもののが分解あるいは燃焼してしまったものと考えられる。

参考文献

- 南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実、月刊考古学ジャーナルNo.355、ニューサイエンス社、p.18-22。
南木睦彦（1993）葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283。

野古A遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

野古A遺跡は、岩手県盛岡市下庭妻に所在し、零石川右岸の河岸段丘線に立地する。本遺跡の発掘調査では、奈良～平安時代の住居跡をはじめ、縄文時代の陥り穴と思われる土坑や溝跡、柱穴などの遺構や土師器や須恵器などの遺物が確認されている。

今回の分析調査は、野古A遺跡から検出された住居跡の年代に関する資料を得るために、住居跡から出土した炭化材を対象として、放射性炭素年代測定を実施する。さらに、分析試料である炭化材の由来に関する情報を得るために、樹種同定も合わせて実施する。

1. 試料

試料は、奈良時代と考えられる竪穴住居跡（RA015）から出土した炭化材（サンプル1）1点と、平安時代と考えられる竪穴住居跡（RA024）から出土した炭化材（サンプル2）1点の計2点である。これら2点の炭化材を対象に、放射性炭素年代測定・樹種同定を実施する。

・サンプル1

サンプル1は、竪穴住居跡（RA015）の床面から出土した炭化材である。本住居跡からは、炭化材は3点検出されているが、発掘調査時の所見では、本住居跡では、カマドから焼土が確認されているのみであることから、焼失住居の可能性は示唆されていない。

・サンプル2

サンプル2は、竪穴住居跡（RA024）の床面から出土している。本住居跡北西側を中心に多量の炭化材が検出され、壁面などにも焼土が認められることから焼失住居の可能性が指摘されている。なお、住居跡覆土からは、十和田a火山灰（To-a）とみられる火山灰の小ブロックの混入が認められている。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は質量分析器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、標準試料PDB (白亜紀のペレムナイト類の化石) の測定値を基準として、それからの差を計算し、千分位差 (‰; パーミル) で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

(2) 炭化材同定

木口（横断面）・柵口（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の判断面を作製し、实体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1に示す。野古A遺跡から検出された住居跡の測定年代値（補正年代値）は、竪穴住居跡（RA015）から出土した炭化材は約1260年前、竪穴住居跡（RA024）から出土した炭化材は約1110年前の値を示す。

(2) 炭化材同定

結果を表1に示す。炭化材はいずれも広葉樹で、豊穴住居跡（RA015）から出土した炭化材はクリ、豊穴住居跡（RA024）から出土した炭化材はコナラに同定された。以下に、各種類の主な解剖学的特徴を記す。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔隙部は1～4列、孔隙外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔隙部は1～2列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

表1 放射性炭素年代測定および炭化材同定結果

遺構名	出土位置	試料の質	樹種	補正年代BP	$\delta^{13}C (\text{‰})$	補正年代BP	Code.No.
豊穴住居跡(RA015)	床面	炭化材	クリ	1260±30	-27.35±0.83	1280±30	IAAA-10549
豊穴住居跡(RA024)	床面	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	1110±30	-25.94±0.67	1120±30	IAAA-10550

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

4. 考察

野古A遺跡から検出された住居跡の測定年代値（補正年代値）は、豊穴住居跡（RA015）から出土した炭化材は7世紀末頃、豊穴住居跡（RA024）から出土した炭化材は9世紀頃に相当する値を示す。

ところで、放射性炭素年代は、測定法自体が持つ誤差や、測定の前提条件である大気中の ^{14}C の濃度が過去において一定ではなかったことなどから、年輪などから測定されたいわゆる曆年代とは一致しない。これらのことから、年輪年代による曆年代既知の年輪についての放射性炭素年代測定を実施することで、曆年代と放射性炭素年代を両輪とする補正曲線が作られている (Stuiver, M. et al. 1998)。この補正曲線によると補正された曆年代のばらつきが大きい場合があり、今回測定された年代値では、豊穴住居跡（RA015）から出土した炭化材では、曆年代は放射性炭素年代より最大で約90年ほど新しくなり、豊穴住居跡（RA024）から出土した炭化材では最大で約140年ほど新しくなる。このことから、今回の測定試料の曆年代は、豊穴住居跡（RA015）から出土した炭化材は8世紀頃、豊穴住居跡（RA024）から出土した炭化材は10世紀頃に相当する年代となる。

今回分析を実施した分析試料は、いずれも住居跡床面から出土した炭化材であることから、遺構との共伴性が高いと考えられることから、遺構構築時または使用時の年代を示している可能性が高い。したがって、豊穴住居跡（RA015）は7世紀末頃～8世紀頃、豊穴住居跡（RA024）は、9～10世紀頃の遺構と考えられる。

今後は、これら遺構の詳細な年代の特定のため、同一遺構内の試料を対象により多くの分析調査を実施し評価するとともに、分析試料の出土状況や出土遺物から得られる考古学的所見と合わせ検証することが望まれる。

引用文献

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24, 000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083

平成13年度
野古A遺跡出土土器胎土分析業務委託

報 告 書

平成14年3月

(株) 第四紀 地質研究所

目 次

- 1 実験条件
- 2 実験結果の取扱
- 3 X線回折試験結果
 - 3-1 タイプ分類
 - 3-2 石英-斜長石の相関について
- 4 化学分析結果
 - 4-1 SiO_2 - Al_2O_3 の相関について
 - 4-2 Fe_2O_3 - MgO の相関について
 - 4-3 K_2O - CaO の相関について
 - 4-4 TiO_2 - MnO について
- 5 まとめ

図 表 目 次

- 第1図 Qt-Pt 図
- 第2図 SiO_2 - Al_2O_3 図
- 第3図 Fe_2O_3 - MgO 図
- 第4図 K_2O - CaO 図
- 第5図 TiO_2 - MnO 図

- 第1表 胎土性状表
- 第2表 化学分析表
- 第3表 タイプ分類一覧表
- 第4表 組成分類表

X線回折試験チャート (巻末)

化学分析表 (巻末)

写 真 集

土器及び断面写真

B E I (反射電子) 写真

鑑定報告

(株) 第四紀地質研究所 井上 嶽

X線回折試験及び化学分析試験

1 実験条件

1—1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1—2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02° 計数時間: 0.5秒。

1—3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイヤグラム

三角ダイヤグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont、Mica、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトはMont/Mont+Mica+Hb*100でパーセントとして求め、同様にMica,Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1～4はMont,Mica,Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

2) Mont-Ch, Mica-Hb菱形ダイヤグラム

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、

a) 3成分以上含まれない、b) Mont,Chの2成分が含まれない、

c) Mica,Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。

Mont-Ch,Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100と計算し、Mica,Hb,Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイヤグラム内にある1～7はMont,Mica,Hb,Chの4成分を含み、各辺はMont,Mica,Hb,Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 図、 $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$ 図、 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3 X線回折試験結果

3—1 タイプ分類

第1表胎土性状表には野古A遺跡から出土した須恵器のX線回折試験結果が記載してある。

第3表タイプ分類一覧表に示すように土器胎土はAタイプだけが検出された。

Aタイプ: Mont,Mica,Hb,Chの4成分に欠ける。

Mulliteの検出される須恵器は高温で焼成されているため、鉱物が熱により分解し、ガラスに変質している。そのため4成分が検出されない。

野古A遺跡の須恵器はムライト (Mullite) とクリストバライト (Crystobalite) が検出される。ムライト (Mullite) とクリストバライト (Crystobalite) は高温で焼成されたときに生成する鉱物で、焼成温度の目安となる。ムライトとクリストバライトの2種類が検出される場合の焼成温度は約1100~1200°C、クリストバライト1種類が検出されるものは約1000~1100°C、ムライトとクリストバライトの2種類が検出されない場合には約1000°C以下の温度領域にあると仮定される。この仮定に基づく分類では須恵器の甕からはムライトとクリストバライトの2種類が検出され、高温焼成の環境にある。野古A-6はクリストバライト1種類が検出され、他の須恵器よりは低い温度領域にある。

3—2 石英 (Qtz) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第1図 $Q_t - P_l$ 図には野古A遺跡から出土した須恵器が記載してある。図に示すように、2つの領域に分布する。

Q_t 一小： Q_t が1000～2000、 P_l が50～150の領域に分布する。

Q_t 一大： Q_t が2500～3400、 P_l が120～270の領域に分布する。

Q_t ：大は P_l の強度が高く、 Q_t ：小の須恵器より焼成温度が低い可能性がある。

4 化学分析結果

第2表化学分析表には野古A遺跡から出土した須恵器の蛍光X線分析結果が記載してある。

4-1 $S_iO_2 - Al_2O_3$ の相関について

第2図 $S_iO_2 - Al_2O_3$ 図に示すように野古A遺跡の須恵器は S_iO_2 が中領域に集中する。

タイプ：I— S_iO_2 が63～69%、 Al_2O_3 が18～25%の領域に集中する。

野古A遺跡の須恵器全部がこの領域に入る。

4—2 Fe₂O₃—MgOの相関について

第3図Fe₂O₃—MgO図に示すように野古A遺跡の須恵器はFe₂O₃が中領域に集中し、“その他”とに分類される。

タイプ：I—Fe₂O₃が4~9%、MgOが0%の領域に分布する。

野古A遺跡の須恵器の大半がこの領域に入る。

“その他”—野古A—6はMgOが0.2%+と高く、異質である。

4—3 K₂O—CaOの相関について

第4図K₂O—CaO図に示すように須恵器はK₂Oが中領域に集中する。

タイプ：I—K₂Oが1.6~3.0%、CaOが0.2~0.5%の領域に分布する。

野古A遺跡の須恵器全部がこの領域に入る

4—4 TiO₂—MnOの相関について

第5図TiO₂—MnO図に示すように野古A遺跡の須恵器はTiO₂が中領域に集中し、“その他”とに分類される。

タイプ：I—TiO₂が0.5~1.4%、MnOが0~0.4%の領域に分布する。

野古A遺跡の須恵器の大半がこの領域に入る。

“その他”一野古A-1はTiO₂が1.6%+と大きく、異質である。

5　まとめ

野古A遺跡の土器分類は第4表組成成分類表に取りまとめた。

- 1) 須恵器は焼成温度が高く、鉱物が高温のためにガラスに変質して4成分が検出されない。そのため、Aタイプだけが検出された。
- 2) 焼成温度は高温焼成の際に生成するムライトとクリストバライトの生成状況で検討した。須恵器はムライトとクリストバライトの2種類が検出され、高い焼成環境にある。野古A-6はクリストバライト1種類が検出され、焼成環境は他の須恵器よりも低い。
Q t-P Iの相関からすると、高い焼成環境の中でも、Q t:大の土器はQ t:小の土器より焼成温度が低いと推察される。(高温になるほどP Iは分解してガラスに変質し、P Iの強度は低くなる。)
- 3) 土器胎土のX線回折試験と蛍光X線分析では、野古A遺跡出土須恵器の胎土はタイプ:Iが中心で、そのほとんどが該当する。土器胎土の原土はほとんど12個とも組成が類似する。
- 4) 砂の混合比であるQ t-P Iの相関では、同じ粘土を使いながら砂の混合比が異なり、Q t:小とQ t:大の2タイプがあり、この2タイプは制作集団が異なるのではないか。
- 5) 野古A-6は焼成環境がいくぶん異なり、MgOの値も少し高く、この土器は在地近傍の異なる土器であるかもしれない。

第1表 胚土性状表

試料 No	タイプ 分類	組成分類										粘土鉱物および造岩鉱物						備 考
		Mn-Mg-Hb	Mg-Ca-Mg-Hb	Mn-Ca	Hb	Ca(F) ₂	Ca(Na) ₂	Cr	Crist.	Mullite	K-fels	Halley	Kato	Pyrite	Au	鉱物		
野古A-1	A	1.4	20					1334	136	645	232			203		巻	9~10°C	
野古A-2	A	1.4	20					1102	92	900	182			146		巻	9~10°C	
野古A-3	A	1.4	20					1529	83	688	249			174		巻	9~10°C	
野古A-4	A	1.4	20					1926	118	229	176			171		巻	9~10°C	
野古A-5	A	1.4	20					3184	244	156	58			71		巻	9~10°C	
野古A-6	A	1.4	20					2570	200	100						巻・壺	9~10°C	
野古A-7	A	1.4	20					1824	82	744	172			201		巻	9~10°C	
野古A-8	A	1.4	20					2922	178	159	63					巻	9~10°C	
野古A-9	A	1.4	20					1413	72	212	109			131		巻	9~10°C	
野古A-10	A	1.4	20					1495	75	197	135			177		巻	9~10°C	
野古A-11	A	1.4	20					1600	96	132	109			148		巻	9~10°C	
野古A-12	A	1.4	20					2694	129	190	67			72		巻	9~10°C	

Mont : モンモリナイト
 Mica : 突母類 Hb : 角閃石 Ch : 錫鉄石 Crist: Fe一次反応
 K-fels : カオリナイト Kato : ハロサイト Pyrite: 黄鐵鉄
 Halley : 普通輝石
 Au : クリストバライト

第2表 化学分析表

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	器種	器型	時期
野古A-1	1.01	0.00	22.34	66.12	1.87	0.30	1.64	0.07	4.24	0.19	100.00	須恵器	壺	9~10°C
野古A-2	0.48	0.00	24.49	66.89	2.00	0.44	1.12	0.17	5.76	0.00	99.98	須恵器	壺	9~10°C
野古A-3	0.64	0.00	22.75	66.89	2.18	0.47	1.08	0.21	5.76	0.00	100.00	須恵器	壺	9~10°C
野古A-4	0.90	0.00	22.32	68.45	2.51	0.31	1.16	0.36	3.99	0.00	100.00	須恵器	壺	9~10°C
野古A-5	0.74	0.00	21.98	64.77	2.12	0.40	0.77	0.00	9.22	0.00	100.00	須恵器	壺	9~10°C
野古A-6	1.21	0.22	20.66	64.05	2.36	0.49	0.61	0.32	10.08	0.00	100.00	須恵器	壺・壺	9~10°C
野古A-7	0.51	0.00	21.62	67.65	2.07	1.04	0.15	6.74	0.00	100.00	須恵器	壺	9~10°C	
野古A-8	0.74	0.00	21.62	68.23	2.28	0.44	1.34	0.15	5.18	0.02	100.00	須恵器	壺	9~10°C
野古A-9	1.29	0.00	20.90	66.14	2.82	0.33	0.89	0.23	7.31	0.09	100.00	須恵器	壺	9~10°C
野古A-10	1.13	0.00	21.06	66.23	2.81	0.30	0.74	0.38	7.21	0.16	100.02	須恵器	壺	9~10°C
野古A-11	1.41	0.00	22.53	65.72	2.64	0.40	1.06	0.17	5.92	0.15	100.00	須恵器	壺	9~10°C
野古A-12	1.59	0.00	22.70	63.75	2.01	0.41	0.87	0.10	8.35	0.20	99.98	須恵器	壺	9~10°C

第3表 胎土性状表

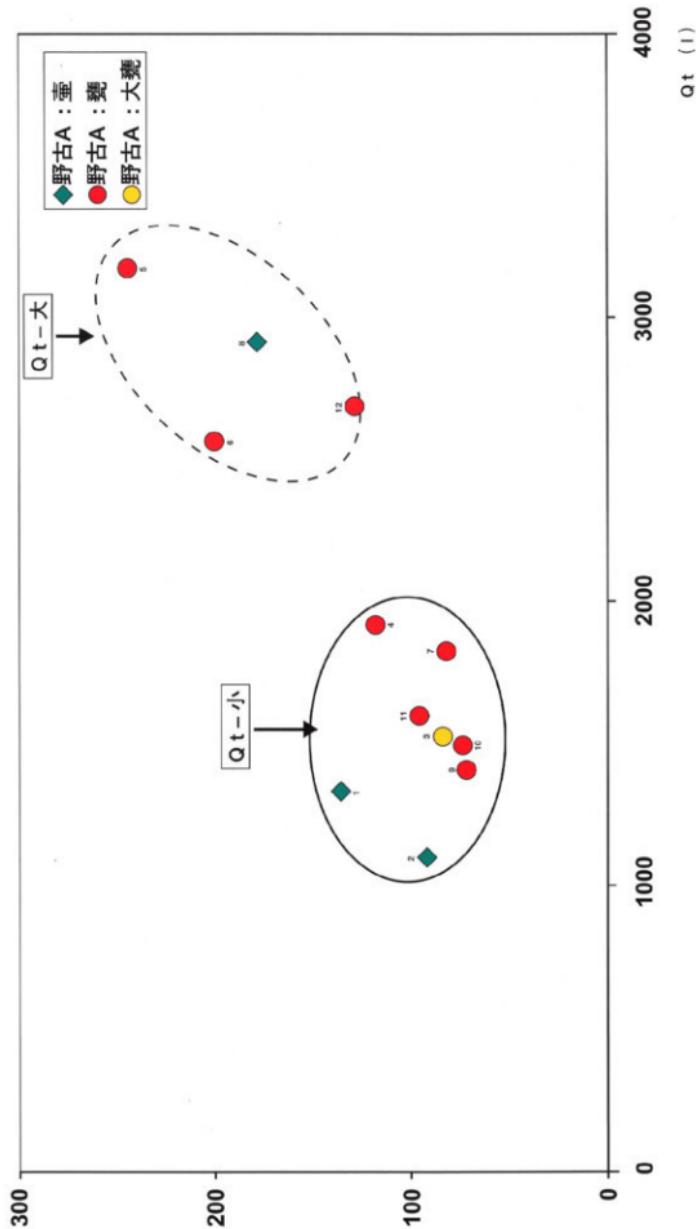
試料 No	タイプ 分類	備 考		
		器種	器型	時期
野古A-1	A	須恵器	壺	9~10CE
野古A-2	A	須恵器	壺	9~10CE
野古A-3	A	須恵器	大甕	9~10CE
野古A-4	A	須恵器	甕	9~10CE
野古A-5	A	須恵器	甕	9~10CE
野古A-6	A	須恵器	甕・壺	9~10CE
野古A-7	A	須恵器	甕	9~10CE
野古A-8	A	須恵器	壺	9~10CE
野古A-9	A	須恵器	甕	9~10CE
野古A-10	A	須恵器	甕	9~10CE
野古A-11	A	須恵器	甕	9~10CE
野古A-12	A	須恵器	甕	9~10CE

第4表 胎土性状表

試料 No	タイプ 分類	備 考			Qt-Pt	Fe-Mg
		器種	器型	時期		
タイプ：I Qt：小						
野古A-1	A	須恵器	壺	9~10CE	Qt：小	
野古A-2	A	須恵器	壺	9~10CE	Qt：小	
野古A-3	A	須恵器	大甕	9~10CE	Qt：小	
野古A-4	A	須恵器	甕	9~10CE	Qt：小	
野古A-7	A	須恵器	甕	9~10CE	Qt：小	
野古A-9	A	須恵器	甕	9~10CE	Qt：小	
野古A-10	A	須恵器	甕	9~10CE	Qt：小	
野古A-11	A	須恵器	甕	9~10CE	Qt：小	
タイプ：I Qt：大						
野古A-5	A	須恵器	甕	9~10CE	Qt：大	
野古A-8	A	須恵器	壺	9~10CE	Qt：大	
野古A-12	A	須恵器	甕	9~10CE	Qt：大	
タイプ：I Qt：大 MgO：高						
野古A-6	A	須恵器	甕・壺	9~10CE	Qt：大	MgO：高

P I (1)

第1図 Q t - P I 図



Al₂O₃ (Wt %)

30

第2図 SiO₂—Al₂O₃図

25

20

15

65

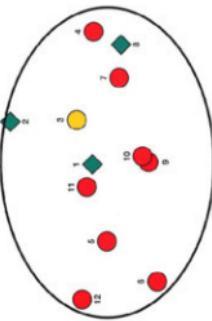
60

75

SiO₂ (Wt %)

- 野古A：壺
- 野古A：甕
- 野古A：大甕

タイプ：I

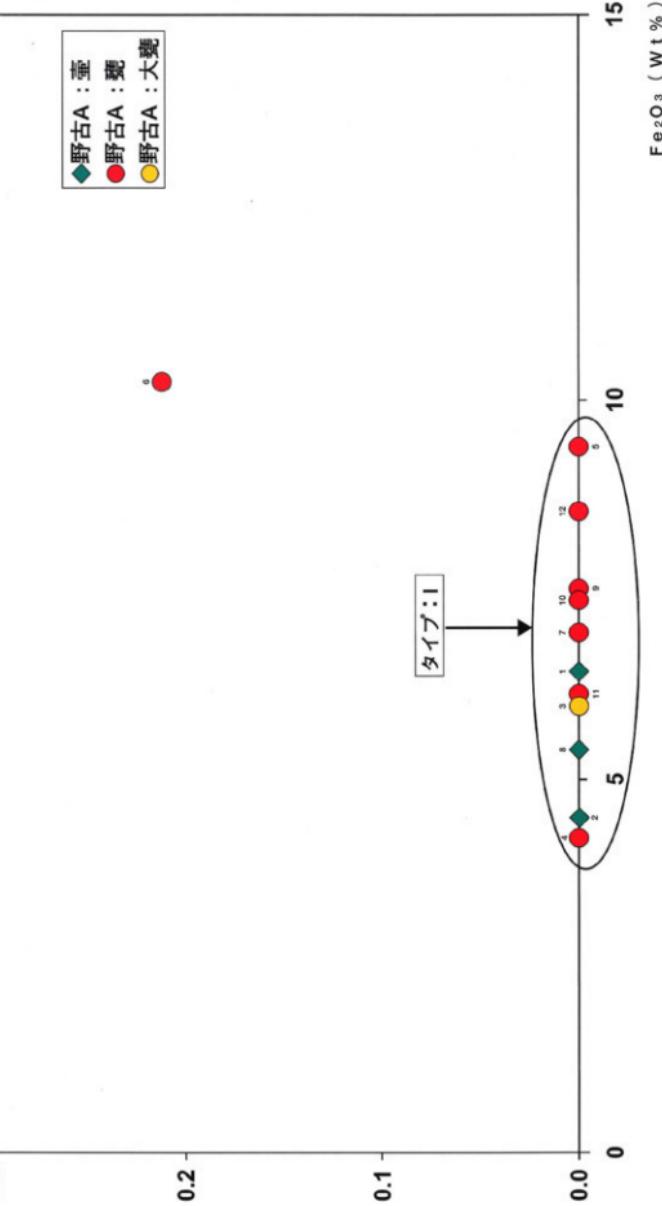


MgO (Wt %)

0.3

第3図 Fe_2O_3 —MgO図

◆野古A：壺
●野古A：甌
○野古A：大甌



CaO (Wt %)

1.0

0.5

0.0

第4図 K₂O—CaO図

K₂O (Wt %)

5

4

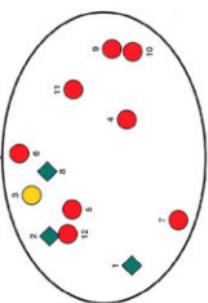
3

2

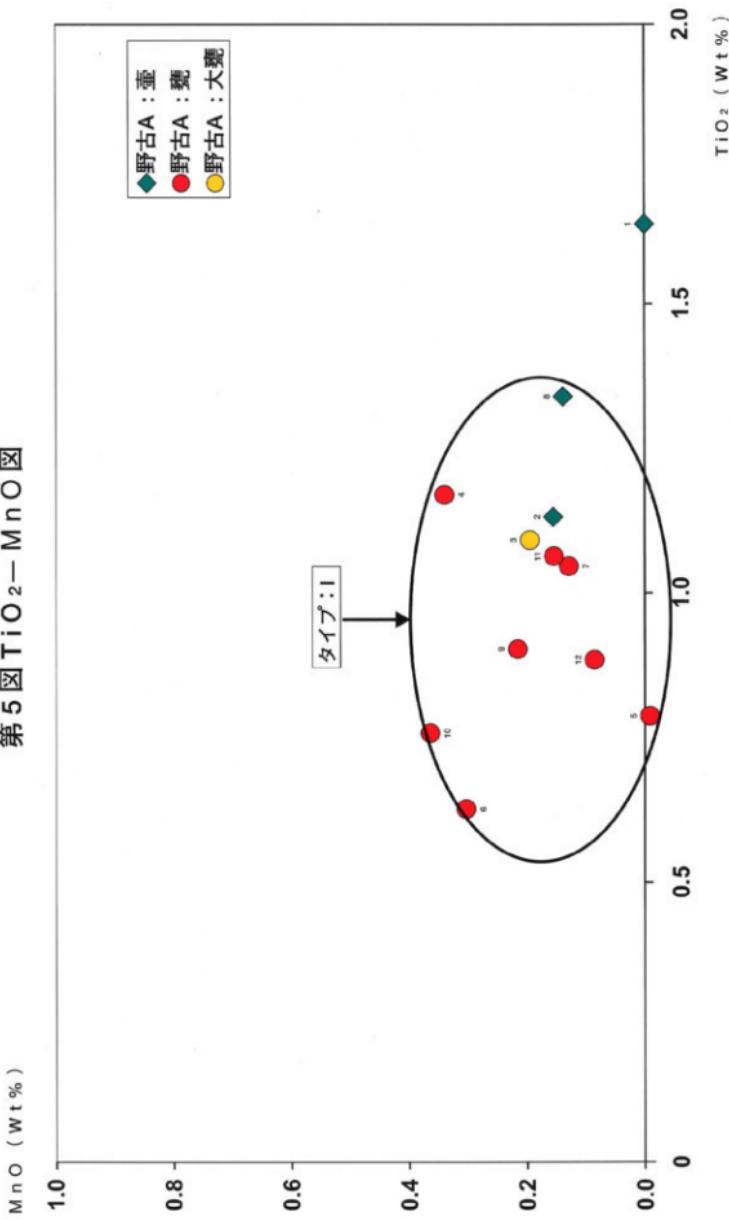
1

- ◆野古A：壺
- 野古A：甕
- 野古A：大甕

タイプ：I



第5図 TiO_2-MnO 図



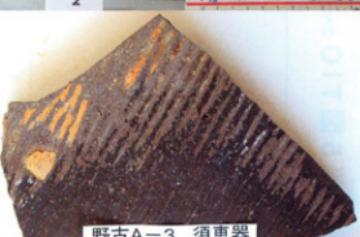
土器及び断面写真 野古A1~4



野古A
1



野古A
2



野古A-3 須恵器

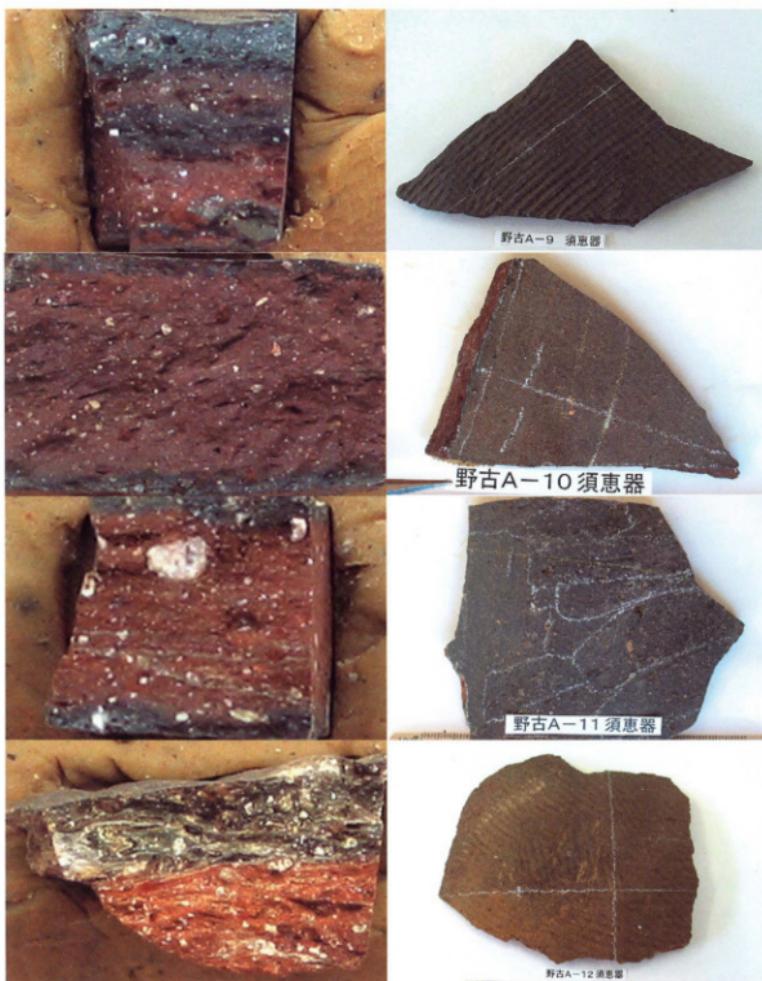


野古A-4 須恵器

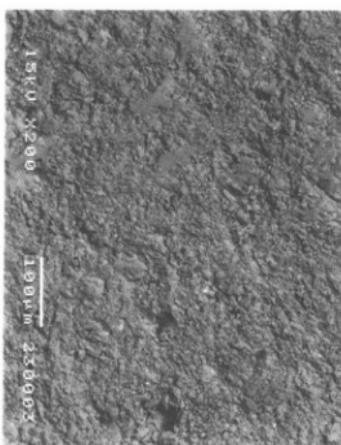
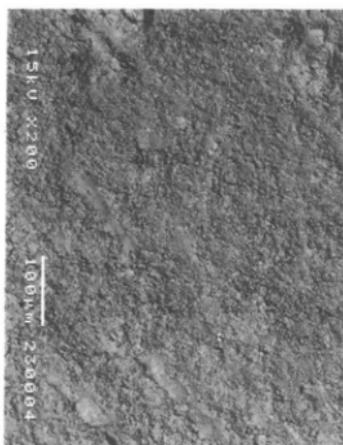
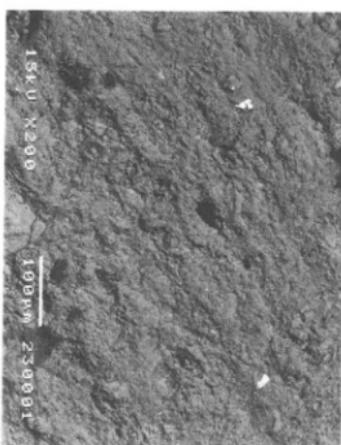
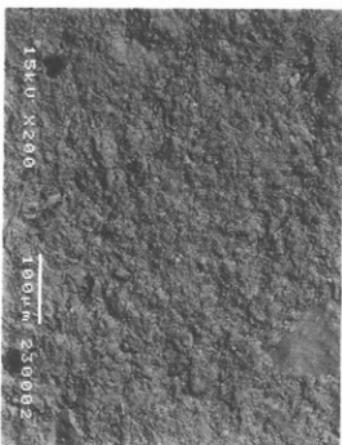
土器及び断面写真 野古A5~8

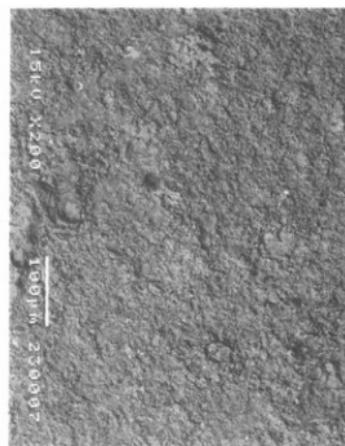
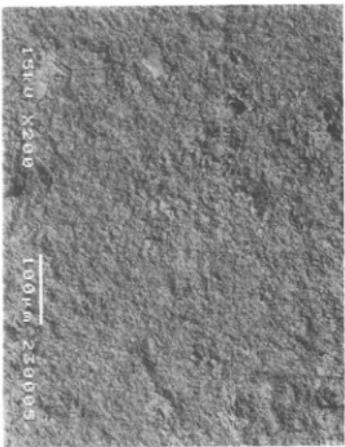


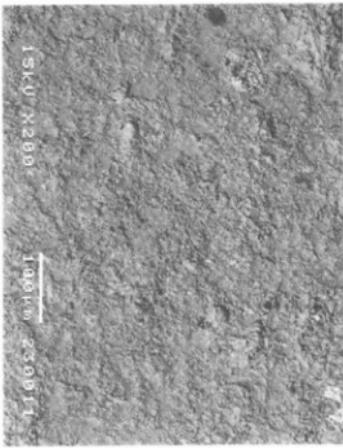
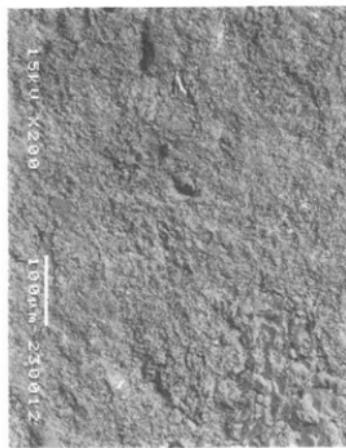
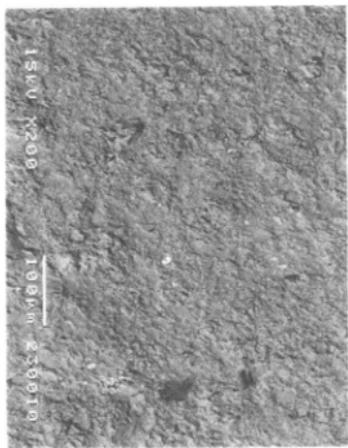
土器及び断面写真 野古A9~12



野古A遺跡電子顕微鏡写真

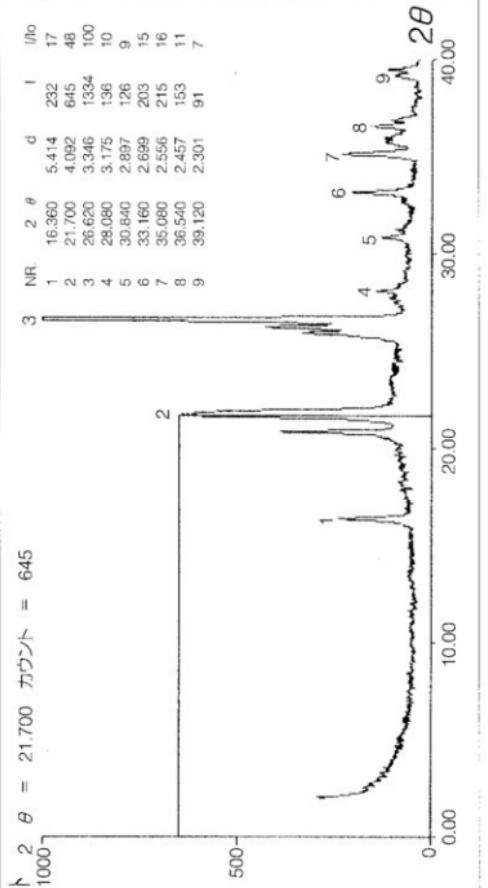






JDX-series

カウント 2 $\theta = 21.700$ カウント = 645



データ処理

JDX : B:N1.SM

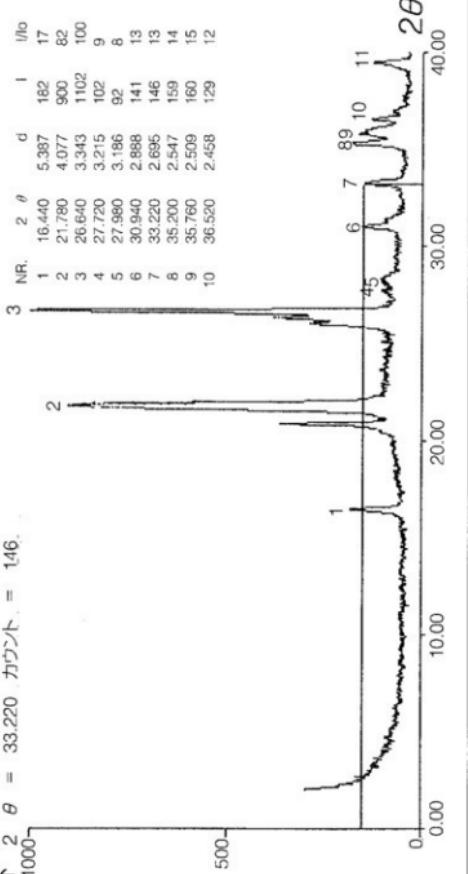
サンプル : JCA, ZI, ツブ, 9-10C

マニュアル オート 追加 削除 Xスケール Yスケール ファイル 出力条件

JDX-series

カウント 2 θ = 33.220 カウント = 146.

π -データ処理

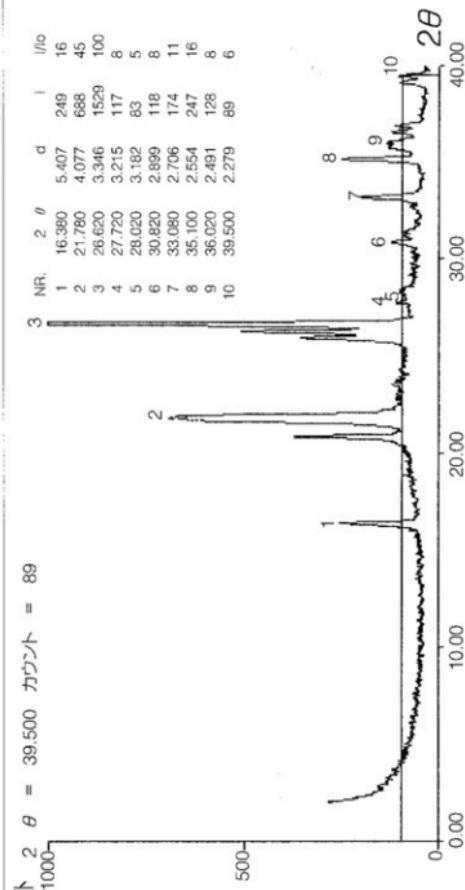


7ファイル : B:N-2.SM

サブル : ノコギリ, 丸鉛, 9-10C

マニコブツ オーバル Xスケール Yスケール ファイル 出力条件

JD-X - series



ファイル : B:N-3.SM

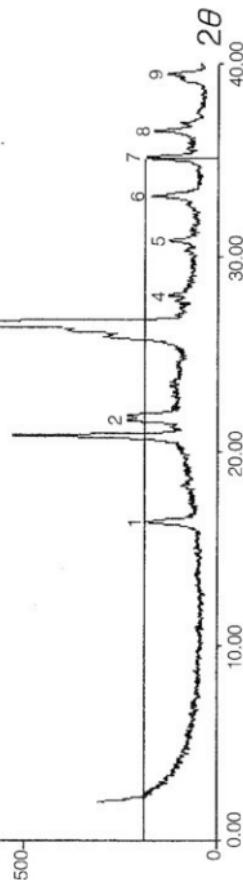
サブル : ノコ, XI, B-カ, 9-10

マニピュレーター ファイル ユスケーラー ファイル 出力条

JDX-series

カウント 2 θ = 35.140 カウント = 182

NR.	2 θ	d	l/l_0
1	16.360	5.414	176
2	21.660	4.099	229
3	26.620	3.346	1926
4	28.000	3.184	118
5	30.860	2.895	123
6	33.140	2.701	171
7	35.140	2.552	182
8	36.500	2.460	160
9	39.460	2.282	128



7741 : B:N4.SM サンプル : ノコギリ, 加工, 9-10CE

- マニコバ
- オーブル
- 追加
- 削除
- 追加
- 削除
- ファイル
- 出力

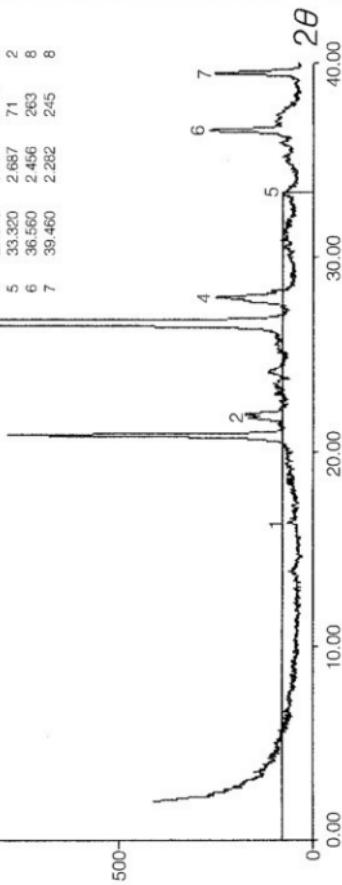
データ処理

JDX-series

カント 2 θ = 33.320 カウント = 71

3 NR. 2 θ d I/I₀

1	16.340	5.420	58	2
2	21.760	4.081	156	5
3	26.640	3.343	3194	100
4	27.940	3.191	244	8
5	33.320	2.687	71	2
6	36.560	2.486	263	8
7	39.460	2.282	245	8



7741 : B:N-5.SM

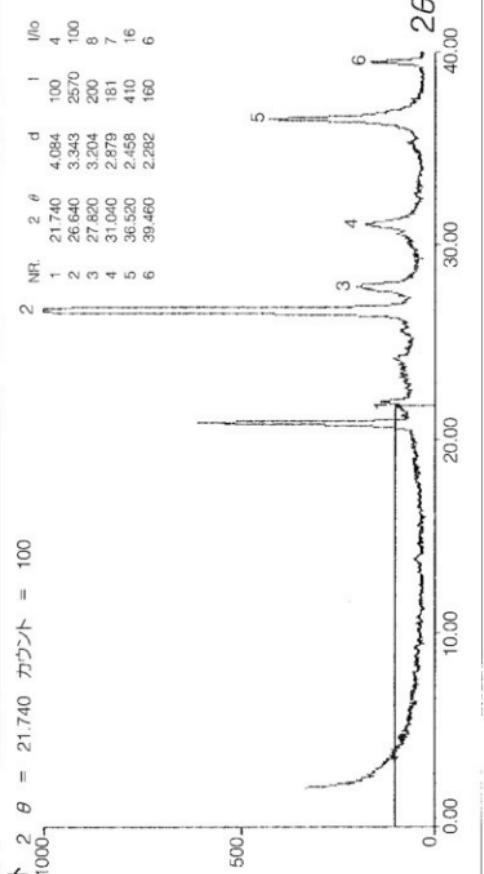
サブ : JJA, XI, カ, 9-10CE

マニピュレーター オート 追加 削除 Xスケーリング ファイル 出力条

JDX-series

カウント $\theta = 21.740$ カウント = 100

データ処理



771# : B:N-6.SM

サンプル : ノコ, リ, カ, 9-10CE

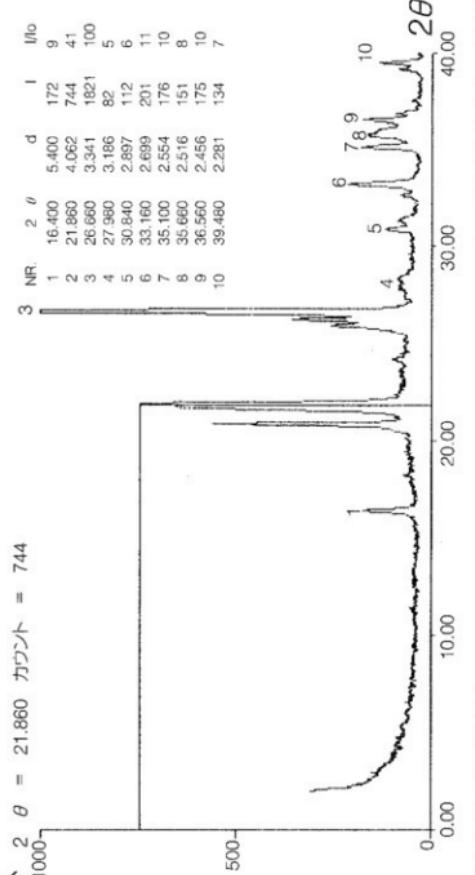
 追加 削除 ファイル 出力条

 データ登録 オートスケール

JDX-series

カウント 2 $\theta = 21.860$ カウント = 744

データ処理



7741 : B:N-7.SM

サンプル : ノジA, ΛI, 加X, 9-10CE

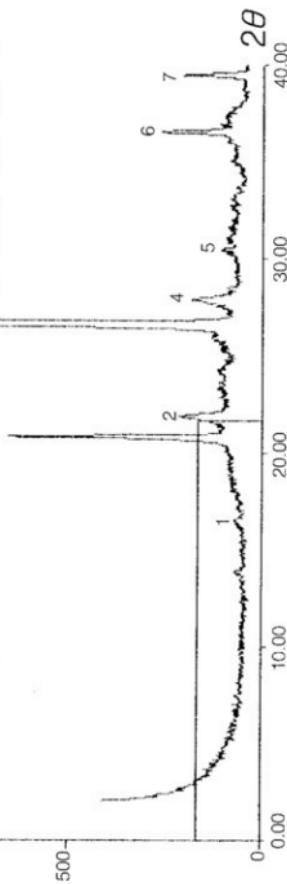
マニュアル 追加 削除 ファイル データ出力

JDX-series

カウント $\theta = 21.700$ カウント = 159

NR. 2 θ = 21.700 NR. 2 θ = 159

NR.	2 θ	d	I/Io
1	16.480	5.374	63
2	21.700	4.092	159
3	26.640	3.343	2922
4	27.840	3.202	178
5	30.480	2.930	98
6	36.520	2.458	255
7	39.460	2.282	203



7ファイル : BN-8.SM

サブ : JGX, ST, リテ, 9-10CE

マニピュレーター オーブン 追加 削除 Xスケーリング Yスケーリング ファイル 出力条

データ処理

JDX-series

カウント 2 $\theta = 27.960$ カウント = 72

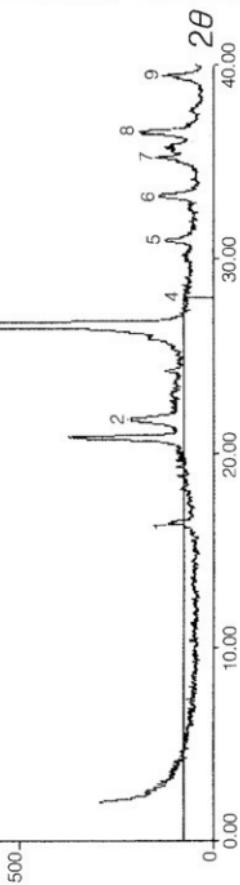
NR. 2 θ d llo

3	1	16.320	5.427	109	8
	2	21.780	4.077	212	15
	3	26.620	3.346	1413	100
	4	27.960	3.188	72	5
	5	30.920	2.890	121	9
	6	33.200	2.696	131	9
	7	35.200	2.547	144	10
	8	36.540	2.457	188	13
	9	39.440	2.283	128	9

1000

500

0



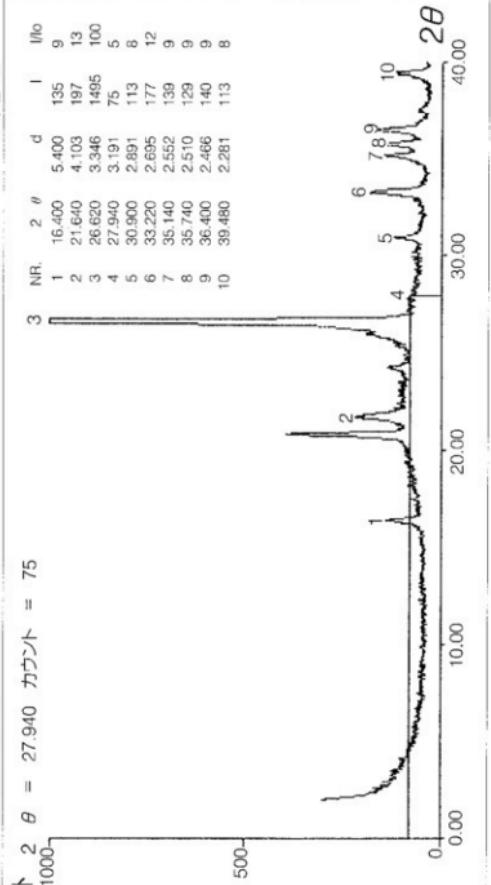
ファイル : B:N.9.SM

サブル : JJA, XI, 加, 9-10CE

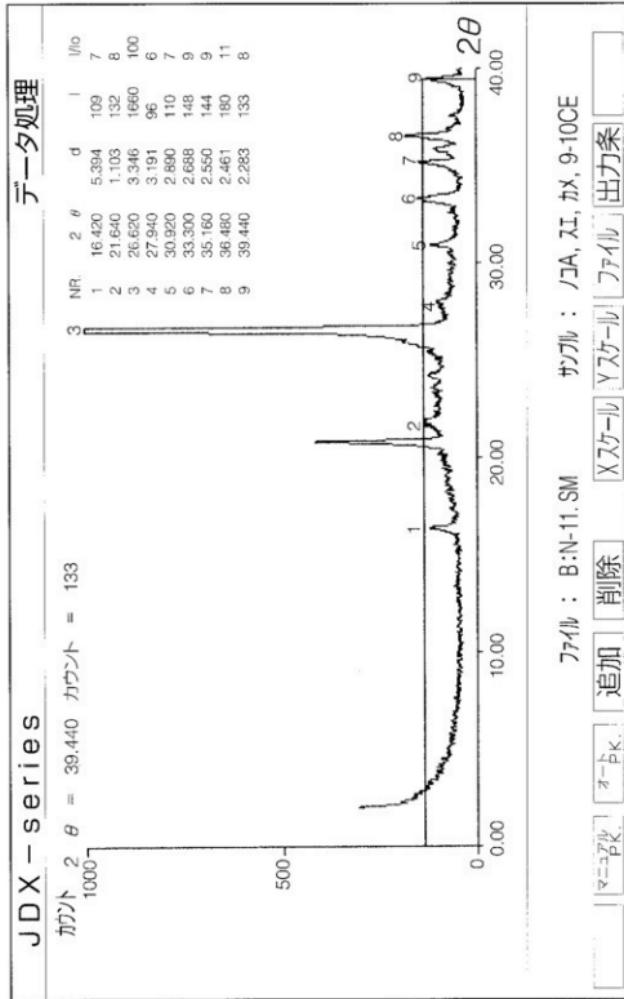
マニピュレーター オーブン 追加 削除 ファイル ユーザー ハードディスク 出力条件

JDX-series

データ処理

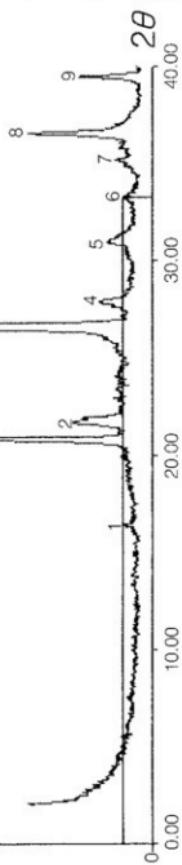


ファイル : B:N-10.SM サブル : JJA, JII, JA, 9-10CE
 ラニツ_{PK}_% オーピ_{PK} 削除 追加 ファイル Yスケール Xスケール 出力条



JDX-series

カウント 2 θ = 33.300 カウント = 72



77イリ : B:N-12, SM サンプル : ノコア, ΣI, カX, 9-10CE

削除

追加 ファイル

マニュアル

オーバー

J E O L N T E D - 2 0 0 1
S P R 1 N T v e r s . 2 . 1 8

試料名 : Noko; A(9-10CE)Sueki Tubo-1

測定日時 : 2年 02月 05日 13時 13分 03秒

分析日時 : 2年 02月 05日 13時 15分 27秒

--- 測定 - ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 127.92 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	K レシオ
Na	K	0.75	0.68	Na2O	1.01	0.2668
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	11.82	9.16	Al2O3	22.34	7.3187
Si	K	30.91	22.99	SiO2	66.12	19.7613
K	K	1.55	0.83	K2O	1.87	1.2255
Ca	K	0.22	0.11	CaO	0.30	0.1813
Ti	K	0.98	0.43	TiO2	1.64	0.7882
Mn	K	0.00	0.00	MnO	0.00	0.0000
Fe	K	4.35	1.63	Fe2O3	6.23	3.5792
Ni	K	0.39	0.14	NiO	0.49	0.3219
O	-	49.03	64.03			
合計		100.00	100.00			100.00

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r s . 2 . 1 8

試料名 : Noko; A(9-10CE) Sueki Tubo-2

測定日時 : 22年 02月 05日 13時 17分 01秒
分析日時 : 22年 02月 05日 13時 19分 24秒

--- 測定 - ジオメトリ - バラメータ ---

加速電圧 : 15.00 KV 取り出し角度 : 20.32°
経過時間 : 128.72 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	K ル シ オ
Na	K	0.35	0.32	Na2O	0.48	0.1345
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	12.96	9.95	Al2O3	24.49	8.5576
Si	K	31.27	23.06	SiO2	66.89	20.8465
K	K	1.66	0.88	K2O	2.00	1.3603
Ca	K	0.31	0.16	CaO	0.44	0.2712
Ti	K	0.67	0.29	TiO2	1.12	0.5591
Mn	K	0.13	0.05	MnO	0.17	0.1079
Fe	K	2.97	1.10	Fe2O3	4.24	2.5334
Ni	K	0.15	0.05	NiO	0.19	0.1256
O	-	49.54	64.14			
合計		100.00	100.00		100.00	

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r s . 2 . 1 8

試料名 : Noko; A(9-10CE)Sueki Dokame-3

測定日時 : 12年 01月 12日 17時 34分 29秒

分析日時 : 12年 01月 12日 17時 36分 49秒

--- 測定 - シオメトリ バラメ - タ ---

加速電圧 : 15.00 KV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 125.59 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	K ル シ オ
Na	K	0.48	0.43	Na2O	0.64	0.1570
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	12.04	9.30	Al2O3	22.75	6.9082
Si	K	31.27	23.19	SiO2	66.89	18.4001
K	K	1.81	0.97	K2O	2.18	1.3079
Ca	K	0.34	0.18	CaO	0.47	0.2590
Ti	K	0.65	0.28	TiO2	1.08	0.4770
Mn	K	0.16	0.06	MnO	0.21	0.1209
Fe	K	4.03	1.50	Fe2O3	5.76	3.0254
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	49.22	64.09			
合計		100.00	100.00			100.00

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r s . 2 . 1 8

試料名 : Noko; A(9-10CE) Sueki Kame-4

測定日時 : 12年01月12日 17時38分21秒
分析日時 : 12年01月12日 17時40分41秒

--- 測定ジオメトリ バラメータ ---

加速電圧 : 15.00 KV 取り出しあい角度 : 20.32 °
経過時間 : 127.74 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	K.L.シオ
Na	K	0.67	0.60	Na2O	0.90	0.2419
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	11.81	9.07	Al2O3	22.32	7.3738
Si	K	32.00	23.61	SiO2	68.45	20.4836
K	K	2.68	1.10	K2O	2.51	1.6160
Ca	K	0.22	0.11	CaO	0.31	0.1809
Ti	K	0.70	0.30	TiO2	1.16	0.5487
Mn	K	0.28	0.11	MnO	0.36	0.2219
Fe	K	2.79	1.04	Fe2O3	3.99	2.2573
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	49.45	64.06			
合計		100.00	100.00			100.00

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r s . 2 . 1 8

試料名: Noko; A(9-10CE)Sueki Kame-5

測定日時: : 2年 01月 12日 17時 41分 59秒
分析日時: : 2年 01月 12日 17時 44分 21秒

--- 測定 - ジオメトリ バラメータ ---

加速電圧 : 15.00 KV 取り出し角度 : 20.32°
経過時間 : 127.30 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量	化合物	重量%	K レンズ
Na	K	0.55	0.50	Na2O	0.74	0.1848
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	11.63	9.08	Al2O3	21.98	6.9615
Si	K	30.28	22.71	SiO2	64.77	18.8371
K	K	1.76	0.95	K2O	2.12	1.3633
Ca	K	0.29	0.15	CaO	0.40	0.2343
Ti	K	0.46	0.20	TiO2	0.77	0.3642
Mn	K	0.00	0.00	MnO	0.00	0.0000
Fe	K	6.45	2.43	Fe2O3	9.22	5.1909
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	48.59	63.97			
合計		100.00	100.00		100.00	

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r s . 2 . 1 8

試料名 : Noko; A(9-10CE) Sueki Kame-6

測定日時 : 2年 01月 12日 17時 45分 39秒
分析日時 : 2年 01月 12日 17時 48分 01秒

--- 測定ジオメトリ バラメータ ---

加速電圧 : 15.00 KV 取り出しあん角度 : 20.32 °
経過時間 : 129.14 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	0.90	0.83	Na2O	1.21	0.3277
Mg	K	0.13	0.11	MgO	0.22	0.0682
Al	K	10.93	8.59	Al2O3	20.66	7.0340
Si	K	29.94	22.58	SiO2	64.05	20.3052
K	K	1.96	1.06	K2O	2.36	1.6561
Ca	K	0.35	0.18	CaO	0.49	0.3107
Ti	K	0.37	0.16	TiO2	0.61	0.3149
Mn	K	0.25	0.10	MnO	0.32	0.2131
Fe	K	7.05	2.67	Fe2O3	10.08	6.2012
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	48.12	63.71			
合計		100.00	100.00		100.00	

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T vers. 2.18

試料名: Noko; A(9-10CE)Sueki Kame-7

測定日時: : 2年01月12日 17時51分38秒
分析日時: : 2年01月12日 17時53分57秒

--- 測定ージオメトリ バラメータ ---

加速電圧 : 15.00 KV 取り出し角度 : 20.32°
経過時間 : 128.61 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析結果 ---

元素	分析認	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	0.38	0.34	Na2O	0.51	0.1375
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	11.44	8.85	Al2O3	21.62	7.3487
Si	K	31.62	23.50	SiO2	67.65	21.0274
K	K	1.72	0.92	K2O	2.07	1.3974
Ca	K	0.15	0.08	CaO	0.22	0.1325
Ti	K	0.62	0.27	TiO2	1.04	0.5166
Mn	K	0.12	0.05	MnO	0.15	0.0991
Fe	K	4.72	1.76	Fe2O3	6.74	3.9910
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	49.23	64.23			
合計		100.00	100.00		100.00	

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r s . 2 . 1 8

試料名 : Noko; A(9-10CE)Sueki Tubo-8

測定日時 : 2年 01月 12日 17時 55分 21秒
分析日時 : 2年 01月 12日 17時 57分 39秒

--- 測定 - ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 KV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 127.17 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	0.55	0.50	Na2O	0.74	0.1941
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	11.44	8.82	Al2O3	21.62	7.0002
Si	K	31.89	23.62	SiO2	68.23	20.519
K	K	1.89	1.01	K2O	2.28	1.4506
Ca	K	0.31	0.16	CaO	0.44	0.5555
Ti	K	0.80	0.35	TiO2	1.34	0.6266
Mn	K	0.12	0.04	MnO	0.15	0.0908
Fe	K	3.62	1.35	Fe2O3	5.18	2.8927
Ni	K	0.01	0.00	NiO	0.02	0.0104
O	-	49.35	64.15			
合計		100.00	100.00			100.00

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r s . 2 . 1 8

試料名: Noko; A(9-10CE)Sueki Kame-9

測定日時: : 2年 01月 12日 17時 59分 22秒
分析日時: : 2年 01月 12日 18時 01分 41秒

--- 測定ージオメトリ バラメータ ---

加速電圧 : 15.00 KV 取り出しが角度 : 20.32 °
経過時間 : 126.76 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	K レシオ
Na	K	0.96	0.87	Na2O	1.29	0.3266
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	11.06	8.61	Al2O3	20.90	6.5993
Si	K	30.92	23.11	SiO2	66.14	19.2797
K	K	2.34	1.26	K2O	2.82	1.7934
Ca	K	0.24	0.12	CaO	0.33	0.1933
Ti	K	0.53	0.23	TiO2	0.89	0.4133
Mn	K	0.18	0.07	MnO	0.23	0.1382
Fe	K	5.11	1.92	Fe2O3	7.31	4.0743
Ni	K	0.07	0.03	NiO	0.09	0.0589
O	-	48.59	63.77			
合計		100.00	100.00		100.00	

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r s . 2 . 1 8

試料名 : Noko; A(9-10CE) Sueki Kame-10

測定日時 : 2年 01月 12日 18時 03分 02秒

分析日時 : 2年 01月 12日 18時 03分 27秒

--- 測定 - ジオメトリ バラメータ ---

加速電圧 : 15.00 KV 取り出しあく度 : 20.32 °
経過時間 : 129.76 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	0.84	0.77	Na ₂ O	1.13	0.3177
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	11.14	8.67	Al ₂ O ₃	21.06	7.3929
Si	K	30.96	23.14	SiO ₂	66.23	21.4417
K	K	2.33	1.25	K ₂ O	2.81	1.9835
Ca	K	0.22	0.11	CaO	0.30	0.1946
Ti	K	0.44	0.19	TiO ₂	0.74	0.3817
Mn	K	0.29	0.11	MnO	0.38	0.2536
Fe	K	5.04	1.89	Fe ₂ O ₃	7.21	4.4659
Ni	K	0.12	0.04	NiO	0.16	0.1102
O	-	48.62	63.81			
合計		100.00	100.00		100.00	

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r . 2 . 1 8

試料名: Nokota(9-10CE)Sueki Kame-11

測定日時: 2年01月12日 18時09分17秒

分析日時: 2年01月12日 18時11分34秒

--- 測定 - ジオメトリ バラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32°
経過時間 : 126.04 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量	化合物	重量%	K レシオ
Na	K	1.05	0.95	Na2O	1.41	0.3539
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	11.92	9.23	Al2O3	22.53	6.9633
Si	K	30.72	22.85	SiO2	65.72	18.4973
K	K	2.20	1.17	K2O	2.64	1.6296
Ca	K	0.29	0.15	CaO	0.40	0.2244
Cr	K	0.63	0.28	TiO2	1.06	0.4784
Ti	K	0.13	0.05	MnO	0.17	0.0965
Mn	K	4.14	1.55	Fe2O3	5.92	3.2002
Fe	K	0.12	0.04	NiO	0.15	0.0946
Ni	-	48.81	63.73			
合計		100.00	100.00		100.00	

J E O L J E D - 2 0 0 1
S P R I N T v e r . 2 . 1 8

試料名: Nokota(9-10CE)Sueki Kame-12

測定日時: 2年01月12日 18時13分00秒

分析日時: 2年01月12日 18時15分20秒

--- 測定 - ジオメトリ バラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32°
経過時間 : 126.66 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量	化合物	重量%	K レシオ
Na	K	1.18	1.08	Na2O	1.59	0.3998
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	K	12.01	9.37	Al2O3	22.70	7.0966
Si	K	29.80	21.31	SiO2	63.75	18.2175
K	K	1.67	0.90	K2O	2.01	1.2787
Ca	K	0.29	0.15	CaO	0.41	0.2386
Ti	K	0.52	0.23	TiO2	0.87	0.4077
Mn	K	0.08	0.03	MnO	0.10	0.0623
Fe	K	5.84	2.20	Fe2O3	8.35	4.6553
Ni	K	0.16	0.06	NiO	0.20	0.1280
O	-	48.44	63.67			
合計		100.00	100.00		100.00	

写 真 図 版



遺跡遠景（南から）



遺跡遠景（東から）

写真図版1 空中写真（1）



遺跡全景（北から）



A調査区近景（直上から）

写真図版2 空中写真（2）

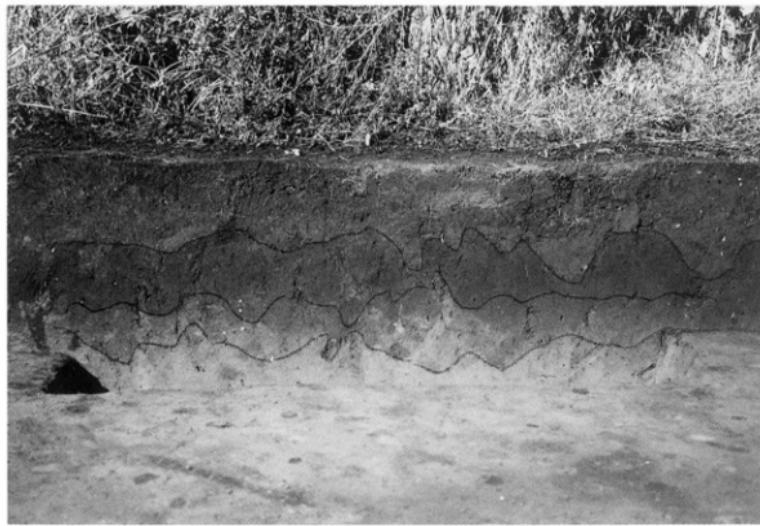


昭和22～23年頃の遺跡周辺の様子（米軍撮影の空中写真）

写真図版3 空中写真（3）



A調査区調査前風景（東から）



A調査区基本土層

写真図版4 A調査区 (1)



A調査区東側全景（北から）



A調査区全景（北東から）

写真図版5 A調査区（2）

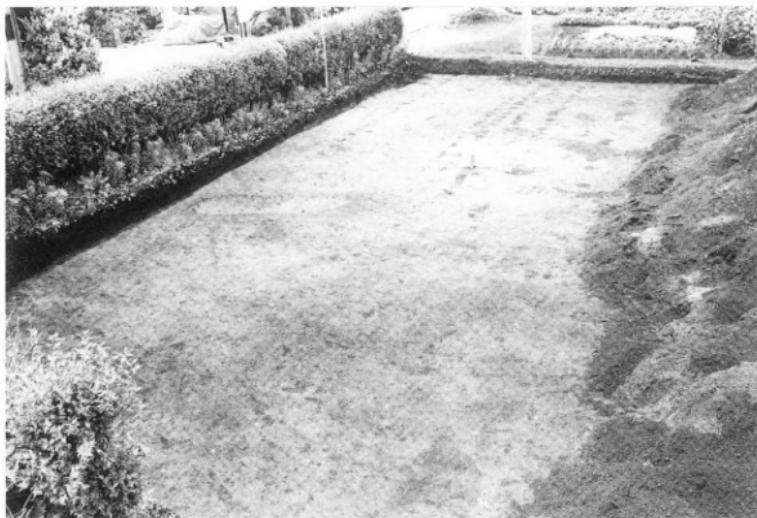


B調査区調査前風景（南から）



B調査区基本土層

写真図版6 B調査区（1）



B調査区全景（東から）

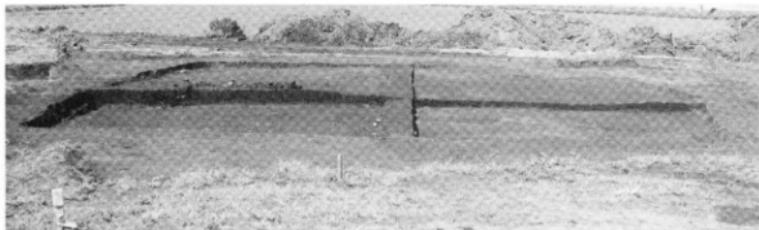


B調査区全景（南から）

写真図版7 B調査区 (2)



RA014 平面（東から）



埋土断面（南から）



カマド煙道断面（東から）



遺物出土状況

写真図版8 RA014竪穴住居跡



RA015 平面（東から）



埋土断面（東から）

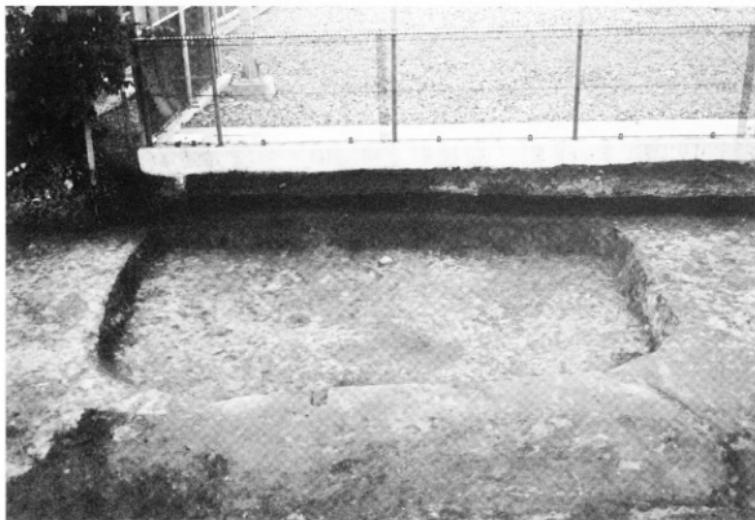


カマド完掘（東から）



カマド断面（南西から）

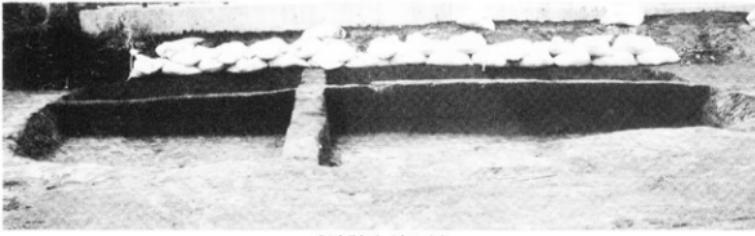
写真図版9 RA015竪穴住居跡



RA017 平面（東から）



埋土断面（北から）

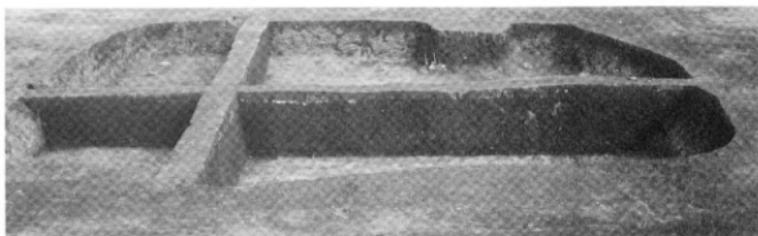


埋土断面（東から）

写真図版10 RA017堅穴住居跡



RA021 平面（東から）



埋土断面（西から）

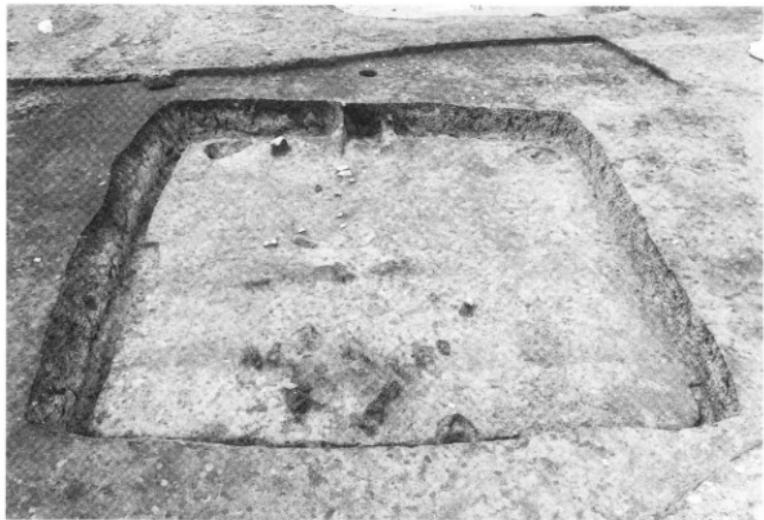


カマド断面（北から）

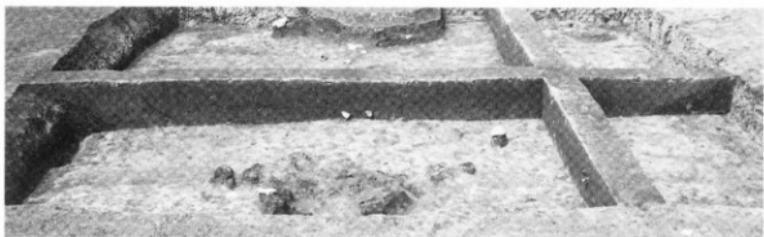


煙道断面（東から）

写真図版11 RA021堅穴住居跡



RA026 平面（東から）



埋上断面（東から）



カマド断面（北から）

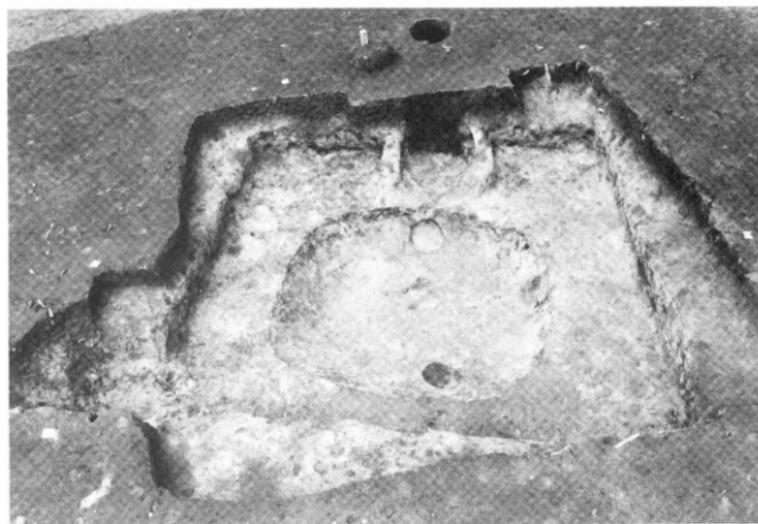


煙道断面（東から）

写真図版12 RA026竪穴住居跡

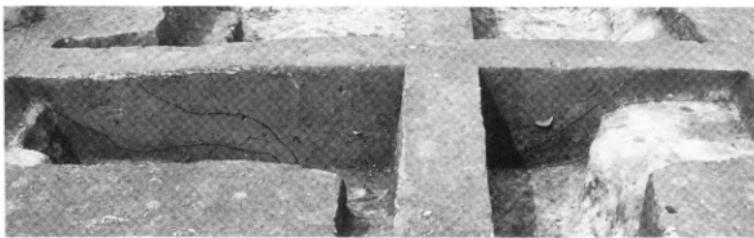


RA027内 土坑検出状況（東から）

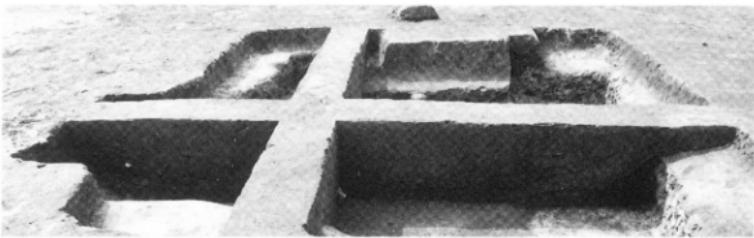


RA027 平面（東から）

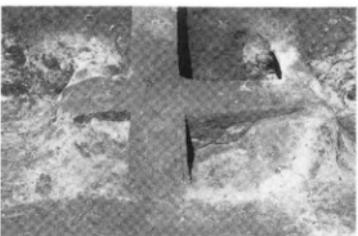
写真図版13 RA027堅穴住居跡（1）



埋土断面（南から）



埋土断面（東から）



カマド断面（東から）



カマド煙道断面（東から）

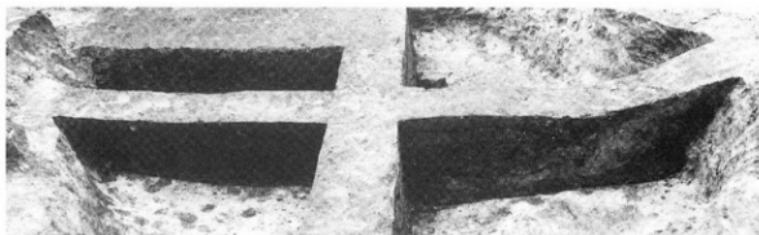


付属施設断面（北から）

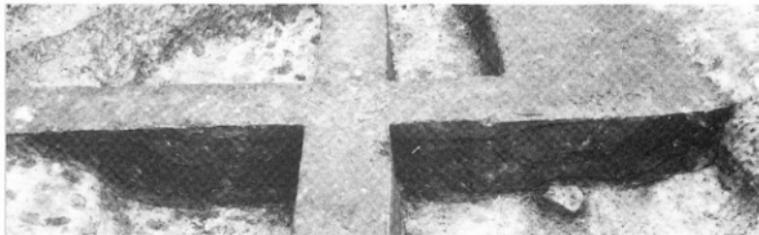
写真図版14 RA027堅穴住居跡（2）



RA030 平面 (北東から)

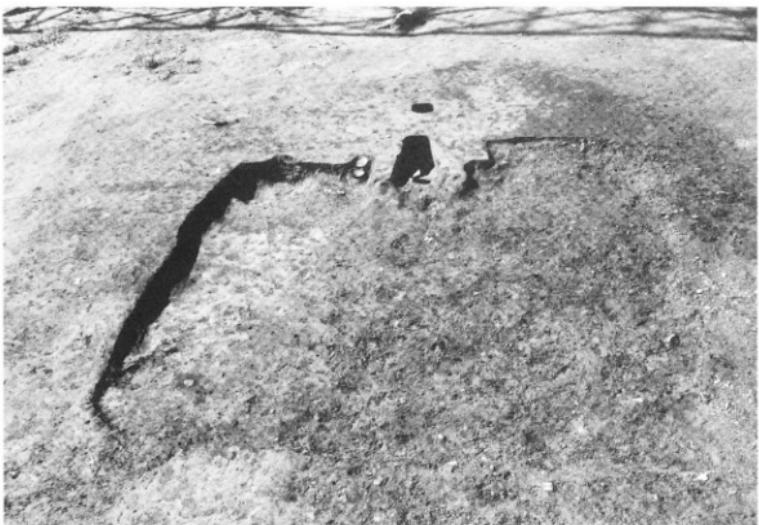


埋土断面 (南東から)

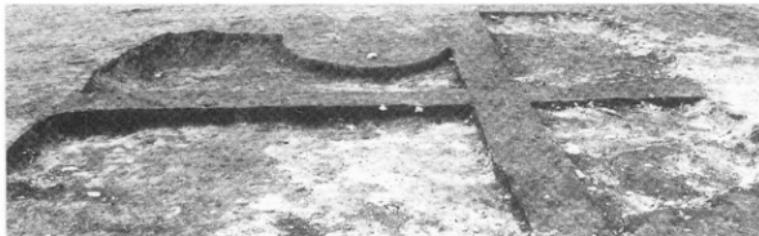


埋土断面 (北東から)

写真図版15 RA030竪穴住居跡



RA032 平面（東から）



埋土断面（東から）



カマド 平面（東から）

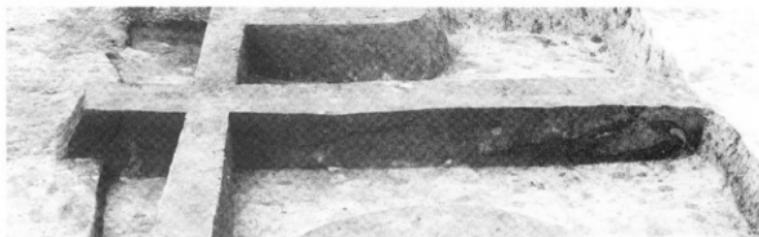


カマド 断面（東から）

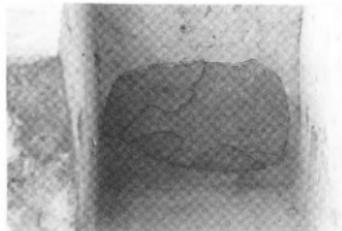
写真図版16 RA032縦穴住居跡



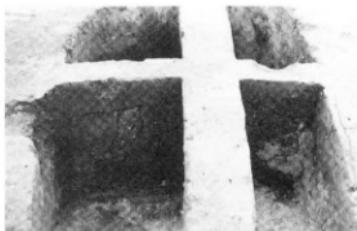
RA035 平面（東から）



埋土断面（東から）



煙道断面（東から）

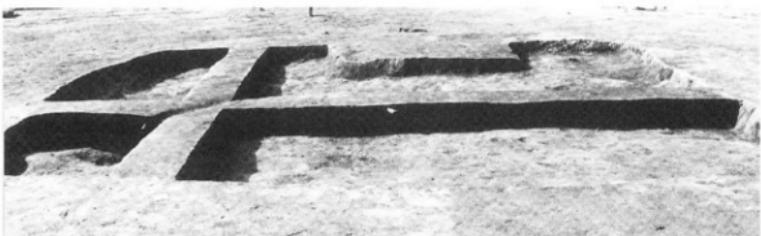


カマド断面（東から）

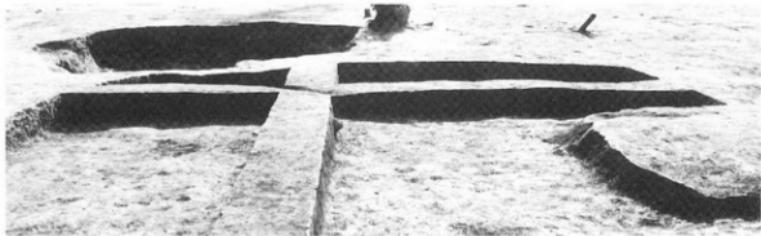
写真図版17 RA035竪穴住居跡



RA036 平面（南東から）



埋土断面（南東から）



埋土断面（北東から）

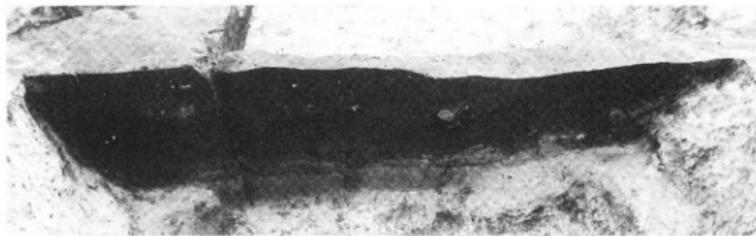
写真図版18 RA036堅穴住居跡



RA038 平面（南西から）



埋土断面（南西から）



埋土断面（北西から）

写真図版19 RA038竪穴住居跡



RA016 平面（北西から）



埋土断面（東から）



焼出し断面（北から）

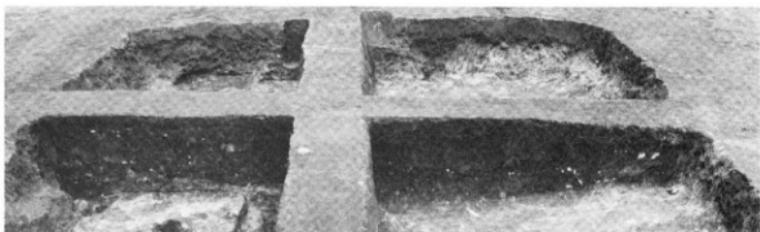


焼出し及び煙道断面（北から）

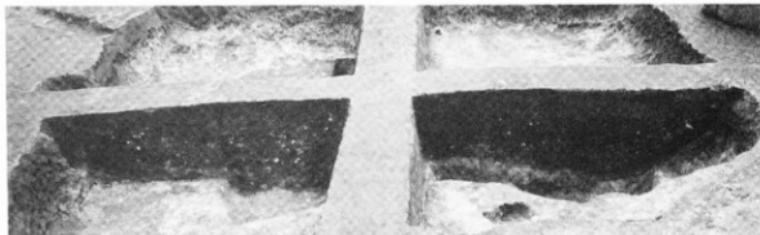
写真図版20 RA016堅穴住居跡



RA018 平面（北東から）

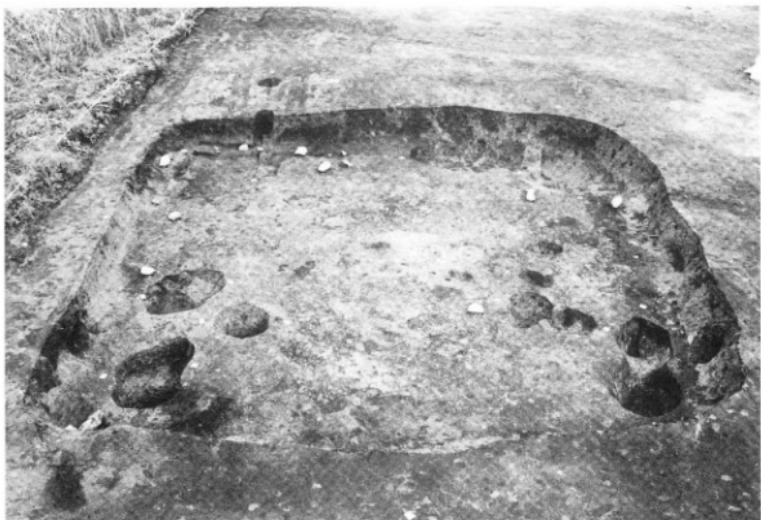


埋土断面（南西から）



埋土断面（北東から）

写真図版21 RA018竪穴住居跡



RA019 平面（西から）



埋土断面（東から）

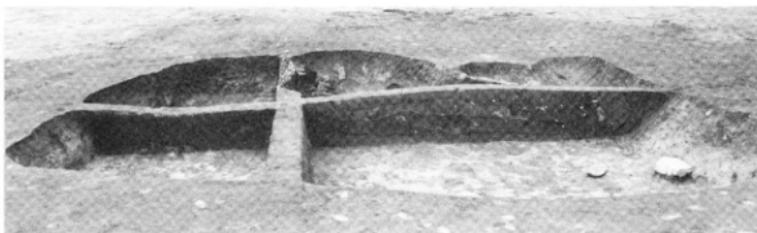


埋土断面（南から）

写真図版22 RA019堅穴住居跡



RA020 平面（西から）



埋土断面（西から）

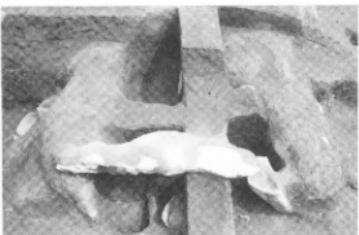


埋土断面（北から）

写真図版23 RA020堅穴住居跡（1）



カマド断面（北東から）



カマド断面（北西から）



遺物出土状況



遺物出土状況



体験学習風景





RA022 平面（北西から）

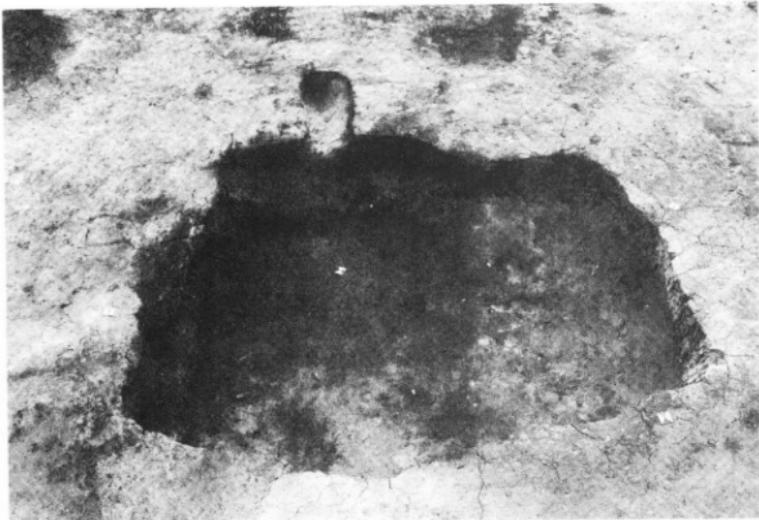


埋土断面（西から）

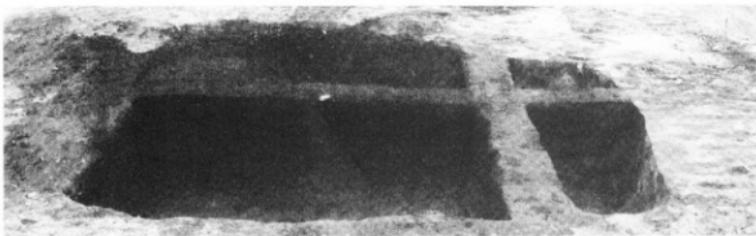


遺物出土状況

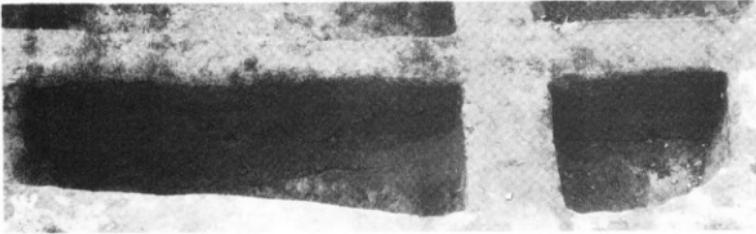
写真図版25 RA022堅穴住居跡



RA023 平面（西から）

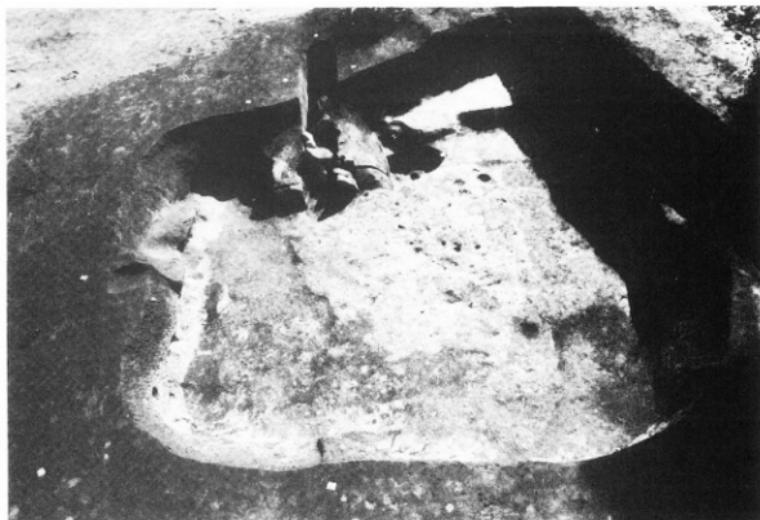


埋土断面（西から）

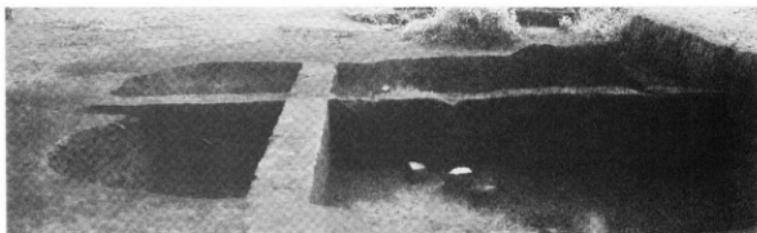


埋土断面（南から）

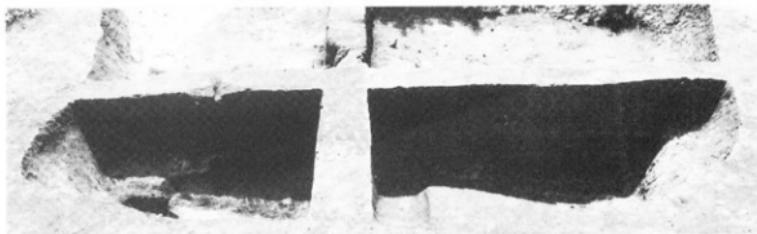
写真図版26 RA023竪穴住居跡



RA024 平面（西から）

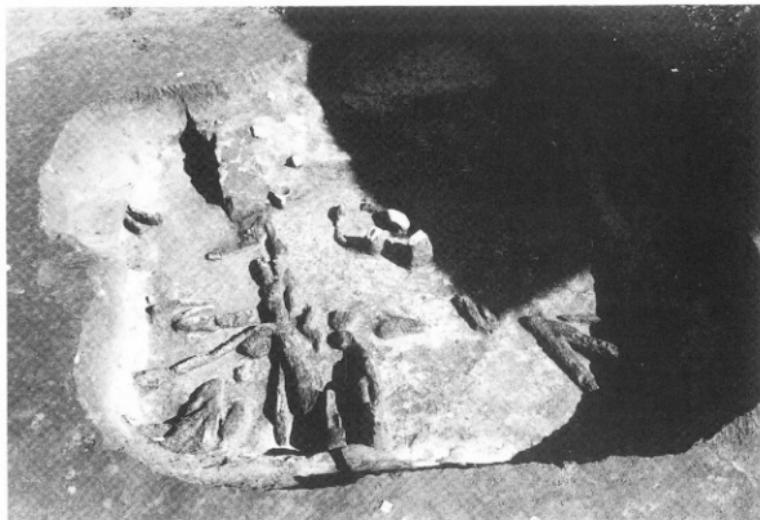


埋土断面（西から）



埋土断面（北から）

写真図版27 RA024堅穴住居跡（1）



RA024 炭化材出土状況（西から）



炭化材出土状況



カマド検出



カマド断面（北から）

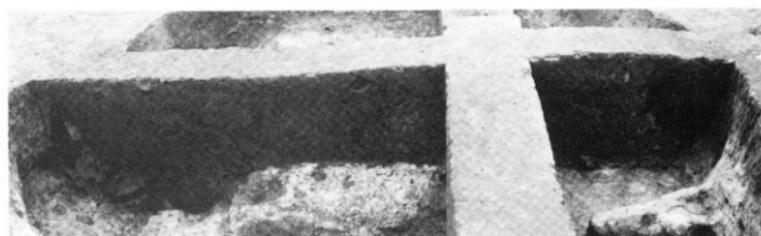


カマド断面（西から）

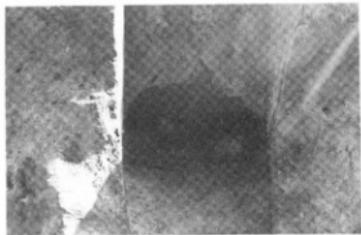
写真図版28 RA024堅穴住居跡（2）



RA025 平面（北から）



埋土断面（西から）

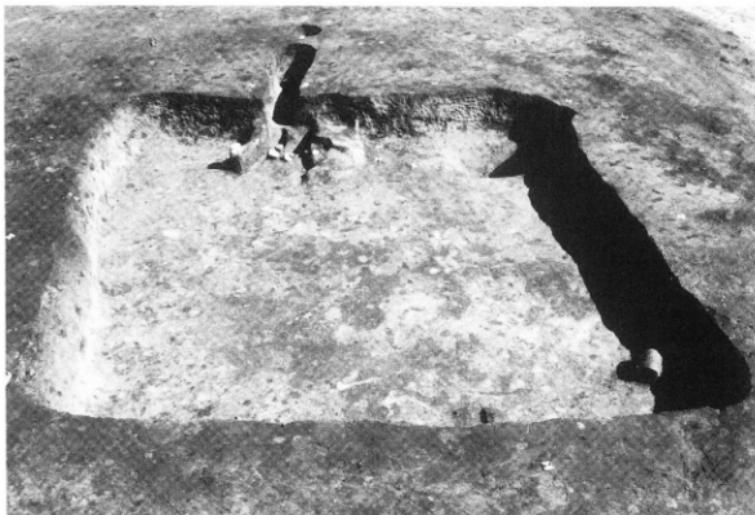


カマド煙道断面（北から）

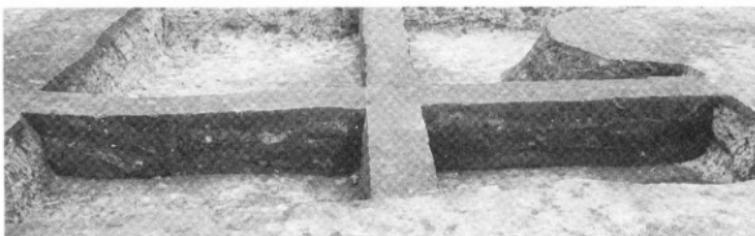


カマド袖断ち割（北から）

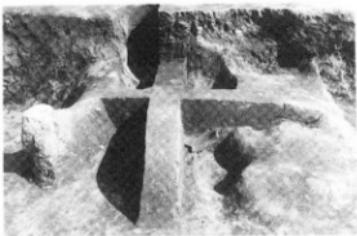
写真図版29 RA025竪穴住居跡



RA028 平面 (西から)



埋土断面 (南から)



カマド断面 (西から)



カマド平面 (西から)

写真図版30 RA028堅穴住居跡



RA029 炭化材・遺物出土状況

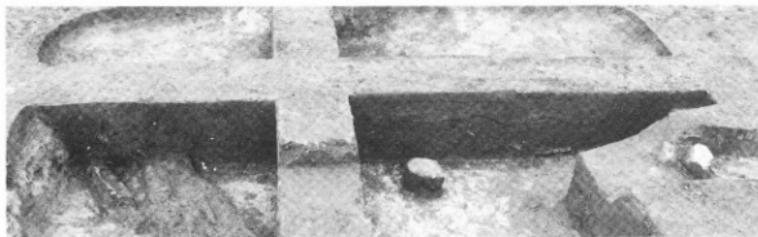


RA029 平面（北西から）

写真図版31 RA029堅穴住居跡（1）



RA029 埋土断面 (西から)



埋土断面 (南から)



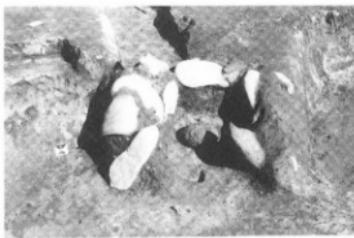
カマド断面 (北西から)



カマド断面 (北東から)



カマド遺物出土状況

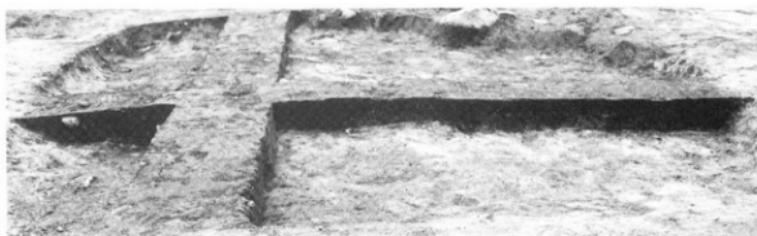


カマド完掘

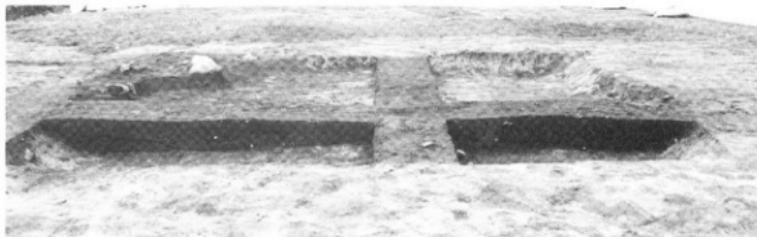
写真図版32 RA029竪穴住居跡 (2)



RA031 平面（西から）



埋土断面（西から）



埋土断面（北から）

写真図版33 RA031竪穴住居跡



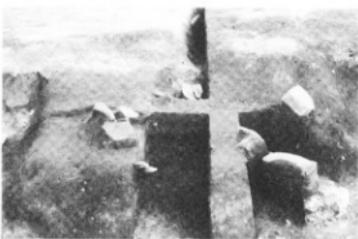
RA033 平面 (西から)



埋土断面 (西から)

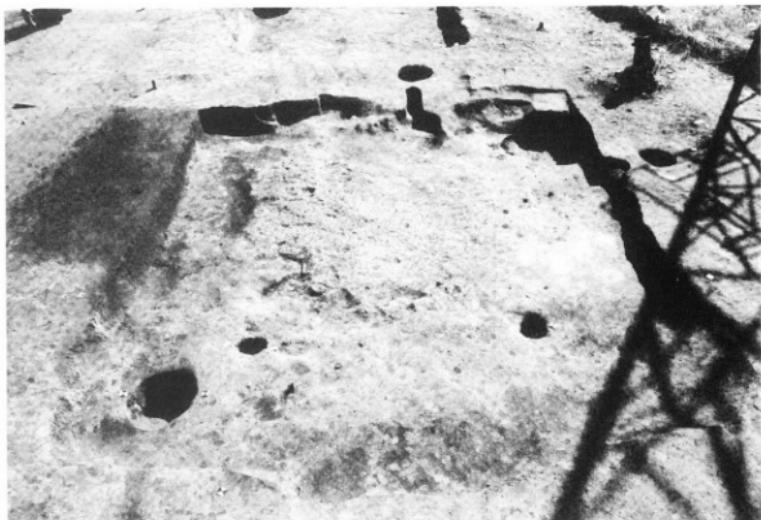


カマド完掘遺物出土状況 (西から)

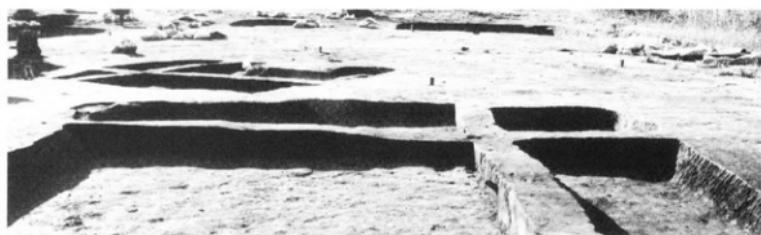


カマド断面 (西から)

写真図版34 RA033竪穴住居跡



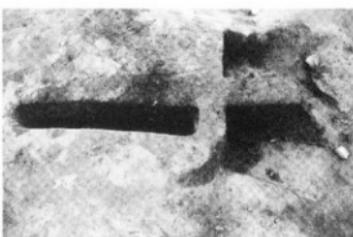
RA034 平面（西から）



埋土断面（東から）



カマド断面（西から）

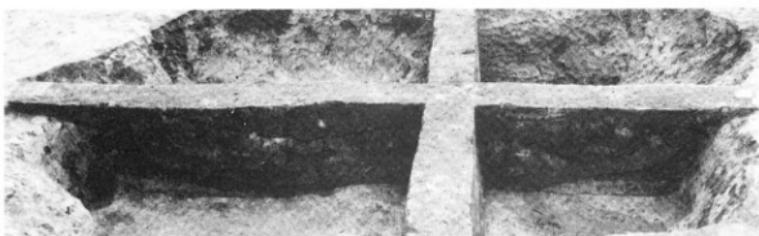


カマド断面（北から）

写真図版35 RA034竪穴住居跡



RA037 平面（北西から）



理土断面（北から）



煙道断面（東から）

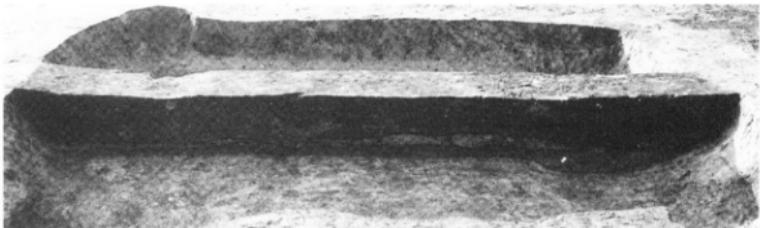


カマド遺物出土状況

写真図版36 RA037竪穴住居跡



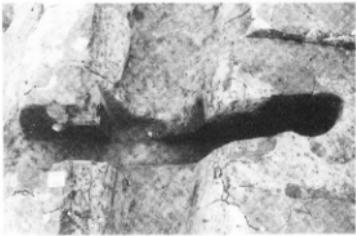
RA039 平面（南から）



埋土断面（東から）

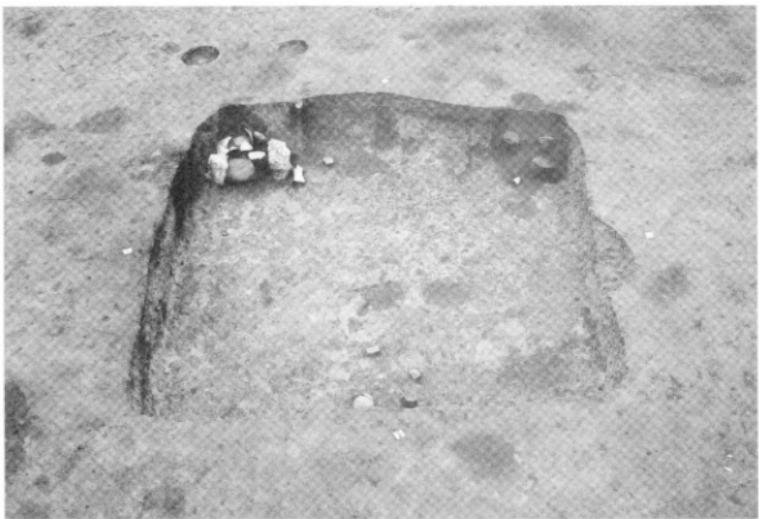


煙道断面（北から）

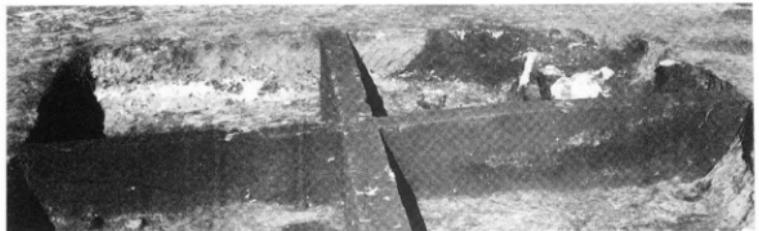


煙道断面（東から）

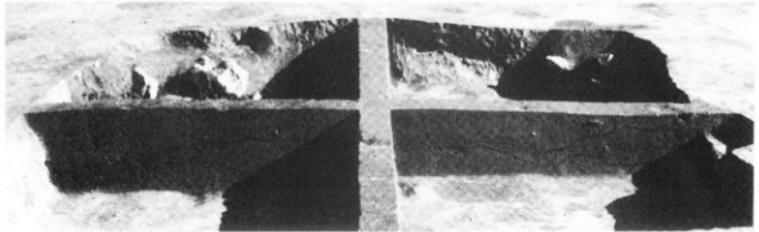
写真図版37 RA039竪穴住居跡



RA040 平面（西から）



埋土断面（南から）



埋土断面（西から）

写真図版38 RA040竪穴住居跡（1）



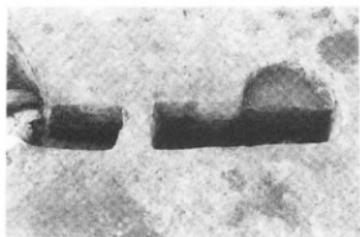
RA040 カマド検出



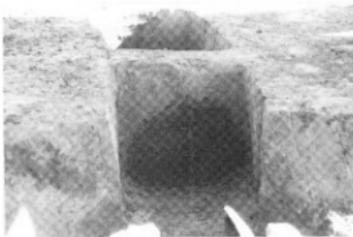
カマド袖断面① (西から)



カマド袖断面② (西から)

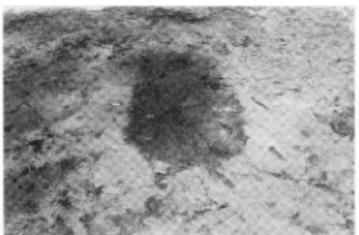


煙道断面 (南から)

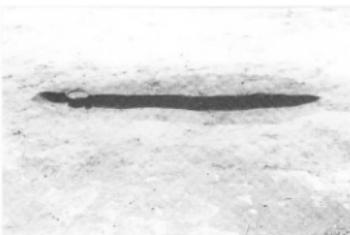


煙道断面 (西から)

写真図版39 RA040竪穴住居跡 (2)



RD017 检出状況



RD017 断面（北東から）



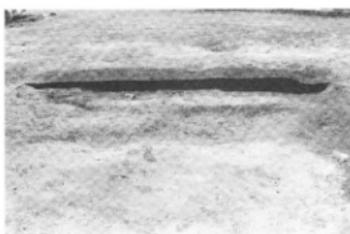
RD017 平面（北西から）



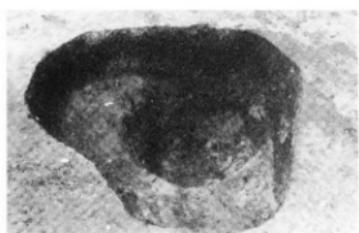
RD017 遺物出土状況



RD018 平面（南東から）



RD018 断面（東から）

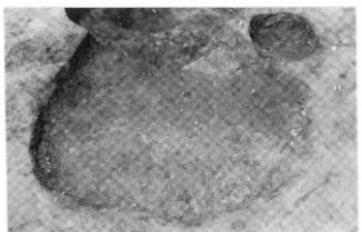


RD019 平面（北から）



RD019 断面（東から）

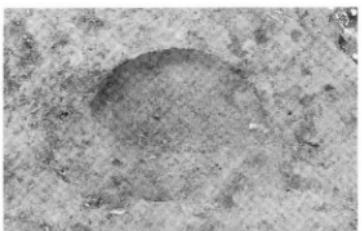
写真図版40 RD017~019土坑



RD020 平面（東から）



RD020 断面（東から）



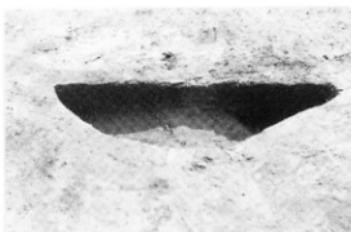
RD021 平面（東から）



RD021 断面（東から）



RD022 平面（東から）



RD022 断面（東から）



RD023 平面（東から）

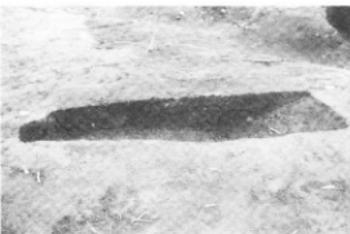


RD023 断面（東から）

写真図版41 RD020~023土坑



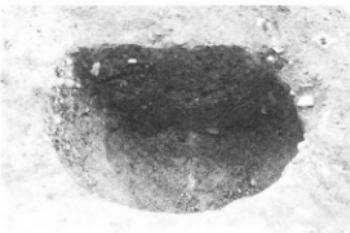
RD024 平面（東から）



RD024 断面（東から）



RD025 平面（東から）



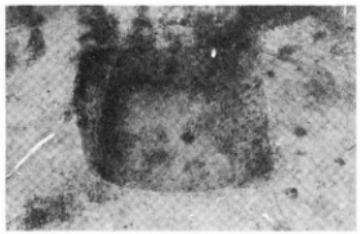
RD025 断面（東から）



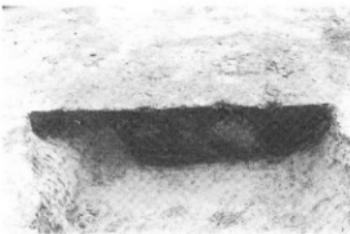
RD026 平面（南東から）



RD026 断面（東から）

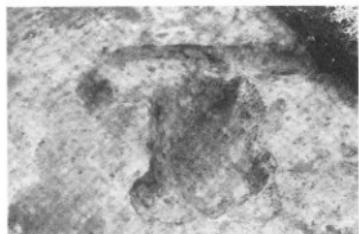


RD027 平面（東から）

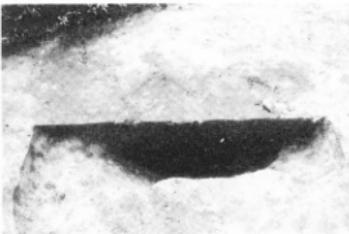


RD027 断面（東から）

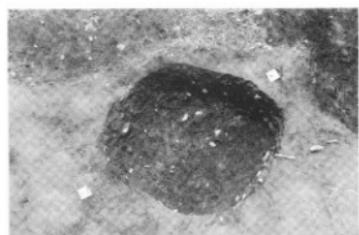
写真図版42 RD024~027土坑



RD028 平面（北東から）



RD028 断面（南東から）



RD029 平面（北西から）



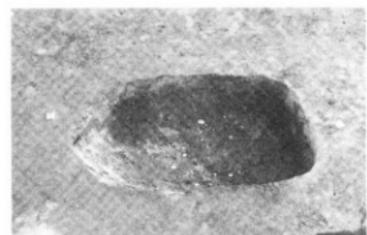
RD029 断面（北西から）



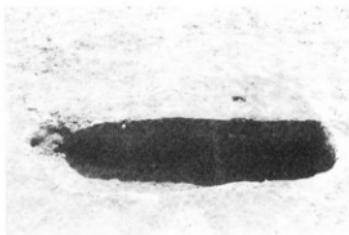
RD030 平面（北から）



RD030 断面（北から）



RD031 平面（北から）



RD031 断面（北から）

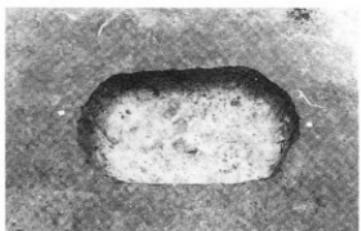
写真図版43 RD028~031土坑



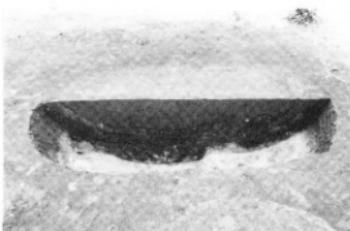
RD032 平面（北から）



RD032 断面（北から）



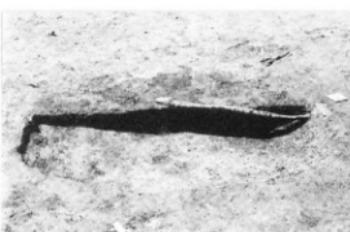
RD033 平面（北から）



RD033 断面（北から）



RD034 平面（北から）



RD034 断面（北から）

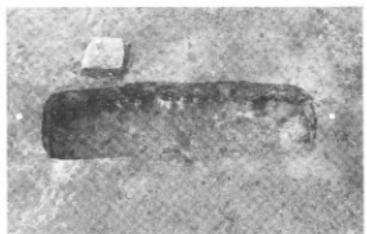


RD035 平面（北から）

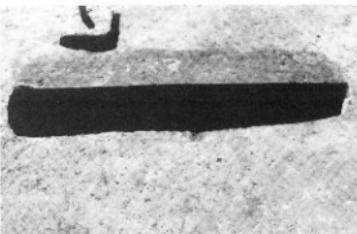


RD035 断面（北から）

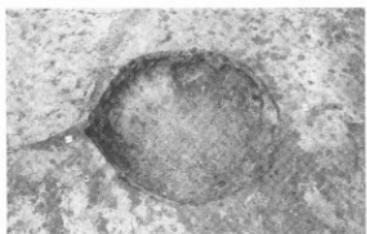
写真図版44 RD032~035土坑



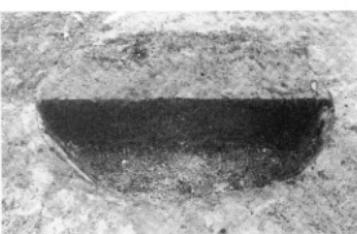
RD036 平面（東から）



RD036 断面（東から）



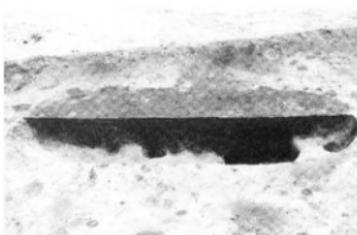
RD037 平面（東から）



RD037 断面（東から）



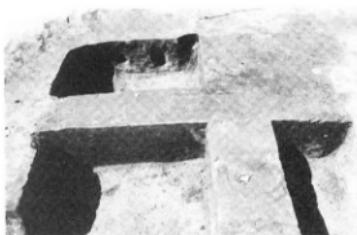
RD038 平面（北東から）



RD038 断面（北から）



RD039 平面（東から）



RD039 断面（東から）

写真図版45 RD036~039土坑



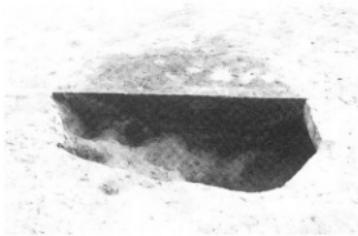
RD040 平面（北から）



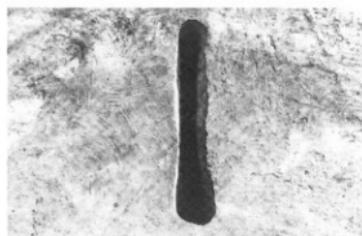
RD040 断面（東から）



RD041 平面（北から）



RD041 断面（北から）



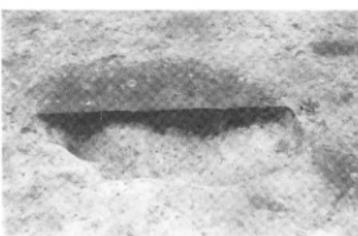
RD042 平面（北から）



RD042 断面（北から）



RD043 平面（東から）



RD043 断面（西から）

写真図版46 RD040~043土坑



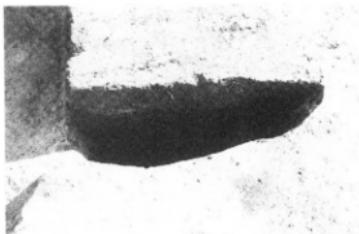
RD044 平面（西から）



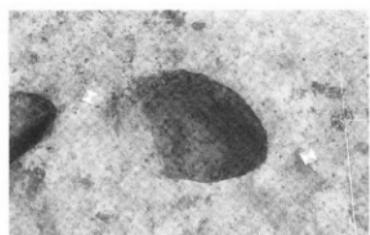
RD044 断面（南から）



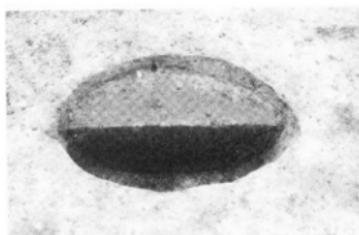
RD045 平面（西から）



RD045 断面（西から）



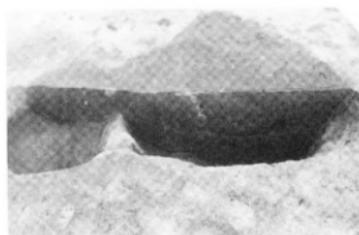
RD046 平面（西から）



RD046 断面（西から）

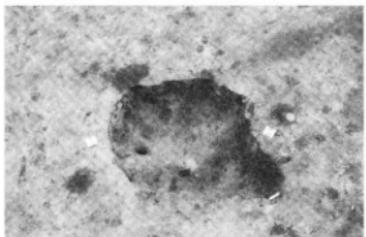


RD047 平面（南東から）

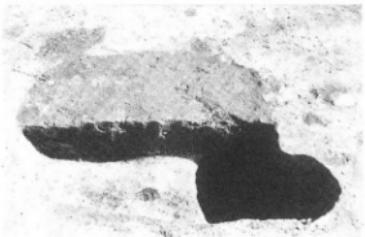


RD047 断面（南西から）

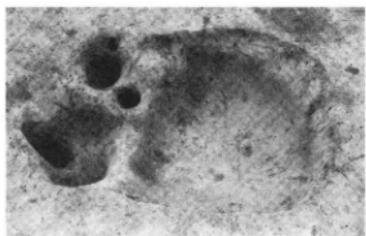
写真図版47 RD044~047土坑



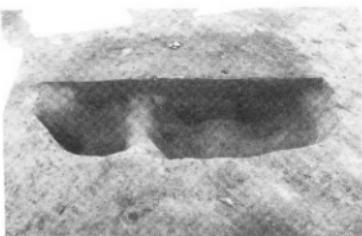
RD048 平面（西から）



RD048 断面（西から）



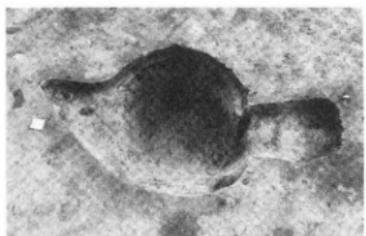
RD049 平面（南西から）



RD049 断面（南から）



RD050 平・断面（北から）

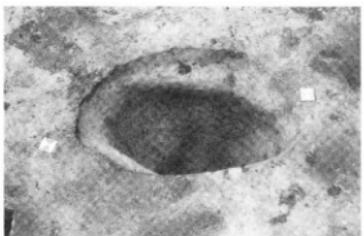


RD051 平面（北から）

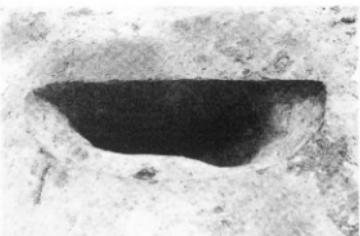


RD051 断面（南から）

写真図版48 RD048~051土坑



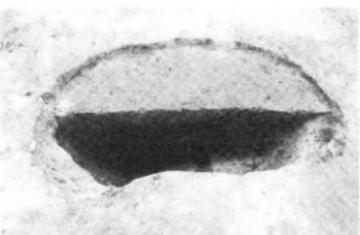
RD052 平面（東から）



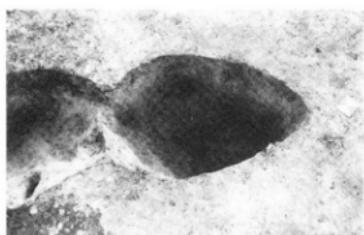
RD052 断面（北西から）



RD053 平面（北東から）



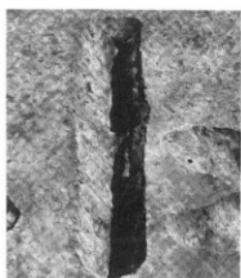
RD053 断面（西から）



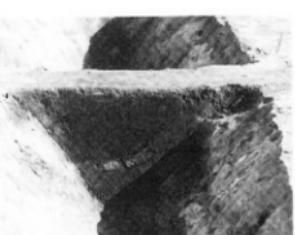
RD054 平面（西から）



RD054 断面（南西から）



RD055 平面（北から）

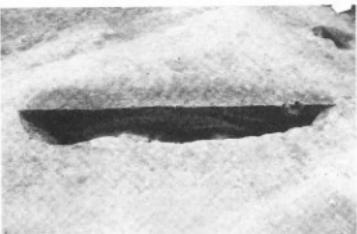


RD055 断面（北から）

写真図版49 RD052~055土坑



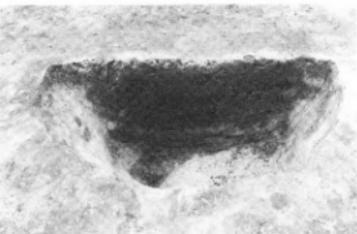
RD056 平面（北から）



RD056 断面（北から）



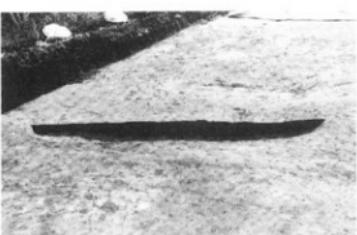
RD057 平面（西から）



RD057 断面（東から）



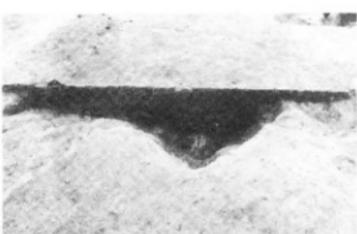
RD058 平面（西から）



RD058 断面（東から）

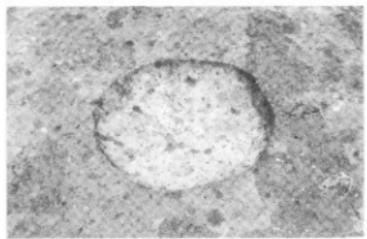


RD059 平面（北から）

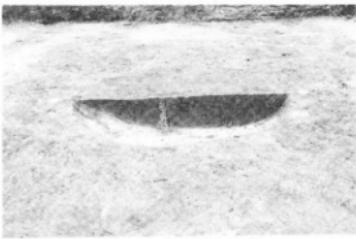


RD059 断面（北から）

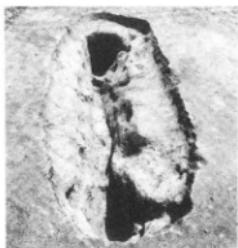
写真図版50 RD056~059上坑



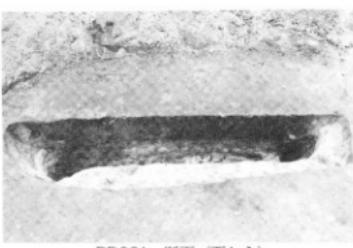
RD060 平面（東から）



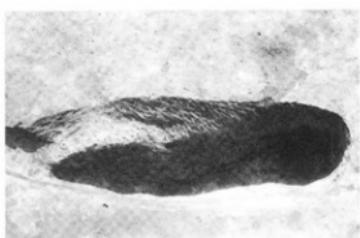
RD060 断面（東から）



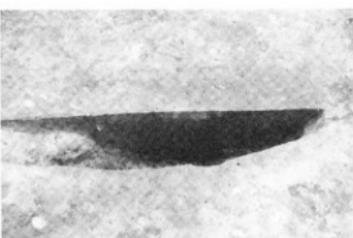
RD061 平面（北から）



RD061 断面（西から）



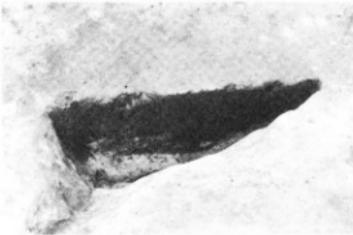
RD062 平面（東から）



RD062 断面（東から）



RD063 平面（北から）

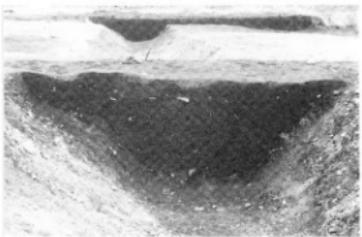


RD063 断面（北から）

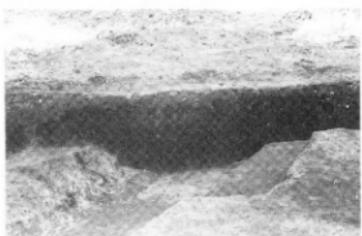
写真図版51 RD060～063土坑



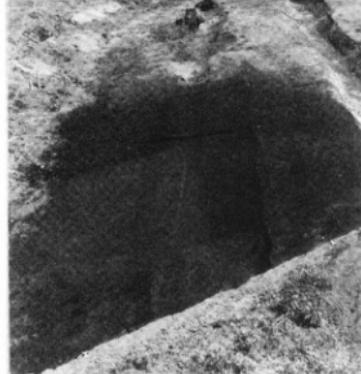
RG008 平面（東から）



RG008 断面（東から）



RG008 断面（東から）



RG009 平面（西から）



RG009 断面（東から）



RG009 断面（東から）



RG009 断面（東から）

写真図版52 RG008・009溝跡



RG010 平面 (西から)



RG010 (東から)



RG010 (東から)



RG012 平面 (北から)



RG012 断面 (北から)



RG012 断面 (北から)

写真図版53 RG010・012溝跡



RG013 平面（西から）



RG013 断面（東から）



RG014 平面（西から）



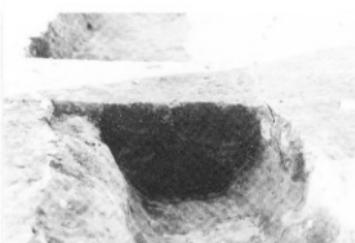
RG014 断面（東から）



RG015 平面（北から）



RG015 断面（南から）



RG015 断面（南から）

写真図版54 RG013~015溝跡



RG016 平面（南から）



RG016 断面（北から）



RG017 平面（南西から）



RG017 断面（北東から）



RG017 断面（南から）

写真図版55 RG016・017溝跡



1

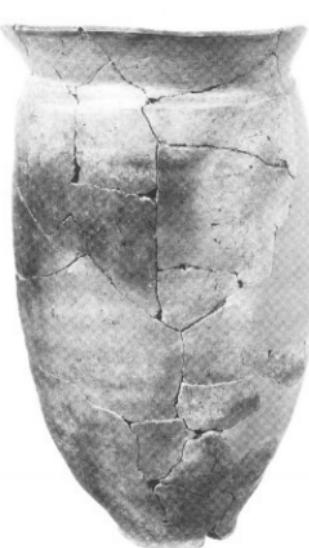
RA014



2



3



4

 $S = 1/3$

写真図版56 堪穴住居跡出土遺物 (1)



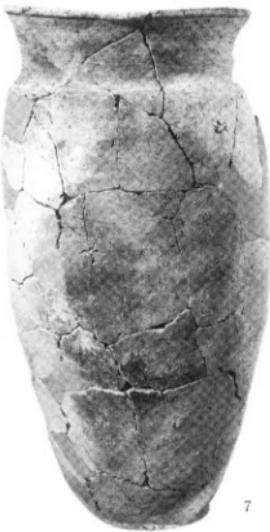
RA014



6



5

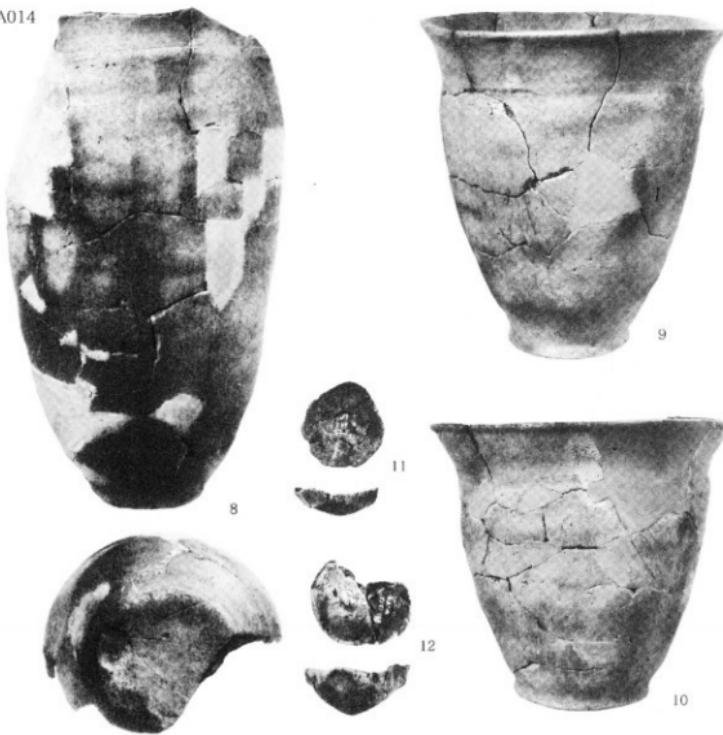


7

S=1/3

写真図版57 縦穴住居跡出土遺物 (2)

RA014

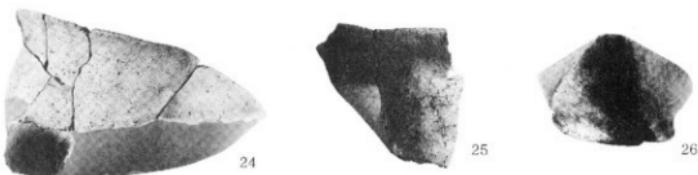


RA015



S=1/3

写真図版58 堪穴住居跡出土遺物 (3)



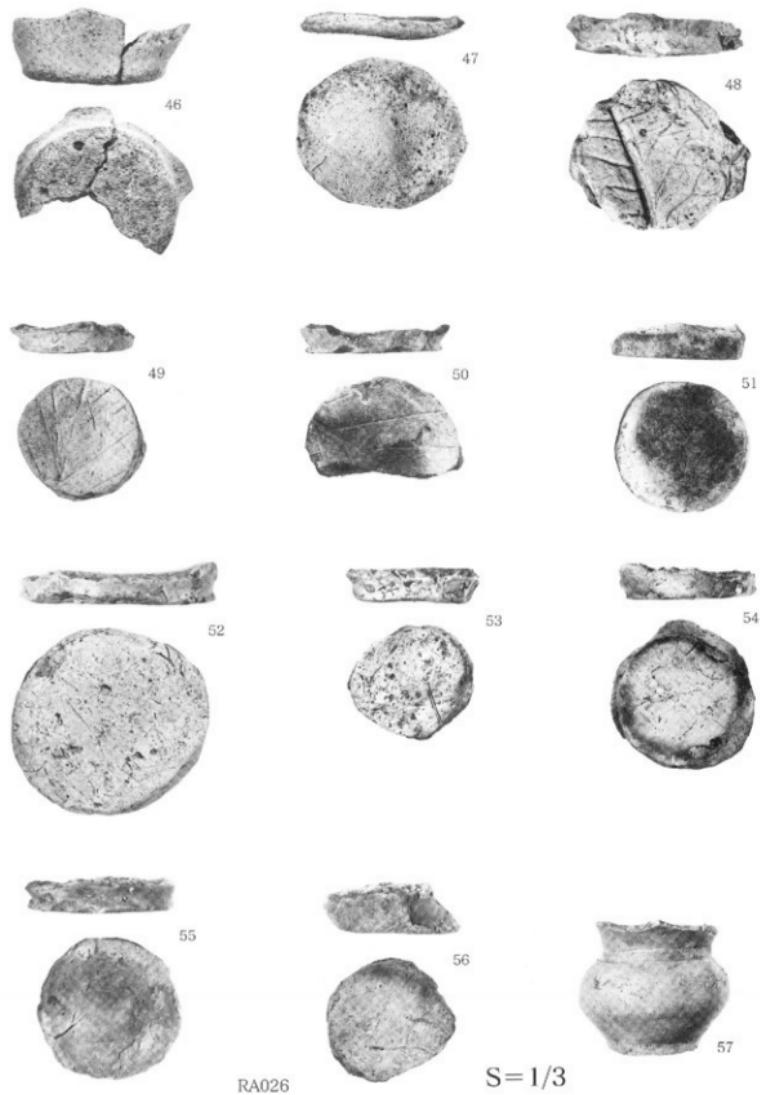
RA021 30 31 S = 1/3
RA026



写真図版59 窓穴住居跡出土遺物 (4)

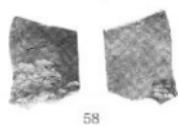


写真図版60 堅穴住居跡出土遺物 (5)

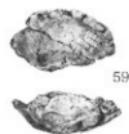


写真図版61 壇穴住居跡出土遺物 (6)

RA026



58



59



60

S=1/2



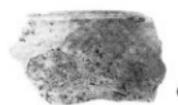
61

S=1/2

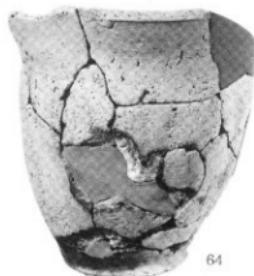
RA027



62



63



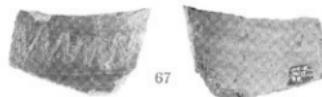
64



65



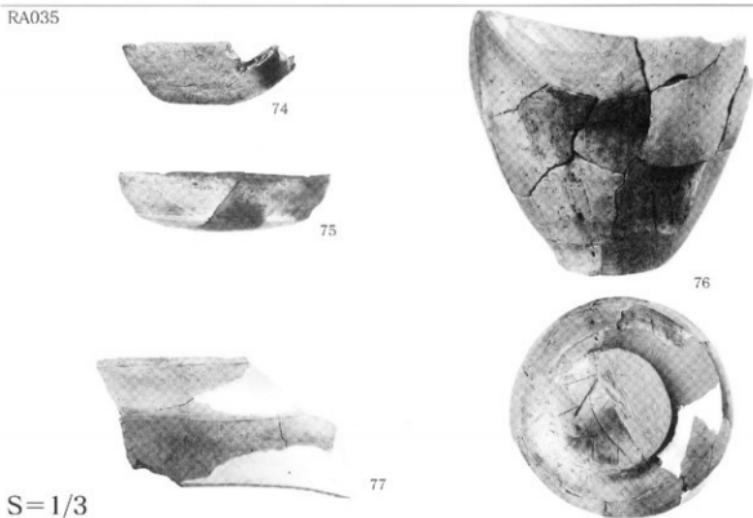
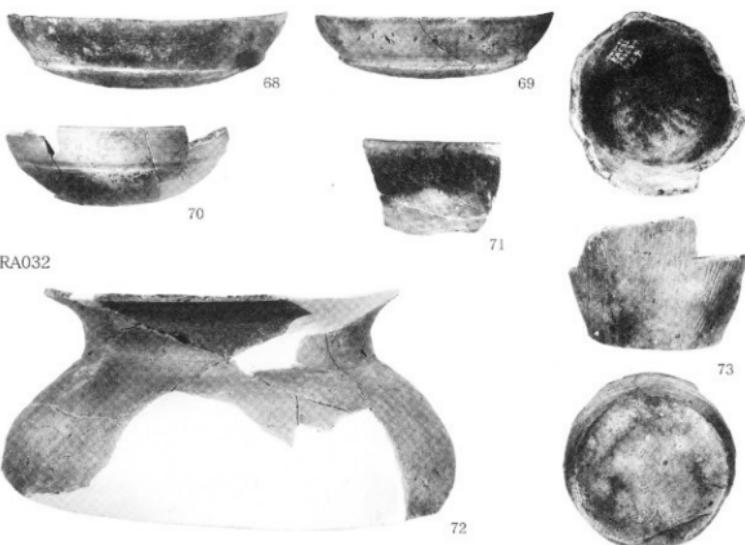
66



67

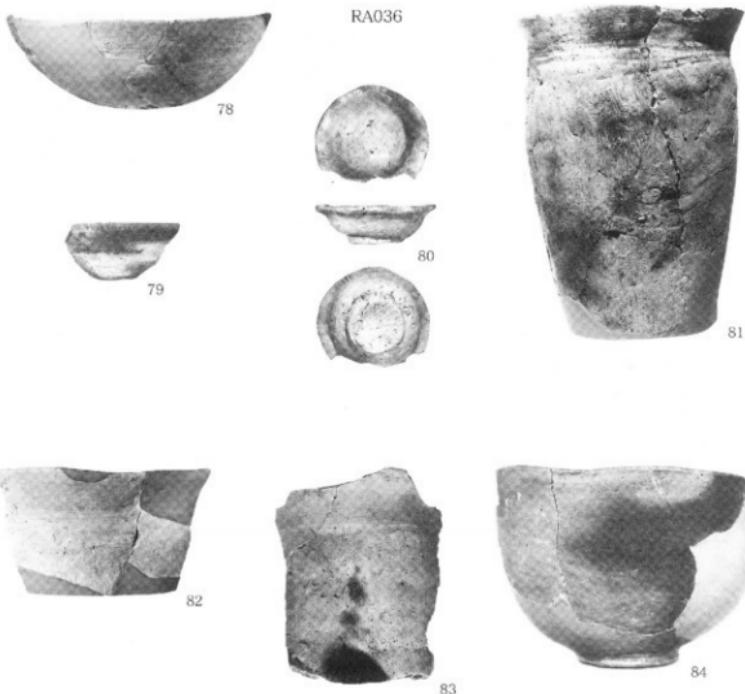
S=1/3

写真図版62 竪穴住居跡出土遺物 (7)



S=1/3

写真図版63 壺穴住居跡出土遺物 (8)



RA038



$S=1/3$

写真図版64 竪穴住居跡出土遺物 (9)

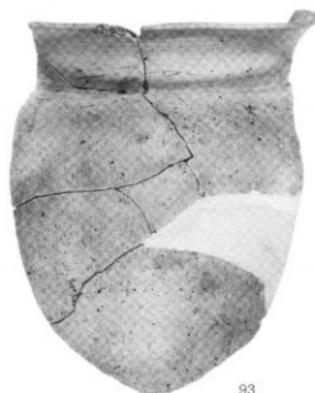


91

RA038



92



93



94



95



96



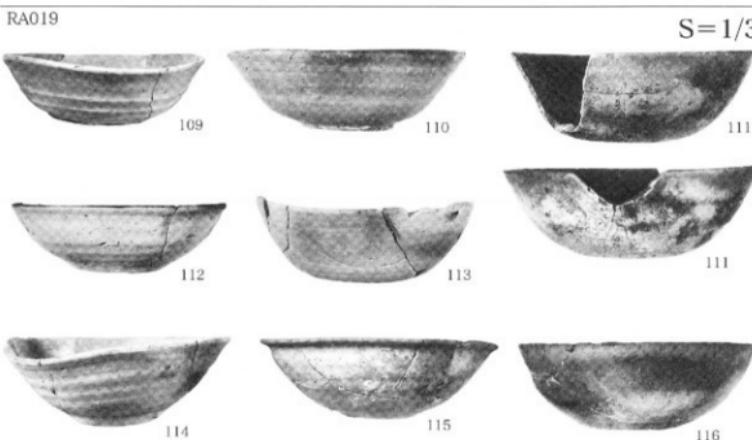
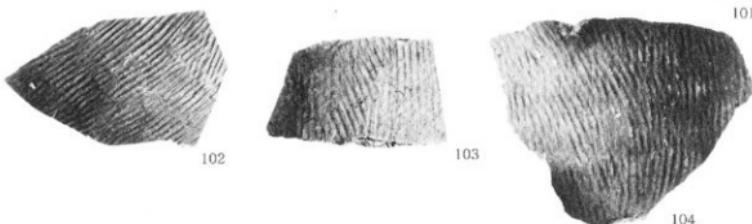
97



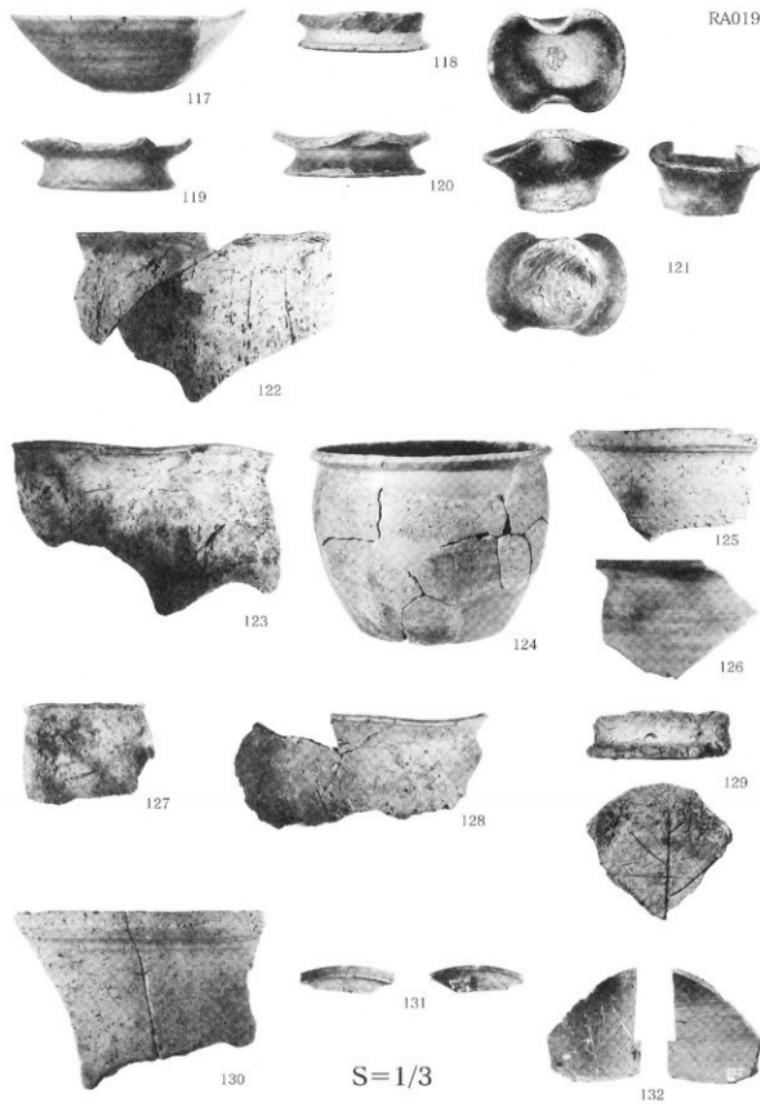
98

S=1/3

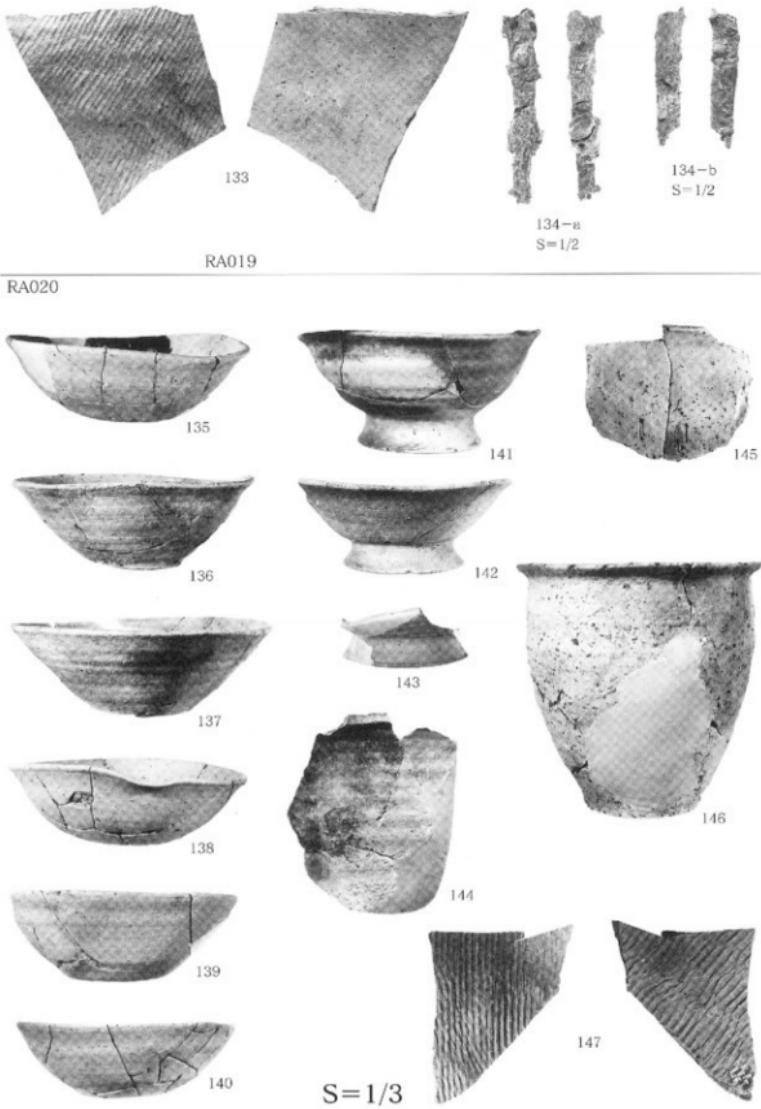
写真図版65 壇穴住居跡出土遺物 (10)



写真図版66 積穴住居跡出土遺物 (11)



写真図版67 堪穴住居跡出土遺物 (12)

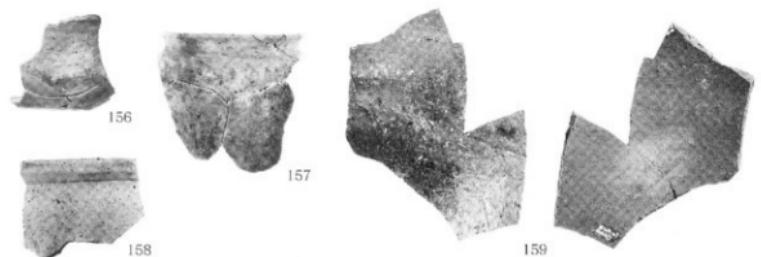


写真図版68 竪穴住居跡出土遺物 (13)



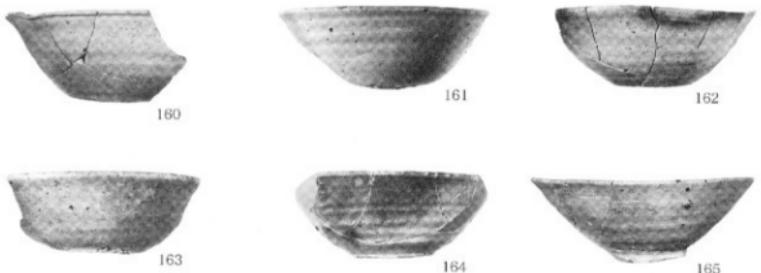
RA022

RA023

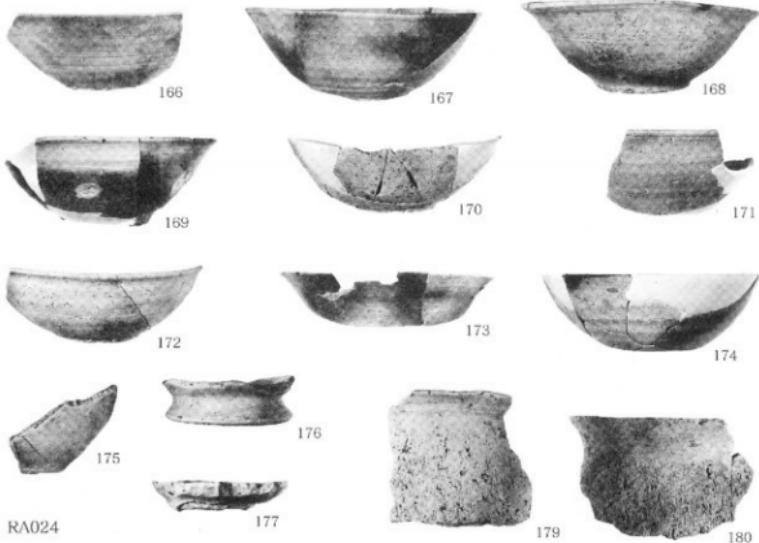


S = 1/3

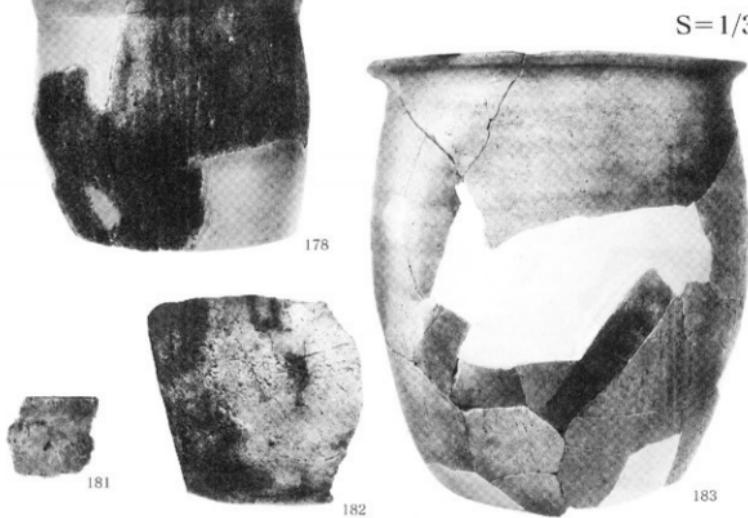
RA024



写真図版69 竪穴住居跡出土遺物 (14)

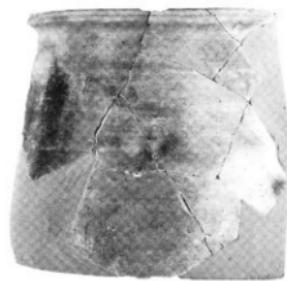


$S = 1/3$



写真図版70 堅穴住居跡出土遺物 (15)

RA024



184



185



186



188



189



187



192



191



190



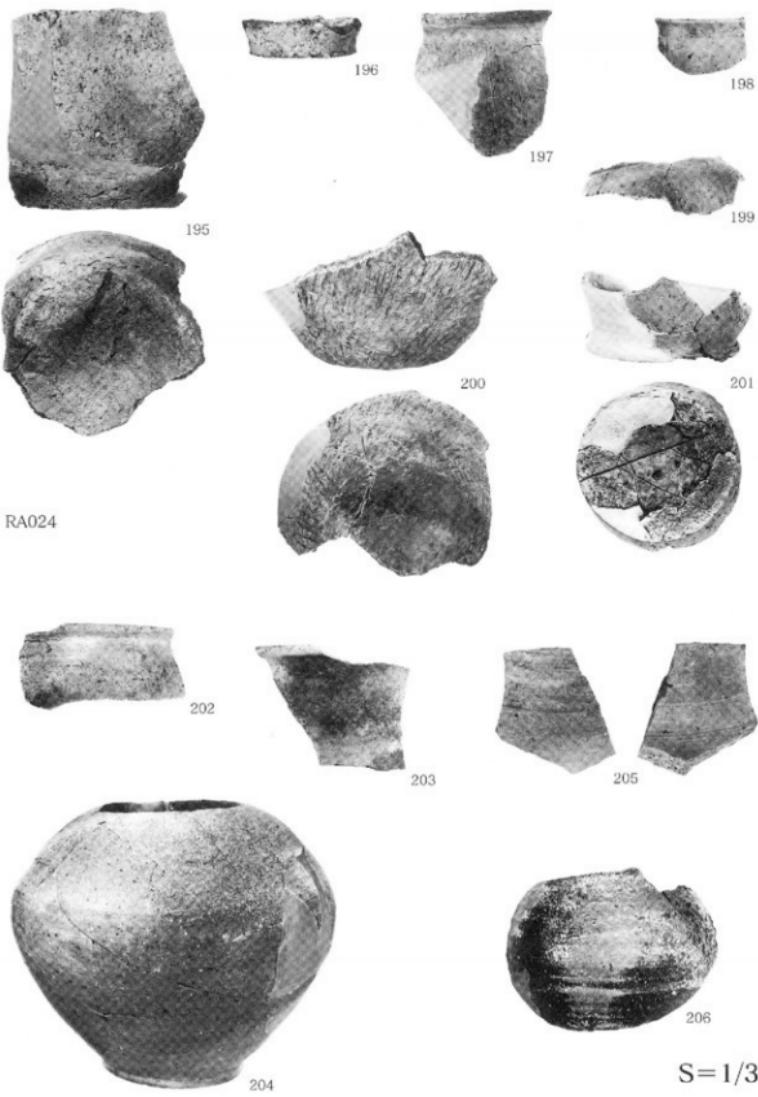
193



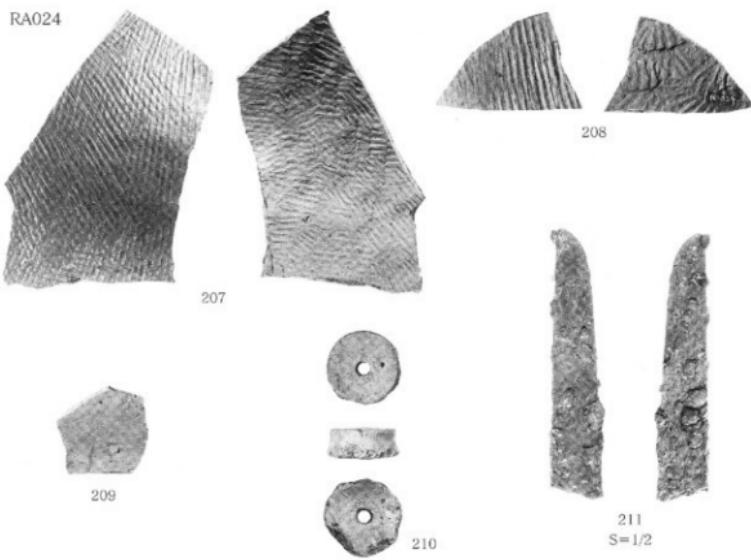
194

S=1/3

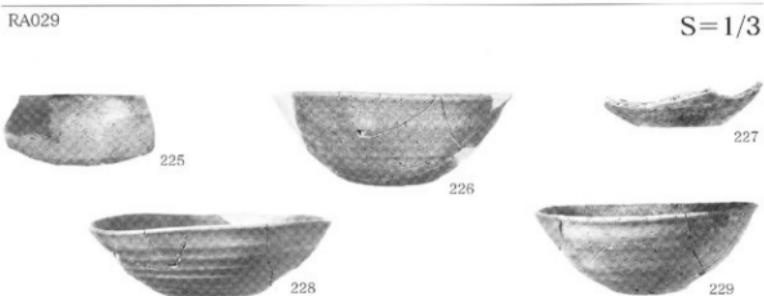
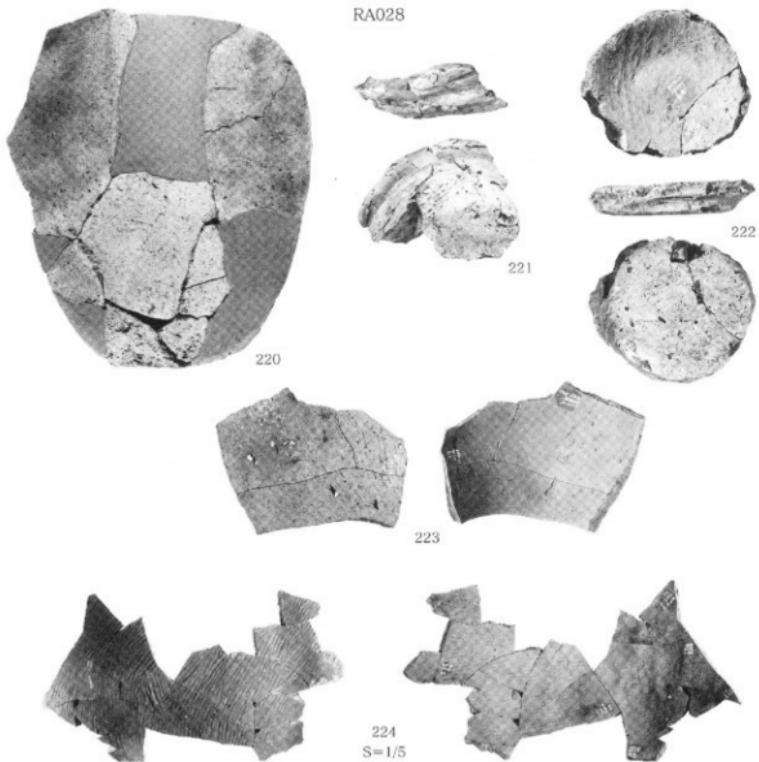
写真図版71 竪穴住居跡出土遺物 (16)



写真図版72 壺穴住居跡出土遺物（17）



写真図版73 竪穴住居跡出土遺物 (18)



写真図版74 窪穴住居跡出土遺物 (19)



230



231



232



233



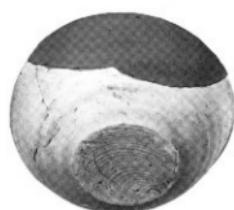
234



235



236



237



238



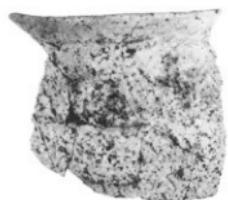
239



240

S=1/3

写真図版75 壁穴住居跡出土遺物 (20)



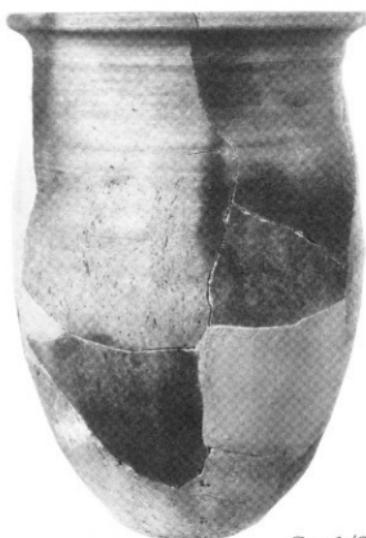
241



242



244



S=1/3



245



246



243

RA029

写真図版76 穂穴住居跡出土遺物 (21)

RA031



247



248



249



RA033



250



251



252



253



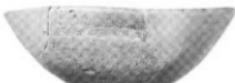
254



255



256



257



258



259



260



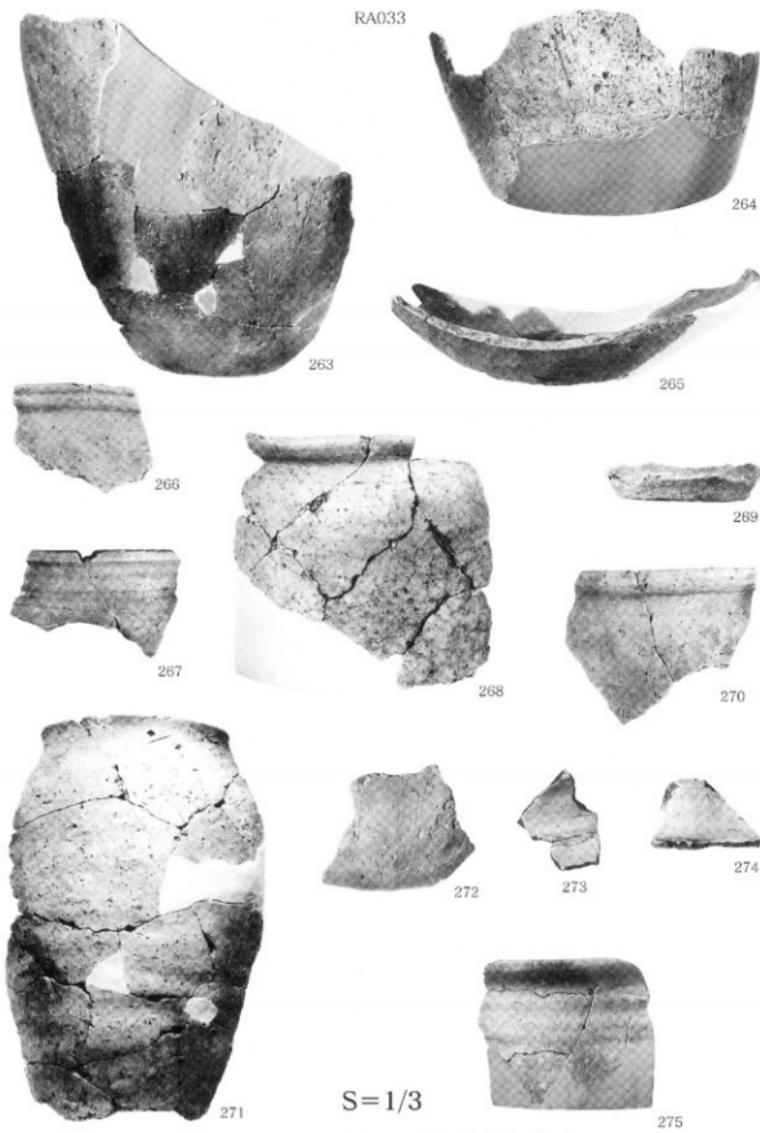
261



262

S = 1/3

写真図版77 堪穴住居跡出土遺物 (22)

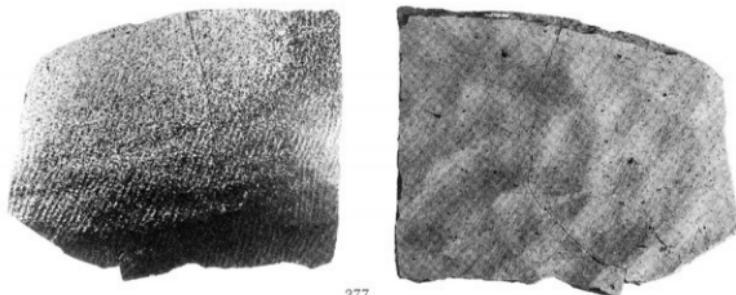


写真図版78 積穴住居跡出土遺物 (23)

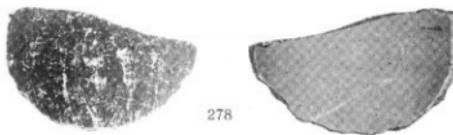
RA033



276



277



278

S=1/3

写真図版79 竪穴住居跡出土遺物 (24)



RA033

280

279
S=1/2

RA034



285



286



284



287



288



289



290



291

S=1/3



292

写真図版80 堪穴住居跡出土遺物 (25)



$S=1/3$



写真図版81 壇穴住居跡出土遺物 (26)



297



298



299



RA034



300



301



302



303



RA037



305

304
S=1/2

写真図版82 竪穴住居跡出土遺物 (27)

S=1/3



306



307



308



309



310



311



S=1/3



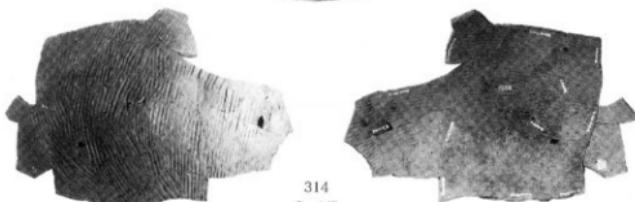
312 S=1/4

写真図版83 竪穴住居跡出土遺物 (28)

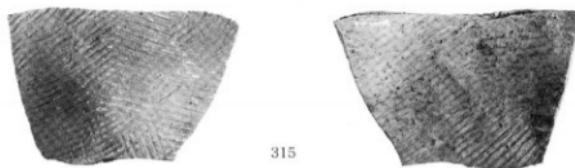
RA040



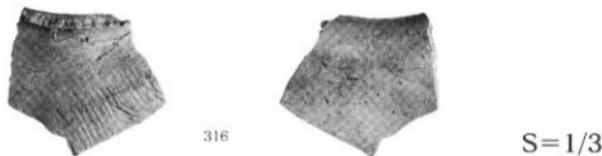
313
 $S=1/4$



314
 $S=1/5$



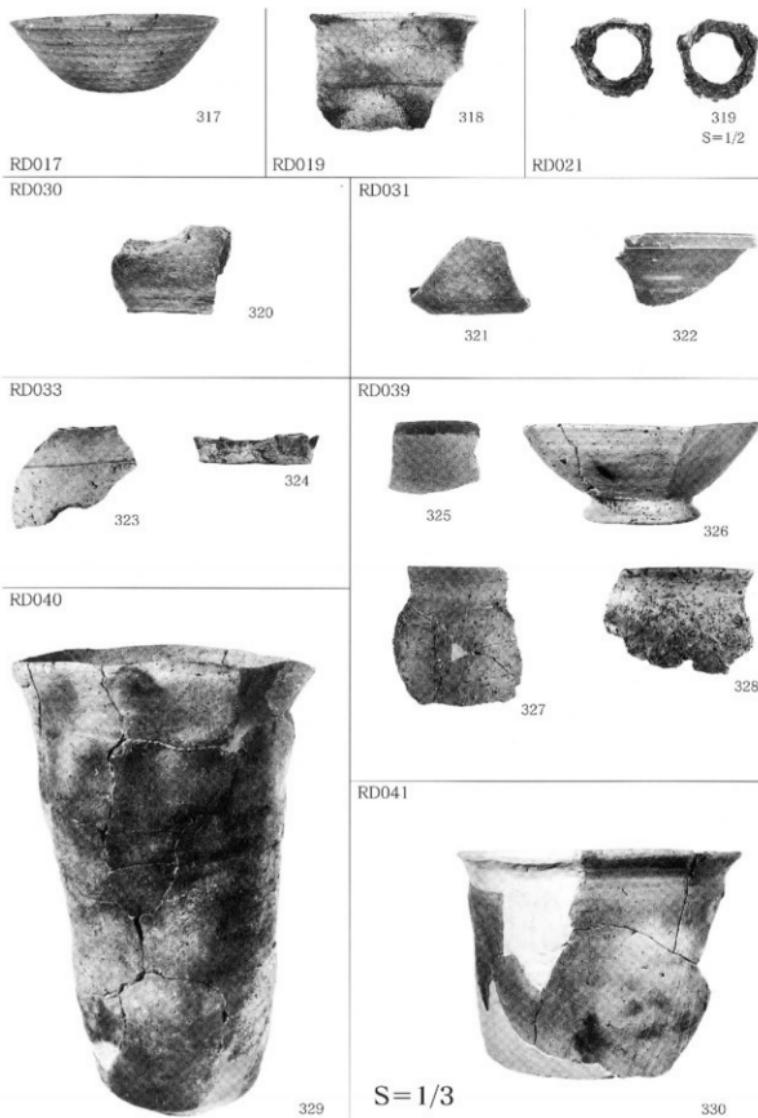
315



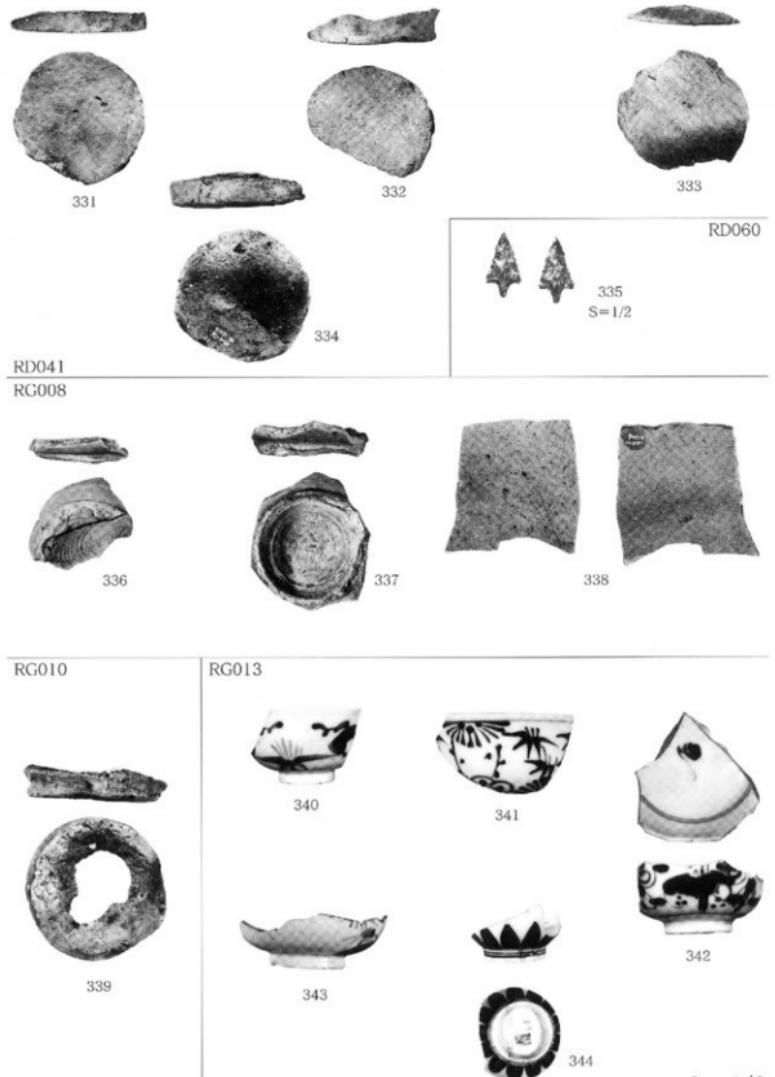
316

$S=1/3$

写真図版84 堪穴住居跡出土遺物 (29)



写真図版85 土坑出土遺物（1）



写真図版86 土坑(2)・溝跡出土遺物(1)

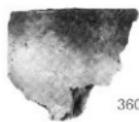
$S=1/3$



写真図版87 溝跡出土遺物 (2)



RG013



360



362



361

RG015



363

表探

364
S=1/2

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月日	のこえいせきたいじゅうにじはくちょうさほうくしょ 野古A遺跡第12次発掘調査報告書 盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第420集 齊原靖男 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019)638-9001 2003年3月28日				
ふりがな 所収遺跡名 所在地 ふりがな 所 在 地 市町村 遺跡番号 コード	北緯 度 東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
のこ いせきたい 野古A遺跡第 じゅうじゆう 12次調査 いせきたい 岩手県盛岡市下 かわあさきた 奥妻字北40-1 ほか	39度 40分 45秒 141度 08分 04秒	2001.05.08 ~ 2001.11.12	6,224	盛岡南新都市 開発整備事業 に伴う緊急発 掘調査	
所収遺跡名 野古A遺跡 (第12次)	種別 集落跡	主な時代 縄文時代	主な遺構 土坑10基、柱穴状小土坑14基	主な遺物 石器：石器	
	古墳時代 奈良時代	堅穴住居跡11棟、土坑3基 溝跡2条(古代)		土師器：壺・高壺・高台付壺 耳皿・甕・長胴甕 球胴甕・壺 手捏ねミニチュア土器 須恵器：壺・甕・大甕・壺 長頸瓶	
	平安時代	堅穴住居跡16棟、土坑4基 溝跡7条、柱穴状小土坑30基		土製品：鋤鍬車・円盤状土製品 石製品：砥石	
	近世～近・現代 (時期不明含む)	土坑30基		陶磁器類：碗・瓶・土瓶・皿 鉢・撞り鉢・水滴 甕・壺 瓦器類：焜炉 瓦(平・丸瓦)	

平成14年度(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第420集

野古A遺跡第12次調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成15年3月25日

発行 平成15年3月28日

発 行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印 刷 杜陵高速印刷株式会社

〒020-0811 盛岡市川町23-2

TEL (019) 651-2110

